
真《チェンジ！！》リリカルなのは 地球が静止する日

早乙女研究所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真≪チェンジ！≫リリカルなのは 地球が静止する日

【Nコード】

N03620

【作者名】

早乙女研究所

【あらすじ】

真≪チェンジ！≫リリカルなのはシリーズ第二弾！ついに動き出した運命の歯車。紅蓮の炎の舞う漆黒の夜天。崩れ落ちるその前に！！

「「ゲッターロボ、発進！！」」

予告

(新連載)

原作：石川賢と永井豪

都築真紀

-魔法少女

「あ、貴方は……!!!」

夜天そていを駆ける

「よお。久しぶりだな……ガキども。」

真リリカルチェンジなのはシリーズ 第二部

真リリカルチェンジなのは 地球が静止する日

封印が解かれし闇の書

「ああ、この本やる？燃やしてもゴミに出しても古本屋に売っても、すぐ手元に戻ってくるんよ。」

「おいおい、燃やすなよ…」

現れし四人の騎士

「…ドロボーが変態かのどっちかやな。」

「…寒そうだな。まあこれでも着ろ。」

「ああ、恩にきる…って、違う…!」

やってきた楽しい日常

「お前ら…いい加減にしろ…」

「うっせーなー、アクション仮面くらい見させるよ。」

「黙れっ！アイス食った後のごみくらい片付けろってんだ、この穀潰しども…!」

だが

「はやてが倒れただと…!」

プロローグ

「あれ？綿棒が一本もないで。」

「え？あ、ほんとだ。でもさ、お前。耳かき使えよ。少しは家計を考えたらどうなんだ。」

『綿棒のひとつやふたつでもめる事か？』

俺は流竜馬。永遠の28歳だ。微妙な歳だ。俺がここにいる理由については、読者諸君は知っているだろうから多くは語らない。つか知らねえ奴は前作読め。

さて、読者諸君はこう思ってたに違いない。「あれ？最終回読んだけど、そういえば竜馬って報酬の金もらったっけ？」だが心配無用だ。リンデイの奴はすっかり金を用意してくれた。アースラから出ていくときに、しっかりと懐に忍ばせておいた。元々俺がもらう金なんだから、窃盗じゃないだろう。

俺はどうやら、管理局連中からは「死んだ」ことになっているらしい。その方が楽だ。なぜなら

「あ。リヨウ兄、ゴキブリ出た。」

…いや、どうでもいいや。

プロローグ

「さすがやなあ。14秒で殺してしもた。」

「フツ。俺にかかればゴキブリの一匹や二匹…」

戦闘をしなくなった分、俺のこの運動神経を向ける相手はゴキブリや蚊しかない。…今の家ってゴキブリ出ないよな。現にそんなこと言っけどゴキブリ出たの今日が初めてだし。

「それじゃあ、ドンキに買いに行くか。はやては家にいるか？」

「あ、私もいく！」

『俺は自宅待機だな。行ってきな。』

武蔵は現在静養中。デバイスを直せる装置があればいいんだが、あいにく無いため、自然回復に任せている。ブラックゲッターの損傷はひどかったが、武蔵曰く

『んあ？あと一週間もあれば直るぜ。』

とのこと。ある程度デバイスには自己修復能力らしきものがあるみたいだが、武蔵は別格だと思う。現に帰ってきたその日と今を見比べると、ひび割れている箇所は大幅に減っているし、ノイズ混じりだった音声も今では元通りだ。一応今の段階でチェンジすることは可能だが、あと一週間は休ませてくれとのことだった。それにしてもたつたの二週間で大破状態から完全に元に戻る機械など信じられない。しかも何も手を加えない状態で。仮に时空管理局レベルの設備があれば、ひよっとしたら二、三日で修理できてしまうかもしれない。

「ゴールデンウィークって言っても、私には特に関係ないんよな。」

「…学校には行きたいのか？」

「うなずくはやてに俺は言った。」

「…それは、勉強をしたいからか？それとも、友達を作りたいからか？」

「あはは…それ言われちゃったらおしまいやな。」

「まあな。もうすぐ10になるガキにはわからねえだろうがな。」

八神はやては孤独な少女だ。まあこれにはあるジジイが関わっているが、それは現段階ではどうでもいいことだ。正直小学校に行かなくても別にどうってことはない。はやては馬鹿ではない。恐らく小学校の時の俺よりも頭はいい。でも、学校を勉強しに行くところだと多くの人間が認識するのは、大概が中学校に入学してからだろう。やはり小学校の意義は協調性を高める…簡単にいえば友達を作る、そこから人間関係を学ぶことにあるのではないだろうかと俺は思う。はやては俺以外の人間とのコミュニケーションは皆無と言ってもいい状況だ。

「リヨウ兄…私な、おつきなったら誰かの命を救う仕事に就きたいんや。」

「そりゃレスキュー隊員とかか？」

「うん。他にも救急士や消防士、警察官や自衛隊…とにかく誰かの命を救えるようになりたいなーって。」

はやてはうつむきながら言った。

「リヨウ兄は、私の父さんや母さんのことは聞かへんよな。私の家族は、阪神淡路大震災の時にみんな死んだんよ。」

「……！」

はやては言った。

「父さんも、母さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも、みんな…みんな死んでもうたんや。私の…目の前で…どんどん冷たくなつてつ…！！！」

「…もういい。はやて、お前の言いたい事は分かった。」

「だからな、今度はもう私みたいな思いをする人が…つて、傲慢な話やな。私一人で何ができて話や。こんな足もまとともに動かへんようなやつが…！」

「はやて…！」

俺ははやての肩を抱いて言った。

「俺は、お前じゃない。だからお前の悲しみも苦しみも分からな。い。だがな、俺はお前の家族だ。…少しぐらい、大人を頼ったらどうだ？はやて。俺と武蔵は、いつでもお前の味方だぜ。」

「…おおきになあ、リヨウ兄!!」

少し涙目になったはやての頭をくしゃくしゃ撫でると、走り出す…わけにはいかず、ゆっくりと坂道を下っていく。夕陽で茜色に染まった坂道を、ゆっくりと下っていく。

今日は5月4日

闇の書起動まで、あと1カ月

平穩が崩れつつある事を、俺はまだ気づいてはいなかった。

プロローグ（後書き）

はやての設定ですが、もし不快に思われる方がいらっしやったら
申し訳ございません。

チェンジ1 蘇る闇の書(前書き)

ご無沙汰な割には短いです。プロローグ2と考えると…という作者の言い訳!!

チエンジ1 蘇る闇の書

俺の朝は早い。午前4時に起きて近所の新聞屋へ行く。『海鳴新聞』というらしい。

「おはようございます、呉さん。今朝の分はこれで？」

「やあ、竜馬君。おはよう。今日もよろしく頼むよ。」

俺は帰ってきてから、新聞配達のアルバイトを始めた。この呉さんはとても良く扱ってくれる。中国人な割には日本語は驚くほど流暢だし、何でも学者も兼業しているそうだ。

「先生は書物を？」

「ははは。学者は常に金欠だからね。でも、学問に終わりは無いものなのだよ。竜馬君、今日は孔子について私と……」

「あー…すまん、先生。もう時間だから行ってきます！」

…いつもこんな感じだ。何かと孔子だのソクラテスだのプラトンの薦めてくる。ハッキリ言って朝読むものではない。悪い人ではないんだが…

チエンジ1 蘇る闇の書

…実は今日の日付は6月3日。そう、今日の午前0時がはやての

誕生日、そして闇の書起動の日になる。実は前からはやてと闇の書について話はしていた。まあヴォルケンリッターや足の麻痺については語らなかつたが。震災の際、はやてとあの闇の書のみが無傷で残っていたという。はやて自身も気になって鎖をはずしてみようとしたものの、ダメだったらしい。ニッパ、包丁、チェーンソー（！？）…まあ何をしても傷つかないうえに捨てても売っても必ずその日の家に手元に戻っていると気味悪がっていた。震災の時、八神一家は高速道路をワゴン車で走行していた。家族旅行にいく途中だった。地震で道路が崩れ、車は下へ落下して地面と激突、炎上。家族の遺体の損傷は目も当てられないほど悲惨な状況だったが、なぜか幼き日のはやてと闇の書のみが奇跡的に無傷だった…と、石田とかいう医者から聞いた。闇の書が彼女を助けた…いや、闇の書が彼女を生かしたのだろう。

「皮肉なことだな。奴は闇の書という名の赤い靴で踊らされているわけか。」

竜馬は最後の新聞を投函すると、静かに言った。

「そんなことなぞやらせねえ。俺の目の黒いうちにはな…」

てなわけで11時になった。早い？作者にも事情つてもんがある。察してくれ。

「なあ、リヨウ兄。今日は夜更かしOKなんて珍しいやないか。どなんしたん？」

「まあ、お前も今日は誕生日だからな。少しぐらい無礼講ってや
つさ。」

そうではない。俺はあの4人をこの目で確かめなければならな
かった。その時、はやての部屋から光が走った。

「あれ？何か光つとるよ？電気消し忘れたん？」

「待て、はやて。俺が先に行く。」

俺はそつと台所に向かって包丁を手に取り、マフラーで顔を覆う。
後ろを振り向くと、野球のプロテクターにアメフトのヘルメット、
剣道の籠手に血のついたクギバットで完全武装(?)したはやてが
いた。

「き、きつとジョッカーがやってきたんや！石橋が出てきそつや。
ぶつとばしてやるぞう！！」

「いいか、慎重に行くぞ。」

抜き足差し足の俺と手で車輪を回すはやて。部屋の前まで来る
と声が聞こえた。

「女の声だ…何人かいるぞ!？」

「おっばい揉ませてくれへん？」

はやてが訳の分からんことを言っているが、そんなの気にする暇
はない！

「…行くぞはやて。3 / 2 / 1で行くからな。」

「うん…」

俺とはやてはドアに付いた。

「行くぞ。3…0!!」 誰もツッコまない

二人でドアをぶち破るとそこには!?

「え…?」

「何が…起こったん?」

部屋の中には、胸を両手で押さえて涙目になっているポニーテールと、泡を噴いて倒れてる金髪、頭を天井に突き刺している幼女と、ごみ箱をかぶったマツチヨマンがいたのだった。

チエンジ 1 蘇る闇の書（後書き）

地味にゲストキャラが登場しました。最近ライダーばっかだからなあ…こっちもがんばるぞー！！

チェンジ2 四人の騎士(前書き)

お久しぶりです。日常編ってとても書きにくいです。元がゲツタ
ーロボですし。

チェンジ2 四人の騎士

現在、八神家では四人の男女が座布団の上に座っており、本来この家の主であるはずの少女がたんこぶを作っていた。

「…結局はやての訳わかんない防犯グッズの犠牲になったということか…手前等は。」

前回物凄い登場の仕方をしたこいつらだったが、何があったのかは…言えない。特にシグナムに関してはアブノーマルすぎる何かがあったので、とても公共の電波に発信することなどできないほどの有様だった。

「まあ、とりあえず…服着ろ。」

チェンジ2 四人の騎士

あれから三日経った。自称守護騎士とかいう得体の知れない四人に、とりあえず服を一通りそろえた。当然ユニクロに決まっている。だって俺ユニクロだし。

「おい、ヴィータ。チャンネル変えるぞ。」

「あつ！おい、竜馬！！アタシ今、朝ズバ見てたのに！リモコン返せよ！！！」

「馬鹿野郎。あと1分でプリズマ イリアが始まっちゃうじゃね

えか。」

「あ。やべっ！すっかり忘れてた。」

テレビでは銀の髪の魔法少女が、飛んだり跳ねたりキラキラしていた。毎週日曜日の朝は、これに決まっている。つか一人で観てたら何故かヴィータが来るようになった。

「リヨウ兄の顔で魔法少女とか言われてもな。」

「うるせえ。」

すると日向ぼっこしながら「ほねっこ」をぼりっぼりしているザフィーラがこっちに来た。ちなみに人間形態。

「やはりほねっこに塩コシヨウをかけると味に幅が出るな。主よ。小遣いプリーズ」

幼女にたかる犬耳マッチョマン。

「はあ？お前何言ってるんだ。小遣い要求する居候がどこに居るんだボケ！！」

ちえーといった表情で元居たところに戻っていくザフィーラ。実はこの家の料理は俺とザフィーラが担当している。俺が魚中心の和食が得意なのに対して、奴は洋食、中でも肉料理を扱わせたら天下第一品だ。ちなみにドッグフードはお菓子で、ちゃんと飯は人間形態でみんなと一緒に食べている。シャマル？思い出させるな、あんなこと…

「あれ？なんか失礼なこと考えてない？」

「失礼も何も、化学兵器と言う名の料理を作る奴にはな……」

「ひ、ひどいっ……！」

涙目になるシャマル。だが

「あかん。わたしこればかりは弁護のしようが無いで。」

「つつつくと七色に色の変わるシチューなんて見たこと無いもんな。」

するとザフィーラがシャマルの肩に手を置いて言った。

「シャマル…人には誰もが、向き不向きがある。頼むから試食を俺にやらすのは……」

「みんな…みんななんて、大っ嫌いなんだからあああああああああああ……！」

涙をきらきらさせて、出て行ってしまったシャマル。だが

「シャマルうっ5時までには戻ってこんとあかんよっ」

基本的に全員スルーだった。

「さて、暇だな。ヴィータのアイスでも盗るか。おーい、ヴィー

ヴィータをからかうのも飽きた俺は、家から出てマンションの屋上へと向かった。何か最後ヴィータがはやくに泣きついてきているようにも見えたが、別にどうでもいい。ホントにすぐムキになるから面白いんだよな、アイツ。

今度は何してからかおうか考えていると、屋上のドアが見えてきた。

「えーつと…あ、いたいた。」

そこでは素振りをするシグナムの姿があった。

「よお、シグナム。精が出るな。」

そういつて俺はシグナムのケツに触った。

「~~~~~!?!?」

「ば、馬鹿者！出会い頭尻触るような輩がおるか!?!」

「いいじゃねえかよ、減るもんじゃねえんだし。」

「そういう問題ではない!?!」

俺の額からは血がピューピュー吹いている。何、奴の尻に触れればこんなもの安い安い。だが胸を鷲掴みをやったら本当に生死をさまよったから、自重しようと思う。

「…やはり慣れねえか？」

「！ああ…」

何だかんだ言って、奴がまだこの家に慣れてないことは目に見えていた。

「まあ、今までお前たちに何があったのかは聞かねえよ。」

「…何故だ？」

シグナムは言った。

「何故お前は、私たちを受け入れられる…？主であるはやてなら分かる。だが、何も関係ないお前に…」

『いや、そうでも無えんだな、これが。』

突然響いた声にびっくりするシグナム。その声は、竜馬のポケットの中から聞こえていた。

『実はこいつ、魔導師なんだよ。まあ、正確には違つんだが。俺は竜馬のデバイスの巴武蔵だ。よろしくな。』

「何…？」

俺は言った。

「実はな、俺もお前らと境遇が似ているんだ。次元漂流者なんだ

よ、俺は。ある日突然、気付いたらはやてに匿われていてな。気が付いたら居候している次第だ。」

俺はふうつと息を吐くと言った。

「まあ、お前が俺たちにいちいち気にかかる必要は無え。そのかわりこつちも勝手気ままにさせてもらうがな。まあ、でも…悪くは無いんじゃないのか？」

俺はシグナムを置いて、すたすたとドアに戻っていく。

「…ま、そんなところだ。もうすぐ飯だ。すぐに戻ってこいよ。」

「…待て。一緒に行く。」

「そうか。」

シグナムと一緒に階段を下り、部屋へ続く渡り廊下を歩いていく。するとシグナムは言った。

「竜馬。お前は本当に不思議な奴だな。」

「何処が。」

「…いや、何でもない。忘れてくれ。」

戻ってみると、はやてが俺とシグナムのフラグがどうのこうの言っていたが、無視した。この程度の会話でフラグが立つなら、世は

リア充で溢れ返るだろう。人生なんてそんなに甘くはないもんだ。

「だがな、はやて。このムニエルにかかっている、紫や緑とグラデーションしながら変色している液体は何だ？」

「あ、それオーロラソースなんだけど…」

「…シャマル。オーロラソースってのはな、本当にオーロラのような色をしてねえぞ。本来ならマヨネーズとケチャップを混ぜて作るから、ピンク色をしてんだ。」

物事には、得意不得意がある。その失敗の中には、これは明らかに悪意があるだろうとツツコミたくなるものもある。だが、一生懸命作ったものを頭ごなしに罵倒してしまっただけは、絶対に上達しない。だが、俺は罵倒する。俺は別にシャマルに料理上手くなってもらわなくていいんだし。だから俺は、眉間に青筋を立てて言った。

「シャマル：まずさ、味見してから出せよ。あと外見で明らかに分かるだろ。な？」

追記：シャマルが自分で作ったものを食って便所でリバースしたので、俺はムニエル（オーロラ風）の処理に困った。そしたらさ、いたんだよ。猫が。二匹。出してやったらさ、うまそうに食いつくわけだ。だが俺はその直後に窓を閉め、カーテンを下ろした。その後猫がどうなったか…後は読者にお任せする。

チェンジ2 四人の騎士（後書き）

竜馬が何故か大きくなりました。ですが精神年齢が反比例しているようです。

チエンジ3 夏と黒歴史

?????side

『そう、全ては遅すぎたのだ。犯した過ちを気付いた時には、もう全ては手遅れだったのだ。』

何処までも続く闇の中で、女の声が響く。誰もいない。誰にも聞かれない。だが、女は言う。

『そう、もし、もしあそこで、アレが現れなければ…だが、今となってはもう遅い。世界はもう終局を迎えてしまったのだから。』

しばらくの沈黙。そして

『…だが、彼女たちが…そう、彼女たちを信じるしかない。そして、【流竜馬】…お前が…最後の望みなのだから…』

『目覚めの時は…近い。そう、その時こそ、世界最後の夜明けが…』

sideout

チエンジ3 夏と黒歴史

一か月がたった。気付いてみると早いものだ。もう季節は初夏。

庭に蒔いた朝顔は、もう蔓を伸ばして、その先に小さなつぼみを付けている。まだ蝉は鳴いてないが、日に日に暑くなっていく今日この頃。扇風機をこの前出し、もう衣替えの季節だ。そんなわけで俺はまたユニクロの前に居る。

「リヨウ兄。ヴィータの服見てくれへん？」

「ああ、いいぜ。どれどれ…」

ヴォルケンリッター一同は、夏服が無い。そして今気付いたんだが、俺にも夏服が無い。

試着室を開けると、ヴィータが珍しくおどおどした様子で立っていた。白と黒のストライプのシャツに、黒いミニスカート。

「ああ。ま、いいんじゃないか？悪くは無いと思うぜ。」

俺が悪くないというときは、良い時だ。当然のことながら、家族みんな知っている。

「おうおう、そっかりヨウ兄。ついに兄にもロリの道が…」

「ヴィータはそれ気に入ったのか？」

「お、おう…」

すると何故か顔を真っ赤にしてカーテンをぴしゃっと閉めてしまった。奴の意外性を垣間見た。しめしめ、からかうネタがまた一つ増えたか…

「はやてちゃん！竜馬さん！」

こんどはシャマルが手を振っている。白を基調にし、青い縁取りのワンピース。そしてつばのひろい白の帽子をかぶっている。

「シャマル、ずいぶん印象変わるもんやなあ…」

「まあ、これでも猫かぶり歴は長いからね」

俺はシャマルと談笑するはやてを置いて、シグナムのもとへと行った。白のtシャツに黒のチェックのスカート。首には待機状態のレヴァンティンが、首飾りの様に掛けられている。

「おう。いいんじゃないのか？」

「そう言う竜馬はどうした？」

俺は黒のTシャツにGジャンとGパン。腹にはチェーン、そして腕にはいつも付けてるマフラーを付けることにした。流石にアレを夏場首に付けるのもどうかと思うから、そうした。説明するとシグナムは

「うむ…これは我々の金では無いからな…」

「ま、そう思うんだっいたら少しは働け。」

とりあえず着換えさせた後、会計に向かった。ちなみにザフィーラは、紺のtシャツに黒いGパンを買った。あと黒の帽子。

「で、荷物持ちは俺たちかよ。」

「そう言うな。男手は二人しかないのだからな。」

「何言っつてやがる。第一女が非力なんて半世紀前のレベルでねえか。」

結局俺とザフィーラが荷物持ちになった。最低だ。ザフィーラの奴は「主の荷物を持って当然」的な勢いな上、どさくさまぎれに全部俺たちに押し付けた女衆…捨てるぞ、コレ…

「おい、シグナム。お前持て。」

「む。何を言っつ、竜馬。別段お前の体では問題あるまい。」

「黙れ、この剣振ってるしか能の無え、脳ミソ筋肉女！！俺が持っつて言っつてんだから持て。じゃなかつたらここで捨てるぞ。」

それを聞くと、シグナムの中で何かがブチっつと音を立てた。

「貴様…今何て言っつた…？」

「んあ？ならもう一度言っつてやる。このクソバカニート脳天気侍！！言い返してえんだつたら、少しは働きやがれ、このタコ！！」

するとシグナムはどっから取り出したのか分からないが、日本刀

の刀身をぺろぺろ舐めていた。

「そうか…ふふつ。たっぷりじっくり可愛がってやるからな…ウフフ…」

「フン。おもしれえ。ザフィーラ！荷物持つてる…！」

竜馬は荷物をザフィーラに投げると、ショットガンを手に取った。

「塵になるのは…手前だあああああああああああああ…！！」

9時過ぎ。八神家のドアが乱暴に開けられると、そこには顔面血だらけの竜馬が、凄まじい笑顔でシグナムを抱えていた。

「フフフ…ハハハハハ！…ざまあみる、このクソ女！俺の…俺の勝ちだあああああああああああああああああああああああああああああああ…！！」

そう絶叫すると、前のめりに倒れた。だが

「あ、ほつといてええよ、あのバカ。」

「さ、流石に風邪をひくわよ……」

「じ…自業自得だな、あいつら。それにしても……」

ヴィータは違う事を考えていた。

（キレたシグナムを…相討ち同然とはいえ倒しただと！？バ、バケモノなのか…竜馬の奴は…）

結局その翌日、怪我と風邪をひいて、竜馬とシグナムは寝込んだ。そして一番哀れだったのは、結局荷物全部持たされたザフィーラであった。ま、流石にみんな自分のものは持ったけど。でも竜馬とシグナムの分をちゃんと持って帰ってきたザフィーラは、八神家の中で最も精神年齢が高いだろう。

一方その頃

「む…」

「……………」

二段ベッドには、下に竜馬、上にシグナムが寝ていた。

「手前もまだまだのようだな、シグナム。」

「貴様ごときに…一生の不覚。」

しばらくの沈黙。すると竜馬は言った。

「おい、シグナム。…パンツ見えてんぞ。」

「なっ!?!?」

シグナムは顔を真っ赤にすると、思わずベッドから飛び上がってしまった。しかしここは二段ベッド。シグナムには身長がある。それがいきなり立ち上がったら…

ゴン

「ひゃうっ!?!?」

とてもシグナムから発せられたとは思えないような声をあげてうずくまる。額を思いつきりぶつけたようだ。恥ずかしさのあまり、顔から火の出る思いで、布団の中にくるまってしまった。

「ぶつぶつぶっ…ぷはははは!!俺から見えるわけ無いだろ、このバーカ!?!」

「う、うるさい!!わ、私だってその、こんな…」

げらげら笑う竜馬。パニックになってしどろもどろになるシグナム。後にこれは彼女の黒歴史として語り継がれるのだが、それは10年以上も後の話である。

竜馬side

季節は9月下旬。そろそろ寒くなるころだが、今年は暑い。まだ夏服の出番はあった。

「ねえ、リョウ兄。みんな最近帰らへんけど、どないしたん？」

「さあな…奴らも最近色々立て込んでるって言ってたしな。」

ここんとこ、ヴォルケンリッター一同の帰りが妙に遅くなった。俺は自分が魔導師だという事を伝えてはいない。それにリンカ、コアも無いため、誰も気づいてはいなかった。はやてには予め絶対言うなど釘を刺しておいた。どうも俺とはやてには黙って蒐集を始めたようだ。

（全ては始まったばかり。俺はまだ動く必要はない。だが…お前は勘づいているようだな。『夜天の書』よ…）

睨みつけた空は、まだ青かった。

これまでの特別なイベントは、皆の騎士甲冑を作った事と、ヴィータに変なウサギを買ってやったことぐらいだけだ。ちよくちよく誰かの帰りが遅い状況がはじまり、飯をみんなで食うのは少なくなつた。基本的にシヤマルは常にいるが、特に最近、ヴィータの単独行動が多くなっている。

「ん？どうした竜馬。何ジロジロ見てんだよ。」

「…いや、何でもねえ。手前はいつ見てもバカっぽいと思っただけだ。」

「なんだと!！」

始まったなら、俺も何か手を打たなくちゃならねえ。だが、まだ早い。まだ早いんだ…

S i d e o u t

その日の夜。シグナムとシャマル、ザフィーラの三名は、一人の男について話していた。竜馬についてだった。

「…ふむ。あの男の詳しい情報は主も知らないと…」

「はい、ザフィーラ。はやてちゃんもよく分からないみたいなの。多分ミッドチルダとも地球とも違う異世界からの次元漂流者だろうけど…」

シグナムは眉をひそめて言った。

「だが、あの男の動き…只者ではない。よほどの訓練か実戦を積みまなければ、あのような足運びはできん。それに…」

「それに?」

シャマルの問いにシグナムは顔をしかめて言った。

「あの男からは…火薬と血の臭いと…『狂気』を感じる。奴は強くなる事を望んではいない。まるで殺す事を楽しんでいるような…」

そんなシグナムに、面喰ってしまった残り二名。シヤマルは苦笑しながら

「い、いくらなんでもそれは無いんじゃないかしら。確かにはじめ見た時にあの格好はどうかと思ったけど…」

確かにシヤマルの言うことは間違っていない。竜馬はまだ人殺しをした事が無いからだ。だが、竜馬のあの服から、シグナムは血の臭いを感じ取った。果たしてその意味とは…？

「だが、不思議なことに奴からは魔力反応を感じる事が出来ない。魔導師ではないことは明らかだが…」

「それにしても不可解な点が多すぎる…か。でも、まだ保留でいいんじゃないかしら。何だかんだ言っとうまく行ってるみたいだし。特にシグナム。」

ぴくっと反応したシグナムを見ると、シヤマルはにやけ面を、ザフィーラはため息をついた。

「妙よねえ…何で同じ二段ベッドで寝てるのかな？ あ、きっとそうよ！最初はそれで、さりげなくダブルになって、最後は同じ一つのベッドで…」

ブチっ

凄いい音が鳴り響く。恐る恐る後ろを振り返ると、両方のこめかみ

から血をピューピュー噴き出しているシグナムが立っていた。その手には、しっかりとレヴァンティンが握られていた。さっきからドイツ語で痛い痛い言っているが、本人たち分からないらしく、空しく電子音だけが響いていた。

「え？ね、ねえ、シグナム。ちよつとレヴァンティンだけはおろしてよ…え、ちよつと待つて『ズシャアッ！』」

血だまりの中にうつぶせになって倒れるシャマル。それをよそにシグナム本人は顔を赤くしていた。

そんな中、竜馬ははやての寝室に来ていた。

「悪いな、リヨウ兄。でも、わたし一人でも大丈夫や。な？」

「そんなこと言っんじゃねえよ。手前だつて多少不便感じてんだろっが。」

『それもそうだけ、はやてちゃん。これでも少ない男手なんだからな。』

デバイスの武蔵はヴォルケンリッターにはれないようにと、はやてと竜馬しかいない場合だけ話すように約束していた。実際音声で話をしないだけで、念話でならいつでも話をする事ができるのだ。

「えへへ、おおきになあ。…あ、トイレや。リヨウ兄ちよい手、貸してくれへん？」

竜馬がはやての手を握って、上半身を起こす。その時だった。

ドクン

「え…?!」

はやての体はゆっくりと前かがみに倒れていく。竜馬の手をすり抜け、床に倒れるはやて。竜馬は一瞬何が起こったかが分からなかったが、すぐに正気に戻った。

「はやてえっ?!?おい!救急車だ!手前らすぐに集まれ!!」

焦点の定まっていないうはやての瞳は、ゆっくりと閉じていった。

はやてSide

「あれ?ここは…」

何が何だかよう分らんかった。さっきまでいたリヨウ兄はおらんし、一面に広がるのは…宇宙?しかも何かアニメに出てくるような宇宙戦艦がいっぱいおるし…一体何がどうなつとるんや!

「リヨウ兄……みんな……!!」

叫んでみるも、こつ目の前でドンパチされたらかなわへん。その時やったんよ。

『後のものは退け!海王星ごと破壊してやる!!』

「ちょっと待ってくれたらええやろ！ここは一体どこなん？私はどうしてここにおるんや！！」

『ここは未来永劫時の狭間…小さき者よ。そこに時空の歪みを作った。汝の求める世界は、時間は、人々は、そこにある。』

すると目の前に小さな赤いかけらが落ちてきたんや。両手で握りしめると、緑色の光が私を包んだんや。

『さあ、行くのだ。さらばだ。もう二度と会うことはないだろう

………』

そして目の前が真っ白になり、わたしは意識を手放したんや……

S i d e o u t

チェンジ5 闇の中のマリオネット

「クソツ！何故だ！何故気付かなかったっ！！」

病院の廊下に鈍い音が響く。白い壁には、小さな赤い斑点が擦れ
ていた。

「ごめんなさい！私、全然気付かなくて…！！」

「いや、お前は悪くない。これは私自身に言っているのだ。」

泣きそうになるシヤマルをなだめるも、こつも自分の心が掻き乱
されるかとシグナムは拳を握りしめる。

「気持ちわかる。だが、今ここで嘆いたところで、今の状況は
良くはならない。」

耳を隠すために帽子をかぶったザフィーラが、腕を組みながら話
す。するとヴィータがザフィーラの胸ぐらを掴んで言った。

「なんでお前は平然としてられんだよ！はやてが倒れちゃったん
だぞ！少しは心配したらどうだ！！」

するとザフィーラが、珍しく大声を出してヴィータを叱責した。

「ふざけるなっ！！俺が心配してないだど？そんなわけがあるか。
冷静になれ、ヴィータ。俺たちが本当にすべきことは何か、考える
んだ……」

「ご、ごめん。ザフィーラ……」

チエンジ5 闇の中のマリオネット

竜馬は今日、用事があると言って外出していた。はやての体は回復するも、結局しばらく入院して様子見ということになってしまった。だが、はやての主治医の石田は、シグナムとシャルに真実を告げた。それは足の麻痺の範囲の増加：このまま進行すれば、年明けには内臓器官に影響を及ぼし、最悪死に至るという残酷なものだった。はやてに家に戻ると伝えると、四人は病院の外へ出た。

「主は…たてえ自分を救うためだったとしても、他人を傷つけたくない…そうおっしやっていた。」

歩きながら、ぼそりとシグナムがつぶやく。

「だが、背に腹は代えられん。たてえ我らが主を裏切ることになったとしても、我らは甘んじてそれを受け入れよう。後悔は…したくないからだ…!!」

ぎりつと歯を噛み締めるザフィーラ。元々感情を表に出さないザフィーラがこんな表情をするなど、彼らが守護騎士として共に戦い始めてから初めてのことだった。すこし驚いた様子のシャルだったが、ザフィーラに続けて言った。

「…そうね。私も、後悔だけはしたくない。だから………」

「はやて…ゴメン。でも、アタシたちはこうするしかないんだよ

…!!」

グイータがそうつぶやくと同時に、四人に騎士甲冑が装着され、転送魔法が発動する。彼らとて望んだ戦いではない。心優しい主と彼女が実の兄のように慕う男。いつまでも平和に暮らしたいという思いは、突然裏切られる。だが、彼らは気づいていなかった。自分たちが闇の書の上で踊らされているだけの、ただの傀儡に過ぎないということには…

一方その頃

「よく来たな、竜馬…」

「ああ、またアンタか。どうだ、最近の『仕事』の調子は？」

「ハハハ…全然駄目だな。」

とある管理外世界。薄汚れたバーに、くたびれた赤い外套を被る男の隣に、竜馬は座った。どうやらこのふたり、知り合いのようである。

「まだ答えは得ていない。俺は…まだ、彼らに会う資格はない。」

「そうか。だが、必ず奴はお前の事を心のどこかで求めているはずだ。」

「何を今更…俺はただただ、最低な男だ…」

残っていたウイスキーをくいっと飲み干すと、ふうっと息を吐く。

グラスをカウンターに置くと、澄んだロックアイスの音が響く。一方竜馬は、大ジョッキのビールを半分ほど飲むと言った。

「ま、それはとりあえず置いといてだ。…闇の書の…いや、『夜天の書』が動き始めた。」

竜馬の『夜天の書』という単語を聞くと、男は一瞬手を止めた。

「成程。その名を知っているということは、事の真相は大方把握しているようだな。」

「フツ…それは貴様もそうだろうか？」

「フフ…」

竜馬は残っていたビールを一気飲みすると、この世界の硬貨をカウンターに置いた。

「ごっそさん。今日は俺のおごりだ。」

「どうした？珍しいな。今日は何もお前に有力な情報は無かったのよ…」

その言葉を聞くと、竜馬はにやっとした。

「ほお…何か仕入れてきたような言い方じゃねえか。言え。」

そういつて詰め寄ると、男は手を差し出してにやっとした。それを見ると、竜馬は舌打ちして紙幣を一枚握らせた。

「毎度あり。」

そう言うと、ポケットから男は黒いUSBを取り出した。

「こいつは管理局の最高機密ファイルだ。こいつを読めば、大体管理局が何を企んでいるのか…見当はつくはずだ。」

「フツ…今回は安い買い物だったな。」

「何、俺とおまえは、求めているものは同じだ。グレアムの爺さんところにも行くんだろ？」

「ああ。…あばよ、相棒。」

そう言うと、竜馬は酒屋を出て行った。男はしばらく座っているも、何も注文せず、そのまま店の外へと出ていった。

「…一番辛いのは、お前だろう…竜馬。」

男の目には、山に沈みかけている夕陽が映っていた。

「今度こそ、決着は俺たちの手で…!!」

そう呟くと、男はどこことなく去っていった。

「今日、四人合わせて32ページか…ペース悪いな。」

不満そうにつぶやくヴィータ。もう日が沈み、ヴォルケンリッタ

「一同は、皆帰宅していた。竜馬は今、風呂に入っている。」

「やはり魔法生物だけでは燃費が悪いか。シグナムよ、答えは出たか？」

「できれば避けたかったが…致し方あるまい。命を奪うわけでも、相手を再起不能にさせるほどの事ではないからな。」

シグナムの言った言葉。それはつまり、魔導師を襲撃して魔力を奪うことだった。

「おい！出たぞ。誰か入れ。」

「竜馬が出たか…では、今夜の12時に屋上へ集合。それまで仮眠をとるなりコンディションの調整を行うこと。解散！」

その後、シグナムと竜馬の間にまた何か一悶着あったようだが、ここは割愛しよう。

八神家の消灯時間は、基本10時。みんな一緒…ではないが、大体この時間にはみんな寝るようにしている。そして今は12時。下で寝ている竜馬に気づかれないよう、シグナムはそっと起きた。

(竜馬は…寝ているな。どちらにしても早く行かなければ…)

シグナムは皆に念話で伝えると、慎重にベッドから降り、そっと外へ出た。屋上の階段を上ろうとしたその時だった。

「待ちやがれ。こんな夜更けに、パジャマ一枚で何処へ行くつもりだ？」

背筋が凍るような感覚に襲われるシグナム。ゆっくり振り返ると、竜馬が立っていた。

「竜馬…！？こ、これは、その…」

どもるシグナムを見ると、竜馬はふつと笑った。

「…何も聞かねえよ。俺は何も見てねえし、聞いてもいねえ。ただ…」

竜馬はシグナムに背を向けるといった。

「風邪と怪我には、気をつけろよ。じゃあな、おやすみ。」

そう言つと、振り返らずに帰っていく竜馬。冬なものにもかかわらず、シグナムの額には汗が光っていた。そして足は震えっぱなしだった。

(奴の最後の言葉…竜馬は怪我をするなど言った。まさか…！！)

竜馬が果たして何者なのか。本当に味方なのか、それとも敵なのか。シグナムには分からない。だが、今はそれどころではない。震える足を引きずるようにして歩き出すシグナム。

そして

静かにゴングが鳴らされたのだった……

チェンジ5 闇の中のマリオネット(後書き)

チェンジ6 戦いの始まり

その日、高町なのはのもとに一通のビデオレターが届いた。そこにはこう記されていた。

Dear NANOHA
Love, Fate・Testarossa

親友との再会は、あまりにも唐突なものであった。

チェンジ6 戦いの始まり

「ただいまー!」

夕方、元気良くドアが開き、これまた元気な声が家中に響いた。

「お帰り、なのは。」

「お姉ちゃん、ただいま。母さんとお兄ちゃんがいないんだけど…買い物?」

「うん。タイムセールで卵買いに行ったわ。」

高町なのはは上機嫌である。彼女の親友のアリサから言わせれば

「あんた、最近浮き足立ってるわよ。授業中ひとりではーっとしてると思ったら突然ニヤニヤするし、電柱に正面から激突して鼻血

がすごいことになったり…」

とのこと。本人は全く気にしてないが、むしろ周りの人間が気になってしょうがない。だけど本人は全くそれに気づかない。それが『なのはクオリティ』（造語・ぼくらのユーノ君）なのだ。

「あ、なのは！またパジャマ脱ぎっぱで出ていったっしょ！いい加減自分で片づけなよ。」

「え？またユーノに押し付けたの？なのは。」

「え…？ごめん、ユーノ君…にやははは…」

ユーノはもう退院し、高町家に居るのだが…本来の人間の姿である。実はフェレット形態でなのはと会話していたところを家族に見られてしまったのだ。そしてその直後のなのはの言い訳も悲惨なものだった。

「…ユーノ君はね、F78星雲のフェレットの国から来た宇宙人なの。ユーノ君は、自分の星の警備隊に入っていて、ある日、護送中の宇宙怪獣ヘムラーが逃げてしまったの。その怪獣はたまたま地球にやってきていて、ユーノ君は本来の姿に変身して、成層圏内での激闘の末になんとか宇宙怪獣をやっつけたの。でも、ユーノ君はその時受けた傷が原因で、人間の姿に変身できなくなってしまったの。地球に落下したユーノ君は、地球上で怪しまれないように地球の小動物のフェレットに姿を似せたの。」

明らかにあり得ないだろう！と思うところだが、ユーノ・スクライアという名前が何かそれっぽいとか、防衛軍の名前は科学特攻隊にしようとか、実は忍さんがジェットビハイクルなる特殊戦闘機を

開発していて、それが翠屋の地下にあるとかいろいろあって、結局高町家に居候することとなった。だが、本当のところを言うと、高町家相手にユーノが組み手を申し込み、ぼろぼろになりながらも立ち上がるその姿に一同が惚れこんだのが一番の理由だったりする。なのはの生活習慣を改善することが彼の最も大きな仕事である。

…それと言いつれれたが、フェレットの姿で女湯に入ったことに関しては、男衆に「修正してやる!!」されたことは言うまでもない。その時に、ユーノはこう言い残して息をひとつた。

「胸が…生足が…お股が嫌いな男がいるかよ…!男がエロくて…何が悪いっ!!ガクッ」

ユーノはいろんな意味で勇者であった。(過去形)話がそれた。とにかくユーノは高町家にお世話になっているのだ、おわり!

「なのはっ!!」

「ひゃいつ?!」

「…靴揃えろ。」

なんだかんだいって、女性陣には人気が高かったりするユーノである。

「もー!ユーノ君、最近厳しいよー!!」

「あたりまえだよ、なのは。何十回僕に言わせるの?脱げば脱ぎっぱなし、食えば食いつぱなし、出したら出しっぱなし、やればやりっぱなし…」

ユーノに叱られたのはは、靴を揃えようと部屋の整理をした。今までユーノが気づいたらしまっただが、今日は心を鬼にしてなのはにやらせたのだった。だが、なのははユーノに対して一つだけ不満なことがあった。それは

「ユーノ君！また変な仮面持ってきたの？」

「ああ、これはインドネシアのマライカ族に伝わる魔除けの仮面で…」

「そんなのどうでもいいよ。何かエヴァのゼーレのマークみたいで不気味なんだけど…」

ユーノの部屋は、物置を改造して作られている。照明が一個しかなく薄暗いその部屋には、ユーノが趣味で集めたオカルトグッズやらオーパーツやらロストロギアやらが転がっていた。ユーノの一番のお気に入り、水晶の髑髏らしい。UFOを見たことはあるそうだが、幽霊は見たことがないとか。

「わかったよ、なのはの目につかないところにしてしまっとかからさ…それじゃ、一足先に行ってくるね。」

「うん、いつてらっしゃい！みんなによろしくね。」

ユーノは白いスニーカーをはくと出て行った。彼は一足先に、アースラに向かうことになっている。まだフェイトの裁判が終わっていないため、いろいろとリンディヤクロノ、それにフェイト本人とも直接連絡を取って日程を調整しなければならなくなってしまったのだ。

「さて、夜ごはんまで勉強しよーっと。」

つまらなさそうにつぶやくと、なのはは自分の部屋に入ってしまった。

「あ、もう十時。そろそろ寝なきゃ。」

夕飯を食べ終わって風呂に入り、まとめの勉強をすると、もう十時を回っていた。なのは自身もこれはまずいと思い、歯磨きをして家族にお休みを言うと、ベッドの中にもぐずりこんだ。そしてなのはは、必ず足をもぞもぞする。

「ふにゃ〜 気持ちいい〜」

なのはは寝る前に必ず、布団の中で靴下をずりずりしながら脱ぐのだ。これが本人曰く、とても気持ちいいらしい。まあ、別に知ったこっちゃないが、彼女が気持ちいいのならそれでいいのだろう。そして眠るまでいろいろと妄想をするのだ。何を妄想しているのかについては…本人のプライバシー上言えない。そんなこんなして瞼が下がってきたその時だった。

「…ッ!!! レイジングハート!!!」

『領域結界発生。上空に一体のアンノウン発見。あと30秒でこ

「こまで来ます。」

なのはは肌の違和感を感じて跳ね起きた。レイジングハートの声を聞いた限りでは、何者かがここに来るまでそんなに時間がかからないはずだ。

「すみません、マスター。気付けませんでした。」

「ううん。大丈夫だよ、レイジングハート。…あとどのくらい？」

『秒読み開始します。10…9…8…』

なのはの額に汗が浮かぶ。レイジングハートをしっかりと握りしめると、なのはは布団をかぶった。

それから数秒後。窓ガラスを突き破って、一つの小さな影がなのはの部屋に降り立った。赤いゴスロリ調の服には似合わない、大きな金槌の様なものを持った少女は、無言でそれを振り上げ

「悪いが…頂いていくぜ!！」

一気に振り下ろした。が!!

「アクセル・シューーット!！」

「何っ!?!?うおっ!!--!!」

何も照明のついてない部屋。そこでは3人の男の声が響いていた。

『全てはシナリオ通りというわけか…このままAプランでいけそうだな。』

『そうか…お前には、すまなく思っている。だが、アレを使わずに済むのであれば、それに越したことは無い。』

『ああ。アレを使うのは、本当に最後の最後の時だ。だが、一つのイレギュラーとしては、全てが早すぎる…俺はそう思っている。』

第3の男の声に、あとの二人も同意した。

『やはりそうか。君もそう感じるかい？私も正直な話、そう思った。第一段階を飛び越えて、いきなり第二段階になるなど…君の意見はどうかね。』

『俺も早すぎると思う。万が一、万が一が起こってしまったときは、その時は…』

『ああ。構わない。奴を…【八神はやて】を、殺せ！…』

チエンジ7 復活の黒き戦士(前書き)

奴が、帰ってきた!!

チェンジ7 復活の黒き戦士

閉鎖された結界の中。全ての止まった闇の中で、一つの影が動いた。

『…そうだ。それでいい。戦え…殺しあえ…』

全く抑揚のない声。その声は悲しみと喜びの入り混じったような、言葉にできないような声だった。

『折れた二つの翼に、傀儡の騎士…か。役者はそろったようだな。』

男はその顔に笑みを浮かべて言った。

『さあ、終焉の笛を鳴らせ。地球は今一度、静止した闇の中で回りだすのだ。夜天に彩られたその劇は、はたして悲劇か、それとも…俺はすべてを見届けようではないか。そうだろうか？ ……』

なのはの放ったであろうアクセルシューターの流れ弾が、男のすぐわきのビルに当たる。その魔力光で、一瞬だけ男の顔が照らされる。くたびれたコートに体に巻きつけたチェーン。両腕に巻いた包帯に、炎のような赤いマフラー。黒髪黒目のその荒々しい出で立ち、流竜馬その人だった。

どんなジャミングを使っているのかは分からないが、竜馬はなのにもヴィータにも気付かれる事は無かった。顔をマフラーで覆い隠すと、そのままビルの間へ消えていった。だが、ふたりはそんな事を知る由もない。デバイスの性能差と戦闘の経験。どれをとっても劣っていたのはは、次第に劣勢を強いられていた。

「ちっ…ちよこまかと!!」

「くっ!!」

ヴィータの使うベルカ式魔法は、なののは使うミッド式魔法とは異なり、遠隔攻撃を大幅にオミットした分、近接攻撃と近接防御に特化した、突撃型の形態である。一対一ではなのの方が完全に分が悪かった。だが、なのは自身もユーノから教わった格闘をある程度身に付けていたため、押しつ押されつの接戦に持ち込む事が出来ていた。

(あの子の武器…下手に防いだら、防御を碎かれて一気にやられる!ユーノ君から教わった格闘で今のところはごまかせてるけど、長期戦では必ず負ける。うまく躲しながら、まず距離を取らないと…)

なのはがアクセルシューターでけん制しつつ、距離を取ろうとする。だが、ヴィータもそれを見過ごすほど甘くない。

「やらすかよ!シュワルベ・フリーゲンツ!!」

アクセルシューターを相殺し、アイゼンをラーケンフォームにチェンジする。

「もらったっ！ラケーテン・ハンマアアアアアアアア！！」

回転しながら打撃を見舞うヴィータ。なのははシールドを展開するが、徐々にヒビが入っていく。

「うっ…まずい！このままじゃ…」

「アイゼン…ぶち抜けええええええええええ！！」

ついに限界が来たのか、なのはのシールドは、ガラスの様な音を立てて砕け散った。アイゼンの鋭い先端が、なのはのわき腹に迫る。だが、次の瞬間！！

「！？いねえだと！！」

アイゼンがなのはに直撃するその瞬間、なのはの体が一瞬ブレて消えた。ヴィータが上を見上げると、その目には、なのはを抱き抱えた黒衣の少女が映っていた。

「仲間だと！？誰だ、てめえは！！」

「管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ…この子の、友達です。」

フェイトはバルディッシュを構えると、静かに言った。

「あなたを、民間人へと暴力および傷害で…逮捕します。」

ビルの上で見ていた竜馬は、舌打ちした。

「おいおい、増援がこんなに早く来ちまったじゃねえか！ーヴィー
ータも他の野郎も何やってんだ！ー！」

本来なら、ヴィータはなのはを戦闘不能にさせ、それからフェイト達がやってくるはずである。だが、ユーノとの組み手で鍛えられたなのはは、ヴィータといい勝負がこの段階から出来てしまったのだ。そしてようやく決まったと思つたヴィータの必殺技も、フェイトによつて空振りに終わつてしまった。戦いの中で帽子を落とされてしまったのが腹に立ったのか、それからのヴィータはカートリッジを後先考えず、馬鹿みたいに使つてしまった。なのはもピンピンしている状況で、四対一…しかもユーノに関しては、どれほどまでの戦闘能力を有しているのか分からない。

「奴らの距離は…こんなに離れてるだど！？この馬鹿野郎がつ！
間に合わねえ…武蔵…」

『…へへ。俺はいつでもいいぜ、竜馬。』

武蔵の言葉に笑みを浮かべると、竜馬はビルから飛び降りた。

「フェイト…ちゃん！ー！」

「なのは、大丈夫！ー！」

戦いの中だけど、再会を喜ぶ二人。後からユーノとアルフが走ってきた。

「いやー、危なかった…大丈夫だったかい、なのはっ!!」

「アルフさん！私は大丈夫です！」

アルフに笑顔で答えるのは。ユーノも頭をかきながら言った。

「ごめん、なのは。まさか僕の行った直後にこんな事になるなんて…その様子じゃ大丈夫そうだけど、無茶はしないでね。」

ユーノはそう言うと、なのはに治癒魔法をかけた。

「ありがとう、ユーノ君。さて…」

全員はヴィータの方に顔を向ける。

「事情は分からないけど、悪い事じゃなかったら、私たちは力になってあげられるかもしれない。どうしても…戦わなくっちゃいけないの…?」

「…ああ…」

ヴィータの問いに、なのはは一瞬悲しそうな表情を浮かべると、レイジングハートをかたく握りしめた!!

「私たちが勝ったら…お話を聞かせてもらおうよ!!」

「四対一か…だが、負けられねえな。いくぜ、蚊トンボども！」
四人に真正面から突っ込んでいくヴィータ。まず前に出たのはフ
イト。大きく構えて技を繰り出す。

「ハーケン・セイバー……！！！」

「遅えな…って、でけえ！しかも誘導弾だと!?!」

接近戦で戦うヴィータにとっては、弾速が遅くても、広範囲の誘
導攻撃は致命的となる。急いでシールドで防ぐも、回転をするハー
ケンセイバーをうまく防ぎきれない。ガードをしている数秒間。こ
れは致命的だった。

「く…何とか防げて…何っ!?!」

ヴィータが構えよとすると、両手両足がバインドで固定されてし
まった。

「勝負あり…だな。」

ユーノが呟く。ヴィータが防御に専念していた時に、バインドを
使ったのだ。意表をついた動きの攻撃に、完全にそつちに気がそれ
てしまった彼女は、敵が後三人もいる事まで頭が追いつかなかった
のだった。

「さて、転送魔法で送るか…」

「ま、手荒なことはしないから安心しな。その顔じゃ、何か深い
わけがあるみたいだし…アタシたちで何か力になれることだったら

…ま、細かい話はこっちでね。」

アルフがヴィータに話しかける。だが、ヴィータはその間にシグナムに念話を送っていた。

『…シグナム。あと何秒でこっちに追い付く?』

『あと30秒はかかるが…まさかっ!?!』

『そう、そのまさかだ…』

ヴィータは歯をぎりっと噛みしめた。

『四人で袋にされちまった。悔しいが、どいつもこいつも優秀な魔導師だった。もう間に合わねえ。アタシを置いて離脱してくれ。』

足もとで緑色の魔法陣が光る。すると目の前の白い魔導師…なのはが言った。

「あの…後でゆっくり話を聞かせて!私たちの力になれる事だったら…」

ヴィータは血が滲むほど小さな拳を握りしめた。

「畜生…!!ごめんよ、はやて。みんな…」

誰にも聞こえないほどの小さな声でそう呟いた、その時っ!!

ジャキンッ!!

ぎゅっと目をつぶったヴィータが恐る恐る目を開けると、地面には一本の武骨な斧が突き刺さり、月の光を反射していた。

「な…っ!？」

「うそ…まさかっ!！」

驚愕する一同。転送魔法は解除できたが、まだバインドに縛られたままだ。だが、ヴォルケンリッターに斧を使うメンバーなんていなかった。その時だった。

「フツ…久しぶりだな、ガキども。」

「あ、あなたはっ!！」

月の光が、その全体像を映し出す。漆黒の装甲に覆われたその体腕から伸びる凶悪な形状の刃物。鬼を模した顔面。その瞳は、まるで血涙を流しているようであり、漆黒のマフラーとマントは、その者の強さ、狂暴さのすべてを物語っているようだった。

「悪いがそいつは返してもらっぜ…いくぜ、ドブネズミども!！」

チェンジ7 復活の黒き戦士（後書き）

原作とは違うストーリーの進みにしました。次回は竜馬無双です。

チエンジ 8 折れた翼（前書き）

竜馬が鬼畜すぎます。

チェンジ⑧ 折れた翼

ヴィータSide

アタシは頭の中で何が起こってるのかが分からなかった。アタシをあんなに苦しめたあいつらを、いとも簡単に叩き潰すアイツ…本当は逃げるとこなんだけど、アタシはシグナム達が来るまで見入っていた。奴が敵なのか味方なのか分かんねえけど…でも、アタシは、あの時のシグナムの横顔を忘れることはできなかったんだ。

チェンジ⑧ 折れた翼

死んだと思われていたブラックゲッター…もとい『リョウ』の出現に、言葉を失う一同。さらに彼の口から出た言葉は、宣戦布告であつた。

「待つて！まず話しを「うるせえ！てめえの事なんざどうだつていい！！いいか、よく聞きやがれ。今後一切俺たちのやることなす事には横槍入れんな。別に誰かの命とるとか、そんなことはしねえさ。だがな、もしてめえらがなんかちゃち入れてきたら、容赦なくぶつ殺すぞ！！」

人の話を全く聞こうとしないブラックゲッターに、ヴィータは目が点になった。

「でも…もしあなたたちのすることが誰かを傷つける事なら、私は許せません！！」

「フェイトちゃん！」

バルディッシュをブラックゲッターに向けるフェイト。しばらくの沈黙。すると竜馬は言った。

「そうか、分かったぜ。」

口の装甲の隙間から、水蒸気が吹き出る。そして

「てめえに引導を渡してやるぜ!!」

高速で前進するゲッター。竜馬は武蔵に通信を送った。

「ムサシ！ブラックゲッターの外見が若干変わっているけど、こりやなんだ？」

『ああ、一度大破したからな。今までの戦闘データをもとにして強化しといたんだぜ。外見の違いは、ゲッターレザーが両腕装備になっただけだな。それと新規の武装も追加した。』

コックピットに映し出される新武装。竜馬は驚いた。

「フツ…すげえな、ムサシ。流石だぜ。あんなネズミども、ゲッタートマホークで叩き潰してやる!!」

距離を一気に離して、なのはとフェイトが一斉にアクセルシューターとプラズマシューターを放つ。だが

「当たると思ってたのか!?!」

「嘘っ!?!」

右肩から火花を飛び散らせながら、ゲッタートマホークを射出する竜馬。右手で握りしめると、着弾する直前で、全弾をトマホークで切り払った。

「トマホオオオオク・ブウウウウウメランッ!」

急上昇して避けるフェイト。だが、待つてましたとばかりに両手にゲッターマシンガンを構える竜馬。

「死にやがれえっ!」

マシンガンの弾幕を、物理法則を全く無視した動きで回避するフェイト。竜馬の頭上では、なのはがレイジングハートを構えていた。

「デイベイイイイン・バスター!」

「なめるなあ!」

頭上から撃たれたデイベインバスターを急バックで避けると、一気に上昇する。

「ゲッターアアアアビイイイイイム!」

フェイトほどの機動力の無いのはは、必死に避けるも少しかすってしまった。バリアジャケットの右肩部分が焼け焦げて消滅した。肌には当たっていなかったから、火傷にはならないだろう。そもそもゲッタービームの直撃を食らって生きていられることは不可能だが。

「うっ！」

「なのはっ！うっおおおおおおお！！」

ユーノが義手を剣に変形させると、竜馬に向かって突っ込む。だが、竜馬は無表情の仮面の下でにやりと笑った。

「ゲッタアアアアガトリングキャノンツ！！！」

竜馬の手に、何処から取り出したのか巨大なガトリング砲が現れた。その大きさは全長2メートル、直径は1メートル。砲身からは直径2.5センチの金色に光る7門の銃口が、こちらに向いていた。

「何っ!?!」

「うおおおおおおおおお！！！！」

シールドを張りつつ逃げようとするが、避けきれず義足が銃弾一発が命中しただけで、粉々に吹っ飛ぶ。周囲のコンクリート壁も、銃弾の当たった場所が大きく碎け散っていた。地面に叩きつけられるユーノ。命は助かったようだが、意識は無かった。

「ユーノ君!?!」

「てめえ!!！」

竜馬の乱射するガトリングの死角…真下を潜り抜けながら、アルフが接近しようとするが

「てめえらのやるこつたあ、全部読めてんだよ!!」

200キロもある砲身を、木の枝の様に片腕で振り回す竜馬。単
純な破壊力では、ヴィータのラケーテンハンマーを上回る。アルフ
は腕をクロスしたうえでシールドを使うも、一撃で吹き飛ばされて
しまった。

「アルフツ!!?はあああああああ!!」

フェイトがバルディッシュを竜馬に振りかざす。ゲッターガトリ
ングキャノンを投げ捨てると、竜馬はゲッタートマホークを構えた。
だが、柄付き鎌と手斧では、リーチに違いがありすぎる。それを生
かして、フェイトは流れるように攻め立てる。竜馬も応戦するも、
正直きつかった。

『ちつ、リーチに違いがありすぎるぜ…このままじゃ防戦一方だ。』

竜馬が少し回りを見ると、なのはが砲撃魔法の準備をしていた。

『やばいぜ、あれはスターライトブレイカーだ。直撃したら流石
の俺もやべえ。ムサシッ!!』

すると武蔵が言った。

『竜馬っ!左肩のパーツを使え!』

竜馬はその武装を見た時、目を疑った。

(嘘だろ!?!こりゃ真ゲッターの武装じゃねえか。でもんなこと

どうだったいい。)

竜馬は至近距離でバルディッシュにゲッタートマホークを投げつける、一気に上昇して距離を離れた。

「ゲッターアアアアサイトツ！」

自分の身長よりも長いポールが、左肩から射出される。高く打ち上げられたそれが月光に照らされたと否や、瞬時に一方には巨大な鎌が、その反対側には無数の棘が展開された。グルグルと円を描いて回転しながら落下してきたそれを、竜馬は絶妙のタイミングで手に取る。

「フッ…」

フェイトの目には、一瞬竜馬の体がぶれて見えた。しかし次の瞬間

「え…っ!?!」

バルディッシュが真っ二つに切断され

「がっ…」

後頭部に衝撃が加わったと思うと、そこで意識を手放した。

「嘘っ!?!そ、そんな!?!」

なのはには何が何だか分からなかった。竜馬の体が消えたと思っ

た次の瞬間、フェイトは地面に叩きつけられていたのだから。起こった事をスローモーションにすると、まず竜馬は人間の目に捉えられない速さ…ブラックゲッターの出せる最高速度を使って一気に接近、ゲッターサイトを振り下ろしてバルディッシュを叩き斬った。その縦の動きの流れを生かして、柄でフェイトの頭を叩きつけたのだ。

でも、なのはもここで引けなかった。もう戦えるのは自分一人。後のメンバーは戦闘不能に陥っていた。なのはは最後の賭けに出た。

「いくよ、レイジングハート!!」

スターライトブレイカを竜馬に向ける。だが、彼女の目的は竜馬に当てることではない。この結界を破壊する事が真の目的だったのだ。だが、わずかな希望も、この男は踏みにじっていった。

「…残念だな。」

竜馬が前進するが、そんなこと分かり切っている。なのはは力を振り絞って叫んだ。

「スターライト…ブレイカー」

叫んだ

「……………」

はずだった

ゲッターサイトには、一つの小さな塊が突き刺さっている。否、それは少女であった。ぼたぼたと垂る鮮血を、その身に浴びるゲッター。だらりと垂れた小さな手。半開きの目。開いた口からは舌とよだれが垂れている。しばらくゲッターは突き刺したそれを眺めると、興味が無くなったのか、乱暴に振り回して捨てた。振り返ると、バインドを解かれたヴィータと、その横にはシグナムとザフィーラが立っていた。

「フツ…死んではいねえ。肺も心臓も、脊髄も外しておいた。」

だが、3人は何も答えようとはしない。彼はしばらく黙ると、笑って言った。

「いたぶって殺した方が…気持ちいいからな。」

竜馬は三人のもとを去って行った。このあとすぐに何とか意識を取り戻したフェイトたちとヴォルケンリッターは交戦するのだが、全く勝負にならなかった。レイジングハート、およびバルディッシュ、ユーノの義足は完全に破壊、全員の魔力が闇の書に蒐集されたのも10分もかからなかった。これは高町なのはとフェイト・テストタロツサの体験した、はじめての完全な『敗北』だった…

チェンジ9 対決！！ゲッター対極道兵器（前書き）

突然文字数が増えました。そして…あの男が、参戦します。

チエンジ9 対決！！ゲッター対極道兵器

その日、アースラの中には沈黙が流れていた。

「なのはちゃん…フェイトちゃん…まだ意識を取り戻しません。」

エイミイの声に、リンディは静かに言った。

「…私は咎人よ。そうでしょうか？クライド…」

チエンジ9 対決！！ゲッター対極道兵器

シグナムは廊下を歩いていった。だが、明らかに様子がおかしい。必死に後のメンバーが取り押さえようとしますが、彼女は突き飛ばす。乱暴に寝室を開けると、そこには、一人の男が本を読んでいた。竜馬だった。

「…この世にはな、ふたつ不幸があるんだ。」

「竜馬…キサマアアアアアアアアアア！！！」

竜馬の胸ぐらを両手でつかんだシグナム。呼吸の粗くなった彼女の顔には、明らかに怒りが込められていた。

「ふざけるな…貴様、自分がいったい何をしてるのか「おい、シグナム！やめろ！！」「ヴィータは口をはさむな！！！」

鬼のような形相で怒鳴るシグナムだが、竜馬は全く表情を変えていなかった。

「てめえ…『ぶざけるな』だと…？笑わせんじゃねえよ…」

今度は竜馬がシグナムの胸ぐらをつかんだ。

「てめえは怖えだけなんだろう！はやてのために、人を殺すのが！」

「黙れっ！！貴様のやっている事は、あれは人間のやる事じゃない、野獣のやる事だ！！こんな事をして…こんな事をして、主はやてが喜ぶとでも思っているのか！！」

「その台詞を、てめえら全員に返すぜ。」

「やめろ、シグナムっ！竜馬っ！！」

ザフィーラが割って入り、何とか二人を取り押さえる。完全に頭に血が上ったシグナムに対し、竜馬は妙に冷静だった。

「…よく考えてみる。そいつは一回までしか同じ対象を蒐集することはできない。なら、邪魔になるものは消しちまえばいい。奴らが消えれば、俺たちの邪魔をする奴はいなくなる。」

シグナムは絞り出すように言った。

「貴様…何を知っている…何処まで知っているんだ！！闇の書を！！我ら守護騎士を！！」

それに竜馬は即答した。

「全てだっ！！」

「！！？」

静寂が部屋を包んだ。竜馬の言った言葉に耳を疑ったのは、シグナムだけではない。その場全員が竜馬の言葉を信じられなかった。

「なら…貴様の目的はなんだ…！！主を殺す事か？私たちを消すことか？今までの…今までのお前は、全て演技だったのか！！？」

シグナムの叫びに、竜馬は背を向けて答えた。

「俺はそんなに芸達者じゃねえよ。俺は…はやてを…お前たちを死なせたくねえ。それに…あのチビどもも…」

「おい…それ、どういう事だよ…お前の半殺しにしたあいつらを…死なせたくねえだと…?!」

グイータがそう言ったのも無理もない。この男はさっきまで、目的の邪魔になるものは消すと言っていたのだ。竜馬の言葉を誰も理解できなかった。

「アレは、てめえらが考えているほど軟なものじゃねえ。場合によっちゃあ、俺が…はやてに手を掛けなくちゃならねえ…」

「何だと…貴様、やはり主を「最後まで聞きやがれ！！いいか、俺は奴を守りてえからここにいるんだ。それは最後の最後だ。俺は…奴を、死なせたくねえ…失いたくねえんだよ、誰も…」

竜馬は懐の銃を取り出すと、シグナムに投げつけた。それを手に取るシグナム。竜馬は言った。

「いいぞ。いつでもそれで撃つていい。こいつをてめえに預ける。ただし」

竜馬はずいっとシグナムに顔を近づけた。

「その時は、全て終わった後だ。」

部屋を出ようとする竜馬を、シグナムは呼びとめた。

「竜馬っ！！話はまだ終わっていないぞ！！」

「俺から聞くな。てめえらが見て、聞いて、感じたもの。それが全てだ。俺が知っているのは一つのシナリオに過ぎん。そのシナリオは、序盤から大きく崩れた。まあ、崩したのは俺自身だがな。筋書きを聞いたところで、それは絵空事に過ぎねえ。」

竜馬は部屋のドアの前で足を止めた。

「…俺は、何があってもてめえらの味方だ。俺はてめえらを信じる。だから、てめえらは俺を信じる。じゃあな、おやすみ。」

そう言ってドアを開けて出て行く竜馬。だが、しばらくすると戻ってきた。

「…ここ俺の部屋じゃん。電気消すぞ。俺、寝る。」

強引にあとのメンバーを追い出すと、自分は二段ベッドの上でぐっかかと寝そべった。

(竜馬…)

シグナムは、上で熟睡している竜馬を見上げた。パジャマ姿のその手には、彼から託された銃が握られていた。

(私はお前が分からない。お前は誰なんだ…)

銃を両手で抱き締める。毛布に顔をうずめるシグナム。部屋に満ちるのは月の光だけだった。

「竜馬…私は…お前を信じて、いいのか…?」

消え入るように呟くと、シグナムの意識は月の光の中へと溶けていった。

翌日。竜馬は一人、海鳴のとある地下駐車場をぶらぶら歩いてた。この辺に居るチンピラどもから金を巻き上げるためだ。すると右肩にどんと誰かがぶつかつた。

「んあ…？テメー、何しやしやってんだよ！！」

竜馬にぶつかってきたのは、いかにもやくざ顔の奴だった。だが、一緒に居たもう一人が顔を青ざめた。

「おい、元！そ、そいつに関わるんじゃないやねえ！！すぐに謝って逃げろ！！」

「はあ？おい、柴本。何アホなことやってんだ。俺は…」

元と呼ばれた男は、理解できていなかった。今自分の体が宙に浮かびあがっている事。コンクリートの柱に激突した事。そして地面に落ちて気絶した事。たったの一秒だった。

「てめえは…ああ、思いだしたぜ。いつかガキに絡んでいて、手首へし折ってやった奴だろ？残念だったな。俺は今、機嫌が悪いんだよ。」

指をコキコキ鳴らせてにやつく竜馬。すると後ろから突然声がかかった。

「おい、ワレ。ワシのシマで何しとんじゃあ？」

黒いシャツに鳶職人の履いているような白いズボン。腰には腹巻がついていた。口には煙草をくわえており、くたびれた帽子にはなぜかねじり鉢巻きが巻かれており、丸いグラスが掛っていた。

「てめえがこいつらの親分か。子分の面倒くらいちゃんと見やがれ。」

そう竜馬は言うつと、やくざの親分は子分を二人とも蹴り飛ばした。二人とも止めてあつた自動車のガラスを突き破つて、頭から突き刺さっていた。

「ワレ、ええ目しとるのお…やくざもんか？」

「ちげえな。ただの新聞配達だ。」

それを聞くと、親分は大笑いした。

「わははははは！！そうかあ！！」

するといきなり、男はマシンガンを竜馬に向けた。

「ワシの目はごまかせへんぞお！！」

ドガガガガガガガガガ！！

男がマシンガンを竜馬に撃つ！！だが、竜馬は何もしない。全て撃ち終わったあと、煙が竜馬を覆っていた。じよじよに煙がはれると、なんと竜馬は瞬き一つせず、健在だった。なんとマシンガンの弾は、全部竜馬の体のスレスレに撃たれていたのだ。

「わははははは！！見破つてたか！！こりやたまげたぜ！！」

「フツ…弾なんてものはよ、当たると思ってるから当たるんだぜ。」

その台詞を聞いた途端、男の顔が変わった。

「ほお…おもれえこと言うな、ワレ…名前なんちゆう？」

「流…流竜馬だ。」

「ほお…ええ名じゃあ…ワシの次にええ名じゃあ…！」

男は右手をむんずつと掴むと、一気に引き抜いた！！そこには、何処にも見た事が無いような銃がきらりと光っていた。

「ワシは極道兵器・岩鬼将造じゃああああああああああ！！

！！！！」

叫びながらマシンガンを乱射する将造。竜馬は服の下からバズーカ砲を取り出す。将造の弾をかわしながら、バズーカを発射した！！

「わははは！なわとびは大好きじゃああああああああ！！」

将造がジャンプすると、着弾した後ろの車が跳ね上がり、粉々に吹っ飛ぶ。その車は、将造の子分が突き刺さった車だった。その子分は、燃えた肉片と化していた。

「なんて野郎だ。今時のやくざは義理も人情もねえな。」

「はあ？何言うてるんじゃ、ワレえ？ありゃ、ワシの子分やないぞ。ありゃワシに敵対してる青熊組の連中や。さっきのはハッターじゃあ。」

それを聞くと、竜馬はにやにやした。

「おもしれえ。この喧嘩、奴らの事務所の地下でやらねえか？」

「ええなあ……ごつつうええなあ！！乗った！！この近くや。」
すると将造と竜馬は、駐車場の中を駆けていった。

その頃青熊組本部。頭領の青熊は、副頭領の飯島と話しをしていた。

「あの岩鬼とか言う男……近頃ワシのシマで大暴れしてくれるそうじゃないかの、なあ。飯島。」

「そうですね、頭領。奴は今から消しておいた方が……」

青熊はにやっと笑うと、後ろの扉を開いた。

「ん……ああ……ああ……！！！！！！」

「んふっ……ん……」

そこに居たのは、部屋にひしめく裸の女たちだった。

「頭領様あ……わたしとしてえ……」

「あっ！わたしとー！！！！」

頭領に抱きつく女たち。だが、彼女たちの目はうつろだった。彼女たちは、薬物中毒者だった。女たちはクスリと引き換えに、青熊に春を売っていたのだ。だが、そのクスリは麻薬ではなく、人間がおかしくなるほどの媚薬だったのだ。つまりここに居る女は、青熊の性奴隷だったのだ。服を脱ぎ、まさに真つ最中のさなか、本部を激しい揺れが襲ったのだ。

「きゃあー!!」

「こわーい!!」

抱きつく女どもを引き離し、青熊は飯島を呼んだ。

「おい、飯島。これは何だ？地震か？」

「い、いえ、外の様子を見てもそんなようには…」

彼らは知らなかった。この地下に、彼らの足もとで起こっている惨劇に…

彼らは、喧嘩をしていた。一対一の喧嘩を。

「てめえに引導を渡してやるぜっ!!」

「死ねや~~~~~!!」

将造が屈むと、膝がパカッと開き、中からミサイルが連射される。

竜馬は飛んできたうちの一発をどっから出したか知らないゲッター
トマホークで切り払う。その流れ弾は、駆け付けた青熊組の組員を…
ドワオ!!

「ぎゃあ!!」

「ぎゃん!!」

生きたまま火だるまになり、手足バラバラになる男たち。竜馬は
目もくれず

「トマホオオオオク・ブウウウウウウウメラン!!」

ゲッタートマホークを投げつける!!だが

「わははは!甘い甘い!!」

将造はドスでトマホークを切り払う。あらぬ方向に飛ばされたそ
れは、組員を引き裂いた。

「ひぎいつ!!」

あるものは腹から内臓を噴きだし

「あぎよっ!!」

あるものは頭をかち割られ

「あぎゃあ」

またある者は首を撥ねられる。竜馬はそのまま拳を振り上げて将造に殴りかかるが、将造はこれをさっとかわす。すると将造の後ろに居た組員の頭が、ザクロの様につぶれ、眼球と脳みそが竜馬の顔にへばりついた。

「ちっ、汚ねえ。」

竜馬はその辺に居た組員の首をもぎ取ると、死体の足を持って振り回す。人間の力を遥かに超えたそれは、地面にあたると上半身が千切れて飛んでいってしまった。飛び出た腸からは、糞便が散らばった。

「うわ、くせえ。」

「隙ありじゃあ!!」

将造はロケットランチャーの標準を竜馬に合わせると、発射する。だが、竜馬はそれをかわすと広い階段を駆け上って行った。それを追いかける将造。50人近い子分は、皆竜馬と将造の巻き添えを食らって死んでいった。ふたりは喧嘩しながら、青熊組に殴り込みをかけたのだ。

「いたぞ、奴らだ!!」

「死ね————!!」

階段では、組員たちがナイフやバットを持って待ち構えていた。だが、将造は手榴弾を、竜馬はロケットランチャーをぶちかました!!

ドワオオ！！

死体の上を猛ダツシユしながら、お互いにマシンガンを乱れ撃つ。壁は穴だらけになり、死体は次々に増えていく。だが、ふたりは笑っていた。声を出して笑っていた！！

「わははははは！！楽しい！楽しいのお！！」

「ヒヤハハハ！！最高の気分だぜ！！」

奴らは好きだった。血の臭いが。人肉の焼ける臭いが。はらわたの臭いが。何よりも

「人殺しは、最高だぜ（じゃあ）！！」

将造に向かって先のがった鉄パイプを突き刺す竜馬。将造が躲すと、周りの人間が串刺しになる。その叫び声ににやにやすると、人間の突き刺さったそれを振り回す。一方の将造は大きくジャンプすると、右足から火炎放射機が現れる。そこから火が吹き出るが、竜馬は組員三人を盾にすると、大きく飛び上がって将造に回し蹴りを決める。吹っ飛ばされた将造は、後ろのドアを突き破った。

「な、何だ貴様らは！！」

「護衛はどうしたというのだ！！」

「きゃー！ー！ー！」

悲鳴をあげて、全身から血を噴いて死ぬ女たち。それを見て、青熊は震えあがった。

「ひいつ！？お、お前たちはバケモノだ！！」

「何言つとるんじゃあ、ワレえ。おのれも同じようなことやってたくせにのお、なあ！流。」

「フツ…てめえ、まだ気づかぬえのか？外見てみる。」

青熊と飯島は窓の外を見た。その光景を見た時、彼らは絶句した。

「な…建物が…落ちてる…」

視界がどんどん下へと下がって行くのだ。このビルは高層ビルだった。だが、竜馬と将造が下の階で、爆弾やらロケットランチャーやらを乱射したせいで、支える柱や基礎がボロボロになってしまったのだ。そして重みに耐えられず、下の階からこのビルは崩れていったのだ。

「うわあ！傾きだした！！」

「た、頼む！この通りだ。金はいくらでもある。女もいくらでもやる。命だけは、命だけは…」

竜馬と将造にすがりつき、命乞いをする二人。ゆっくりと傾き始めるビル。竜馬と将造は、ふたりの首根っこを掴んで立たせた。

「ほら、立てよ。」

竜馬が青熊を立たせる。青熊は言った。

「た、助かったあ！い、急いで逃げないと…」

すると何を思ったのか、竜馬と将造は二人の幹部を窓際に立たせた。

「え…？」

「な、何のつもりだ…？」

すると将造がにやつと笑った。

「ええサーフボードやなあ…流。」

「そつだな、岩鬼。」

そつ言つと二人は青熊と飯島を

「「「つりゃあつ！」「」

窓の外へ蹴り飛ばした！そして竜馬は青熊の上に、将造は飯島の上に乗った！背中に乗られた彼らの体が、ビルの壁に密着した！！

「ぎゃあああああああ！！」

「つぎゃあああああああ！！」

服が裂け、鼻がもげ、全身の皮膚がはがされる。そんな彼らの体を使って、竜馬と将造は崩れゆくビルの外壁で、なんとサーフィンを始めたのだ！！

「最高のサーフィン日和だぜ！！」

「わはははは！今年最後のビックウェーブじゃあああああ！！」

青熊の首がぶちっともげる。竜馬が将造を見ると、飯島は首はおろか両腕がすでにもげてしまっていた。それを見ると、竜馬はニヤツと笑った。

「さて、フィニッシュは華麗に決めないとな。」

「ワシは金メダリストじゃぞおおおおお！！」

胴体だけになった男の死体を蹴り飛ばすと、空中回転して華麗に着地する竜馬と将造。彼らが着地したと同時に、ビルが轟音を上げて崩れ落ちた。

「わはははは！！今日は楽しかったのお、流れ！！」

よく分からない理由で始まった喧嘩は、なぜか知らないうちに和解しており、ましてやヤクザの組一つ壊滅させてしまった竜馬と将

造。

「俺も良い運動になったぜ。」

竜馬が腕を回しながら答えた。

「お前と俺が組みゃあ、世界を取れる。」

「悪いな。俺はさっき言った通り、やらなきゃならねえ事があるんだ。岩鬼組は勘弁だぜ。」

「まあ、人それぞれっちゅうもんはあるわな。分かった。じゃが」

将造は右腕のマシニングを竜馬の腕にこんと叩くと言った。

「今日から俺とおまえはダチじゃあ！今度からワシのことは将造呼べえ。ワシはお前の事竜馬って呼ぶじゃあ。」

「そうか。分かったぜ、将造。あばよ！！」

「またな、竜馬！！」

夕焼けの海鳴公園をバックに、真反対の方向に歩きだす二人。本来なら相見える事の無かった二匹の狂犬は、それぞれの寢床に帰って行ったのだった。

チェンジ9 対決！！ゲッター対極道兵器（後書き）

知っている人には、分かるはずです。恐ろしい組み合わせです。

チェンジ10 暴虐の竜馬!! 逆襲せよ、アースラチーム!! (前書き)

徐々に役者がそろってきます。

チェンジ10 暴虐の竜馬!! 逆襲せよ、アースラチーム!!

不毛の大地。砂漠のみが広がっているその空間には、無数の怪物の死骸が山となっている。その頂点には、分厚い本を抱えた鋼鉄の死神が腰かけていた。そこに、場に合わぬ赤服の少女が飛んできた。

「竜馬っ! 大丈夫かよ、お前!!」

鋼鉄の死神の事を、少女は竜馬と呼んだ。彼の体は血まみれだった。

「フツ…これが俺の血だとも思ってたか?」

竜馬はそう言って立ち上がる。すると背後から30メートルはある巨大な怪物が現れた!!

「軽く撫でてやっただけさ。」

後ろを向いたまま、怪物を全く見ようとしない竜馬。だが右手に握りしめられたゲッターサイトがわずかに震えるだけで、怪物の体は両断され、絶命した。

「つまんねえ…もっと殺しがいいのある奴はいねえのかよ。まだ足りねえ。まだ殺し足りねえんだよ、俺は!!」

チェンジ10 暴虐の竜馬!! 逆襲せよ、アースラチーム!!

竜馬との戦闘で重傷を負ったのはは、シグナムとの戦闘で負け、リンカーコアを蒐集してしまったフェイトと、義手がまだ完成していないユーノトリハビリに取り組んでいた。

「なのは。じゃあ、右足から出してみて。」

「うん。…くっ!？」

「なのはっ!!大丈夫!!」

右足を出そうとすると、激痛のために床を転げまわるのは。軽度ではあるが、右足に若干のマヒが残っている。医師からは時間の経過とともに治るとは言われているが、そんな裕著にしているは、闇の書を完成させることとなってしまふ。あの後、病院のベッドでなのはがリンディから聞いたのは、忌わしい過去だった。

謎の魔導師の持っていた分厚い本。あれは【闇の書】という名前の書物で、なのはたちと交戦した四人の魔導師は人間ではなく、闇の書自体が生み出した、実体をもったプログラムだという。闇の書は全666ページで構成されており、リンカーコアの魔力を吸収することによりページを埋め、最終ページが埋まると絶大な力を所有者に与えるという。だが、その全てが実際には闇の書に所有者自体が取り込まれてしまい、肉体が崩壊するまで破壊活動を繰り返すというものだった。またプログラム（総称してヴォリケンリッターという）と闇の書は、消滅しても転生機能によって再生し、時代も世界も全く異なる場所に蘇ってしまうということだった。

十年前。闇の書の主を逮捕し、護送している最中の出来事だった。護送中の戦艦で、闇の書が突如暴走。当時その艦の艦長だったクライド・ハラオウンは、全乗組員を脱出させたのち、自ら仲間の船に自分ごと闇の書を消滅させることを提案。やむを得ず、同僚だった

ギル・グレアムは最終兵器【アルカンシエル】を発動。クライドごと闇の書を消滅させた。そう、クライド・ハラウンとはリンディの夫。そしてクロノの父親だったのだ。

クライドの犠牲によって、なんとか闇の書自体は消滅させることができた。だが、闇の書はその再生機能を使い、今度はこの世界で復活したのだ。だが、不可解な点が二つある。一つは、ヴォルケンリッターたちが感情を持っていること。過去の記録にそんなものは記されていない。もう一つは、ブラックゲッター。実は、彼の事は今までの記録に一切ない。彼の正体は、闇の書が新たに作り出したヴォルケンリッターの一人なのか、あるいは闇の書に加担する第三者か。エイミイとクロノ、そしてリンディが追っているが、今だつかめていない。

「く…立たなきや…わたしたちは、まだ負けられない!!」

竜馬が去って行った後。怪物の死体の上に、何も無いところから一人の男が現れた。その顔には仮面が、額には真紅の鉢巻きが巻かれていた。

「竜馬…全てはシナリオ通りだ。でも、お前は…全て、全てを一人で終わらせるつもりなのか!!もし、もし仮に彼女たちを救えたとしても、悲しむはずだ。自分たちのためにお前が犠牲になったなどど知ったら…」

男は俯いた。

「…その悲しみは、俺が一番よく知っている。だが俺は…俺たちは、あいつを…!!」

拳を地面に叩きつけると、砂漠に巨大なクレーターができる。

「すまない…すまない…竜馬ッ!!」

仮面の男は一跳びすると、いずこかへと消え去っていった。

その頃、海鳴の街角の一角に、白髪の初老の男が立っていた。その甘いマスクは若いころかなりの美男子だったことをうかがわせる。スーツを身にまとったその出で立ちは、まさに紳士を絵に描いたようだった。

「む…良い香りだ…」

渋みの利いた声が響く。男は香りのする方向に引き寄せられていった。だが、彼の感じ取った香りが何なのか、誰も知る由もない。海岸でもなく、有名な喫茶店の翠屋でもなく、男はある坂を登って行った。その途中で男はこう言った。

「…ああ、良い香りとはこのことだったのか。」

そこにいたのは、下校途中の小学生…つまり幼女だった。

「あまりにも良い香りだったからつい来ってしまったが…そうか。この子たちの服の香りだったのか…」

その男、ギル・グレアムは、紳士だった…だが、真のロリコンは違う。リアルに手を出して、レイプしてぶっ殺すような屑どもは、もうロリコンとは呼べない下賤な存在。真のロリコンとは、「YES！ロリコン・ノータッチ」なのだ。つまりどういうことか。すべてを自分の脳内【だけ】で済ますのだ。彼は本当の美男子だった。有名な女優からプロポーズを何度も受けたことがある。だが、彼に妻はいない。そう、彼が恋愛対象にするのはあくまで幼女。縁談もプロポーズも全部突き返したのは、正直幼女以外の女には興味がゼロだったからだだった。

「ううむ、あの子にはお尻に蠟燭を垂らすのが…いやいや、そこはどっかの次元世界から触手生物を連れてきて…」

その思考は、もはや犯罪者を超えている。だが、彼はただ一度たりとも体にタッチしたことはない。チキンのではなく、それが彼の理性なのだ。

「いや、それにしてもいい幼女ですなあ。どれどれ…」

グレアムは正面からこっちに来る幼女たちとすれ違う。グレアムが10メートルくらい離れてからだろうか。遠くから幼女たちの悲鳴が聞こえる。ポケットに突っ込んだグレアムの両手には、ほかほかの幼女のパンツが握られていた。彼がすれ違いざまにパンツをはぎ取る速度は、スーパーカメラでも捕えられないほどの早業。

「…うむ。この温もりが最高にいい…それにしてもいい香りだ。」

パンツをくんくんするグレアム。彼は、清々しいまでの変態だった。だが、その時だった。

「きゃーーーーー！！！！」

パンツを奪われた時とは違う悲鳴を聞きつけ、グレアムが振り返る。するとそこには、下校途中の小学生の列に突っ込む乗用車の姿があった。

「ぬ……！！」

いきなりグレアムの目が、変態ジジイから急に鷹の様な鋭い目になる。すると一瞬体がぶれた次の瞬間、グレアムの体は消えていた。

「いやああああああ！！」

逃げまどう小学生を、しつこく乗用車が追いかける。この運転手は、子供を引き殺そうとしていたのだ。その証拠に、手には拳銃を持っていた。

「死ねえええええええ！！」

道路に一人の少女が転ぶ。車が轢き殺そうと突っ込んだ瞬間だった！！

ドゴオツ！！

突然、凄まじい音が鳴り響いた。その場にいた人々は、彼女が轢かれたと目を覆った。だが、なんとその自動車は、空中高く飛び上がっていたのだ。一人の老人の蹴りで。

老人は右手の指に五枚の十円硬貨を挟むと目を閉じ、何か言葉を言いながら左手で印を切る。そして彼が目を開いた瞬間、十円は自

動車を貫き、車は空中で爆発した。すると男が無傷のまま空から落ちてきた。

「うぐっ!!…な、なにがとうなってるんだよお…!!」

男と老人の目が合う。すると男は逆上した。

「何だジジイ!!死ねよお!!」

男は老人に銃を向けると発砲した!!だが

「ふふふふ…甘いな。」

男は信じられなかった。何と老人は、自分に向かってピースしていたのだ。そしてその指には、銃弾が挟まれていたのだ。

「ひいつ!!?」

「いいか?銃とは…こうやって撃つのだ!!」

老人が銃弾を指で弾くと、男の持っていた銃を撃ち抜き、その後の電柱に当たった。するとその衝撃で電柱は砕け、倒れてしまった。

炎上する自動車。泡を吹いて気絶している男。そして粉碎された電柱。その場にいた人々は、声を失った。すると老人は少女に近づくこと、優しく体を起こした。

「…怖かっただろう?怪我は無かったかい?」

老人に少女は言った。

「う、うん！ありがと、おじちゃん！！」

すると老人はにっこりと笑うと、一瞬で姿を消してしまったのだ。
った。

ところ変わって作戦室。ディスプレイをずっと眺めるクロノに、
エイミイがコーヒーを渡した。

「はいどうぞ。」

「ん…？ありがと、エイミイ。」

エイミイは珍しく真剣な顔で言った。

「…ヴォルケンリッターとブラックゲッター。奴ら、調子に乗っ
て大暴れしているみたいね。」

クロノのディスプレイには、堂々と巨大生物を狩るヴォルケンリ
ッターとブラックゲッターが映されていた。その戦い方を見ても、
敵ながら舌を巻いてしまうほどだった。

「悔しいが、現時点で僕たちに勝ち目はない。経験・武器・そし
て精神力。全ての面で彼らが上回っている。その上、四人の騎士の
コンビネーション…正直、本局の武装隊でも勝てるかどうか…」

クロノはコーヒークップをデスクに叩いていった。

「畜生…せめて、せめて奴らに一矢報わねえと俺の気が収まらねえ。クソツ、何かいい方法は無いのか…」

「…クロノ、大丈夫だよ。」

エイミイはそつとクロノの手を握った。彼の手は震えていた。

「辛いのは、クロノだけじゃないよ。私だって、みんなだって辛いんだよ。今、みんな必死でリハビリしてる。だから、少しずつでも私たちにできる事…探していこ？」

優しく笑いかけるエイミイの胸に、クロノは少し頭をもたれた。

「…エイミイ。これを見てくれ。」

クロノの渡した紙には、レイジングハートとバルディッシュの強化案が書かれていた。

「これは、デバイスが自ら要求したものをまとめたものだ。」

そう、その強化案はデバイスが自ら頼んだ事が克明に描かれていたのだ。そして最後のページを読んだ時、エイミイは驚きを隠せなかった。

「!?!?こ、これって…!!」

クロノは立ちあがって、言った。

「…そう、カートリッジシステム。一発へマをしたら命は無い、危険な代物さ。」

チェンジ10 暴虐の竜馬!! 逆襲せよ、アースラチーム!! (後書き)

グレアムはいつたい何者なのか…分かる人には分かると思います。
ですが、分かっているも口には出さないでくださいね…ね？

祝PV30000突破企画 ゲッターなのは 第五話(前書き)

ウツソ「おかしいですよ、はやてさん!!」

波平「はやてのやつ、いたずらばかりしおつて。けしからん。」

ムスカ「はやては滅びぬ。何度だって蘇るさ!!」

管総理「今までは仮免許だったが、これからが本番!!」

涼宮ハヤト「八虫人類、百鬼獣、メタルビースト、インベーター、鬼、もしくはそれに類するもの、わたしのところに来なさい。地獄を見せてやる。」

「ちっ！ババア！！てめえのゲッターが抜かされてるぞ！！この先にあるのは病院なの。このままじゃ、アイツに潰されちまうの！！」

メカフェレットの前方には、大きな病院があった。その患者の多くは避難できる状況ではない。だが、そんな緊急事態にもかかわらず、リンディは余裕の表情だった。

「ふふふ…そんなに焦る必要はないわ、なのはさん。…ん？な、何だっ！！」

余裕の笑みを浮かべていたリンディだったが、急に顔がこわばる。なんとゲッターの真下の海面に、巨大な影が浮かび上がったのだ！それは大波を立てて海から現れた。

「か、怪物のスペアボディですって！？」

そう、いましがた倒されたばかりのメカフェレット。その新品のスペアボディが現れたのだ。スペアボディと合体すると、メカフェレットは真の姿を取り戻す。それだけではない。今度はもう二体、計三体のメカフェレットが現れたのだ！！

「な、なんてことなの！？これじゃ追いつけないの。」

動揺するなのは。すると前方のメカフェレットが、一斉にミサイルを発射してきた！！

「や、やべえ！！避けきれねえ！！」

ゲッターにピンチが訪れたその時、リンディが叫んだ。

「なのはさん、オープンゲットよ。ゲッター2でいくわ。」

「ふふ…わかったなの！！オオオオオオープン・ゲットツ！！」

なのはがレバーを引くと同時に、ゲッター1の頭部が粘土のように変形し、イーグル号に変形する。そして一瞬のうちに三機のゲットマシンに分離する！！赤いイーグル号、白いジャガー号、そして黄色のベアー号の順番に飛行しているが、ジャガー号がイーグル号を徐々に追い越していく。加速するジャガー号と対照的にイーグル号は減速をはじめ、今度はベアー号がゆっくりと追い抜き、ジャガー号、ベアー号、そしてイーグル号の順番に一列になった。

「おわあっ！？な、なんや！なんやあああああ！！」

ジャガー号の中で暴れまわるはやて。だが、自動操縦のためジャガー号の動きに何の支障もない。

「いくぜーチェンジ・ゲッターアアアア・2ウツ！！」

イーグル号が細長く変形し、丸っこい形状になったベアー号と合体する。そしてジャガー号のエンジンが停止すると、頭部のとがったロボットの頭が現れた！！

「ひゃあああああああああ！！！！」

悲鳴を上げるはやて。次の瞬間、すさまじい衝撃がコックピットを襲う。だがその時、はやての頭の中になにかが走った。それと同時に、ドリルを装備した高速陸戦用の第二の姿、ゲッター2が海鳴

度を落とし、海に墜落して爆発した。残るは一機。だが、もうそれは病院の目と鼻の先まで迫っていた。

「きゃあー!!」

「た、助けてくれえ!!」

悲鳴を上げる病院の患者たち。絶望的な状況。だが、ゲッターなら!!

「オオオオオオープン・ゲットツ!!」

三機のゲットマシンに再び分離すると、なのははゲッター2にチェンジした!!

「間に合えっ!!チェンジ・ゲッターアアアアア・2ウツ!!」

ゲッター2が物凄い速度でメカフェレットを追いかける。もはや速すぎて、コックピットの中から景色が分からないほどだ。だが、病院を救うためにはこの方法しかない!!

「ドリルアアアアアムツ!!」

ゲッタードリルが四つのジェットエンジンを最大噴射させ、高速回転する。風を切り、もう音すら遅れてやってくる。勝利を確信したメカフェレット。病院を破壊しようと思いかかるうとしたその瞬間、三本の首に激痛を感じた。彼は理解していなかった。二本の生体部分と中央の機械の首。この三つが、ゲッター2のドリルに貫かれていたことに。ゆっくりと真横に倒れるメカフェレット。病院の前には、海鳴の守護者たるゲッター2の白き雄姿があった。その白

い姿は、町の人々には、天使のように映った。

「ふう…なんとか間に合ったわね。」

一息つくリンディ。

「ははは…やった〜！！！」

喜びの声を上げるなのは。町の人々は、怪物を倒したロボットに拍手を送っている。

「でも…ゲッターの存在が公になってしまったわね。」

「しかたないのなの。いつかは絶対ばれるの。でも、町を救えて本当によかったなの。」

喜びを分かち合うのはとリンディ。その時、ふとなのはは思った。

「にやははは…あ、はやてを忘れてたの。はやてー！生きてるかー！！！」

画面に映るはやてのコックピット。はやては操縦席に座っていたが、頭と両腕を前にだらりと垂らしていた。

「あーあ、伸びちまってやがる。コックピット開けるか…」

なのははジャガー号のコックピット開閉スイッチを押した。しかし、ボタンが利かなかった。

「あれ？何なの？故障なの？」

その時だった。突然何か回転する音が聞こえたのだ。見ると、なぜか何も操作してないのにゲッター2のドリルが回転していたのだ。

「なんでドリルが？とまれ。」

なのははボタンを押してみたが、ゲッターは反応しない。それだけではない。レバーを動かしても何も反応しないのだ。

「お、おい！ババア！！ゲッターが勝手に動いているぞ！！！」

「わ、私からも操縦できないわ！！！」

焦るリンディ。その時、リンディは最悪の状況に陥ったことを理解した。一言の奇声で。

「…イヒ…イヒヒ……………」

「！？ま、まさか！！！」

それはついに、現実となった。

「あきやははははははははははは！！！」

なんと、さつきまで死んだようになっていたはやてが、突然笑い始めたのだ！！それと同時に、ゲッター2が死んだメカフェレットに何度もドリルを突き刺す。そして次の瞬間

ゲッター2の両目から放たれるゲッタービームは、満員の新幹線
を真っ二つにし、線路ごと大爆発させた。乗客乗員に生き残れた者
はいないだろう。自分の血と足元に転がる無数の死体が、はやてを
最高に興奮させていた。

「キキキキキ！ゲッターが…ゲッターさえあれば…わたしは神や
あ！…誰もわたしに逆らえへん！！」

高速道路は避難する車で渋滞になっている。はやては奇声をあげ
ながら道路を破壊した。地面に激突した車は火を吹き、はやては丁
寧にわざわざ一つ一つゲッターで踏みつぶした。

「ひ、ひでえ！…てめえ…てめえ、人間じゃねえ！！」

激昂するなのはを、はやては嘲笑った。

「君は神の前におるんや。言葉を慎みたまえ。」

「神…ですって！？」

リンディにはやては言った。

「そうやあ！これさえあれば…わたしは世界征服も可能や。イヒ
ヒヒヒ…」

するとゲッターの足を潜り抜けて、幼稚園バスが猛スピードで逃
げていく。それを見るとはやては笑顔になった。

「みんな、しっかりつかまっているんだ！！」

「こわいよー!」

「ママー!」

中には幼稚園児が泣き叫んでいた。必死に抱きしめてなだめる先生。ゲッターからでも中の様子が見えた。

「ヒハア…ゲッタービジョン。」

はやてが呟いた瞬間、ゲッター2の姿が消えた。

「ふ、振り切ったか!」

ロボットが見えなくなつてほっとする運転手。だが、まだぶるぶると震えている子供もいた。

「こわいよお…」

「大丈夫よ。怖い怪物さんはあっちにいつちゃったからね。」

涙目の女の子の頭をなでる先生。その時だった。

「あ…」

運命とは、常に残酷なものだった。

「うわあああああああああああああああ!」

悲鳴を上げる運転手。彼の体は、巨大なドリルの先端によって肉片と化した。

ゲッター2が地面からドリルを引き抜く。そこには八つ裂きになって炎上している幼稚園バスがあった。

「ひやはははは！見る！人がゴミの様だ！！」

笑いすぎて白目を剥きながら、この世の生きものとは思えないような醜悪な声で笑うはやて。はやてはゲッターの操縦方法を全てマスターしてしまった。こちらからブロックをかけ、ジャガー号以外の機体では動かせなくしていたのだ。

「ふふふ…イヒツ…イヒヒヒヒ…」

口からよだれを垂らしながら、猫背の姿勢で嗤うはやて。彼女の目に映ったもの、それは…原子力発電所だった。

「ヒヒ…キャハハハハハハハハハ！！これはあ…これはわたしの力やあああああああああ！！」

建物を破壊しながら、物凄いスピードでダッシュするゲッター2。

「奴め…原子力発電所を襲うつもり！？…くそっ！！」

なのはは非常用脱出装置を使ってイーグル号のガラスを吹き飛ばすと、走行しているゲッター2の正面に張り付いた。

「う…ぐぐう…」

振り落とされそうになるも、必死に上に登るなのは。ベアー号のところまで到達した時だった。

「な、なのはさん！？何やってるの！！」

リンディは腰を抜かした。それもそのはず、自分のコックピットのガラスになのが張り付いているのだから。

「ババア！あのキチガイ野郎を止めるには、コックピットを外からふっ飛ばさなきゃならねえ。」

「む、無茶だ！！今すぐ戻れ！！」

「バカタレ！奴が原発に突っ込んだら、ゲッターごとおじゃんだぜ。死なばもるともよ！！」

リンディを無視して登っていくのは。やっとの思いでジャガー号に取りつくと、拳銃で外部に取り付けてあるキーを解錠した。パワードを打ち込むと、非常用の脱出装置レバーが飛び出る。なのはが思いつきり引くと、ジャガー号コックピットのガラスが吹き飛んだ。

「ひえっ！きひえっ！！」

突然目の前のガラスが吹っ飛んだ事に驚くはやてだったが、突然興奮し始めた。目の前に原発が見えてきたのだ。

チェンジ11 覚醒！新たなる力 前編（前書き）

基本的におかしなテンションで書いたからいろいろおかしいです。海鳴は怖いところだ。ちなみにゲートボールとは、エクストリームスポーツの一種です。

チェンジ11 覚醒！新たなる力 前編

「カートリッジ・システム…？」

エイミイはクロノの言ったことが信じられなかった。

「う、嘘っ！？本当に…あの子たちが…？」

「僕とて信じられないさ。成功すれば、火力だけならヴォルケンリッターに追いつくことができるはずだ。だが…博打で勝てる相手ではないことは、彼女らが一番わかっているはずだ。それとも…彼らなりの確信があるのか…?!」

チェンジ11 覚醒！新たなる力 前編

数日後

真っ暗な部屋。電気もつけずに何かを机の下でもぞもぞ動かしている男、ギル・グレアム。今日の収穫をいじくってくんかくんかしていた。

「うむ…この匂いは、きつといいところのお嬢様に違いない。良い石鹸の香りだな、これは…」

ニヤニヤしているその姿は、もはや変態と呼んだら変態がかわいそうなほど気色悪いものだった。すると突然、銃声が響く。グレアムは女兒パンツをいじりながら利き腕でない左手で銃弾をつかんで

いた。

「アリアか。弾道のクセが直っておらん。右にコンマ0・05ミリずれているぞ。それでは当たらんよ。」

ドアの向こうなのに、誰が撃ったかグラムにはわかった。そう言ってパンツをしまうと、煙草をくわえた。火をつけたと同時に、ライフルをもったアリアがドアから入ってきた。

「お電話ですわ、クソオヤジ。」

「はっはっはっ…昔みたいにお父様とは呼んでくれないのかね？」

「…なんだかあなたを見てみると、無性に死にたくなるわ。」

ため息をつくアリアにグラムは

「ほいほい死ね死ね今すぐ死ねー」

鼻眼鏡に腹巻姿で、両手に日の丸の扇をひらひらさせて、謎の踊りを踊っていた。

ブチッ

何かが激しく千切れる音が鳴り響くと、しばらくの沈黙の後、短いグラムの悲鳴が聞こえた。何かを切り刻んでいる音がずっと聞こえているけど気にしない気にしない。

グレアムが電話を取ると、十分以上も前にかけた声の主はぶちぎれていた。

『おい！！何分待たせたと思っただよ、コラア！！』

「ははは、すまんね、君。今日も誠君になっていたのさ。」

全身血だらけのグレアムは、こんな時だからこそ紳士に振る舞う。

『ああ、大体想像ついた…じゃあ、そのまま死んでくれ。その方が世のため人のためだ。』

「おいおい、そんな冷たい言い方はなかるうに。」

『なんだ、意外と元気じゃねえか。つまんねーな…爺さんよ、そろそろ【予兆】は出たか？』

その言葉を聞くと、グレアムは真剣な顔になった。

「どうやら…レイジングハートとバルディッシュにカートリッジシステムが搭載されるようだ。」

『ほう…敵さんも必死ってことだな。』

「だが…分の悪い賭けとも言い難いよ。使いこなせれば恐らくは…」

『火力とスピードは…向こうが上ってことだな。』

グレアムはうなづいた。

「そつだ。君ならともかく、彼女たち…特にヴィータ君は目にも見させられるかもしれん。」

『だな。ロングレンジからの超長距離射撃…高町なら一撃で落とせるな。』

「そつだ。そして君の言う事が正しければ、闇の書は一度【起動】させたほうがいい。だが…」

電話の主は、少し黙っていった。

『わかってるさ…あの【悪魔】だとしたら…俺はためらわず奴を殺す。』

「できるのか…君に。」

『フツ…こんな薄情な人間のクズだぜ？なんだってしてやるさ…それと、奴はどうだ？』

「ああ、それらしきものを掴んだらしい。…どうやら、十中八九は…」

『…わかった。じゃ、また何かあったら連絡する。』

「そつか。…死ぬなよ。」

グレアムはそういつと電話を切った。

「死ぬなよ…か。偽善だな、これは。」

「おう、シグナム。今終わった。」

「そうか。主が心待ちにしておるぞ。」

竜馬はシグナムと一緒に病室に入った。そこには

「あ、リヨウ兄!!」

「はやて、良かったじゃねえか。退院できて。」

倒れて一時入院したはやてだったが、もう体調はもとにもどり、今まで通り自宅に行けるようになったのだ。皆が喜んでいるが、竜馬だけが少し様子がおかしい事にシグナムは気づいていた。

「…?どうしたのだ、竜馬。お前最近おかしいぞ。」

「!?!?…う、うるせえ!何訳の分かんねえ事言ってやがんだ。なあ、はやて。無理すんじゃねえぞ。」

「もー…リヨウ兄はこう見えて心配性やからな。わたしは大丈夫や。えへへ…迷惑掛けてすまんかったなあ。」

竜馬は感づいていた。はやてがなぜ急に体調が良くなったのか。そして、闇の書の闇の正体とは…だが、それははやて本人はおるか、守護騎士たちにも伝えることはできなかった。実はこの件で、竜馬は確信していたのだ。

（はやて…どうやら俺は、お前を…シグナムを、ヴィータを…シヤマルを、ザフィーラを……殺さなければならねえ。【地球が静止する日】を迎えぬために……）

はやての髪をなでる。幸せそうな顔をするはやて。だが、自分はこの薄幸な少女を…呪われた騎士の亡霊の…掴みかけた幸せを…奪わなくてはならない。なら、自分が今まで戦ってきた理由は一体何だったのだろうか…？自分は、自分自身の手で殺すために…彼女たちを護ったのか…？

（だが…ふふふ、俺はまだ未練があるらしい。発現してからでは遅いというのに…それでも最後まで待ちたいと思っちまう。）

シヤマルが車椅子を押し、その周りを自分たちが囲んで家に帰る。久しぶりに皆で食事を取って、笑って……だが、竜馬の心は晴れるどころか、自責とやり場のない怒り、悲しみが込み上げただけだった。だが、竜馬は決して顔には出さず、笑ってはやてを寝かしつける。消灯のあと、リビングに水を飲みに行くと…そこには、電気もつけずにソファーに座っているシグナムの姿があった。

「…？おい、シグナム。起きてんのか？風邪引くぜ。」

声をかけてみるが、シグナムは反応しない。目は開いているのに…竜馬はもう一度呼びかけてみた。

「シグナム？おーい、死んでんのか？てめえ。」

「竜馬……」

ぼそりと焦点の合っていない目でテーブルを見つめながらつぶやくシグナム。

「お前は……何処まで知っているのだ？」

「んあ？何訳の分かんねえ事を……」

シグナムを寝かしつけようと近づいたその時だった。

「言え……言え……って言うてるんだ……！」

かばつと立ちあがったシグナムは、突然竜馬の胸ぐらを両手で掴んで叫んだ。その目には……普段絶対に見せる事のない光の雫が、月の光に照らされて頬を伝っていた。

「いつまで続くんだ……私たちは主を……救えるのか……？貴様は……全部知っているのだろう……！私は知っているんだ。お前が私たちに黙って、管理局の重役と後一人、得体の知れない男と密会していることを……！どうだ、答える……！」

竜馬の体を揺さぶるシグナム。竜馬は、シグナムの目を見ていった。

「一つ答えてやる。その得体の知れないとか抜かした男は……お前たちが一度殺した男だ。」

「そんな事を聞いているのではない！！主が…主はやてが救えるか否か、それを…」

竜馬は短く言った。

「…単刀直入に言っぞ。救えねえ。もって今年中の命だ、奴は。」

「!？」

急にシグナムの手の力が緩み、膝をがくりと下ろす。カツと見開かれた目に対し、震えの止まらない肩。竜馬はしゃがみ込むと、しっかりとシグナムの両肩を大きな手で掴んだ。

「…だけどよ、俺は…俺たちはさ、何もしねえで、あいつが死んじまつて後悔するんだつたら…少しでも、少しでも可能性があるんだつたら、俺は力になるつもりだし、今までそうしてきたつもりだ。」

「綺麗な事など…いくらでも言える。ぎりつと歯を噛みしめた竜馬だった。」

その頃、なのはとフェイトは、ある物を受け取りにリンディのもとへ向かっていた。

「リンディ…提督から話しがあるって。」

「うーん…でも、なんで牛井屋さん？」

リンディからレイジングハートとバルディッシュの修理と強化改造が終わった事を聞いたふたりは、デバイスの受け取りに向かっていたのだ。だが、なぜかリンディからは牛丼屋で待っていると連絡が入ったのだった。

「ひよっとしたら…みんなで単に食べたかったのかもしれないよ？」

「そ、そうなのかなあ？私、肉って正直あまり…」

そんなことをしているうちに、オレンジの看板の牛丼屋が見えてきた。看板には y o s h i d a y a と書かれている。今年で95周年らしい。(2004年現在)

「……いらつしゃいませー」

入るとドアの近くのテーブル席で、リンディがこちらに手を振っている。その横でげんなりするクロノとニヤニヤしているエイミィ。なのはとフェイトは、腕を組んでぐうぐう寝ているユーノの隣に座ると、なのははユーノの鼻をつまんだ。

「ご注文を聞いてやるうか？ただし…真つ二つだぞー！」

なんか後頭部がおかしな髪形の店員が伝票を持ってくる。なのはは並のつゆだく、フェイトは何を頼めばいいか分からなかったのとおりあえずなのはと同じものを頼んだ。

「ねえ、なのは？」

「ふえ？どうしたの？フェイトちゃん。」

「…あの人、ちょっとやな感じだったね。」

「え？私には素晴らしい人に見えたよ？」

なのはの返答に終始？？だったフェイトだったが、雑談をしているうちにすぐに牛丼が来たのでびっくりした。

「冷めぬうちに食う事だな。はっはっはっ！！」

なのは曰く素晴らしき(?)店員は呵々と笑うと、レジに戻っていった。

「ところで…リンディ提督。デバイスと言うのは…」

「あら、フェイトさん。そうそう、これなのよ。」

ほいと待機状態のデバイスを手渡すリンディ。その手に乗っている物体はレイジングハートとバルディッシュである事は分かったが、別に外見が特に変化しているわけではなかった。

「ねえ、なのは。これだって。」

「何か…別に変わってないよね？」

しげしげと見つめる二人に、ちよっかいを出されて起こされたユ
ーノは言った。

「まあ、その状態じゃ特に変化は無いけど…デバイスに変形させ

るとその違いが良く分かるよ。」

クロノが補足して説明した。

「なのはのレイジングハート：いや、新デバイス・レイジングハート・エクセリオンは、従来のデバイスを越えた超長距離線に対応した、正に超攻型移動要塞と言っても過言ではない：って、分かりづらいか。」

「う、うん…」

クロノは頭をかきながら言った。

「ええと、つまりレイジングハートは、さらに遠くかつ強力な魔法攻撃：なのはの得意なバスター系魔法に特化した作りになっているんだ。初期形態のアクセルモードと、中・遠距離戦用のバスターモード。そして、一撃必殺の超高火力の：っと、これは今は使えないんだ。とにかく、この二形態を上手く活用してくれ。それと、前にも話した通り、カートリッジシステムを組み込んである。攻撃力、防御力ともにヴォルケンリッターやブラックゲッターと互角に渡り合えるはずだ。」

バルディッシュの説明はリンディがした。

「フェイトさんのバルディッシュは、バルディッシュ・アサルトに生まれ変わったわ。通常形態のアサルトフォーム：これはなのはさんのレイジングハートと同じく、外見も扱いもそれほど大差は無いわ。第二の形態はハーケンフォームよ。ブースター機能も付いているから、ブラックゲッターと同じくらいのスピードで攻撃を繰り返す事が出来るわ。第三の形態についてはなのはさんと同じ理由で

伏せておくけど、なのはさんがあらゆる場面で通用する強力な砲撃魔法と要塞の如き防御力がウリに対して、フェイトさんは超高速のヒットアウェイ戦法をコンセプトに入れた、なおかつ接近戦で強力な火力を手に入れた…って、つまりなのはさんが後ろからドツカンドツカン撃つて、フェイトさんが前線に立って斬つちや逃げ斬つちや逃げしてりや、勝てんじゃね？てな寸法よ。わかった？」

まあ、まとめるとそうなる。たとえば…なのはがマジンガーZの戦い方でフェイトがガンダムといったところか。フェイトは理解しているみたいだし、なのはも何となく感覚は掴んだみたいだ。

「でも、火力が上がっただけであなたち自身が強くなったのではないわ。武器の性能に頼ると…落とされるわよ。」

真剣な顔で言うリンディ。ユーノなのはたちにフォローを入れた。

「ははは、リンディさん。なのはもフェイトもちやんと分かっているよ。提督のお気持ちも分かります。ですが、この子たちが見えないところでどれほど努力してきたか…僕には分かりません。でも、特になのはが危なそうだな…大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ！！」

「静かにしてもらえるかな？周りのお客様がご迷惑をしているのだ。」

ついついなのはが大声を出してしまった。すると何故か赤い仮面の謎の店員が天井から逆さまに生えてきたのだ。

「う、うめんなさい……」

「いかにも……よくご存じで。」

嫌味な笑いを浮かべると、謎の店員は天井に吸い込まれていった。しばらく全員がじつと天井を見上げていた。

「……とりあえず………食べよつか。」

「う、うん。」

ちよっと冷めてきた牛丼の残りを、みんなしてがつつ食べたのだった。

そのころヴィータは、老人会のゲートボール大会に出ていた。

「オッス、師匠！ジイさまー！！」

「ぬ……おお、ヴィータか。」

「待っておったぞ？」

会場にはヴィータと同じ番号を付けた二人のジイさまがいた。二人共白髪だが、一人は紫色の中国の拳法家のきているような服を、もう一人はスーツに茶色のセーターといったって普通の格好。だが、この三人のチームは海鳴市最強のチームである。

「アタシも師匠やジイさまの足ひっぱらねーよつにするからさ！」

「うむ。やるとなれば優勝しかあるまい。」

「それ以下は、敗北に等しいのでな。」

三人は悠々と会場に立つ。そこには、怪しげな三人組が待ち構えていた。

「あのプレイヤーめ、只者ではないぞ……」

「なに、10年使い続けたドウムとてまだまだ現役よ！」

「黒っばい三連星のおそろしさを見せてやる……！」

このオッサンたちは、ゲートボール界では黒っばい三連星と呼ばれ、恐れられていた。関東ブロックで第三位の猛者である。彼らはこの海鳴に恐ろしく強いチームがあると聞き、わざわざ栃木の日光市から来たのだった。

「む。この覇気……なかなかの強者と見た。」

「だが、この程度でワシ等は負けはせんわ。」

「へへ、そーだぜ……！」

試合開始の合図と共に、先に動いたのは黒っばい三連星だった。

「よし、先手必勝だ。カレトギ！ポテト！奴らにジェットストリ

「ムアタックをかけるぞ!!」

「思ったより素早いぞ。いいな!」

「おう!!」

三人が一列になって接近してくる。それを見ると…ジイさまはにやりと笑った。

「その気になれば突破は簡単!!…そう言わなかったかな?」

ジイさまが地面に拳を叩きつけると、先頭にいたオツサンの真下の地面が突然10mほど隆起し、巨大な大地の柱が一瞬にしてそびえたつ!!何が起こったのかわからないオツサンは一瞬注意がそれる。だが次の瞬間、小さな幼女…ヴィータが自分を踏み台にして高々とジャンプしたのだ!!

「ああっ!俺を踏み台にした!?!」

「ふはははは!ぬるいのオ!!」

続けて師匠がヴィータよりもさらに高々と跳び上がる。

「いくぜ、師匠!!」

「来い、ヴィータよ!!」

空中で静止したまま良く分からないポーズをとる師匠。何故か分からないけど、彼の前に漢字が浮かび上がった。ヴィータにはむつかしくて読めません。(誤字ではなかとです)

「ワシらに一行で突っ込んでくるなど…愚の骨頂!!」

師匠の体が空中で物凄い速さで回転する。あまりの速さに全身が火の玉の様になるが、本人たちはいたって冷静だ。

「超級!!」

「霸王!!」

「電・影・弾ああああああああああああん!!」

なんと火の玉と化した師匠を、ヴィータは何の躊躇も無くアイゼンでぶっ飛ばしたのだ!!

「な、何!？」

「まさか!？」

超級霸王電影弾の直撃を受けたカレトギとポテトは、光の中へと消えてゆく。唯一名前不明のオッサンは、二人の踏み台にされたが故に無事だった。何とも皮肉。

「爆ああああああく・発ッ!!」

ドガアアアアアアアン!!

着地した師匠がそういうのと同時に、巻き込まれた二人が大爆発を起こす。ぷすぷすと煙を上げ、ぼてっと地面に落ちた。

「ジェットストリームアタックをすり抜けるなんて…信じられん…」

試合終了を告げるホイッスルが鳴り響く。オッサンはひっくり返ってる二人を引きずりながら、栃木へと帰っていった。

「まずは一勝と言ったところか…」

「うむ。超級霸王電影弾を使わなかったら、負けていたかもしれん。戦法は一流だったが、ワシ等とは相性が悪かったようだな。」

そんなこんなで結局ヴィータのチームが優勝して、二人の老人に別れを告げると意気揚々とヴィータは帰っていったのだった。胸に光るは金メダル。そこにはこう彫られていた。

血看石全王東新

染招破新者方一

東 天招之不派

方 驚式風敗

一 片 紅

…ジイさまが猛反対したのは言うまでもない。

チェンジ11 覚醒！新たなる力 前編（後書き）

老人会となっていていますが、これでも師匠は四十代後半です。ジイさまが薄くなっちゃったのが残念ですたい…

チェンジ 12 覚醒！新たなる力 中編（前書き）

ついに仮面の男の正体が明らか…に？

チエンジ 12 覚醒！新たなる力 中編

何処までも続く砂漠。太陽の光を受け、不毛の大地は輝く。人類の文明を感じさせないその光景。その静寂を破るものは…空と陸にいた。

「ゲツタアアアバズウウウウカツ！！」

空を舞う黒き戦鬼が、地面に向かって巨大なバズーカ砲を発射する。直線に飛んで行った弾丸は、空中で炸裂して何十発もの小型の弾頭となり、雨の様に降り注ぐ。噴き上がる砂煙。そこから現れたのは、巨大な装甲をまとった、ミミズのような化け物だった。姿が似ているだけであって、化け物には目もあれば他の生きものを捕食するであろう、鋭い歯の並んだ口もある。その大きさからして、この場所の生態系の頂点に君臨する存在だという事は容易に想像ができる。だが、本来なら狩る立場の化け物も、今日限りは違った。彼らが狩られるのだ。一匹の…黒鬼によって。

「ギエエエツ！！」

『へ、おいでなすったぜ。リヨウ！化け物に、目に物見せてやれ！！』

「こいつが…一撃必殺の戦法よお！！」

ゲッターバズーカをマントの下にしまつと、両肩からゲッターマホークを取り出して両手に構える。そのまま化け物の顔に向かって直進するブラックゲッター。当然迎撃するために、怪物は巨体に見合わないワイヤーのような触手を、地面から何十本も突き出して応戦する。触手がゲッターに絡みつき、あたかも茶色の玉のような姿になって拘束される。だが

「ひいっさつ！トマホークスラッシュ…トルネエエエエエドッ…！」

コマのように回転する姿は、まさに黒い旋風のようなだった。触手を切り裂き一瞬で脱出すると、回転したままトマホークを投擲した。

「いけえええっ！！トマホオオオオオク・ブウウウウウウウウ
メラッ！！」

二本のゲッターマホークは、一方は怪物の右目に、もう一方は額の装甲に深々と突き刺さった。緑色の体液を噴き出して、暴れ狂う怪物。

「とどめだあっ！！ゲッタアアアアアビイイイイイムッ！
「！」

潰れた右目に回り込み、額に刺さったトマホークに向かってゲッタービームを発射するゲッター。トマホークは緑色の光りながら白熱化すると、しばらくして大爆発した。その衝撃で怪物の頭が粉々に四散する。頭脳を失った怪物はしばらく砂漠の上でのたうち回ると、ゆっくりと動かなくなった。

「やるじゃねーか、竜馬。」

蒐集を終えた竜馬のもとに、ヴィータがやってきた。

「へっ、このぐねえ骨のある奴じゃねえとつまんねえからな。」

「…竜馬。こいつ骨なんてねーぞ。」

「馬鹿かてめえ！！たとえだよ、たとえ！！！」

闇の書のページはだいぶ埋まってきた。竜馬はヴィータにあることを言った。

「…ヴィータ。管理局の連中がそろそろ復帰するそうだ。フルチユーンの強化装備付きで。」

「へっ、なんどやっても同じだぜ。あの白え奴も黒え奴もぶっ潰してやる！！！」

『そうは言うけどよ、向こうはずるっこみてえに強え武器もってるんだぜ？力押しじゃ負けるぜ。』

武蔵のアドバイスにヴィータは

「そ、そんなの懐に飛び込みまえばこっちのもんじゃねーか。攻撃する前に潰しちまえばいいじゃねーか。…つつかムサシってほんとにデバイスなのかよ？」

いくらインテリジェントデバイスとはいえ、ここまで主人に反論したり冗談を言ったりするデバイスは、ヴィータは見たことがない。そもそも竜馬自身がデバイスの武蔵を人間のように扱っていること

にも違和感を持っていた。

『ま、その話は後つつーことで…それよりも何ページたまったか？』
『？』

武蔵に聞かれると、ヴィータはページをぺらぺらとめくった。

「んつと…」

「何だ、見てねえのかよ、てめえ。」

「うつせー！…あ、ここまでだ。455ページ…って、ずいぶん
とたまったな。」

武蔵のアイデアで、竜馬たちは魔法生物だけではなく、たまたまそこにいた次元犯罪者たちをぶちのめしたりして魔力を集めていた。実際のところ、殺すの大好き戦い大好き戦争大好きの竜馬がいるの
としないのでは段違いだという事は読者も分かるだろう。

「案外早く済みそうだな…なんだ？」

珍しくザフィーラが二人に念話を送ってきた。

『ザフィーラか…てめえからなんて珍しいじゃねえか。どうした？』
『？』

『竜馬か！どうもこうもあるか。向こうがこっちのしつぽを掴んだ
だよ。今のところには黒服の少年と複数の公僕どもが、シグナム
のもとにはテストロツサと名乗る少女が来たらしい。ジャミング
をかけているが、シャマルが見つかるのも時間の問題だ。ヴィータ

は闇の書をシヤマルに。あと…おそろく白服はそっちに向かっているはず…くっ！い、いかん、ここで切るぞ！」

『了解！…！』

念話を切った竜馬はヴィータに言った。

「どうだった？」

「どうもこうもあるかってんだ。管理局の連中に尻尾つかまれた後のみんなは全員交戦しているらしい。」

「マジかよ！？思ったより早え！！」

(そう…全部思ったより早すぎるんだ…くそっ！！)

竜馬は助けに行こうというヴィータに、自分たちは無駄な戦闘を避けて逃げた方がいいと言った。だが、ヴィータの性格上絶対に納得しないという事は、竜馬も分かっていた。

「なぜだよ、竜馬！何でアタシらが尻尾巻いて逃げなきゃならねーんだ！」

「馬鹿かお前。あいつらまたぶっ潰したところで、闇の書に蒐集させることはできねえ。こっちに得な事は何一つねえんだ！！」

ヴィータは反論した。

「でもよ、このまま逃げ続けてはやての家を突き止められちゃったら一巻の終わりだぜ。なら、もうここで一度と立ち上がれねえほ

どに叩いちまえば後が楽になるじゃねえか!!」

『馬鹿野郎！俺たちが管理局と戦えば戦うほど、記録や映像が残っちゃう。そうならこっちは物量とバツクに負けて押されるにきまつてるじゃねえか。』

「ええい、ゴチゴチャうるせえ！引きずってでも連れていくぞ。
ムサシ、離脱だ!!」

その時だった。

『あちゃー…上空1キロ先に熱源確認。こりゃ落として逃げるしかなさそうだな。』

竜馬とヴィータが言い争いをしているうちに、管理局に見つかってしまったのだ。ゲッターのメインカメラで拡大すると、そこには高町なのはが映っていた。

「しかもあの白いガキだぜ…ヴィータ。ここは俺に任せて行け。」

「お、おい！おめーだけじゃまずいだろーがよ!!」

「アホ！てめえよりかはうまくやるさ!!…って、もう来たのかよ!?!」

ヴィータをかばって彼女だけでも離脱させようとしたが、思いのほかなのはの速度が速く、追いつかれてしまったのだった。

「!?!?あの赤い服の子と…リョウウさん!?!」

はは身をもつて経験している。ほんの一瞬、油断していなくても反応が遅ければ…殺される。そう思うと、自然と体に力が入ってしまう。これじゃいけない。分かっているけど、体には力が入る一方だ。

「どうした？クク…何をビクビクしてやがる？」

「そ、そんなこと、ありません…!!」

竜馬は装甲の下でにやつと笑った。

「まあ、いい。こいつをとっ捕まえれば、いい人質になる。両腕両足切り落として、ダルマにしてから連れてくか…」

首をコキコキと鳴らして、ゲッタートマホークを構える。負けじとなのはもレイジングハートを構える。

「…何でゲッターサイトにしなかったか分かるか？」

「え…」

竜馬は凄まじい笑みを浮かべて言った。

「この方が…手足切り落としやすいからだよおっ!!」

正面から襲撃してくる竜馬に対して、なのははアクセル・シユートを放つ。今までのものより遥かに弾数の多く、キレのある魔力弾が襲いかかるが、ゲッターはトマホークで切り払う。

「当たらんなあ…!!」

だが

「回避行動が遅れている…デイベイイイイン・バスタアアアアアア！」

一瞬加速してブレーキをかける…ゲッターの回避時の一瞬のすきを突いて、強化されたデイベインバスターがゲッターに…直撃した！！

「うおっ！？思ったよりも効いたか…！？」

『右腕装甲34%被弾！？一撃でだと！！竜馬、慎重に行け。当たるとでけえけど…当ててくるぞ…！！』

「了解…！」

ゲッターはゲッターマシンガンを撃ちながら、後方に下がる。

「レイジングハート、追いつける！？」

『Of cause, master.』

再び発射姿勢を取るなのは。それに対して、ゲッターも腹のビーム砲を開く。

「ゲッタアアアアアアア」

「デイベイイイイイン」

桃色の魔力光と赤色のゲッターエネルギーが収束していく。ふた

つの光は、同時に放たれた。

「ビイイイイイイム!!」

「バスタアアアアア!!」

同時刻。シャマルは押されていく味方の戦況を見て舌打ちした。白服の少女と戦っている竜馬と、黒服の少女と戦っているシグナム。この二人が負けることは無いだろうが、ヴィータとザフィーラは多勢に無勢の危機的状況に陥っていた。

(まずい…竜馬とシグナムがあんなに手こずるなんて、予想外だったわ。何とかしてここは逃げないと…)

シャマルはヴィータに念話をした。

『ヴィータ？聞こえる？』

『あ、ああ。何とかもっているって感じだな。さっきまで蒐集してたからカートリッジも残り少ねえし、正直持久戦はまずいな。』

シャマルは言った。

『…わかったわ。できるだけ戦闘を避けてすぐ………』

その時だった。急にシャマルの念話が切れたのだ。いや、正確には切れたのではない。つながったまま、シャマルが急にしゃべるの

を止めたのだ。

『シャマル…！？おい、どーした…！』

『……………』

何度呼びかけてみても、シャマルは応答しない。ヴィータはザフィーラに言った。

「ザフィーラ。…シャマルと念話が切れた。捕まったかもしねえ。」

「何だと！？くっ…だが、この包囲網では助けに行けん…どうする？！」

シャマルは健在だった。だが、その後頭部にはブロンズの彫刻の様な姿の、SU2が突きつけられていたのだった。

「ついに捕まえたぞ…ヴォルケンリッター！お前たちの目的は何だっ！こんな事をして…こんな事をして、お前たちの主が幸せになると思っているのかっ…！」

彼女にかけられる声。その声の主は、クロノだった。

「…僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。何、命を取ったり怪我をさせようなんてそんなつもりはない。貴方達が本当に

主の事を想っているのであれば…来ていただけますね？」

丁寧な言葉遣いだが、その言葉は氷の様に冷たく、鋭く、シャマルの胸に突き刺さる。言葉を出そうと知るが、口が震えて動かない。そう、この少年は殺意の塊であった。彼の心に渦巻く悲しみが、憎しみが、恐怖が、怒りが、ナイフのような鋭さをもって露見していたのだった。

殺される

自分たちの場合少し違うが、それでもこの少年の持っている殺意は凄まじいものであった。そう、まるで生きた怨念の様な…彼が自分の体を傷つけ、記憶の彼方へと隠して忘れ去ろうとしたもの。無かった事にしてた事。その全ての壁がはがされた時、少年の心に人間の心は残ってはいなかった。

「お前たちが…お前たちがいなければ…」

デバイスの出力を殺傷設定に切り替える。クロノの目は真っ黒に濁り、瞬きをしていなかった。恐怖にひきつるシャマルの顔。それを見ると、ほんの少し微笑んだ。

「お前たちはア…生きてちゃいけないんだよ…この【悪魔】があああああああああああ！！！」

零距离からステインガレイを放とうとした、その時だった。

「待てい！！！」

零距离。クロノの魔力弾は、この【悪魔】の作り上げたプログラ

ムの頭を貫いた…はずだった。クロノのデバイスは、夜空に大きく投げ出されていた。状況が何も分からないクロノ。自分の後ろで、乾いた音を立ててデバイスが落ちる。そこに立っていたのは、白いくたびれたコートに緑のシャツ…体に真紅の布を巻きつけた男が立っていた。その出で立ちと言いい体格と言いい、竜馬と酷似しているが、男は赤い鉢巻きと仮面を付けていた。

「…誰？僕の邪魔をしないでよ…」

「…貴様からは負の気を感じる。憎しみや怒りは、真の力となりえん…！」

「ハハハ！…僕のお…僕の邪魔をするなああああ…！！！」

狂ったように襲いかかるクロノ。少年の豹変様にシャルマルは恐怖で足がすくんでしまう。男はシャルマルに言った。

「…彼は俺が食い止める。その隙に闇の書の魔法を発動させて、結界を破り、脱出するんだ。」

「あ、あなたは一体…それに、そんな事したら折角貯めたペーシが…！」

男は吐き捨てるようにして叱責した。

「そんなもの、命と比べたら安いものよ！！後からいくらでも蒐集できるであろう。ここで誰かが捕まってみる。もうその時こそゲームオーバーだ。行けっ…！」

「…はいつ…！」

この仮面の男を信用するか否かは別として、この状況はヴォルケン陣営にとって絶望的であったのは紛れもない事実。魔法の準備をするシャマルを護るように男は立つ。

「ブレイズカノンがあ…かわせるかよお…！」

クロノが殺傷設定のブレイズカノンを放つ。だが、仮面の男は左腕一本でそれを受け止める。

「な…何！？」

「憎しみに捕らわれたその魔導…俺にも、貴様の心が伝わってくるぞ…！だがな、貴様にも仲間が、家族が、大切な人がいるのではないか…？」

その問いにクロノは

「…さい…うるさい…！お前に、お前なんかには、僕の気持ちが分かるか…！父さんを殺されたんだぞ…！あいつらのいたせいで、母さんも、エイミイも、全部、全部なくしちゃったんだ…！」

いつの間にかクロノの瞳には光が戻り、その目には大粒の涙が流れていた。

「なあ、答えるよ…答えるよおおおおお…！」

渾身の力でブレイズカノンを発射するクロノ。彼が我を忘れるほど怒り狂うなど、普通では考えられない事だ。クロノ自身にも、良く分からなかった。ただ、あの緑の服を着た金髪の女。あれは、こ

の世にいちやいけないものだ。顔も覚えていない父親の仇だと。彼は本能のままに戦っていた。クロノの魔法を今まで受け止めていた男だが、不意に右腕を空に掲げる。この手の甲には、ハートの紋章が浮かび上がっていた。その紋章を見た時だった。

ドクン

「え……………？」

何も聞こえない。ただその紋章を見た時に、クロノの脳裏に写真の断片の様な光景が、物凄い速さで走っていく。男が何かを言っている。だが、その言葉を聞き取る事はできない。瞬きをする。クロノが目を開けた時には、男はクロノの目の前で光り輝く拳を振り上げていた。

「…ニング…フィンガアアアアアア！」

クロノの視界が光に覆われる。薄れゆく意識。だが、不思議と苦痛ではなく、逆に彼の心は光に包まれていくような、不思議な感覚に見舞われた。意識が途切れる瞬間、クロノは光の中で声を聞いた。

『そんな戦い方を教えたかよ…この……………』

その続きの言葉を、クロノが聞く事は無かった。

クロノが仮面の男に倒されたのと、シャマルが闇の書の魔法で結

界を破ったのは同時だった。離脱する面々。竜馬となのはにも、それぞれ念話が送られてきた。

「ちっ…命拾いしたな、クソガキ。今日のところはこれで勘弁しておいてやる。」

悪役の決め台詞のような言葉を吐き捨てる竜馬。あながちそれは嘘でもなかった。今竜馬となのはの戦っていた砂漠地帯には、無数のクレーターが出来ている。外れた右肩を押さえながら、息絶え絶えに今にも倒れそうなのはと、体に多くのひびが入り、そこから赤い血のような液体を垂らしているブラックゲッター。なのはの魔法を防ぎ続けた左腕はもげ、右の角は折れて無くなっていた。

「はあ…はあ…クソガキじゃ、ないです…なのはですよ、な・のは…！」

今にも倒れそうにもなりながらそんな台詞を吐けるのは、やはりなのはだからであろうか。だが、なのはは今回の闘いで本当によく頑張った。あの竜馬と引き分けまで持ってこれたのだから。確かにデバイスが強力になった事も勝因の内に入っている。なぜなら単純な出力では、レイジングハート・エクセリオンと武蔵ではレイジングハートの方が遙かに上だからだ。それだけでなく、どんな特訓をしたらそうなるのか分からないが、誘導弾の扱いと弾幕の展開が滅茶苦茶うまくなったと竜馬は感じた。『避けさせて、当てる』をコンセプトにおいており、流石の竜馬もこのありさまである。だが

「フツ…だが、これで勝ったと思うな。てめえの作戦は分かった。この俺に二度と同じ手は通用しねえぞ。せいぜいそんな時まで生きながらえるんだな。あばよ…！」

ゲッターウイングを広げて飛び立つゲッターの影。それが完全に空へと吸い込まれたと同時に、なのはは精根を使い果たして前の方に倒れたのだった。

チェンジ12 覚醒！新たな力 中編（後書き）

今、作者の頭は完全にチェンなのの方に傾いています。ライダーや鉄人に全然手がつかない！楽しみにしてください。さる方にはすみません（汗）

良く分からぬテンションのまま、懲りずにまたネタ絵を書いてしまいました。あと2〜3話くらいしたら出す予定です。それでは！

チェンジ13 覚醒！新たなる力 後編（前書き）

怒涛の翌日投稿！！…ってほどでもないですね

チェンジ13 覚醒！新たなる力 後編

仮面の男の協力もあって、なんとかその場を脱出できたヴォルケ
ンリッターと竜馬。五人はとぼとぼ家に帰っていた。

「痛ててて…くっそ、あのガキンチョ、ちょっと手加減してやっ
たらいい気になりやがって…」

『にしても損傷率45%は喰らいすぎだぜ、竜馬。』

首をコキコキ鳴らす竜馬にザフィーラが言った。

「…いや、竜馬がそこまでやられたのは、お前が防御と回避を全
然しなかったからだ。」

「なんだと!?!」

怒る竜馬にザフィーラは

「いや、俺は褒めて言っているんだ。第一俺の様な守り中心の戦
いで攻めていたら、負けていただろう。敵の火力が半端じゃなく上
がっている。」

「まーな…攻撃しなきゃぶっ潰せねーからな。防いだり逃げ回っ
たりしてたら負けはしねえけど勝ちも絶対にはあり得ねえ。」

「こっ、いい具合に自滅してくればいいんだけど…そうだ！隕
石落とすとか!?!」

突然何を言い出すのかと思いきや、訳の分からない事を抜かすシヤマル。とりあえず無視した。

「…はあ…」

「ちよ、ちよっと！私の話を聞いてよ！！」

ならちやんと考えてから物をしゃべれよと竜馬が怒鳴ったら、シヤマルはしゅんとして黙ってしまった。

「ただいまー…って、あれ？電気付いてないな。」

竜馬が先に家に入る。ヴィータが靴を脱ぐのにもたついていて後がつかえているが、気にせず竜馬は冷蔵庫に向かった。そこには紙切れが、某冥王様のマグネットで止まっていた。

『無能なウジ虫どもめ』

ククク…俺はすずかとかいう人形のもとへ飯を食いに行く。貴様らはゴミでもあさってる…と言いたるところだが、ハハハ！宇宙より心の広い俺は、ご丁寧にカップラーメンを用意してやったぞ！嬉しく思え！俺の足をなめる！！ハッハッハッハッ！！

P・s・マジでごめんなあ。あ、あと冷蔵庫のプリン食ったら殺す。』

「…ぜってープリン食ってやる…」

「おい、どうした？」

シグナムが来たので事情を説明した竜馬。その夜はみんなでカツ

ふにやふにやの感触と、女の子特有のにおい、そしてたまに聞こえるエイミィのささやき声…いくらチビとはいえ、14の男に耐えられるかと言ったら、そんなの無理に決まっている。目は血走り顔は真っ赤。抜け出そうと動くときエイミィが抱きつく力を強くする…結局この鬨いは、リンディが来るまで続けられていたのだった。

「ク〜ロノっ！嬉しかった？」

クロノに抱きつくエイミィ。クロノはげっそりして目が見えなかった。

「H A H A H A…二度と来るなバカヤロウ」

「またまた〜ツンツンしてるなあ。いつデレ期が来る事やら…」

どうやらクロノは、ツンデレキャラで固定されてしまっているらしい。事の発端はなのがか

「クロノ君ってさ…『勘違いしないでよね』が口癖だね。…ツンデレ？」

と言ったのが始まりだったり。ちなみにクロノはツンデレの意味を知らなかったりする。

「そんなことはどうでもいい。…ところで、あの事は？」

そういうと、エイミィの顔が急に真剣な顔になった。

「そうだね。あともう少しで皆に集まってもらっけど…」

「ああ。…真実とは、いつも残酷なものだね。」

しばらくすると、皆が作戦室に入ってきた。なのはは絆創膏をほつぺたに貼っているけど、大きなけがはしていなかった。竜馬と戦ったと聞いて焦ったクロノだったが、とりあえず安心したのだった。

「まずは、見ての通り…今回の戦いは、こっちの比較的優位な引き分け…ってな感じで終わったわけですが、なのはさんとフェイトさんには、彼女たちが一体何者であるのか…分かった事を知らせようと思います。といっても…問題は、彼らの目的よね？」

リンディにクロノは顎をいじりながら言った。

「ええ、どうも腑に落ちません。彼らはまるで、自分の意思で闇の書の完成を目指しているようにも感じますし…」

そう、何故彼らは自分達の意思で完成を目指しているのか………話を聞く限りでは、あの四人と後一人、ブラックゲッターが誰かに命令されて従うなんてありえない。

「え、それって何かおかしいの？闇の書つても、要はジュエルシードみたいに、すごい力が欲しい人が集めるもんなんでしょ？だったら、その力が欲しい人の為に、あの子達が頑張るってのもおかしくないと思うんだけど…」

アルフがこの会話に疑問を持って言う。その疑問にリンディとクロノが答えた。

「第一に、闇の書の方は、ジュエルシードみたいに自由な制御の利くものじゃないんだ。」

「完成前も完成後も、純粹な破壊にしか使えない。少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度もないわ。」

「そっか…じゃあ、何であの子たちは…」

クロノはしばらく黙っていった。

「それからもう一つ。あの騎士たち、闇の書の守護者の性質だ…」

「クロノ…それは…」

リンディがためらうのも分かる。特にフェイトの前では…だが、こうなった以上彼女たちは知る権利があり、義務がある。そしてそれを伝える自分たちには、全力で彼女たちを守る責任がある。クロノは言った。

「いえ、話しておきましょう。知っていたほうがいい…」

「……そうね……」

「ちょっと、結局なんなんだい？もったいぶらずに言ってくれよ。」

クロノは…言った。

「……………彼らは人間でも使い魔でもない。」

「え!？」

「ど、どういう意味…?」

なのはとフェイトが驚愕の声を上げる。

「闇の書に合わせて、魔法技術で造られた擬似人格。主の命令を受けて行動する、ただそれだけのためのプログラムに過ぎないはずなんだ…」

突然言われた事に理解できなかったなのは。その時、フェイトがぼろっと呟いた。

「あの、使い魔でも人間でもない擬似生命っていうと、私みたいな…。」

「馬鹿野郎!！」

パンと乾いた音が鳴り響く。フェイトは一瞬何が起こったか理解できなかった。頬に刺さるような痛み。吹き飛ばされて床に叩きつけられる。そこに立っていたのは、ユーノだった。

「おい、コラ!もう一度いつてみるてめえ!！」

「や、やめて！ユーノ君！！」

倒れたフェイトを押し倒して、胸ぐらを掴むユーノ。こんなに怒っているユーノをなのはは初めて見た。

「うるさい！なのはは引っこんでろ！！」

「きやあつ！！」

なのはを突き飛ばすユーノ。机がひっくり返り、リモコンやらコップが床に散乱する。ユーノは恐怖でひきつった顔のフェイトに言った。

「ふざけんな！多少生まれが違つとも、お前はフェイト・テストロツサつていう一人の人間なんだよ…次こんなこと言ってみる。お前の前歯、全部へし折るぞ！分かったか！！」

「ユーノの言つのも最もだ。検査の結果でも、ちゃんとそう出ただろ？…変なことを言うものじゃない。」

ユーノに次いでクロノもそう言った。

「ごめん…なさい……………」

泣きながら謝るフェイト。ユーノはいつもの優しい顔に戻った。

「分かればよろしい。フェイト、なのは。手荒な事をしてごめんね。」

「うづん、気にしてないよ。」

「アンタ…へえ。見直したよ。」

ユーノは謝ってテーブルの片づけを始めた。フェイトが手伝うと言って、結局みんなで後片付けをしたのだった。片付けが終わると、みんなはもとの位置に戻った。

「えーっと、それじゃあ、モニターで説明しよっか！」

モニターに映し出されたのはロストロギア・闇の書と四人の守護騎士の映像。そして…ブラックゲッター。

「…守護者達は、闇の書に内蔵されたプログラムが人の形をとったもの。闇の書は転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと闇の書と共に様々な主の下を渡り歩いている。」

「意思疎通のための対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだけどね〜。感情を見せたって例は、今までにないの。」

なのはは声をあげた。

「で、でも！私と戦ったヴィータちゃんは、泣いたり…怒ったり、笑ったり…」

「落ち着くんだなのは。ちゃんと、皆分かってるから。」

「あ、うん…」

続けてフェイトも言った。

「それに、シグナムからもはつきり人格を感じました。…なすベきことがあるって。仲間と、主の為だって…」

「主のため、か…だが、面々やブラックゲッターの言葉からすると自分の意思でおこなっているようだし。いったい……………」

分からない事だらけで皆が考え込み始めかけた中、リンディがソファから立ち上がって言う。

「まあ、それについては捜査に当たっている局員からの情報を待ちましょっか？」

「転移頻度から見ても、ブラックゲッターが私たちと接触していたころを見ても、主はこの付近にいるのは確実です。案外、主が先に捕まるかもしれません。」

「ああ！そりゃ、判りやすく良いねえ！」

「だね？闇の書の完成前なら持ち主も普通の魔導師だろうし。」

クロノの言葉にアルフとエイミィが答える。そして、

「それにしても、闇の書についてももう少し詳しいデータが欲しいな。」

そう言っつてクロノはユーノの肩をたたいた。

「…はあ？なんて無茶ぶり…」

クロノはユーノの耳元でそつと言った。

「…フェイトの下着を付けるとしたら？」

「…全く、僕がそんな薄情者だと思ったのですか？」

にやっとしてサムズアップするユーノ。このやりとりを見ていた
なのはが

「…ユークロもありなの……………」

と、妄想していたのはここだけの話。

竜馬Side

俺は夢を見ていた。そこは…真っ暗な空間だった。

「何故だ、何故お前はそこまでできる？おまえは……………」

暗い空間で明らかに寒そうな格好の女が話しかけてくる。ずいぶ
んと真剣そうだけど服が全てを台無しにしやがる。

「んあ？何の話だ？つか、てめえは誰だよ。」

こいつは言った。

「闇の書の…悪魔の書の、管制人格…人は私をそう呼ぶ。名など、
私にはあっても無くても同じものなのだから…」

「その名前…気に入らねえみてえだな。【夜天】よ。」

「!!!?」

鎌を掛けたら、あいつめ凄い驚きようをしゃがる。

「そうか…ふふ。その名を呼んでもらったのは何万年も前だろうか…」

「そんなの俺の知ったこっちゃねえ。何をしてえんだ、てめえ!!」

奴は俯いていった。

「お前は違う…なのに何故……………」

「お、おい!主語言えよ。俺に分かるように説明しろ!!」

それにしても面倒な奴だぜコイツは。何とかならんのか?とりあえず銃を突きつけてみた。

「お前は…そうか、そういうことだったのか…私のせいだったな。主どころか無関係な者の人生まで…すまない…。」

「おい!だから勝手に自己完結して話を進めるんじゃないよ!!」

「すまない。」

ああ、つたく!!また謝りだしたよコイツ。

「すまねえで済んだら警察なんていらねえんだよ!」

「すまない。」

「つつかなんだよ、ここ!電気通ってねえのかよ!」

「すまない。」

「俺、最近デジャヴを良く見るんだぜ。」

「すまない。」

「おっぱいでけえな。」

「すまない。」

何だこいつは!最後のめっちゃ恥ずかしかったのに、ことごとくすまないすまないすまないすまない…うぜえ!うざいから…

胸を掴んで揉んでやった!!(もみもみ)

「な!?!ななな…!!!?!?」

ほう…なるほど。これは大穴だ。シグナムに勝ったかもしれん。大きさだけならば。

「ちょ……まつ!!」(もみもみ)

「お前にこの気持ち分かるかあ!!俺はなあ、もつとこう、この小説に恋愛系が欲しいんだよ!他作品を見たら大概主人公はモテてイチャイチャイチャイチャ…中では小学生でもうしちまった奴もいるじゃねえか!!何で俺のまわりはおっさんと化け物ばつかなんだよ!気がついたら俺、フラグ修復不能くらいまでへし折ってるじゃねえかよ!!」

「ちよつと…さて!」(もみもみ)

「もつと言うならなあ、なんで俺がこんな思いせにやあならんだよ!!感想見れば俺の事、みんな外道だなんだ…良かったなあ!正義の味方やつてる馬鹿どもはよお!!この野郎、家事全般全部俺やつてるんだぞ!!」

「ま…やめ…あん!?だ、だめ…だめなのに…あう／＼」(もみもみ)

「わかるか!!?なあ、わかるか!わかるか!わかるかああああああああ!!」

その時だった。男の腕が奴の胸を触つたのを。思いつき揉んでいたのを。そいつは、顔面傷だらけの男だった。

「フツ…俺は、ボインちゃんが好きなんでね。」

ソイツの顔を見た後、管制人格の顔を見たら…顔がコーウェンになっっていた。

「では、私は砂漠地帯のほうへと行く。」

「…そこは…」

「ああ、ヴィータと竜馬が数日前に行った場所だ。」

シグナムに俺は言った。

「おい、あそこの化け物は手強いぞ？」

「分かっている、私とお前を見くびっているわけではない。だからそのお前が手強いと言ったのも理解しているが、ページが稼げるのも事実だ。それにお前はあの怪我をしてからたったの一日しか休んでいない。そして…ヴィータもだ。」

その言葉に諦めたのかヴィータが言う。

「分かったけど…無理するなよ。」

「ふ、心配しなくても私はお前達の将だぞ？」

「何が将だ、この二一ト。」

「なんだと!?!」

ちっ、事実を言っただけなのによお…君たちはいつもそうだね。わけがわからないよ。b y Q . B .

「…念のため俺がいつでも加勢にいけるように付近で蒐集行為を

行っ、心配するな。」

「わーたよ、ったく。」

あいつはあぶねえからな。俺がついているとするか。

「闇の書はてめえが持っている。」

「そうだな。」

「おう、じゃあな。アタシはもう行くぜ!!」

そう言ってヴィータと竜馬は別次元へと転移していく。

「では、私も行くぞファイラ。」

「ああ、ヴィータが苦戦した生物…竜馬は瞬殺だったらしいが、一筋縄ではいかんだらう。危険なようならすぐに呼べ。」

「分かっている。その時は意地を張らずに呼ぼう。」

それぞれ分かれるヴォルケンチームと竜馬。戦いのゴングは、再び鳴ろうとしていた…

ヴィータSide

アタシは飛びながらシャマルから念話を聞いていた。

『おいシヤマル、今週のカンタムロボは撮ってくれたのか!?!?』

『話し聞いてたの!?!?シグナム達が砂漠で交戦してるの。テスト
ロツサちゃんと、その守護獣の子と!?!?分かってるの!?!?』

『分かってるって、こんな時だからこそ冗談言って落ち着かせて
るんだよ。……………とにかく長引くと厄介だな。』

『うん、だからどっちかの援護に……………』

『分かってる……………あ、一つ確認するけど……………あ、ワリィ。無理っば
い。』

アタシは少し真面目に言った。

『え!?!?』

少し離れた空中にアタシに対峙してアイツ……………白い魔導師がいた。

『白い方が来た。こっち何とかしてから援護に回る。』

『高町……………にゃのは……………!?!?』

『なのはだよ……………!?!?』

『え!?!?』

『ちよつと、何で今知つたみたいな顔するの!?!?』

『あ、菜の花だっけ?』

「なのはだよ！！な・の・は！！リョウさんも同じ様な事言ったんだけど！！」

そう言ってあいつは言った。

「コホン、えっと…ヴィータちゃん。やっぱり、お話聞かせてもらう訳にはいかない？もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかも知れないよ。」

そう言って笑って見せた。何であいつは、笑えるんだよ。敵であるアタシに対して…

「とにかく悪いが管理局は信用できない。いい思い出はねえんだよ、奴らとは。」

アタシがそういうとあいつが

「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者、知ってるでしょ？」
そう言って手を広げるのは？だっけ。何で手を広げるんだ？

「とにかく、民間協力者でもだ。お前は立場的には管理局側だ。手伝わって事はイコールアタシ達側…悪いが話はできないな。」

「…そう…なんだ……………」

俯いている今がチャンスだ！！アタシは衝撃弾を作る。それをアイゼンで叩く。

「唸れ閃光！爆音となれ！！」

『Eisengeheil』

それは激しい閃光と爆音を発しなのはの視覚と聴覚を一時的に奪う。その隙にアタシは普通の砲撃魔法では当たらないであろう位置まで行き転移の準備をした。

「まさか…ここまで撃つてこれねーだろ。」

アタシが準備を始めた時だった。

「いくよ、久しぶりの長距離砲撃！」

そういつてなのは？はデバイスを構える…って、はあ？何してんだ？

『Load cartridge』

カートリッジを二発ロードさせる。あいつは魔法陣と砲撃増幅・加速用のリングを展開させる…って、真剣でこっち狙ってねえか？

「嘘だろ！！？届くはずねえ！！」

いや、届くだろ？この感じは…なんとなく、そんな感じがした。

だってここで届かなかったら番組としてどうなの？って展開になる。

(マテ)

『Divine buster・Extension』

「デイバイイイン・バスタアアアア!!」

いやいや、ちょっと待て。いくら……え……!!?

その瞬間、アタシの目の前を桃色の光が覆った。でも……

「ったくよ、これだから放っておけなかったんだぜ？」

閃光と爆煙。その中から現れたのは、ヴィータを守るようにして立つブラックゲッターだった。

「いますぐ離脱しろ。ここは俺が食い止める。」

「!?!?お、おい!この前とおなじじゃねーかよ!?!」

吠えるヴィータに竜馬は言った。

「なあに、奴とは前に戦った。二度、同じ手など通用するわけがない。」

「で、でもよ、竜馬……」

ヴィータに竜馬は、自信たっぷりと言った。

「俺たちが…死ぬわけねえだろ？」

ヴィータはしばらく黙った後

「…負けんじゃねーぞ。」

「フン…てめえこそ。」

そういつと、転送ポートに乗って消えていった。

「さて…どうやら俺とお前には因縁があるらしい。なあ？高町なのは。」

竜馬がそういつて見上げると、戦闘態勢を取っているのが、レイジングハートを構えながら言った。

「あれは…何でこんな事をするのですか！闇の書を完成させたところで、貴方達のマスターは…」

「助からねえ…って言いてえんだろ？」

「…!?」

自分の言おうとした言葉を先に言われて、言葉を失うのは。竜馬はつづけていった。

「そうだとも。可能性は限りなく低い…だがな、良く聞け。お前は何も、何も知らねえんだ。ただロストログアである闇の書の回収が目的なら…これ以上の深入りはよせ。死ぬ事になるぞ。」

竜馬の言葉になのはは驚いた。

「そ…それって…どういう事ですか……………?!」

「んあ？今話した通りだ。訳も知らずに、正義の味方気取りで関わるのはよせ。お前が死ぬ事になると言っているんだ。アレは…そんなちやちなものじゃねえ。俺の考えが正しかったら、アレは…」

なのはは言った。

「あの…教えてください!!そんな、アレとかソレでは話が分かりません!!」

「その必要はない…」

竜馬がそう言った瞬間、姿が消えた。そして一瞬のうちになのは目の前に現れる。ゲッターサイトを…両手に持って。

「てめえは…ここで死ぬからだっ!!」

「くっ!!」

ゲッターの斬撃を、シールドとフィールド魔法を併用して防ぐのは。初撃を防ぎ、次の攻撃でシールドが割れると同時に、レイジングハートで罅迫り合いまで持って行った。

「ほお…接近戦も様になってきたじゃねえか。見直したぜ。」

「ありがとうございます…って、言うべきですか?」

にっつと笑うのは。だがその目は闘志が宿っている。竜馬はそれを見るとフツと笑った。

「でも…それじゃ俺には…勝てないぜえっ!!」

零距离でゲッタービームを発射する竜馬。なのははディバインバスターを逆噴射させて、一瞬で軌道すれすれのところまで上昇する。

「なんのっ！ディバイイイイン・バスターアアアアア!!」

逆噴射から動きを予測していたのか、竜馬は難なくそれを回避する。避けると同時に手にはゲッターバスター力が握られていた。

「甘いぜっ!!」

発射されるバズーカの弾。なのははアクセルシューターを3つ精製すると、空中で撃ち落とす。爆発。その煙を切り裂いて、トマホークブーメランが二本飛んでくる。

「避けれる…? いや、避けてみせるっ!!」

なんとなのはは逆に、飛んでくるトマホークに向かって、突っ込んだのだ。トマホークブーメランは、一度大きく弧を描きながら半円状の軌道で飛んで行き、途中で戻ってくるという技だ。竜馬が二本投げる理由は、ちょうど目標の後ろあたりで引き返させ、二つ投げることで逃げ場を与えなくさせる寸法だったのだ。だが、飛んできている途中で高速で突進すれば…

「二つの斧が最も離れる…その瞬間をつけばっ!!」

だが、竜馬も馬鹿ではない。この死角に気付いたなのはに感心するも、今度はゲッターマホークを直線状に投げる。なのははシルド魔法をレイジングハートの先端斜めに取り付け、弾き飛ばした。

「何っ!?!」

「いつけええええええ!!」

レイジングハートと竜馬が手に持ったゲッターマホークが、空中で激突する!!そのまま零距离でなのははディバインバスターを放った!!

「ディバインイン・バスタアアアア!!」

回避する竜馬だったが、避けそこなったのか、足の装甲が少し融解する。だが、そんなことはお構いなしに、回避行動で上昇した勢いを利用して

「止めだアツ!!ゲッターアアアアトマホウウウウク!!」

凄まじい速さで振り下ろす竜馬!!だが、なのははレイジングハートをアクセルモードに変形させ、鉤の様になっている先端を刃の付け根に引っかけると…竜馬の力を利用して回転させる!!わずかにそれるゲッターマホーク。逆に、てこの原理で加速したレイジングハートの柄が、竜馬の後頭部を直撃した!!

「ぐおっ!!」

衝撃で折れて、飛んでいくレイジングハートの後部。なのはは一瞬で修復させると…竜馬にバインドを掛けたっ!!

「な…何だとっ!!」

『や、やばいぜ、竜馬!!』

両腕と両足、ついでに腰に胸に首…これでもかと言っほどバインドを掛けて上昇するなのは。大きく展開される魔法陣。竜馬の背中に、初めて冷や汗が流れた。

「はあ…はあ…カートリッジ・ロード!!」

『Load Cartridge』

何を考えたのか、残っていたカートリッジ全てをロードするのは。一発、二発、三発…合計五発もカートリッジを使いまくった。

「これが私の…全力全開!!」

『Starlight Breaker』

桃色の巨大な魔力光が、レイジングハートの先端に収束していく。味方には希望を、敵には絶望をもたらす、流星の閃光。その名も…

「スターライト………ブレイカアアアアアアアア!!」

超巨大な砲撃魔法が、竜馬に向かって発射される!!抵抗する竜馬だが、これだけは力云々で解決できる問題ではない。

「ぬあっ!く、くそっ!!」

『り…竜馬！？竜馬アアアア！！』

武蔵も必死にプログラムを起動させるが、バインドを解けない。ゲッタービームは腹に付いているから、発射して焼き切ることもできない。

『ま…まずいぞ…！！』

「フツ…ここまでのようだな…！！！」

竜馬の視界がスターライトブレイカーに飲み込まれる。最早ここまでと思ったその時だった。

「！？」

『…これは…！！？』

コクピットに表示された文字。考えるよりも先に、体が動いた。レバーを持ち上げる。ゲッターの顔面の装甲にヒビが入る。スイッチを入れる。装甲が融けていく。そして…

なのはは信じられなかった

突然、竜馬の体が

『うっ』に

「オオオオオープンゲットッ！！」

分離したのだから…

チェンジ13 覚醒！新たなる力 後編（後書き）

そろそろ盛り上がってまいりました。

チェンジ14 復活の武蔵(前書き)

いやいや、テンションが乗っています。

チェンジ14 復活の武蔵

勝負は一瞬で突いた。砂漠に倒れているのは。空にその黒い体を輝かすブラックゲッター。本当に…本当に一瞬だった。

「おい…ムサシ。こりゃ一体何なんだよ…」

竜馬に武蔵が答えた。

『分からねえ…でも、あの時に突然『オープンゲット』の機能が解放しやがった。』

そう、オープンゲット…ゲッターロボは通常3機のゲットマシンが合体して、その真価を発揮する。だが、この機能はオリジナルのブラックゲッターにはオミットされていたはずだった。

「デバイスのお前でも分からねえ事があるのかよ。」

『ああ。ゲッターサイトの時と同じだ。きっと俺たちの危機をこいつが感じ取って、進化したらしいな。ったく、ご都合主義にもほどがあるぜ。』

武蔵がそう言うてにやりと笑う。だが、竜馬はそれどころか逆に、表情を渋らせた。

『ん？どうした？竜馬。』

「ムサシ…高町なのは、前と比べ物にならねえほど強くなった。デバイスの性能だけじゃねえ。あいつは…本当に強くなった。オー

ブンゲットが使えなかったら、俺たちは確実に負けていた。」
それを聞くと武蔵は

『…そうだな。俺のナビゲートも全然追いつかなかった。すまん。』

「いや、ムサシが悪いわけじゃねえ。ただ……………」

竜馬はそう言いかけて空を睨みつけた。

「なら、フェイト・テストロツサも…気をつけるよ、シグナム…」

竜馬は撃墜したなのはを岩山に乗せると、一人飛んでいった。

チエンジ14 復活の武蔵

ガキイーン!!

『グオオオオオオオオオ!!』

シグナムの攻撃を食らっても、この巨大な蛇の様な生物は、少し皮膚が凹んだだけで終わった。

「ちい!!」

舌打ちするシグナム。この頑丈な鱗…いや、一枚一枚が強固に合

『Thunder blade』

『グオオオオツオオツオオオ!!?』

そのデバイス音と共に、無数の雷撃を纏った金の刃が怪物に刺さり、続けてシグナムを締め上げていたワイヤーの様な硬い触手を斬っていく。こんな事できるのは…

「……………テストタ…ロツサ……………」

シグナムが上を見上げると、魔法陣の上に立っているヤツがいた。

「ブレイク。」

その一言で刺さっていた金の刃は再稼働を始め、爆発。甲殻がところどころ吹き飛んだ怪物は逃走を始める。それに危険を察知したのかもう一体も砂に潜り、その場から逃げ始めた。

「礼は言わんぞ、テストタロツサ。」

「お邪魔でしたか?」

「蒐集対象を潰されてしまった。」

この怪物、倒すだけなら簡単である。だが、竜馬の様にリンカーコアの位置を勘で探し出す能力をシグナムは持っていない。あれほどの大きさにもかかわらず、あの怪物にはリンカーコアが一個、それも大きさは人間より一回りほど大きいだけのものしか持っていない。それに殺してしまえばよくすると、他の個体が死体を捕食しようとする。

這い出して来るため、大体殺して一分以内にリンカーコアを探し出して蒐集しないと、食べられてしまうのだ。だから気絶程度で済ませようとしているからこそ手こずる…と言っても、強力な個体なのに変わりはない。非殺傷設定とはいえ、生命力の強いこいつらではなかなか気絶してくれないものだ。そう思いながら、シグナムは改めてカートリッジを補充した。

「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし。」

「そうだな、悪人だったな、私は。」

「あ…ス、スミマセン。」

「謝るな、事実だ。」

テストアロツサがいるなら、恐らくあの守護獣もいるのであろう。ここにいないということはザフィーラの所か。増援の見込みが無くなったと判断したシグナムは、レヴァンティンの血を払う。

「あの、やっぱり話を少しでも聞くわけにはいかないのでしょうか？」

「ここまでできてまだ言うか？」

「やっぱり戦わずにすむならそれに越した事は……。」

「くどいぞ、それにそれは建前なんじゃないか？」

「え？」

構えながらシグナムは言う。

「りよ…ブラックゲッターから聞いている、お前も結構な負けず嫌いだとな。私としては預けた勝負はできれば今しばらく先にしたかったのだが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかあるまい。」

シグナムがそういうとフェイトは

「…そうですね。本音を言わせてもらおうと…私も、そのつもりで来ました…ちょっとだけですが。」

そう言っつてテストロツサは構えた。ちょっとだけと言いながらも、キラキラしたフェイトの瞳を見るなり、自然とシグナムの口元に笑みがこぼれる。その顔は、戦いの女神・ヴァルキリーの微笑みの様にも、血に飢えた百獣の王の獰猛な笑みにも見えた。

「最初から全力で来るがいい。」

「はい、そのつもりです。」

一時の間、そして、

ザッ！！

戦乙女達は、お互いに向かって飛び出した。互いの信念を比べるために。想いの強い方が…勝つ。

『Schlangeform』

シグナムのデバイスは鞭状になり、まるで生きているかのごとくフェイトに襲い掛かってくる。普通の鞭とは違い、連結刃がついているからその威力は計り知れない！！何とかかなりふり構わずに避け反撃の準備に入る。

『Load cartridge, Haken form』

「ハーケン・セイバー！！」

魔力刃を展開してフェイトは構える。それに対しシグナムは、デバイスをまるでフェイトの周りに包むかのように展開する。逃げ場を与えなくするためだ。だが、その隙間は徐々に狭まっていく。肉を抉り、骨を断つその刃が、刻一刻とフェイト迫る。その時だった。

「はあ！！」

フェイトは、牽制に魔力刃を飛ばす。それに反応してシグナムも、フェイトの周りに展開していた鞭状の刃を、頭上から降り注ぐように攻撃してきた。

『Mach special』

それと同時に、フェイトは残像を展開させながら高速移動をはじめ、間一髪で避ける。その衝撃で発生した砂埃にまぎれて魔力刃を再び打ち出す。不意をついた攻撃にシグナムは上空に逃げるけれど、これがフェイトの狙いだった！！！！

「はあああ！！！！」

『Haken slash』

シグナムの背後に回りこみ、ありったけの力でさらに強力に展開した魔力刃のバルディッシュを振り下ろす。

「落ちろおっ!!」

勝った!! そう思った次の瞬間!!

ガキイイイン!!

「っ!? 鞘!!」

そう、その渾身の一撃は、レヴァンティンの鞘で防がれていたのだ。良く見ると、鞘には魔力が帯びている。動揺するフェイト。その隙について、シグナムはフェイトを蹴り飛ばす!! 何とかバリアを発生させ防ぐが、衝撃を殺せずにフェイトは吹き飛んでしまう。だが

『Plasma Lancer』

バルディッシュがプラズマランサーを自動発射。完全に不意をついた攻撃だったが、流石シグナム。レヴァンティンで切り払う。だが、時間稼ぎはできた。転んだって唯で起きたりはしない!! 何とかうまく着地すると、フェイトはバルディッシュの形態を変える。

『Assault form』

一方のシグナムは、すぐに体勢を立て直して、またデバイスを普通の剣状に戻した。

『Schwertform』

そしてフェイトがカートリッジをロードすると同時にシグナムもロードする。フェイトは足元に魔方陣を展開させ、空いている片手に雷を発生させ、攻撃加速・増幅用の二つのリングを前に展開させた。

「勝負を決めるのは…デバイスの性能差ではない事を教えてやるうー!!」

「射程内に入った…いける!!」

二人の動きは同時だった。

「プラズマ…」

一方シグナムも足元に魔法陣を展開させ大きく構え大技の体制をとった。

「飛竜…」

吹き上がる紫の魔力…それと同じくらいに輝く金の魔力。二人の目は、同時に開いた。

「スマツシャアアアア!!」

「一閃ッ!!!」

ドガアアアアアアア!!

ぶつかり合うフェイトとシグナムの技は、相殺された。これで駄目ならすぐに次の攻撃に、そう思いフェイトは跳んだ。やはりシグナムもすぐに切り替えてフェイトに攻撃を仕掛けてくる！！

「来たか…沈めっ！！」

「ううおおっ！！」

お互い、再びカートリッジをロードさせ、渾身の思いでお互いのデバイスをぶつけ合った。その時だったっ！！

『グオオオオオオオオオオ！！』

突然、砂埃が二人の足元から噴き上がる！！同時に巻きつくワイヤーの様な触手。勝負に目が行きすぎて、二人の注意が散漫になっていたのが原因だった。さっき撃退した二匹の怪物が、引き返して来ていたのだ。

「しまっ……！！？」

「ぐ…くうっ！！？」

締めあげられ、痛みに喘ぐシグナムとフェイト。遠く離れた岩陰で、一人の男が動き出そうとしていた。

「む…？あの程度見切れぬなど、ファイターとしては半人前と言ったところだな。行くか…？」

その男の顔には特徴的な仮面がついていた。そう、この男はクロノを一撃のもとに倒した、凄腕の魔導師だったのだ！！だが、彼の

耳に突然念話が届いた。

『いや、その必要はない。』

その声を聞くと、男は

『！？竜馬か…大丈夫だ。ここは俺が何とかする。』

なんと仮面の男は竜馬を知っていたのだ。続けて竜馬は言った。

『いや、俺にも事情があつてな。少し確かめたい事がある。それに…お前はあまり表舞台に出るとまずい。いつボロが出るか分からん。』

『そうか…分かった。』

すると竜馬は

『…悪いな。つき合わせちまつて。』

『何、それは俺のセリフだ。アレは俺が…俺が全てに決着をつけるはずだった。でも、お前は…』

竜馬は笑つて言った。

『……………何、それはお互い様だぜ。それにこっちは身内が絡んでいる。どっちにしたって同じだろうよ。』

しばらく黙ると、仮面の男は言った。

『竜馬…お前、本当は……………』

『か、勘違いするんじゃない！俺はただ身内が絡んでいるだけだ。この世界がどうなるうと知ったこつちねえ。俺はただ…ええい！ゴチャゴチャうるせえ！いったん切るぞ！』

そう言つと竜馬は念話を切つた。仮面の男がいくらつなごうとするも、応答しなかつた。

「お前は自己中なのか、お人よしなのか…つくづく分からん奴だな、竜馬。」

そう呟くと同時に、仮面の男の姿は一瞬にして消えたのだった。

「ふ…不覚…だ……………！！」

一度に同じミスを二度もするほど、シグナムは全力でフェイトと戦つてしまった。確かに手加減すれば落ちるのは彼女だ。だが、こは彼女たちだけの土俵ではないということが頭から抜けてしまったのだった。

「あ…いやあつ…！！」

突然フェイトが、頭を左右に振つて暴れだした。怪物は恨みがあるのか、フェイトから喰おうと口を近づけていったのだ。

「テストロッサ…！くつ…離せッ！このッ…！！」

シグナムも必死に抵抗するが、逆に触手は締まる一方。

「あ…ああ…!!」

フェイトの頭を噛み砕こうと、ぬらりとした何本もの牙が包み込む。これがフェイトの頭を砕こうとしたその時だった!!

「ゲツタアアアアビイイイイイム!!」

突然黒い弾丸が、空を引き裂いて飛んでくる。スパイラルゲツタービームは二人を拘束していた触手を焼き切り、その隙に二人は一気に離脱する。フェイトとシグナムが並んで飛び上がる。竜馬は言った。

「フツ…手出しは無用だったか？」

「あの…ありがとうございます…」

ぺこりと頭を下げるフェイト。流石にこんな反応をされるとは思っていなかったらしく

「はあ!？何とち狂った事してんだ、てめえ!!」

「え…?だって敵なのに私も助けてくれたから…あの、迷惑…でしたか?」

さらに返答に困るような返事をされた竜馬は

「う、うるせえ!あのまま喰われたらそのバカ侍「おい、りよ…じゃなかった、それは聞き捨てならんぞ!!」事実じゃねーかよ、

「まったく、このアホ連れてあっち行ってるボケ。喧嘩ならよそでやれ。」

そう言っつて二人を追い出そうとしたその時だった。

「!?!後ろっ!?!」

フェイトが叫ぶ。そう、竜馬の背後に無数の触手と、怪物の頭が迫っていたからだ。フェイトとシグナムに目の前の映像が、スローモーションで映る。たった数メートル。だが、その距離が二人にとつては月よりも遠くな、どこまでも続く、そんな長さに見える。だが!?!

「オオオオオープンゲットツ!?!」

それは一瞬の出来事だった。ブラックゲッターの瞳が消え、口を覆う装甲とゲッターウィングが外れ、消滅する。それと同時に体の色が胸と腕は赤、腹は白、腰と足は黄色のカラーリングに変わる。二本の角は肩に向かって折れ曲がり、粘土細工のように変形する。そして

「なっ!?!」

ゲッターの体は

「う、嘘!?!」

3つに…分離した

3機のゲットマシンとなったゲッターは、触手を躲しながら、怪物の根元…本体へと向かって行く。

『竜馬！試したい事がある。…いいか？』

『よし、任せるぜ、ムサシ！！』

やがてゲットマシンが触手の海に消えていく。一時の間。何か金属の合わさるような音が鳴り響いた。

「う…嘘！！何が…どうなってるの！！」

完全に混乱しているフェイト。それもそうだ。突然目の前にいた人間が3つに分離して飛んでいってしまったら…誰だってそう思うだろう。シグナムの頭の中が滅茶苦茶になっているが

「テ、テストタロツサ。まずは離脱するぞ！！」

シグナムはフェイトの腕を掴んで飛び上がる。だが、混乱したフェイトはなかなか動こうとしない。

「おい、テストタロ…」

シグナムがそう言いかけたその時だった。またしても触手が雨のように空から、その水飛沫のように地面から、襲いかかってきたのだ！！まずい！シグナムがレヴァンティンを構えようとしたその時だったっ！！

ギャラララララララララ！！！！

それは、黒光りする鋼鉄の拳だった。その拳は火を吹きながら、空高く伸びていく。同時に怪物に絡みつく、鉄の鎖。フェイトとシグナムを絡め取ろうとした触手も、怪物の体も、締め上げられる。その手が怪物の頭を捉えると、凄まじい力で地面に引き寄せる。抵抗する怪物。恐ろしい事に、レヴァンティンでも傷のつかなかった装甲が、あまりの力に耐えきれず、割れ始めているではないか！？怪物の姿はまるで触手の団子のようになっている。その中央の暗い隙間から、紅い光が漏れた。

『まさか…ゲッターには驚かされるばかりだぜ。』

「ああ。まさかな…」

すると黒い手が怪物の咽喉元に当てられて、紅く輝いた！！

「ナパーム・フアング！！」

竜馬ではない男の声と同時に、凄まじいまでの熱が、怪物の甲殻の弱い部分を焼き切る！！そして悪魔の様な爪は深くその肉を抉り、緑色の体液を吹きあげさせながら、リンカーコアを抉り取った。

「そう、ブラックゲッター3！！」

> i 1 9 3 8 4 — 1 2 5 9 <

そう、信じられない事に、ブラックゲッターはゲッターチェンジも可能となっていたのだ！！下からAI人格のジャガー号。中央は

竜馬のイーグル号。そしてその頭部は、武蔵のベアー号が連なっていた。外見はゲッター3と大差ないが、ブラックゲッター3は黒を基調とした色彩になっており、真っ赤な両眼には禍々しい黒の瞳が睨んでいる。そして凶悪な黒い爪：ゲッタークロー。そして恐ろしいまでのミサイル系重火器が内蔵されているのだ。その戦闘能力は、本来の大きさがあれば真ゲッター3に勝ると劣らない火力を誇る、水中・地上用広域型戦闘形態。ブラックゲッター第3の姿。それがブラックゲッター3なのだ。

『よし！シグナム。そのチビ連れて、できるだけ遠くに逃げろ。上じゃない。横に離れる！！いいな？』

「わ、分かった！いくぞ、テストロッサー！」

「は、はい！！」

最大速度で離れていくシグナムとフェイト。それを見届けると竜馬は言った。

『よし、行ったな。行け、ムサシっ！！』

「おう！いくぜ…これが元祖！！」

その瞬間、怪物の体は持ち上げられる。たった一つの小さな物体によって

「大」

その瞬間、怪物の体は回転する。砂漠に巨大な竜巻を巻き起こして

「雪」

その瞬間、怪物の体は切り裂かれる。真空となり、刃となった空気によって

「山」

その瞬間

怪物の体は、天高く舞い上がった

「おろしイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
!!!!!!!!!!!!」

そう、これは巴武蔵が大雪山の麓で、血の滲むような修行の末に編み出した秘技・大雪山おろし。車弁慶にも受け継がれたその技は、ゲッターのスペックノートには無い、必殺の技である。今ここに、この技を編み出した巴武蔵本人によって復活したのだ!!

体の十何倍もの大きさのある怪物を、その姿が見えなくなるくらいまで上空に放り投げる、ゲッター3。何秒かたつと、その体はきりもみ状に回転しながら、遙か地平線の彼方へと落下していった。

「ゲッターミサイイイイル!!」

頭の横に付いている二門のミサイルが前に倒れる。発射。二発のゲッターミサイルは上空で怪物を捉え、その体を二つに分断した。

「す…すごい…」

フェイトはその光景に呆気を取られていた。シグナムも同様だった。

「あれは…あれは、竜馬だと言つのか!？」

シグナムがそう言った時、答えるようにゲッター3は言った。

「へへ、んじゃ、俺たちは先に行つてるぜ。じゃあな。」

そう言うとブラックゲッター3は分離し、結界の外へと飛んでいったのであった。

チェンジ14 復活の武蔵(後書き)

オリジナルゲッター、ブラックゲッター3の登場です。「活躍するゲッター3」を合言葉に頑張ります。

チエンジ15 加速、そして(前書き)

みなさんは、チエンジの流竜馬にキャラソンがあるのをご存知ですか？BURN THE RUNって曲名なんですよ。竜馬歌うめえ！？ってなりました。

あと…天才志村動物園のナレーターも…竜馬なんですね。知らなかった……

チェンジ15 加速、そして

竜馬Side

情けない話、はやてが闇の書に取り込まれないようにする方法を、最後まで見つけることができなかった。俺がグレアムやアイツから直接闇の書にアクセスしてある一定の情報が確認できるが、はっきり言って上澄みだけだ…ついでに言うと、ヴォルケンリッター…奴らの使える力もごく一部であることがわかった。例えばザフィーラのデバイスなどだ。この長い年月の中、奴らが闇の書の真実に気付けないのも、これが原因であろう。

闇の書：正式名称【夜天の書】、本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集し研究する為に作られ主と共に旅する魔導書。今のようになったのは歴代の主の誰かが…そう、【奴ら】…の可能性も否定できねえが、ま、今となっちゃ、そんなこと分かりっこないとにかく、どっかのクズが勝手にプログラムをいじったせいで、破壊にしか使えないようになっちまったって寸法だ。そして長い年月の中に本来の姿が薄れ戻るのは不可能になっちまったってわけだ、こりゃ。転生と無限再生の原因は旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走しているから、こいつが後に破壊すべき防御プログラム…てな訳だ。話…ついていけるか？そして…いや、これは伏せておこう。【奴ら】がどんな方法で【アレ】を手に入れたかは知らねえが…【奴ら】じゃないにしても、【アレ】は、あの【悪魔】はあの後に完全に…

外部からの接触は不可、無理にすれば主を生体部品として取り込んで暴走、完成しないと主だっていじれない。でも完成したら完成したで主取り込むし、取り込まれても自分を強く持てる人しかいじれない仕組み。ま、八方塞りちゅー訳だ、こりゃまた。でもな、正直な話、はやてについては心配はない。あいつは少なくとも夢や幻に逃げるような奴じゃないことは俺もよく知っている。ガキのくせ

に少し背負い込みすぎな所があるが…フツ。まあ家族もダチ公もいる。それに、あいつはまだ若い。これから出会う人たちも沢山いるし、傷つき、打ちのめされながらも、少しづつ成長してくれたらいい。だから俺があいつにできることは、少しでも現実に未練を残させてさっさと起きれるようにするぐらいであつた。それは、あのチビどもも同じだ。俺を乗り越えて、この先に待っている地獄で生きながらえるために…ま、そんだったら今、死なせてやった方が幸せだと俺は思うけど…生憎俺はサディスティックなんでね。そいつは勘弁してもらいてえ。

だが、それは俺の知っている【闇の書】での話だ。もし、【アレ】がああ【悪魔】なのだとしたら…問答無用ではやては取り込まれ、永久に生体部品として自己進化・自己再生・自己増殖を繰り返す、世界を破壊する【悪魔】となる。神なんてこの世にはいない。アルマゲドンが起こったなら、【悪魔】が勝つだろう。そもそも、神が必ずしも人間の味方とは限らねえけどな。そんな時は、俺が神だろうが悪魔だろうが、ぶち殺してやる。んなクソどもより、シャマルの料理の方がずっと恐ろしいぜ。ひえー！！

そして、もう一つ俺はやらなくてはいけねえ。ま、何だかんだ言つてこの暮らしは退屈しなかつたし、バカでアホでチョンな野郎どもだったけど…嫌いじゃなかつたしな。それに…あのチビどももだが…俺は償わなければならねえ。だから俺は……

チェンジ15 加速、そして

なのはたちは、本局にあるアースラで、前の戦いについての会議をしていた。

会議は進んでいく。こちらのシステムがクラッキングされたこと、でもエイミーの奮闘で仮面の男の映像が取れたこと。だが、彼らを震撼させる事がもう一つあった。それは…

「さて、問題はこれだな。」

そう言ってクロノはある映像を出した。そこに映し出されたのは

「オオオオオープンゲットツ！！！」

「見ての通りだ。ブラックゲッターは、突如として人間の体の構造上、どう考えてもおかしい事を平気でやってのけた。」

「3機のマシンの様なものに分離。バインドをすり抜けて、ギリギリのタイミングでスターライトブレイカーを回避するなんて…」

クロノの後にロツテが言う。

「えつと…あ、あと…」

「…あ、そうそう。これもだね。」

フェイトが何か言いたげに呟くと、エイミーが慌ててモニターのスイッチを入れた。

「いくぜ、ブラックゲッター3！！！」

「大雪山おろし！！！」

そう、ブラックゲッターの別形態・ブラックゲッター3（以下ゲ

ッター3)の登場だ。オープンゲットで分離したと思ったら、戦車の上にロボットの上半身がくっついたような姿に変形したのだ。目つきは相変わらず悪い。

「かわいくない…」

「い、いや、アリア。かわいいとか、かわいくないとかの問題じゃ…」

すかさずアリアにツッコみを入れるクロノ。その時だった。

「わかった…全部分かったの!!」

突然なのはが目を輝かせて立ち上がったのだ!!

「リヨウさんは…ゲキガンガーだったの!!」

「ゲキ…ガンガー………って、何?」

首をかしげるフェイト。すると突然なのはがキレはじめた!!

「フェイトちゃん…ゲキガンガー3を知らないのに、よく地球で今までのんべんだらりと過ごせたね…?」

ゴゴゴゴゴゴ…と、まるでジャンプの漫画で出てくるような擬音語を発しながら、フェイトの胸ぐらを掴むのは。

「なの…は!?!」

「違うの。なのじゃないの。私の名前はダイゴウジ・ガイ!!」

「これは魂の名前なの!!」

それから数分間なのはがゲキガンガーについて語りだしたので、とりあえずリンディが止めたのだった。

「…そこで幻の旧ゲキガンガーが…」

「え、えつと、まず話しはそこまでで…エイミー!」

「はい!んゝ…あ、クラッキングの話ね。そもそもシステムをクラッキングできたことも考えると組織だっておこなっているのかもね、それなら複数いてもおかしくないし。」

「とはいえ、まだ不明な点は多いか…それに、僕の事を知っているみたいだった。」

「あ、ごめん…」

謝るエイミー。クロノは笑い飛ばしていいよと言い、怖がらせてごめんとなのはやフェイトに謝罪したのだった。

「とりあえず、今分かるのはこんなものかしらね、アレックス。アースラの航行に問題はないわね?」

リンディさんが立ち上がって指示を出す。

「ありません。」

「ん。では、予定より少し早いですがこれより司令部をアースラに戻します。各員は速やかに所定の位置に。」

「……はい！」

「つと、なのはさんはお家に戻らないとね？」

「あ、はい。でも……」

なのはは事件の事が心配だったのか、少し歯切れが悪く返事をした。

「……闇の書のことなら大丈夫。私たちでちゃんと見ておくから。」

「……………はい。」

闇の書とブラックゲッターの新形態。問題は、増える一方だった。

竜馬Side

俺達は例の仮面の男について話していた。ま、俺はごまかしているだけだったけどな……

「助けてもらった……って事で、良いのよね？」

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ。」

「だろうな。完成した後、その破壊が目的なんだからよ。でも、そいつは……」

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれないが。」

そのザフィーラの言葉に俺は言う。

「いや、それは無えな。闇の書はマスター以外は使えねえ。ちょっと調べれば分かる事だ、俺は当然、てめえらですら、その一部しか使用許可を得れないんだろ？」

一応それっぽい事言って会話に参加する。

「ああ、それに完成した時点で主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずもないしな。」

「まあ、家の周りには嚴重なセキュリティも張ってるし、万が一にもはやてちゃんに危害が及ぶことはないと思っけど…」

「セコムしてるもんな。」

俺がそう言うと、シグナムは頭に？を浮かべて言った。

「…？ま、ともかく念のためだ。シャマルはなるべく主の傍を離れん方が良いな。」

「うん。」

その時だった。

「……………なあ、闇の書は完成すればどうなる？」

「？何を言っている？」

シグナムが聞き返す。

「完成すれば、闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私たちは、それを誰より知ってるはずでしょ？」

シヤマルが付け加えるが、ヴィータの表情は不安に駆られていた。

「…皆は何か忘れてる事とかないか？」

「忘れた事？」

「ヴィータちゃん、何か思い当たる事があるの？」

ヴィータの言葉を理解できない3人。やはりな…誰も違和感すら持っていないか。これも改編の影響ってやつだろう。

「あゝ……………ごめん、忘れて。多分アタシの勘違いだ。」

「いや、これだけいろいろな事があつたんだ。何かに不安に思つのも仕方ない。」

「そうね、シグナムの言う通りよヴィータちゃん。不安なら隠さないうで相談していきましよう？」

眠い…ちつ、大きな欠伸をしたらみんなジト目で俺を睨んできやがった。そういえば『欠伸』と書いて『あくび』って読むんだな。俺、ずっと『けっしん』って読んでたぜ。こいつは恥ずかしいな。

「な、なんだよ。」

「竜馬。こんな大切な話をしているときにお前と言う奴は…！」

「おいおい、落ちつけって。欠伸なんか我慢でき…」

その時だった。

ガシャン…！

軽い金属の倒れる音。そして何かが床にたたきつけられる音。

「何この音…!?」

「はやての部屋からだ！はやてっ…！」

「主はやて…！」

この音に気付いて、俺が先頭になって、急いではやての部屋に行った。そしてそこには倒れた車椅子と胸を押さえて苦しそうに倒れているはやてがいた。

「はやてちゃん…！」

「あ、主はやて…!?」

おい…!という事だよ、これ…!あいつは…せめて、最期の時ぐらいは…!?いや、こんな事をしている暇はない…!

「はやて…!くそ、シャマル…!治癒魔法…！」

「え!?でも…！」

もたつくシャマル。そんなシャマルの頬を、軽くぴしつと叩いた。

「うるせえ！！何もしないよりましだ！！シグナムは救急車を呼んでくれ！！！」

「わ、わかった！！！」

シグナムが走って電話のもとへ行く。ザフィーラがはやての体に触ろうとするのを、俺は止めた。ここで動かすと、逆に症状を悪化させちまうからだ。ちっ…前世の記憶が、こんなところで役に立つとはな！！すると事もあろうに、はやての奴がいきなりしゃべりだしやがった！！

「そ、…そんな…大袈裟…やよ…」

それでもこの状況でも心配させないようにしようとするはやてに、俺は怒りを感じた。だが、それを先に口に出したのはヴィータだった。

「うるせえ！！何でこんなになるまで我慢していた、そのせいで！！！！！」

「落ち着けヴィータ！当り散らした所でどうにもならん！！！」

ザフィーラが説得する。生憎、ここではいくら守護騎士とはいえ、シャマル以外には何もできない。前世の俺が目指していた物の知識。本の中だけでしか知らなかった知識を、出来る限り実践する。

「分かってる！分かってるけど！！！」

「はやて！な、大丈夫だ。みんないるぞ。あと少しだ、あと少しがんばれ。な？」

はやての小さな手を、俺は両手で握る。こんなんで、死なせてたまるか。死なせるものか……！！

その後、はやては救急車で運ばれ、俺達は病院に来ていた。俺とシヤマルは付き添いで救急車に乗って、ヴィータとシグナム、ザフィーラはタクシー使ったけど、ま、それは関係のない話だ。

病院に着いたはやては、すぐに石田医師の検査を受けた。そして、はやては今、病院の個室のベッドの中にいた。

「大丈夫みたいね、良かったわ。」

「はい。ありがとうございます、先生。」

俺がこの町で敬語を使う人は、石田先生だけだ。

「はあ、ほつとしました。」

「せやから、ちよう眩暈がして胸と手が攣ったやてゆゝたやん。もう、皆して大事にするんやから。」

ち、嘘つきやがって。これでも一年近い付き合いだぜ？俺が分かるねえとも思ったのかよ、このバカは……！！

「でも、頭を打っていましたし。」

「何かあつては大変ですから。」

「むう…なんやヴィータ。怖い顔をして。」

「…なんでもないけど、本当に平気なのかよ。」

「大丈夫やて、心配性やなあ〜。」

楽しそうに言うはやてそれが俺にとっては結構キツイ。

「まあ、来てもらったついでにちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしてってね？」

「…分かりました。」

その時だった。

「…………さて、竜馬さん、シャルルさん、ちょっと。」

「はい。」

「へ？」

そうして俺たちは、石田医師に連れられ部屋の外に出た。

「発作がまた起きないとも限りません。用心の為に、少し入院してもらった方が良いでしょう。大丈夫でしょうか？」

「はい。」

「そうですね、分かりました…」

「すみません。夜分遅く。」

俺はそう言っただけで頭を下げた。

「また入院？」

「ええ、そうなんです。」

あれからしばらく検査をしてからシヤマルはその話をした。検査の結果と見せかけてはいるがその前から決まっていた事ではあるが…

「あ、でも再検査って名目ですし、心配ないですよ、ねえ？」

「ああ。」

それについてフォローする俺。でもはやては、

「うん、それはええねんけど。私が入院しとったら、皆のご飯は

誰が作るんや？」

「そ、それは…何とかしますから。」

「そうですね！大丈夫です…多分。」

シヤマルとシグナムが言う。前の時はコンビニ弁当にしたら、ばれて滅茶苦茶怒られたっけ…ち、しゃーねーな…

「俺がやつとくぜ。」

「ええ…!!？」

「な、何ッ…!!？」

「そっか…ま、リョウ兄ならお任せや。」

フツ…：そうだろう。だが、俺は基本的に家事全般と絵とお裁縫は得意中の得意なのだっ…!!

「り、竜馬…!!作れたの…!!？」

「おう。昔のダチに食道楽がいてな。つつか知らなかったのかよ。」

こいつら、いつも作っている飯、俺がはやと一緒で作ってるの知らなかったのか？…あれ？なんかシヤマル落ち込んでる？なんでさ？

「…シヤマル。例のオーロラ事件で、すでに予測が付いていた事

だ。
「

「分かってるけど、でも……」

「あ、はは……ほんなら私は、三食昼寝つきの休暇をのんびり過すわ。……っあ！あかん！すずかちゃんがメールくれたりするかも！」

「ああ、私が連絡しておきますよ。」

「うん、お願いや。」

シヤマルがそう言うと、はやてはうなづいた。

「では、戻って着替えと本を持ってきます。」希望がありましたら……」

「うん、なんにしようかな？」

そして俺達は病院にはやてを残して出た……けど、

「あ、やっべ！財布置いてきちまったぜ。ワリイ！取りに行ってくる……！」

「え？竜馬!？」

俺は返事も聞かずに病院へと戻った。そして病室で……

「っ……っ……!!」

案の定はやての奴は、苦しそうに胸を掴んでいた。

「…このクソツたれ!!」

「あ…リヨウ兄…あんなこれは…っ!??」

ぶん殴ると思ったんだろつな。目えつぶりやがった。ま、そつちの方が俺としては都合がいい。俺はとく喋らずにはやてを抱きしめた。ちっ、こんなのガラじゃねえけどな。

「あのな…確かに俺たちは、辛いのを聞くことしかできねえ。こればかりは、代わりたくても代わってやれねえんだよ。…けど、逆に言うなら辛いこと聞く位はできるんだぜ?へへへ…知ってたか?」

「あう…うう…ごめんなあ…もうちよつとこのままで…」

「……………あぁ……………」

ちっ…俺って奴ア…本当のクズだぜ…!!

一方その頃二人は

シヤマルSide

私たちは、今はやてちゃんの入院セットを取りに家に向かっていました。ヴィータとザフィーラは、先に帰ってもらったんですね。竜馬さんが病院に戻ったけど…ちようどいいので、私はシグ

ナムとある事を話そうと思います。前には忘れようと思っていたけど…

「ねえ…やっぱり最近の竜馬さん、おかしくない？」

「ああ、お前も気づいていたか。」

「…やっぱり…竜馬さんは…」

息を吐く。白い息。プログラムかもしれないんだけど、私にも体温があるんだ。そう実感しました。するとシグナムが

「だがシャマル。お前も見たであろう。主はやてが倒れた時の、アイツの必死な顔を。」

「ええ…」

「…ならば信じよう。我らの仲間を…」

そうだけど、何かが違う。竜馬さんが裏切るとかじゃない。もっと別の何かに気をつけないといけない…何故か私は漠然とそう思いました…

次の日

私はこれほど運命が残酷に感じたことはなかった。すずかちゃんからのメール、それに添付されていた写真にすずかちゃんの友達が写っていた。けどその友達は…

「う…そ…!？」

そこに写っていた子達の内二人は…私は急いでシグナムに念話を送った。

『エヴィン…?』

『おかしいですよ、シグナムさん!!…じゃなくって!!』

『冗談だ、全く…何? テスタロッサ達がどうしたって?』

『だから! フェイトちゃんとなのはちゃんの管理局魔導師二人が、今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの! すぐかちゃんの友達だから! どうしよう! どうしよう!!』

『落ち着けシャマル。すでに手は打ってある。ついでに言う結構前から知っていた。むしろ今までこんな事にならなかったのが不思議なくらいに。』

『ええ!!!?』

な、なんで!!??

『いちいちリアクションがうるさい奴だな…さかなクンか? ま、そんな事どうでもいい。竜馬から聞いていた。とにかく私たちと鉢合わせる事がなければ良いだけだ。すでに昨日のうちに主はやって、それから石田先生に我らの名を出さぬようにお願いをしている。ご友人のお見舞いの時は私たちが外そう。変に思われたかもしれんが仕方あるまい。』

『ギョギョー！！だ、大丈夫かしら…』

『それに忘れたか？主はやての魔法資質は殆ど闇の書の中だ、詳しく検査されない限りバレはしない。』

『そうだけど…顔を見られちゃったのは失敗だったわ。出撃したとき変身魔法でも使ってれば良かったかしら？』

そう言うとシグナムは

『さらに言うと、すでにそのことを初めに竜馬が提案したが、闇の書を使ってる以上、我々の事もいずればれると言う結論に至っている。』

ああ、もう！シリアスな空気が一気に無くなったわ！！何これ！
字数稼ぎなの！？

『ねえ…何で私には教えてくれなかったの？』

『ああ、シャマルは何しでかすか分かりっこないという結論に出てな？竜馬の奴は脳みそ濃んできると言っていたぞ。私も同意見だ。』

『…そろそろ泣きそうよ、私。』

『ま、仕方ない。シャマルだから。』

『仕方なくない！！！！て言うか私の扱いひどい！！！！』

『あ、あと最後に。お前シャベルに改名しろ。二度と念話何かするなこのタコ！！！！』

ひ…ひどい！！シャベルは無いよね、シャベルは…でも、こんな会話をしたけどやっぱり心配なので、私はサングラスをして変装してはやてちゃんのいる病院に行く事にしました。何か007にでもなった気分です

「そんなシャマルで大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い。」

八神家で、某マダオのコスプレをしたザフィーラとシグナムが、そんなやりとりをしたとかしてないとか。というか、そっちじゃないよ…

シャマル移動中……

今はやてちゃんの病室の前にいるんだけど、二人ははやてちゃんのことには気付いてないみたいで楽しそうに話している。よかった…これもゲルマン忍法シャマルシャドーのおかげね！！

「シャマルさん？何やってんですか？」

「はあ！？その、えっと…ちょっと、気になりました。」

私に声をかけてきたのは石田先生でした。何か生暖かい目が気になります。

「えっと…その…」

「だめじゃないの。潜入とは…こうやってやるのよ!！」

すると先生が、白衣を脱ぎはじめました! ! その下から現れたのは、迷彩服に防弾チョッキ、手にはAK-47を、そして額には緑のバンダナを付けた先生が! ?

「あの…えつと…石田先生?」

「今の私は、石田なんて名前ではない。伝説の傭兵・スネークとお呼び。」

すると石d…じゃなかった、スネークは、服の下からある物を私に手渡しました。

「これは…?」

「段ボールよ。」

そう、これは段ボール。静岡みかんと印刷されている。

「入りなさい。」

「えつ…! ?」

そう言うと、スネーク先生は段ボールの中に入ったのです! ? わ、わたしも真似して入りました…

「どづ…? なんか…ドキドキしてこない?」

あ、あれ？どうしちゃったんだろ、私…

「なんなの…？なんなの？この胸のときめき…」

……………そんな事をしてたら、気付いた時には、もうみんな帰っちゃってしまいました。これを話したら、みんなに殴られました。何で？

「潜入のお供には、これよ。」

「カロリー…メイト？」

あむあむ…

「」「うますぎるっ！」「」

竜馬Side

……………もう無理なんだな。奴らと、あの家で会うことはできないのか……………ちょっと寂しいけど仕方ない、分かっていた事なんだから……………本当に楽しかった。けどよ、俺は…

でも、そいつは……………だから、せめて最期ぐらいは。最期ぐらいは、笑って送り出してやりたい。来世でも幸せに……………ってな。

「なあ。はやて……………」

チェンジ15 加速、そして（後書き）

全ての雰囲気をぶち壊しにするシャベルと石田先生に乾杯！！

チェンジ16 クリスマス・イヴ(前書き)

ゲッター スマイルについては、みなさんご想像してください。

チェンジ16 クリスマス・イヴ

竜馬Side

はやての入院から、俺達は家にもろくに帰らずに蒐集行為を行っていた。当然カプセルホテルや漫画喫茶、果ては段ボール敷いて野宿した事もあった。そのせいもあり、管理局も切りきり舞いになっていたようだ。たびたび会いに行くとはやては寂しそうだったけど…まあ、そんなこといつてられる状況じゃねえしな。そして月日は流れ…

12月23日 PM10:55 八神家宅

「…シグナム、あと何ページだ？」

「あと56ページ。悲願まであと少しだ…」

その言葉に俺は言った。

「【悲願】か…読んで字のごとくかもしねえな。」

「竜馬…」

「そうかもしねんな。もとより原因は我らにあるのだ。」

俺の言葉に、ヴィータ、ザフィーラが言う。そしてシグナムが口を開いた。

「だが、それももうすぐだ。もうすぐで終わる。完成されるのだ。大いなる力が…それをもって主はやての病を消す。そして大いなる

力を使わずにただ平穩に暮らす。」

「そうね、もうすぐね。もうすぐ皆でまたのんびり平穩でいられるのよね！」

「ああ。」

「あたりめーだ。そうだろ、シグナム。」

「ああ。そのためにも、残りをしくじらない様にしなくてはならない。」

「でもよ…明日は、はやてに会いに行こうぜ。皆で。」

俺は言う。これだけは譲れない。なぜなら……

「だが、あと少しで……」

渋るシグナムにシャマルは言った。

「シグナム、明日はクリスマス・イブよ。せっかくなんだし皆で会いに行きましょう？」

「それがいい。特別な日に皆で集まらないのはな……」

「折角なんだもんな…はやても寂しがつてるし。アタシも賛成だぜ！」

「そうだな…幸いにも、あとわずかだが猶予はある…その代わりに明日だけだぞ？」

「フツ…じゃあ、決まりだな。」

「ええ!?!」

「家の守りは俺がする。三人で行って来るといい…」

とか言っつて、こっそりパチンコ打つてたら殺すぞ?

そして

チェンジ16 クリスマス・イヴ

12月24日 PM4:20

海鳴大学病院

「はやて!?! 竜馬の料理ギガうまだったぜ!?!」

「って!?!いきなりやなあヴィータ!?!びっくりしたよ〜」

入ってきて早々にイミフな事をのたまうヴィータに、すかさずはやてがツツコみを入れる。

「いや、数日前に竜馬の料理を食ったザフィーラがな、『うーまーいーぞー!!』って叫んでそれはもう…」

「そうだな…神龍がその辺に飛んでたからな。」

そう言っつて、シグナムとシャマルも病室に入っつていく。最後は俺だ。

「なんや。ドラゴンボールがいらん子やなあ。」

「何か違つた次元を見た…」

いやいや、それはお前らのリアクションだと俺はツッコむ。そして…

ドワオオ!!

ノックが聞こえた後に声がする。そう、運命ともいえる時が…つて、今の音明らかにおかしかったような…

「こんにちは〜」

「あ、すすかちゃんや!はい、どうぞ〜!!」

そのはやての一言に…ヴィータとシャマル、そしてシグナムが、目で分かるぐらい過剰反応をした。一瞬だけ、顔の作画が石川賢になった。仕方が無い…なぜなら…

「こんにちは〜!!」

「こんにちはっ！」

「ウエールズよ…私は帰ってきたっ！！！」

「こ、こんにちは…」

四人の女の子が、そうアリサ・バニングス、月村すずか、そして…高町なのは、フェイト・テストロッサ。敵対しているはずの二人が来たからである。

「あは、今日は皆さんおそろいですか？」

「こんにちは、始めまして！」

月村とバニングスが挨拶をする。一方高町とテストロッサは…

「…っ!？」

「…っあ!？」

やはりな…ま、そんな反応をするだろうがよ。ただ思いがけない再会に戸惑い、シグナムは場所も考えずに睨みつけ、シャマルはおどどしていた。もっとも俺は知っていたので普通に平然としていたがな…というか、俺の顔は知られてないんだし。

場に変な空気が漂い、何も知らない奴らは「えー」みたいな空気になっている。バニングスが言った。

「あ、すみません…お邪魔でした？」

「あ、いえ。」

「いらっしゃい、皆さん。」

「なんだ、よかった。」

急いで冷静を取り戻して二人は言う。それに安堵する月村。ったく、こういう状況ができる可能性ぐらい、ちよつと考えりゃ分かるだろうが！！はやてが不安がってただろーが！！…って、無理な話だろうな…

「ところで今日はみんななどないしたん？」

「えへへ…セーの！サプライズプレゼント！！」「」

そう言っつて、月村とバニングスは、はやてへの贈り物を出した。

「今日はイブだから、はやてちゃんにプレゼント！」

「ええ！？ほんまか！！？」

「皆で選んだんだよ！」

「後で開けて見てね？」

「あ、ありがとぉ〜！！なんや、私だけ悪いな〜…あれ？なのはちゃん、フェイトちゃんどないしたん？」

ふと、はやてがまだショックから回復していない二人に声をかけた。

「あ、う、ううん。何でも…」

「ちょっと、ご挨拶を…ですよね？」

「あはは…」

それにシヤマルとシグナムも相槌をして合わせる。少しは空気を読めるようだ。

「はい…」

「あ…みんな、コート預かるわ。」

「…はい…」

そうやってシヤマルとシグナムは、その場にいた連中からコートを預かり、テストアロツサも手伝うふりをして会話をする。

「念話が使えない…通信妨害を!？」

「シヤマルは、バックアップのエキスパートだ。この距離ならば、造作もない。」

シヤマル飯というゲッター線兵器を作れることを考慮すれば、ある意味この小説の中では最強候補だけだな…まあそれは置いて。

「あの…そんなに睨まないで…」

なのはがヴィータに言う。

「睨んでねーです。こいつ目つきなんで…す…！」

「こら、ヴィータ…！」

ヴィータの頭にばかりとはやてのげんこつが落ちる。

「折角来てくれはったのに、その態度はないんやないか、ヴィータ。」

「あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ…！」

ヴィータの鼻をつまむはやて。指を離すと、赤くなった鼻の先をヴィータは両手で押さえた。

「で、でもよお…」

涙目のヴィータは少し黙って…俺の方を見た。

「目つきなら、こいつの方が悪いぜ…！」

「何言ってるの？リョウ兄せやからしゃあないよ。」

そう言えば、周りの奴がビビってやがる。

「あ…あの…」

完全にビビりながら、テストロッサが俺に話しかけてきた。

「んあ？」

「あ…あの…えつと……」

「あーあー、怖がつとるよ。笑顔笑顔。ほら、にこつと…な？」
そう言われたから俺は…

「にこ」

ゲッター　スマイルをお見舞いしてやった！！

「……………あう」

テスタロッサはじつと俺の顔を見ると、泡を吹いて倒れちまった。
ざまあー！

「ああう……」

「ひっぐ…ひっぐ……」

「あ…え！？あうあうあう……」

…何だ？月村の奴、泣き始めちまった。結局その場をおさめるのに30分ちよいも使っちゃったぜ…

シグナムとシャマルは下に四人を送りに行くと、俺はすつとその場を離れた。ヴィータに少し用事があると言って、その場を後にす

る。抜けるのは…今しかねえからな。

俺が病院の下から見上げると、屋上にシグナム、ヴィータ、シヤマル、なのは、フェイトの四人が来て対峙を始めた。シグナムとシヤマルの顔は、重く暗かった。しかし、高町達はバカだぜ。二手に分かれて逃げればいいものを…管理局に気付かれないよう結界は張っていねえし、シヤマルの通信妨害だけなんだからよ。もつとも電話はできるんだけどな。…ちったあ頭使えってんだ…ん？俺の携帯電話が…

「もしもし？」

『様子はどうだ？流。』

「てめえか…予定通りだ。全てはシナリオA…狂いはない。合図は俺がする。その時は、あの猫二匹を使え。」

『…お前は本当にそれで…』

「…言っただろう。てめえの師匠や兄貴…そしてアイツもそうだったように…」

『…だが、それではお前は…だから俺は…！』

ちっ、だからなんだってんだ。

「フツ…てめえがそんな甘チャンだったとはな…だが、全ては俺の話し通りにしてもらおうぞ。ギリギリまでお前達の計画は始めるな。」

『分かった…それと…後悔だけはするなよ、流。』

「そうだ…だが、報いはその身に受けなければならねえ。だがよ…そんなのは後でいい。全て終わった後でだ。さらばだ。」
そう言っつて、俺は電話を切った。

「でも…その心遣いだけは貰っておくぜ…」

…っと、いつの間にか始まっちまってるぜ。

「悲願は、あと少しで叶う…」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも…！」

二人の言葉に高町は叫ぶ。

「待って！ちょっと待ってください！駄目なんです！闇の書が完成したら、はやてちゃんは…！」

高町がそう言いかけた矢先、ヴィータが先手を打った。

「うらあつ！…！」

「く…きゃあつ！…？」

吹っ飛ばされて、後ろのフェンスに激突する高町。

「なのはっ！…？」

テスタロツサが高町に駆け寄りつつとする。が

「うおおおおおー!!」

高町の事に気をとられたテストロッサに、シグナムが襲い掛かる。

ドガッ!!

咄嗟にテストロッサは避け、対象を失ったレヴァンティンは、床のコンクリートを抉った。テストロッサもデバイスを起動させる。

「管理局に、我等が主のことを伝えられては…困るんだ。」

「私の通信妨害範囲から…出す訳には…いかない!」

一方、高町とヴィータは

「ヴィータ…ちゃん…」

アイゼンを握りしめ、迫るヴィータに高町は言う。だが奴は答えず、騎士甲冑を無言で展開する。

「邪魔…すんなよ…」

一歩。踏みしめながら

「あとちよっとで…完成するんだ…」

完全に頭の血がのぼってやがる。また一歩、ヴィータは踏み出す。

「もう、あとちよっとで助けられるんだ。はやてが元気になって、

アタシたちのところへ帰ってくるんだ…!!」

デバイスを握る手が震える。そうだろう。だが、俺はそんな奴らを…利用している。罪悪感なんて感じねえ。所詮奴らは捨て駒に過ぎねえ。だけど…

「必死に頑張ってきたんだ。もう後ちょっとなんだから…」

震えるヴィータの青い目から、一筋の光りが落ちていった。

「邪魔すんなあああああ!!」

赤い閃光が走り、屋上で爆発が起こる。煙と炎。息を荒げるヴィータ。だが、その炎からゆっくりと奴は現れる。そう、どんな攻撃も防ぐ、白いバリアジャケットに身を固め

「悪魔め…」

「悪魔で…いいよ…」

その閃光は、いかなる敵をも焼いて、消し去る。ありとあらゆる距離において、絶対的な防御力と破壊力を併せ持つ、空中要塞

「悪魔らしいやり方で…話を聞いてもらうんだから!!」

すでにシグナムはテストロッサの事だけを見て、シャマルは通信

妨害に集中して、俺のずれた行動には見向きもしていなかった。というか、俺が抜けた事に気づいていないようにも感じる。

「フフフ…騎士としての腕はかなりのものだが、戦闘…いや、戦争ではただの的だな。先陣切って死ぬのはああゆう奴らだ。さて…」

俺は携帯を取り出した。

「もしもし？俺だ、流だ。てめえらんとこの大将に取り繕つてくれ。流竜馬と伝えれば、分かるはずだ。んあ？んなの、将造のアホに決まってるだろ？何、極道がそんなんでもたついてんだ。チコ付いてんのかよ、てめえら！！」

「つたく、奴の子分がこんな奴なのかよ…それにしても岩鬼組は、ずいぶん見ねえうちに勢力伸ばしたな。」

『…ああ、竜馬か。ワシじゃ、将造じゃあ。』

「おう、将造。久しぶりだな。ちよつと急ぎの用があつてよ…今、大丈夫か？」

『何を、どうせ極道なんざ暇しとる商売じゃあ。それにワシとお前の仲じゃつたら、無下にできんじやる。何だ？言ってみい。』

「ああ…実はな………」

俺は、しばらく話すと電話を切った。奴にも迷惑をかけちゃったな…

「さて、はじめるか。」

俺の口に、自然と笑みがこぼれる。ああ、悪魔がいたとするならば…俺のように笑うんだな。

竜馬 Side out

屋上では、騎士甲冑を装着したシグナムとシャマルが、涙を流しながら叫んでいた。

「もう止まれん！！判り合うことなぞできん！！！」

泣きながらシグナムは剣を振るう。

「それが私達の願いだから！！！」

泣きながらシャマルが叫ぶ。

「止めてみせます、絶対に！！！」

速さを上げるために、装甲を薄くしたフェイトが決意の眼差しを言う。だが！！

「うるせえ！！それはてめえのやるこつたあ！！！」

男の叫び！！それは確実にその場に響いた。ビルの下から跳び上がった男は、両手に持ったバズーカを…シグナムとフェイトに撃つ

た。

「え…きゃあ!!!?!」

「バ、バインド!!!?」

シグナムとフェイトはかわしたが、一瞬のすきを突いてシャマルとなのはにバインドがかかる。

「何故、外した?」

「フン。これが狙いだったこと知ってたろ?てめえ。」

にやっと笑う男。彼は紛れもない。流竜馬だった。

「「そうだったな。」」

竜馬の隣に、二人の仮面の男が現れる。

「竜馬!?!」

「な、なにを!?!」

「お…お前…!?!」

「竜馬…さん!?!」

「ど、どろして!?!」

竜馬が仮面の男と一緒にいるのか、それとも竜馬が突然攻撃を仕

掛けたからか。皆が竜馬に悲痛の声を上げる。竜馬はそれを無視して、仮面の男たちに指示を出す。

「【烈火の騎士】は、俺が動きを止める。後はてめえら二人いるんだ。何とかなるだろ。」

「承知。」

「了解。」

竜馬はシグナムに向かって、マシンガンを撃つ。

「ま、待て!!」

シグナムが竜馬に制止をかける。が

「バカが。」

「つく!?!」

竜馬の攻撃を、障壁を張り耐えるシグナム。それに隙ができ、後ろからバインドが飛んできてそれに捕まる。

「しまっ…!?!」

一方フェイトは、突然現れた二人の攻撃に対応しきれず隙ができて捕まる。

「つくう!?!」

「もう一人いる」

「そうだったな…俺が防ごう。」

そう言って、仮面の男の一人が障壁を張り、ザフィーラの拳を防いだ。それでもザフィーラは無理をしてそれを貫こうとする。だが

「無理をするなザフィーラ、拳から血が出るぞ？」

「り、竜馬！？なぜ…」

竜馬はにやりと笑った。

「まったくよお…可哀そうだから消毒してやるぜ。」

ダアン…

「ツぐあー！？」

非情にも、竜馬は拳銃でザフィーラの右腕を撃って、叩き落した。地面にぶつかる前にザフィーラもバインドに捕まる。皆が捕まった事を確認して竜馬は言う。

「ああ、許せ。許せよ、はやて。」

竜馬は背を向けていった。

「そう、だから償わなければならない。でなければ…報われない。」

「

「…ああ。」

「…分かった。」

さあ、奏でよう。地球最後の序曲を

この物語の…別世界でA・Sと呼ばれた物語の終焉を…

チェンジ16 クリスマス・イヴ（後書き）

次回、なのは&フェイト対竜馬&武蔵の最終決戦！！魔法少女は、
竜馬の言う【地球が静止する日】を阻止する事ができるのか…？！

チェンジ17 決戦

はやてside

「リョウ兄!？」

唐突に私は、その名前を口にした。理由は分からへん。まるで急に…そう、どうか私の知らない遠くに行ってもたような…そんな時、

「え!?!な、何やこれ!?!？」

私は光に包まれた。その光が収まった時、私の頬に冷たい…風?なんで?窓は閉ま…

「え…?」

そこは、どっかの屋上やった。さっきまで確かに病室にいたはずやのに…まさか転移魔法?!けど、一体誰が…

「なのはちゃん!?!フェイトちゃん!?!?何なん…?何なんこれ!?!」

なのはちゃんとフェイトちゃん…でも様子がおかしかった。そして…そこには…宙に浮いたまま貼り付けにされたヴィータと、地面に倒れとるザフィーラがおった。

「君は病気なんだよ。闇の書の呪いって病気…」

「もうね、治らないんだ。」

なん…で…わけが…わけが分からへん!?

「なんや…私に、私に分かるように説明して!」

「闇の書が完成しても…助からない。」

「君が救われる事は…無いんだ。」

「そんなのは…ええねん。ヴィータを…ヴィータを放して…ザフイーラを…放して!!」

「この子たちね…もう壊れちゃってるの。私たちがこつするまでから、ずっと…」

なんや…何でそんな事言うの…なのはちゃん!!

「とつくの昔に壊された闇の書の機能が、まだ使えろと思いで、無駄な努力を続けてたの。」

そんな…嘘や…フェイトちゃんが…フェイトちゃんが!!

「無駄ってなんや!! シグナムは…シャマルは…!!」

フェイトちゃんが、顎で指す。その先には…血だまりに沈んだ二人の服があつた。

「……………ツ!!?」

はやてSide out

その最中、仮面の男の障壁を破壊したなのはとフェイトは、竜馬と対峙していた。

「やはり、貴方が…」

フェイトの言葉に、竜馬が応じた。

「そうだ。ブラックゲッター…これは、この姿の名だ。俺の名は流竜馬。ちなみに言っておくが…俺は【夜天の書】のプログラム体でもなんでもない。ただの人間だ。」

挿入曲：シューマン交響曲 イ短調 第1楽章

「っ！？そんな…どうしてその名前を…！」

なのはに竜馬は言った。

「知らないとも思ったのか？だがな、お前たちの知っているものよりも遥かに…アレはそんなに生易しいものじゃねえ。」

竜馬は、デバイスを両手にはめた。

「さて…もう、これきりにしねえか？」

そう言う竜馬に、フェイトは言った。

「最終決戦…と、いうことですか…?」

「そうだ。お前たち二人でかかってこい。」

「二対一…ですよ!」

その時、男の声が響いた。

『いや、一人じゃないぜ。』

それは、デバイスから発せられた声だった。

「え…!?!」

デバイスは、言った。

『俺は巴武蔵。信じねえだろうが…元は人間だ。』

「嘘…!?!」

なのはに武蔵は言った。

『何、魂の器が代わっただけだ。それに、ゲッターは2タイプに
チェンジできる。』

「つまりそう言う事だ。どうだ?これで二対二だ。文句はねえだ
ろ?」

にいつと笑う竜馬。それに…ふたりはうなづいて答えた。

「いくぞ、ムサシっ!!」

竜馬の体が光に包まれ、三機のゲットマシンが現れる。

「ムサシ！ゲッター1でいくぞ!!」

「おう！チエイイイイインジッ!!」

ジェット噴射を急停止し、変形したジャガー号に、ベアー号が接続される。バチバチとゲッター線を放出しながら肩の部分の装甲が丸く持ち上がり、ゆっくりと伸びていく。伸びていく過程でむき出しとなった骨格を覆うように、細胞の様な小さな装甲が重なり合い、強固なゲッターの腕の装甲を完成させる。ベアー号のエンジン部分が伸び、ゲッターの足を形どる。

「うっおおおおお!!」

その上を飛行するイーグル号も変形し、ベアー号と合体の完了したジャガー号に接続する。ガチンと金属音が鳴ると同時に、イーグル号の両方の下部が持ち上がり、ゲッター1の二本の角となる。

「チエエエエエエエエンジン!!」

ゲッター線をまとった電流を放出しながら、ゲッター1が空中で力強いポーズをとる。

「ブルウアアアアアック！ゲッタアアアアアアアアアアアアアアアアアア！ウワアアアン!!!!」

竜馬の叫びと共に、ゲッター1の口の部分に装甲が展開されて、赤い目が宿る。と同時に水蒸気が噴出されて、体の色が黒く変わる。背中から勢いよくゲッターウィングが展開される。夜空よりも黒いその体。絶望、怨念、邪悪…それらの全てを体現したような悪魔が、地に舞い降りたのだった。

「てめえに引導を渡してやるぜ!!」

ブラックゲッター1（以下ゲッター1）が、両手にゲッターマシンガン構えて二人を撃つ。こちらに飛びながら、空中で方向転換してかわす。向かって右斜め上にフェイト、そして左斜め上になる。

「やらせない…絶対につ!!」

なのはがアクセルシューターの発射姿勢を取る。ゲッター1に躲かせないと、フェイトもハーケンセイバーの発射姿勢を取る。

「アクセルシューター…シューウウウウツツ!!」

「ハアアアアケン・セイバアアアアア!!」

だが、ゲッター1はゲッターマシンガンを投げ捨てると、ゲッター1トマホークでハーケンセイバーを切り払い、アクセルシューターが迫ってきたところで

「オオオオブンゲツトツ!!」

三機に分離して後方に下がる。外れたアクセルシューターが地面

ギリギリで方向転換し、そのままゲットマシンを追撃する。

「竜馬、俺に代われ!!」

「わかった!」

「チエイイイイインジッ!! ブラックゲッターアアアア・スリイイイイイツ!!」

空中でゲッター3にチェンジすると、ゲッター3の胸の装甲にある窓のような部分が開き、中から無数のミサイルが顔をのぞかせた。

「くらえっ! ゲッターアアアアストライクミサイル!!」

数えきれないほどの小型ミサイルが、なのはのアクセルシューターを迎撃する。全弾撃墜した後、残った多くのミサイルが、今度はなのはとフェイトを襲う。だが

「撃ち落とすっ! フェイトちゃん、下がって!!」

「お願い、なのは!!」

フェイトの前に立つなのは。

「デイバイイイイイン…バスタアアアアアアア!!」

巨大な光の前に、ゲッターストライクミサイルが飲み込まれ、爆発する。なのはが薙ぎ払うようにレイジングハートを振るうと、次々と爆発が巻き起こる。数発しか残らなかったミサイルも、なのはに着弾する前に、フェイトがバルディッシュで切り払った。

「そこおっ!!」

なのはがすかさずデイバインバスターを、ゲッターミサイルの飛んできた位置に向かって撃つ。だが

「オープンゲット!!」

ビルの爆発と同時に、三機のゲットマシンが空中に上がる。フェイトがプラズマランサーで撃ち落とそうとするが、軽やかに避けながら合体する。

「チエエエエンジンゲッターアアアアアア・ウワアアアン!!」

ゲッター1に変形すると、なのはたちに突撃しながら武器を出す。

「ゲッターアアアアガトリングキャノンツ!!」

巨大なガトリング砲を構えて乱射するゲッター1。だが、フェイトはバルディッシュをプロペラのように回転させ、弾丸をはじき返す。一方のなのはは、地面すれすれに飛び、背中広範囲にシールドを展開することで避ける。

「やるじゃねえか、チビ助!!」

「チビじゃないです!!」

フェイトがハーケンセイバーを放つ。ゲッター1は余裕でかわすと、またゲッターガトリングキャノンを構える。

「黙れえっ!!」

接近しながら巨大なガトリング砲を撃つ、ゲッター1。フェイトとの距離が近くなると、力任せに砲身で殴りかかった。

「おらあっ!!」

殴りかかりゲッター1。だが、その背後になのはが現れた。

「ちっ、オオオオブンゲツトッ!!」

なのはの攻撃を察知したゲッター1は分離し、空中でゲッター3にチェンジする。

「ゲツタアアアバルカンッ!!」

ジャガー号の機首から機関砲を撃ちながら、下のジャガー号のパーツ自体をグルグルと回転させる。上空に逃げる二人。だが

「おっと、逃がすかよ!ゲツタアアアクラスターミサイル!!」

突然ジャガー号の上部の装甲が展開し、10発のミサイルが空中に発射される。だが、それはなのはやフェイトを完全に無視し、そのまま空の彼方へと消えていった。

「あ…あれ?」

「外した!今だっ!!」

地面に着地したばかりのゲッター3に、チャンスとばかりに攻撃を仕掛けるフェイト。だが、これが武蔵の狙いだった!!

「フェイトちゃん!? 逃げて!!」

「え!?!」

なのはの声の上を見上げるフェイト。すると空から雨のような無数の黒い粒が降ってきた。そしてそれは…

「フェイト…きゃあっ!?!」

「なの…うくうっ!?!」

地面に落ちると爆発したのだ!! 辺り中が爆発と炎に包まれる。そう、このゲッタークラスターミサイルは、上空にミサイルを撃ちあげ、無数の拡散弾頭を敵の上空から降らし、広範囲を殲滅する武器だったのだ。当然のことながら、こんな爆発でゲッターの装甲はびくともしない。なのはとフェイトの悲鳴も、炎の中に消えてしま

「い…いいのか? 竜馬。」

武蔵に竜馬は言った。

『フツ…この程度で死ぬんだったら、今死なせてやった方が親切だ。それに…奴らをなめねえほうがいいぜ。』

竜馬がそう言って笑った矢先、巨大な桃色の閃光が炎を切り裂く!! それをかわすゲッター3。

「あたるかよっ!!」

お返しとばかりにゲッターミサイルを放つ。だが、この程度避けると武蔵も分かっている。案の定、ハーケンセイバーでミサイルは迎撃された。すると硝煙の中から、フェイトが躍り出た!!

「はああああああつ!!」

目にもとまらぬ早業で、ゲッター3に連続攻撃を仕掛けるフェイト。だが、バルディッシュの斬撃では、ゲッターの装甲には傷一つ付かない。なにせゲッター3は、3タイプの中で最も防御力が優れている。スピード重視のフェイトの火力では、一発で決める事は出来なかった。

「そんなっ!?!」

「俺たちのゲッターが、そんなんでやられるかよ!!」

ゲッター3の左手が、振り下ろされたバルディッシュを、がっちりと掴む。

「いくぜ、ゲッター3!!これが必殺の…!」

動きの止まったフェイトの体を、ゲッター3の腕が絡みつき、締め上げる。

「し…しまっ…!?!」

「大雪山おろしいiiiiiiiiiiiッ!!」

凄まじい竜巻と共に、小さなフェイトの体は夜空の彼方へと投げ飛ばされる。きりもみ状に降下するフェイト。ゲッター3は標準を合わせると、ゲッターミサイルを発射した!!

「ゲッターアアアアアミサイルイイルツ!!」

だが

「デイバイイイインバスタアアアア!!」

ゲッターミサイルは空中でデイバインバスターに破壊され、そのままデイバインバスターはゲッター3に命中した!!

「うおおっ!?やるな、畜生め!!」

動きの止まったゲッター3。なのははきりもみ状に落下するフェイトを、優しく受け止めた。

「フェイトちゃん!大丈夫!!」

「う…うん!ありがとう、なのは…」

なんとか起き上がるフェイト。彼女はなのはに言った。

「ブラックゲッター…いや、竜馬さん。彼は強い。」

「う…うん。だって、ずるいよ!!攻撃したら、すぐに分離して避けちゃうんだから…」

その言葉を聞いた時、フェイトの表情が変わった。

「分離…？」

その時、フェイトの脳裏にある光景が浮かんだ。そう、あれはジユエルシード事件の時。信じていた母のプレシア・テストロツサが自分を裏切った時のこと。フェイトはあまりのショックで倒れ、その最中【夢】を見た。そこは、未来のミッドチルダであった。現れる無数のゲッターロボ。フェイトを襲った二体を倒した真ゲッターロボ。それに乗っていた男は、自分の事を流竜馬と名乗っていた。

だが、身長も顔つきも、今自分たちが戦っている流竜馬とは、明らかに異なっていた。だが、そんなことはどうでもいい。フェイトは思いだそうとした。真ゲッターが、どうやって他のゲッターを倒したか…

「……………そうかつ!!」

「え！何か分かったの、フェイトちゃん!!」

フェイトは言った。

「なのは。今から私の言うとおりに動いて…!!」

デイベインバスターを受けたゲッター3は、ミサイル系火器の装填を完了させた。

「全ミサイル、装填完了！！竜馬、いつでもいいぜ。」

『よし、ゲッター1でいくぞ。奴らに一泡吹かせてやる！！』

オープンゲットしてゲッター1にチェンジすると、ゲッターウィングを体に纏った。

「ゲッターアアアアビイイイイムツ！！」

スパイラルゲッタービームを放つゲッター1。二人は避けると

「プラズマ…スマツシャアアアアアア！！」

「デイベイン…バスタアアアアアア！！」

同時に攻撃を仕掛ける。が

「甘いぜ！オオオオオープンゲットツ！！」

またもやゲッターはオープンゲットし、後方に下がってゲッター3にチェンジする。その時だった。

「フェイトちゃん！今の、見た！！」

「うん！なのはっ！いくよ！！」

ゲッター3を追撃する二人だったが、突然ゲッター3の装甲が開いた！？

「え…！？」

「寄ったな…こいつで終わりだ！！ゲッタアアアフルオオオオポンミサイイイイイル！！」

ジャガー号からゲッタークラスターミサイルが、胸からゲッターストライクミサイル、そして頭部からゲッターミサイルが一斉に発射された！！無数の三種類のミサイルが、なのはとフェイトを襲う！！辺りは炎と硝煙と爆音に包まれた！！

「きゃあ！？」

「避けれ…かあっ！！」

流石に何百発のミサイルを全弾一斉に発射したのだ。なのはもフェイトも避ける事が出来ず、炎の中に飲み込まれていく。周囲のビルもがれきと化し、炎の中には、悪魔の様なブラックゲッター3だけが健在だった。

「ゲッターミサイルの一斉射撃だ。避けれるわけがねえ。」

『これで奴らも、粉々というわけか。』

燃え盛る炎。だが、そこにふらつきながらも立つ、二つの影があった。

「勝手に…殺さないでください…！！」

白服の少女が、ゆっくりと立ち上がる。

「勝負は…まだ、ついてません…！！」

黒服の少女も、自信の相棒を杖にして立ち上がる。その姿は満身創痍。バリアジャケットはどこどころ破け、血も出ている。あまりにも痛々しすぎる光景であった。だが、それでも二人の少女の目は死んではいなかった。否、さらに輝きを増していた！

「やるじゃねえか…」

思わず、武蔵も称賛の言葉を送る。だが、竜馬は言った。

『なんの、あと一回攻撃が当たれば、おだぶつじゃねえか。とつとつ止めをさせ、ムサシ！！』

それにフェイトは

「なのは。竜馬さんが言うとおり。あと一回でも当たっちゃったら…それでおしまい。あの作戦も、チャンスは一回きり…やれる？なのは。」

フェイトになのはは笑って言った。

「…うん！私も全てを懸ける。だから…勝とう！フェイトちゃん！…」

なのはとフェイトは拳をお互いに打ち付けると、二手に分かれて飛び上がった。

「またその手が。へへへへ、驚くなあ…！」

すると、残弾の無くなったゲッターミサイルの発射装置が、2 m

近く伸びる。巨大な大砲となった発射口は、前に倒れるとあたかも戦艦の主砲のような迫力を見せた。そこに赤い光がチャージされていく。

「ゲッターアアアビイイイイムキャノンツ!!」

頭の横の二門の砲身から、二発のフルパワーゲッタービームが放たれる!!

「出力が高くて、かわせるっ!!」

フェイトがかわそうとした、その時だった。

「嘘っ!? 誘導機能が!!」

なんとゲッタービームが、フェイトを追跡してきたのだ!! なのは方にも追いかけている。ビーム兵器は直線にしか進まないはずなのに、このゲッタービームはミサイルのように追尾してくるのだ!!

「だ…だめ! 避けきれない!!」

「そんな…こんな所でっ!!」

二人があきらめかけたその時だった!!

「なのはっ!!」

「フェイトっ!!」

思わず目をつぶった二人だったが、いつまでも衝撃は来なかった。恐る恐る目を開けてみると……

「なの…は…っ！！大…丈夫？」

シールドを張り、身を呈してユーノがなのはを守っていた。

「だ、大丈夫…かい!？」

フェイトの前には、アルフが全身を使って、ゲッタービームからフェイトを守っていた。

「今の…うちに…叩けっ!!！」

ユーノの言葉にうなづくなのは。

「ユーノ君…はいつ!!！」

なのはは飛び上がって、発射態勢を取る。

「デイバイイイイイン…バスタアアアアアア!!！」

ゲッタービームを放ったままで、防御態勢をとれないゲッター3に、なのはは渾身のデイバインバスターを放った。だが!!

『邪魔が入ったか…』

「だけど、何度やったって同じだぜ。オープンゲット!!！」

渾身の攻撃も、オープンゲットで簡単に回避させられてしまう。

「そう、ゲッター最大の弱点…それは…」

「合体の、瞬間!!」

フェイトは即座にイーグル号にバインドを掛け、上空に放り投げる!!さらにその上から、桃色のバインドが掛けられる!!

「うっおっ!!?ム、ムサシっ!!」

「竜馬!?!こいつう!!」

武蔵は残ったゲッター1を操作し、フェイトの両足を掴んで投げ飛ばす。そしてもう一度合体しようと飛び上がるが

「させるかあああああ!!」

なんとクロノが割って入り、合体途中のゲッター1を弾き飛ばす

!!

「ぐううっ!!」

「なのはっ!!ヤツの本体は…そこだあああああああ!!」

クロノが吠える。それと同時に、レイジングハートに凄まじいまでの光が収束された!!

「これが私の…全力全開!!」

んだ。仰向けに倒れている竜馬。なのはとフェイト、ユーノ、アルフ、クロノ。五人が竜馬を囲んだ。

「負け…たぜ。」

竜馬は、にいつと笑って見せた。

「やはり、俺の目に狂いはなかった。お前たちなら、アレを止められるかもしれねえ。」

「アレ…アレって、何ですか!?!」

フェイトがそう言った、その時だった。

「うわっ!?!」

突然、海鳴大学病院の屋上で爆発が起こり、禍々しい球体が現れた。突然、竜馬に念話が届いた。

『流竜馬か!?!』

『てめえ…その声はアリアだな。どうしたっ!?!』

『それが…最後までお前の言うとおりにしたんだ。お前には悪いが…八神はやては射殺した。』

それを聞くと、竜馬は目をつぶった。

『そうか…奴は逝ったか…』

『そうではない！撃った直後から体を再生させたんだ！！』

『なんだと！？』

思わず竜馬の目がカツと見開かれる。

『じゃあ…じゃあ、まさか！！』

『覚醒…してしまった。すまない…！！』

竜馬は思わずその場で怒鳴った。

「ふざけるな…ふざけるなっ！！てめえら…なんて事を！！」

がばっと起き上がろうとする竜馬。だが、体に激痛に顔をしかめる。

「待つてください！その怪我じゃ危険です！！」

竜馬を介抱するのは。竜馬は仮面の男たちに…アリアとリーゼに念話をした。

『お前たちは退け。無駄な犠牲はいらん。』

『え…』

『で、でも、それでは！！』

竜馬はふっと笑った。

『何言ってやがる。てめえらだって、まだ若い。こんなんで命捨てるなよ。じゃあな。』

そう言うと、念話を切った。竜馬は真直ぐなのはを見ていった。

「お前たちには…知る権利がある。いや、知らなきゃならねえ。この事件の真相を。あの…あの【悪魔】の正体を…!!」

『Guten Morgen, Meister.』

何処からともなく、声が響く。きれいな、けれど全く感情の無い声。

「封印開放」

それは、紛れもなく八神はやての声だった。

「!?!はやてッ!!」

『Freilassung.』

闇の中で、はやての体は異なるモノへと変貌する。その体は成人女性のように大きくなり、短い髪は腰よりも長い銀髪になる。目の色が血の様な赤に変わり、黒い羽が、禍々しい騎士甲冑が装着されていく。

「また…繰り返すのか…滅びと、再生を…」

その声も外見も、最早八神はやてとはかけ離れていた。ソレは、あまりにも哀しい声でささやく。

「我は闇の書…我が力の全ては…主のため…」

「そんな…はやて…ちゃん!？」

遠くからだが、はっきりとその姿を捉える事が出来た。呆然とするのは。

「我は呪われた書、主の意思すら無視した愚かな事しかできない壊れた魔導書…」

ソレは言う。自分というものを。

「我が存在は…破壊のために。」

そしてソレは

「愚かな…破壊を…」

ソレは…

「だから…」

叫んだ

「でろおおおおおおおおおおおおおお!! デビイイイイイイイイイイ
イイイイルウ………… ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアムツ!!!!!!!!!!」

その日、【悪魔】が地球に降り立った。【地球が静止する日】を

迎えるために……

チェンジ17 決戦（後書き）

挿入曲は、ググれば「ああ、あの曲か」と分かるかと思います。
流しながら読むと、臨場感がでる…かな？

チエンジ18 運命(前書き)

今日、私の家に、三菱電機を名乗って、「手動式の発電機を無料でお付けします」という趣旨の訪問がありました。絶対におかしいです。皆さんも、業者や団体を名乗った詐欺・窃盗にご注意ください。

それにしても…世の中には、本当に悪い奴がいるものですね。一番しちやいけない事だと、僕は思うんですけどね…それでは。

チェンジ18 運命

展開されていく封鎖領域から逃れるため、闇の書：いや、デビルガンダムが覚醒したビルから十分に離れた場所に、仮面の男達は自らの居場所がばれないよう強力な魔力探知阻害の結界を張り続けていた。

「しかし、本当に可能なのか…？一度取り込まれた主の意識が覚醒する事など？」

「どうだろうな、こればかりは…」

「神のみぞ知る、と、言ったところか…」

「ふん、まあ暴走の瞬間がきたら我々の計画を始めれば…」

「だが、そもそも主自体が、肉体再生能力を得ている。凍らしたところで、どうこうできる相手ではない。」

その言葉にもう一人が驚く。

「な、なんだと…！？どう言う事だ…！」

「落ち着け。そもそもデビルガンダム自体、完全に破壊されたケースは、管理局が調べたところでは一度も無い。今までの闇の書の暴走…そのある時期から突然奴は現れた。」

「そんな…！？」

「たとえば、どんなに可能性が低くても、懸けるしかないだろう。封印も破壊も無理なら……」

「私だって……それを望んでいる。でも……」

『それについては僕も同意見だよ。』

突然、少年の声がその場に響き渡った。刹那、仮面の男達は青白いバインドによって捕らえられる。

「な!!?」

「くっ!!?」

「……ストラグルバインド。相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する。あまり使いどころのない魔法だけど、こういう時には役に立つ。……」

「「ぐ……ああ!!」」

「変身魔法の強制解除。」

仮面の男達はその変身を解かれ、ギル・グレアムの使い魔リーゼロット、リーゼアリアの姿に戻った。

「!!?……やはり……貴方達でしたか……」

「クロノツ!?!く、くそっ!!!」

リーゼロットは恨めしそうに睨む、一方リーゼアリアは、

「やれやれ、アイツの言った通りやつぱり気付いたか…あんたも成長したね？」

少し嬉しそうに、けれど寂しそうに言った。その言葉にクロノは驚き、再び顔を厳しくして言った。

「そのアイツっていうのも…話してもらおうぞ！」

チエンジ 18 運命

「デビル…ガンダム…!？」

病院を破壊して現れたデビルガンダムの胸に、はやてだったもの…闇の書の意志が吸収されていく。本家のレイン・ミカムラよろしく、上半身が胸部から飛び出る形となって、固定される。全長は目測25メートルくらい。だが、突然なのはたちを地響きが襲った!!

「きゃっ!?!?じ、地震!?!」

「こいつは…ただの揺れじゃねえぞ!!気をつける!!」

竜馬が言った、その時だった。

「クキヤアアアアアアアア!!」

突然地面を突き破り、ガンダムの頭のついた芋虫の様な気色悪いロボットが無数に生えたのだ!!なのは達のすぐ近くにも一匹現れ、

近くにいたフェイトに襲いかかった!!

「え…!?!」

ガンダムヘッドの鋭い歯が、フェイトを噛み砕こうと迫る!!だが

「てめえはこれでも食ってる!!」

なんと動けない竜馬が、服の下からバズーカを取り出して、ガンダムヘッドの口にぶち込んだ!!頭部が粉々になるガンダムヘッド。芋虫の様な体が、そこらをのたうちまわっていた。

「大丈夫か!!」

「は、はい!ありがとうございます!!」

なのはとフェイトを近くに寄せる竜馬。ふたりの竜馬はガンダムヘッドの破片を見つめる。すると、金属であるはずのその破片が突然真っ黒に変色し、黄色い無数の眼球のある不定形な生物に変化したではないか?!竜馬には見覚えがあった。そう、これはまるで…

「馬鹿な…インベーターだと!?!」

竜馬にフェイトは質問した。

「竜馬さん!!インベーターって…なんですか?」

竜馬はじつとフェイトの顔を見る。竜馬は目を閉じて笑った。

「ああ…全て話そう。俺の知っている限りの事を…」

竜馬は、インベーダーについて話し始めた。

「まず、最初に…俺は、この世界の人間でもなければ、ミッドチルダの人間でもない。この地球とは、全く違う歴史の地球から来たんだ。」

「それって…」

フェイトに竜馬はうなづいた。

「そうだ。だから、今から俺の言う事は、お前たちの世界ではない、全く別の地球での話だ。この世界の常識を取っ払って聞いてくれ。」

はじめにそう言うと、竜馬は始めに、ゲッター線について説明した。

「…俺のデバイスは、魔力で駆動していなければ、カートリッジシステムも搭載していない。その動力は、ゲッター線というエネルギーだ。」

「ゲッター…線？」

首をかしげるなのは。

「そうだ。ゲッター線…こいつは、宇宙に漂う無限のエネルギーだ。ありとあらゆるエネルギーと比べても、パワーは段違いな上に無尽蔵。だが、全てにおいて、他のエネルギーとは根本的に異なる個所がある。それは…エネルギー自体に、意志がある事だ。」

「それって…ゲッター線に心があるってこと…?」

なのはの問いに竜馬は

「そうだ…それだけではない。ゲッター線ってのは、宇宙そのものを創造するエネルギーだ。ゲッター線は、この宇宙に存在する全ての物質、生物、エネルギー、はたまた精神や空間、時間のように形の無いモノの中にまで存在して、その全てが宇宙の中で有機体を生み出しているエネルギー…それがゲッター線だ。」

竜馬は付け加えた。

「そして、そのゲッター線に寄生した微生物が進化したものが、俺の言っているインベーターだ。奴らはゲッター線を餌としているが、ゲッター線でしか倒す事が出来ない。」

「そ、それってつまり…いっぱい食べすぎてお腹痛くなっちゃうってこと?」

「そういうことだ。」

竜馬はむくりと体を起こす。

「今見たとおり、どうやらあのデビルガンダムは、インベーターが何らかの形でDG細胞を取り込んだ…メタルビースト・デビルガンダムというわけか…!!」

デビルガンダム改め、メタルビースト・デビルガンダムは、凄まじい咆哮を上げる。デビルガンダムコロニーは形成してないものの、

足の下からこの封鎖領域全体に触手を伸ばしている。次々と地面を突き破って現れる、メタルビースト・ガンダムヘッド。さらに信じられないものが、なのは達の前に立ちふさがった。それは…

「な…何！？あのロボット！！」

地震。凄い揺れを起こしながら、道路に亀裂が入る。そこから傀儡兵の様な巨大ロボットが現れたのだ！？その全長は20mほど。それは…

「ガンダムマックスター…それにドラゴンガンダム！？」

竜馬は知っていた。そう、目の前にあったのは、紛れもなく新シヤツフル同盟の…だが、それだけではない！！

「ボルトガンダム…それに、ガンダムローズ！？」

そして

「ゴツド…ガンダム…だとお！！？」

竜馬が知る由も無かった。そう、インベーターは新シヤツフル同盟の機体を完全にコピーしていたのだ！！全く異なる世界で、「秩序の守り手」と呼ばれたシヤツフル同盟。だが、今ここに破壊と絶望をもたらす、メタルビースト・シヤツフル同盟として立ちはだかつたのだ！！

「グギギギギ…」

「キシヤアアア…」

この世のものとは思えぬ声で、叫び続けるガンダム達。だが、それだけではない。

「ま、また!？」

そう、それだけではなかった。なんとデビルガンダム四天王までもが、メタルビースト化して現れたのだ!!メタルビースト・マスターガンダム。メタルビースト・ガンダムヘブンスソード。メタルビースト・グランドガンダム。メタルビースト・ウォルターガンダム。計9体のメタルビーストガンダム軍団が、海鳴に咆哮した。これが人間サイズだったら、まだ勝機はあったかもしれない。だが、本来のMSサイズのこの敵に、今は打つ手はなかった。

「なんか…サイズ違いすぎ…」

『ぶっ叩かれたらミンチですね、マスター。』

さりげなく凄い事を言うレイジングハート。

「でも、あながち間違いじゃないね。今は逃げるが勝ちってやつよ。」

竜馬の言う事を正しかった。この竜馬がガンダムと呼んだロボットたちがどんな性能を秘めているのか、わかりっこない。それに…元の機体の性能から言って、大方の機体は接近戦に強い。潰すのなら、メタルビースト・グランドガンダムや、メタルビースト・ガンダムローズからだ。正直な話、メタルビースト・ゴッドガンダムあたりは石破天驚拳あたりぶち込まれたら、一瞬で終わりだ。

すると全てのガンダムが飛び上がり、メタルビースト・デビルガンダムを取り囲むようにして立つ。すると、コアの闇の書の意志が言った。

「やはり私だけでは…主の考え通りに動いてやる事はできないよ
うだ…」

まだ動こうとしない、デビルガンダム。なのはは言った。

「闇の書さん…！」

「そこか…お前達は…」

「お願い！！はやてちゃんを解放して！！」

「武装の解除を…！」

なのはとフェイトが説得する。だが

「お前も…私をその名で呼ぶのだな。」

闇の書の意志は、悲しげに笑った。

「無理だ…我が存在は、破壊しか行えない。そうだったことまで
きるはずが無い。」

それに二人は反論する。

「そんな事無い…！」

「だって、話せるし、心だつてある!!」

闇の書の意志は、自らの胸に手を当て、目を閉じていった。

「それでも、我が意思のみではどうにもならない…私は呪われた存在…そういう風にできてしまった…」

そう言い、闇の書の意志は片手を挙げ、攻撃態勢をとる。

「来るなら…障害とみなす。破壊する…全てを。」

その時だった。

「うるせえ!このインベーター野郎!!」

放たれる炎。その爆風を防ぐ闇の書の意志。

「誰だ…」

「てめえ、ごちゃごちゃ言っでんじゃねえ!今度は何が目的だ? てめえらはある時、真ゲッターと真ドラゴンのシャインスパークで完全に絶滅したはずだ!!それに、DG細胞だつて…」

その話を聞くと、闇の書の意志の表情が、ほんの少しだけ険しくなった。

「お前…何故知っている…?」

「黙れえっ!!てめえらの様なバケモンは、目障りなんだよ!!俺が引導を渡してやるぜっ!!」

「なのはっ！ここは悔しいけど、ひとまず…」

そう言って、フェイトがなのはの腕を掴んだ、その時だった。

「何故だ…何故、そこまでするのだ…」

そう言うと、闇の書の意志の掲げた手から、球状の黒い魔力の塊が現れる。黒…というより、濃い紫の中で、どす黒い何かが蠢いているような、そんな禍々しいものだった。

「デアボリック・エミッション。闇に染まれ…」

迫りくる魔力の塊！！同時にグランドガンダムが砲撃を！！避けきれない！？

「なのは！フェイト…！」

「僕達の後ろに…！」

「ユーノ君！アルフさん…！」

ユーノとアルフがシールドを張る。

「竜馬さんっ…！」

「俺の心配はするなっ！このデカブツを利用してやる…！」

そう言ってサムズアップする竜馬。

「きっちり守るよ、ユーノ…！」

「分かってる!!!」

そうやって二人は、なのはとフェイトを守るためにシールドを張る。一方竜馬は

「いくぜ、グランドガンダムッ!!ゲッターアアアアビイイイイイイムッ!!!」

ゲッタービームを右の主砲の中に発射し、インベーターごと右肩を吹き飛ばす!!片方の主砲を失うも、破壊された直後でも徐々に再生を始めるグランドガンダム。

「今だアッ!!!」

竜馬はゲッターウイングで体を覆うと、何とインベーターのむき出しになった肉質に潜りもんだ!!すぐにその体は飲み込まれ、その部分は再生された装甲で覆われた。直後、デビルガンダムの空間攻撃が味方を襲った!!

「~~~~っ!!!きつついね~~~~!!!」

「でも、これで向こう視界が防がれている!!!一旦距離をとろう!!!」

ユーノの指示に従い、なのは達は一旦距離をとるために飛び、そして

「ゲッターアアアアビイイイイイムッ!!!」

突如、グランドガンダムの装甲の隙間からゲッタービームが噴き出し、爆発していく。右腕と頭が吹き飛び、その首の断面からブラツクゲッター1が躍り出た!!

「てめえらの腹ン中が一番安全だと思ってよ。礼はたっぷりと受け取れえええええええええ!!」

首の断面からゲッタービームを体内に照射するゲッター。グランドガンダム内のインベーターが飽和を起こし、死滅していく。D G細胞も、徐々に崩壊を起こし

ドワオオオオオ!!

大爆発を起こし、消し飛ぶグランドガンダム。

「やったあ!!」

「す、すごい!!」

体の大きさの全然違う相手を倒した竜馬に、皆は驚きの声を上げる。だが、それもつかの間。

「グギヤアアアア!!」

ガンダムマックスターが、ギガンティックマグナムを発射してくる。それを

「おらおらああああ!!」

ゲッタートマホークで、ホームランしていく竜馬!!

「す…すごいな…って、今のうちに状況の説明をするよ。今、クロノが解決法を探している。援護も向かってるけど時間がかかる…」

「じゃあ、それまで私達で何とかしないと…」

そう言ってフェイトは不意になのはの顔を見る。その表情は暗かった。

「なのは…」

「…大丈夫フェイトちゃん。私達で何とかしないと！竜馬さんに答えなきゃ！！」

そう言って、無理やり落ちつかせるのは。だが

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー…！！」

なんと、闇の書の意志はもう攻撃態勢を取っていたのだ！！ガンダム達は竜馬が押さえているが、闇の書の意志…いや、デビルガンダムはなのは達を完全にロックオンしていた。

「誘導型！？」

それになのはが応戦する。

「レイジングハート！！」

『Acceler Shooter』

「シユウウウウツツ!!」

なのはは、撃った12の誘導弾で撃ち落とそうとする。だが

「だめ!!半分しか落とせない!!」

咄嗟に、フェイトとアルフ、ユーノはシールドを張る。闇の書が放った攻撃がぶつかり、轟音と共に煙が発生した。

「ぐっ…何の冗談だい、これ!!?」

「っ!パワーの差が大きい!!」

「でも!これならまだ耐えられる!!」

何とか耐えた。が、闇の書は再び攻撃の態勢をとっていた。見えたのは掲げた手に展開されたピンク色の魔方陣…それは…!?

「咎人達に、滅びの光を…星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ…」

「スターライト…ブレイカー…!?!」

呆然となりながら言ったなのはの言葉に、フェイトははっとして、急いで皆に指示を出す。

「みんな!!急いで離れるよ!!」

そう言つと、フェイトはまだ呆然としていたなのはを抱えて急いで飛んだ!ユーノもまたアルフに抱えられている。飛行スピードは高さから判断すれば、これが最善だ。

「何でなのは魔法を!!」

「なのは一度蒐集されている。その時にきつとコピーされてるんだ。元々夜天の書はそういったものだから。」

アルフの疑問に、ユーノが自分の考えを言う。

「フェイトちゃん…そんなに離れなくても…」

だが、なのはの砲撃魔法は、本人が思っている以上に射程は長く、威力も計りしれない。

「至近で食らったら、防御の上からでも落とされる!とにかく回避距離をとらないといけない!!」

ユーノは指示を出した。

「ここは二手に分かれよう。少しでも回避率を上げるっ!!」

「分かった!!」

そう言っただけなのは達は一度二手に分かれた。魔力の集束に時間がかかっている…恐らく、魔力集束技術を持っていないのだろう。だが、明らかにその威力はなのはを上回っていると予測できる。かつてインベーターに寄生されたプレシア・テストロツサと同等か、あるいはそれ以上…だが、時間はある。少しでも遠くに…

一方、竜馬もこの状況に焦りを覚えていた。

「まずいな…どうする。何か打つ手は…」

その時だった。

「ギヤアアアア！！」

ボルトガンダムがグラビトンハンマーを振りかざす！！回避して、それをつなぐチェーンをゲッタービームで焼き切る。だが、こんどはマスターガンダムが殴りかかってくる！！

「オオオオオープンゲットッ！！！」

回避し、マスターガンダムの股を潜ってデビルガンダムに接近する。ガンダムローズがローゼスビットで攻撃してくるが、躲しながら

「チエイイイイインジッ！ブラアックゲッターアアアアア・スリイイイ！！！」

「キエエエエエエエ！！！」

ゲッター3にチェンジすると、空からガンダムヘブンスソードが襲いかかる！！秘技・虹色の足を発動させる…が！！

「オープンゲット！！！」

分離すると、鳥のような飛行形態を逆手にとり、その背中ゲッター3に再びチェンジする！！ゲッター3のアームが、背中からガンダムヘブンスソードを締め上げる！！そして

「おうおおおお！！大雪山おろしいイイイーーーーーっ！！

「！」

もともと自重も軽く、その形状も災いして空に打ち上げられるガンダムへブズソード。方向転換できず、羽をばたつかせても竜巻にへし折られてしまう。通常なら真上に投げる大雪山おろしだが、今回は違った。それは

「なっ!?!」

そう、闇の書の意志が極限までに溜め、今発射しようとしたスターライト・ブレイカー。その収束エネルギーに直接、ガンダムへブズソードを…激突させた!!

フェイトSide

『Sir, there are noncombatants on the left at three hundred yards. (左方向300ヤード、一般市民がいます)』

「え!?!」

突然バルディッシュが私に警告をした。嘘!?!封鎖領域内なのに!?!?

私達は急いでそこに向かう。そこにいたのは…

「なのはちゃん!?!」

「それにフェイト!?!?!」

友達の…

「アリサ…？」

「すずかちゃん…？」

だった…！！

チェンジ19 接近(前書き)

最近の更新スピードは目覚ましい…書けるときにガンガン書きま
す。

チェンジ19 接近

クロノSide

…グレアム提督の考えていた計画は、僕の予想通りの物であった。闇の書を主ごと強力な凍結魔法で封印して、次元の狭間か氷結世界に閉じ込めること。そのために闇の書の転生先を探し、現在の主…『八神はやて』を見つけ、完成まで監視する予定であった。だが、このことを提督から聞いたとき、提督は

「だが、そんな事は違法であり、凍結解除はそう難しくもなく、むしろ最悪の事態を引き起こす可能性もありうる。簡単ではあるが、先の事を考えると穴だらけな方法であった。彼にそう指摘されたよ。」

と自ら語っていたが。

その話を聞いた後、僕は一枚の写真を出した。グレアム提督あてに、『八神はやて』から届いた写真を。そこに写っていたのは幸せそうに笑ってる彼女たちの写真…一人を除いて。

「それからこの写真ですが…ずいぶんと流竜馬が不機嫌そうにしています…」

「…当然だな。自分の家族を利用した上に、永遠の眠り…いや、そんな言葉は使わん。殺そうとする私への写真なのだ。むしろ機嫌よくしろというのが無理な話だ。」

「…では、やはり計画の変更は、竜馬さんが別の案を？」

「ああ、いささか非現実的な理想論ともいえる話ではあったが…
今思えば理想論と言っても、緻密な裏付けがあつてこそそのものだと
気づいたよ。もっぱら、私としてはその時の彼…ナガレ君の気迫に
押されたのだがね。」

聞いた内容は、確かに計画とも言えない計画であつた。一度主を
闇の書に取り込ませて内部から暴走部分である防御プログラムの分
離させ、それを皆で破壊させる。インベーターとD G細胞に冒され
ないようにするために、あえて守護騎士の肉体を破壊したうえで蒐
集、その再構築をしている間に防御プログラムを切り離せば、ど
ちらの影響も受けることなく、守護騎士は本来の機能をリカバリ
した状態で復活する。

インベーターとD G細胞。どんな物かは、僕には分からない。グ
レラム提督も、実際に実物を見たことはないと言つていた。流竜馬
はプレシア・テストロツサに寄生しているような事を言つていたが、
こればかりは、流竜馬本人から聞くしかない。今までの様子から
して、彼はインベーターに対して異常なまでの憎しみを抱いている。
僕がD G細胞に抱く憎しみと同じように…だが、これは提督に聞く
内容ではない。

「…分かりました…もう聞きたい事は、聞く事ができました。現
場が心配ですので、一旦失礼させていただきます。」

そう言つて退室しようとした時だつた。

「クロノ。」

「はい…?」

提督は僕を呼び止めた。

「アリア。」

「…はい、分かっています。」

そう言ってアリアは僕に待機中のデバイスを渡した。これは…？

「と、父様！？それは！！」

「ああ、氷結の杖『デュランダル』…君にこれを渡す。」

デュランダル…何故だ。何故その名を聞くと、心が疼くんだ…！
！知っている…僕は、その名を知っている。だけど、それはデバイ
スの名前ではなかったはずだ。それは…

「なぜ…ですか？」

「何、おそらくは君の予想通りだよ。」

提督とアリアは、苦笑いしながら言った。

「ナガレとの約束でね、もしもアンタが真実にたどり着いたのなら
これを渡せってね。」

「この力はクロノには必要な物だとな…いや、正確には『この
力ではないが…』」

そう提督とアリアが言った。もっともロツテは納得のいかない顔
であったが…知らなかったのだろうか？

「私が頼むと言う資格が無いのは分かっているが…せめて、彼の思っただけでも受け取って欲しい。」

それに僕は怒りを抑えながら言う。

「お断りですね、そんな思い。本人に突っ返してやりますよ!! 自分だけ犠牲になって…彼は自分が死ねば、どれだけの人間が悲しむか、知らないんだ!!」

そう言っつて僕は現場に向かおうとした、その時

「流派!! 東方不敗は!!!」

提督の叫びに、僕の足は止まる。何故だ…何故僕は、『コレ』を知っている!?

「…ナガレ君が言っていた。君の閉ざされた記憶…クライド君が亡くなる前の記憶。それが全てのカギだと…」

提督は、後ろを向いていった。

「答えは…その拳に問おう。キング・オブ・ハートを継ぎし者よ…!!」

チエンジ19 接近

なのはSide

アリサちゃんとすずかちゃんを避難させた後、私達は闇の書さん

との戦いを続けていました。後で分かったのですが、闇の書さんがスターライト・ブレイカーを撃つのを竜馬さんと武蔵さんが妨害してくれたおかげで、なんとか私たちだけで防ぎきる事が出来ました。

「でも…竜馬さんたちはっ!!」
なのはSide out

何とかガンダムを盾に、その場を乗り切ったゲッター3。だが、装甲を破損したガンダム達は、すぐに自己再生機能で再生してしまった。

「畜生…俺たちが何をしたってんだ。」

『まあ、インベーターに話が通用したら、苦労しねーよ。』

若干ダメージを受けたガンダム軍団だったが、インベーターとD G細胞の自己再生機能で、その修復速度は目を見張るほどだった。それに

「ちっ!! さっき潰した奴が、もう再生を始めてやがる!!」

なんと、倒したはずのグランドガンダムとガンダムヘブンスソードが、機体の半分ほどを再生してしまったのだ!! さらに信じられない光景が、竜馬たちの目の前に立ちふさがる。それは

「嘘…だろ…!?!」

爆風から現れた影。それは無数のメタルビースト・ガンダム軍団だった。

『おいおい、なんだよ、こりゃ…!!!』

9体の巨大なガンダム。今の戦いで、何とかその2体を倒す事が出来た。だが、今そこにいるのは、そんなものではない。ゴッドガンダムが、ガンダムマックスターが、ガンダムローズが、ドラゴンガンダムが、ボルトガンダムが、マスターガンダムが、グランドガンダムが、ガンダムヘブンズソードが、ウォルターガンダムが……数えきれないほどに。だが

『ククククク…はははははは!!!』

竜馬は大声で笑った。

「わーーーーーっはっはっは!!!」

武蔵もふんぞり返り、腹を抱えて笑った!!!

「どうした？気でも触れたか？」

闇の書の意志が言う。だが

「いやあ、おかしくってよお…!こんなんで、俺たちを殺す気か？」

「何…?」

『へっ、分かりやすく言ってやるぜ…!』

竜馬と武蔵は、同時に叫んだ!!!

「『魂のこもってねえ人形に…俺たちを殺せるわけねえだろ?』」

なのはSide

「なのは…フェイト…」

アリスちゃんと、すずかちゃんに見られちゃった…でも

「……………何?見られちゃった…とか思った?」

アリスちゃんとすずかちゃんの口から出た言葉は意外でした。

「そんなんで、友達をやめるとか…言うと思った?」

「すずか…」

「でも…全部終わったら、ちょっとは話を聞かせなさいよね!!」

「大丈夫だよ、なのは、フェイト。この事は私たちだけの秘密にしとくから…ね?」

「ありがとう…アリスちゃん、すずかちゃん…」

その時でした。

「ゲキヤアアアアアア!!」

突然、地面からガンダムマックスター…って竜馬さんが言ったけど、それが襲いかかってきたのです!!辺りを見渡すと、際限なしに現れるガンダム…って、アリスちゃんとすずかちゃんが!!

「お嬢様、ここは私に任せてお逃げなさい。」

「サメジマっ！いな、何言ってるのよ、アンタ！！」

その時、アリサちゃんの執事のサメジマさんが来てくれました！
！けど…

「大丈夫です。高町様、テストロツサ様。お嬢様からお話は伺っております。ささ、ここは私めにお任せを…」

そう言っつて、私たちを逃がそうとするサメジマさんに、フェイト
ちゃんは

「すみません…お心遣いはありがたいですが…」

「…行け。私は、もう友を失いたくないのだ。」

そう言っつて、笑いかけるサメジマさん。その時、ガンダムマツク
スターが後ろからサメジマさんにパンチを！？

「あぶないっ！逃げ…」

「うるあああっ！！」

信じられませんでした。

「え…？」

パンチをしたガンダムの腕が、空に舞い上がっていたのです…

「さ、いきなさい。」

「は…はいつ…！」

そう言っただけで私たちは、全力で逃げました。

なのはSide out

なのは達が言ったのを見届けると、サメジマと名乗った男は、腕を破壊されたガンダムマツクスターを睨みつけた。

「さて…このしゃべりの方が慣れてる。」

サメジマは、葉巻に火を付けると一服して言った。

「そうか…俺は、いまならお前の気持ち分かるぞ、戴宋…」

そして、男は高らかに名乗った。

「何処の愚か者かは知らぬが…サメジマとは仮の名よ。俺の二つ名は衝撃！衝撃のアルベルト…！」

葉巻からぽとつと、灰が落ちた。

「覚えておいて損はない。ただし、お前に次は無いがな。」

隻眼の男は、にやりと笑った。

「おらおらあっ!!」

一方、再びゲッター1にチェンジした竜馬は、ガンダム達をなぎ倒していた。だが

「ちっ!!倒せばすぐ再生しやがる。おまけにどんどん増えてやがる!!」

グラビトンハンマー10発が、同時に振り下ろされる。空には無数のローゼスビットが。機体はいくらでも再生するので、ドラゴンガンダムは真・流星胡蝶剣を、ゴッドガンダムとマスターガンダムは石破天驚拳を乱射してくる。隠れられる建物は何もなく、あたりは瓦礫のみが広がっていた。驚くべき事に、インベーターはそういつたパイロットのデータまでも再現していたのだ。

「はあ…はあ…」

ブラックゲッターの体は、崩壊寸前になっていた。石破天驚拳が掠めた時に大破してしまっただ。メタルビーストだからとはいえ、その威力は本物と同等である。

「どうやら…ここまでの様だな…」

『竜馬っ!!』

竜馬は言った。

「ムサシ…あいつらは、もうロクな魔力も残ってねえし、カートリッジも俺との戦いで使いきっちゃったようだ。そこでだ…」

それも聞くと、武蔵は驚愕した。

『!?!?そ、そんな事したら、お前は!?!』

「…ムサシ。頼む、あと少しだ。あと少しだけ粘ってくれ。今、奴らを倒すのは無理だが…ここであのチビたちを失うわけにはいかなえ。」

竜馬は笑った。

「信じてるぜ。死ぬなよ…ムサシ。」

『竜馬?!?!?』

突然、ブラックゲッターのイーグル号だけが分離し、デビルガンダムのコア…闇の書の意志に突撃した!!

「ううおおおおおおお!!」

そして

「うわあああああああ!!」

竜馬の横には、ハーケンフォームに変形したバルディッシュ・アサルトを振るう、フェイトの姿があった。

「お…お前?!?!」

フェイトは言った。

「彼女を倒さなければ…ガンダム達は無限に増え続けます。民間人の二人は、ユーノとアルフが転送してくれました。」

「そうか…」

闇の書の意志は、涙を流しながら言った。

「崩壊が始まる…せめて、意識のあるうちに、主の願いを…永遠の眠りを…」

「永遠なんて…永遠なんてものはないよ!!」

デイベインバスターが、デビルガンダムの足に命中する。なのはだった。

「だから…だから一生懸命に生きられるんですよ…!!最後の最後まで、力を振り絞れるんですよ…だから!!」

だが、闇の書の意志はその手をかざした。

「そうか…ならば、お前たちは眠れ…」

フェイトを金色の光が、竜馬を赤い光が包み込む。だが

「ゲッターエネルギータンク、展開!!」

その時、イーグル号からゲッター線が、レイジングハートとバル

ドイツシュに放たれた。

「高町い！！ゲッターエネルギーで奴を叩けッ！！そうすれば……」

そう言いかけ、竜馬とフェイトは消滅した。

『吸収』

闇の書は閉じられ、辺りを静寂が包んだ。

なのはSide

そんな…！？竜馬さん…フェイトちゃん！！

「エ、エイミーさん！！」

『落ち着いて、なのはちゃん！！竜馬さんとフェイトちゃんのバ
イタル、まだ健在！！闇の書の内部空間に閉じ込められただけ！助
ける方法、現在検討中！！』

よかった、まだ無事だ！だけど…さっきの攻撃で、私の魔力は尽
きてしまいました…

『マスター。』

「レイジングハート？」

レイジングハートから出た言葉に、私は驚きを隠せませんでした。

『マスターの残り魔力は無くなりましたが…【ゲッタービーム】なら使えます。』

え…！？ゲッタービームって…！！

『流竜馬が、私の炉心にゲッターエネルギーを注入してくれたのです。これがあれば、補給なしでもまだ戦えます。』

竜馬さん…私のために…！！その時でした。

「我が主も、彼らも選んでいる…」

「え？」

闇の書さんが何かを語ってきました。

「自らが望んだ幸せな夢を見るか、それとも現実を生きるかを…」

「それって…」

「話はここまでだ、私の今の存在意義は破壊のみだ…」

「待つて、どういう意味!？」

私は構えながら言いました。

「今…私は全力でお前をガンダム達の標的から外した…これが、私にできる唯一の事だ…」

そう言って夜天の書さんは片手を前に出しました。

「ゲッター…ビーム…」

嘘っ！？ゲッタービームを使えるなんて！！

「こつちも！！レイジングハート！！」

『Getter Beam.』

「ゲッターアアアビイイイム！！」

そして二つのゲッタービームがぶつかった。それにしても、さっきの闇の書さんの言葉に、私は何かの希望が見えた気がしました。だから…

「この闘い…必ず勝つ！！」

はやてSide

あゝ…何や眠いわ…私、何しとったん？よー思え出せへんなあ。せやけど、このまま寝ると幸せやけど幸せじゃなくなつてまう、そんな気がするんよ…それにしても、車椅子に座つたままじゃ寝難いわなあ…

「あなたはどちらを選びますか？」

どこからか声がした。何やるう？聞いた事があるような、無いような。そんな声。

「健康な身体。愛する者たちとのずっと続いてゆく暮らし。あなたが見たいのであれば夢の中で、そんな世界にいられるように私がしてあげられます。」

その声は、とても優しげに私に問いかけたんや。

「眠って…ください。それしか…私は…」

少し意識がはつきりしてきた…前には、私に声をかけてきたと思われる人がおった…長い銀髪に真紅の目…それに昔皆が着ていた服を思い出させる黒い服。そして、シグナムを越えるかもしれへん、ええボイン「それは余計な思考です」…ツッコまれた…この子、ニユータイプやな。

「え〜と、なんやっただけ？ああ…鼻水が…」

そう言ったら、ティッシュくれた。ええ子や。その裏を見たら『バカが見る』と書いておった。こやつ…できる!!

「何で私こういうこと知ってるんや？」

「覚醒の時に、いくつかの情報をあなたに渡しました。その時に余計な物まで紛れ込んでいたのでしょう。」

そう聞いて私は少し考える。そこにはいろいろな情報があった。目の前にいるのが闇の書の…いや、夜天の書の…いや、それだけではあらへん。もっと…もっと……

「わかる…全てが…ああ、そうや。そういうことやったんか…」

「では…」

「そう、せやから。せやから…」

夢の中で皆と過ごしても、それは結局現実から逃げてるだけや。後には…何も残らへん。後悔だけはするなってリヨウ兄に言われとったけど…ここで終わったら、一生後悔する事になると思う。

私はずっと一人で嫌やった。でも…でも、リヨウ兄が、私に新しい世界を見せてくれたはった。シグナムが、ヴィータが、シャマルが、ザフィーラが…皆が私に勇気をくれた。いっぱい…いっぱいもろたから、今度は私が恩返しする番や。せやから…せやから、ここで夢に逃げとったら、今までの事を…思い出を、全部無駄にしてまう！そんなん嫌や…そんなん言ったら、皆に笑われる！！それに知った！まだ間に合う！まだ諦めるには…早すぎるッ！！

「私は…逃げない！！逃げとぅない！！夢見る明日を…必ずいつかつかまえるんや！！」

「…本当によいのですか？」

「当たり前や！！」

そう私が言うと、彼女は目を瞑り黙り込んだ。
はやてSide out

竜馬Side

「ここは…何処だ？」

「熱い…体が骨になりそうだ…ん！？」

そこは、炎に包まれた町だった。いや、町だったものの残骸だった。そこには、お互いを殺し合うゲッターロボの姿があった。

「ゲッタービーム!!」

「ドリルミサイル!!」

「ストロングミサイル!!」

ゲッターどうしの殺し合い…その時、俺の目の前にゲッタードラゴンが現れた!!

「逃げたパイロットか…死ねッ!!」

「おうおっ!?!」

ゲッタードラゴンが、俺に向かってビームを撃ってきやがった!!畜生、何て野郎だ!!

「てめえ…やりやがったな!!」

俺はゲッタードラゴンの足にしがみ付くと、コックピットの視界に隠れるよう、裏から回ってポセイドン号の横に張り付く。俺の記憶が正しければ、この辺に…

「あつた…!!」

そう、ゲッターロボには絶対に非常用の脱出装置が外と中に取り付けられている。銃で扉を壊すと、中のレバーを引っ張る!すると、案の定、ポセイドン号のコックピットの窓が壊れた!!

「うわあっ!!」

俺はポセイドン号に乗り込むと、中にいた奴の頭に銃を突きつけた。そしてマイクとモニターのスイッチを切る。

「俺の言ったようにしろ。でなきゃ…ぶち抜くぜ。」

「ひ…ひいつ!!」

潜入と、ゲッターロボの入手は成功したか…さて

「主導権は握らせてもらったぜ…オオオオオープンゲットツ!!」

ゲットマシンに分離するゲッターG。突然分離したから、奴らめ腰を抜かしてやがる!!

『お、おい!どうした!!』

『何があつた!!』

へ、適当に嘘をついてやる。

「さ、言えっ!!」

「さ、さっきの奴が、コックピットに攻撃してきたんだ!!モ、モニターがやられた。ゲッターポセイドンで叩く!!」

『了解!!』

そこにはゲッター2がいた。きつと、攻撃が当たると確信して油断したんだろう。

「俺が戦いつてのを教えてやるぜ。うっおおおおおおおお!!」

俺はゲッター2をブン回すと、俺の背後に迫るゲッター3にブン投げた!!

「ぐわあっ!!」

「うっおお」

激突した…今だっ!!

「死ねッ!! ストロオオオオオング・ミサアアアアアイル
!!」

ストロングミサイルをぶつけると、二体のゲッターは木っ端微塵になった。

『お…おい!!』

『す…すげえ…お前、何時からそんな操縦が上手くなったんだよ
!!』

ククク…まだ気づいてねえのか? こいつら…

「てめえら…悪いけど、ゲッターは俺がもらったぜ。」

『なっ!!』

「いいか、てめえら。俺のために死ね。」

だが、正直まずい。あの二人がすぐに死んでくれねえと、オープニングゲットが使えねえ。それにコックピットは窓全開…というか無い。喰らったら最期だ。

「ちっ、いくぜっ…！」

ポセイドンの足をキャタピラーに変形すると、俺は建物の陰に隠れる。

「ゲッタービーム…！」

くっ…新ゲッター1…だと！？少し細部が違う気がするが…馬鹿なッ…！

「ぐおっ…！」

『ぎゃあ…！』

ゲッタービームを避けきれず、それはポセイドンの右腕とライガー号のコックピットを持つてった。

「野郎…ゲッタアアアサアアアアイクオオオオオンッ！」

胸部装甲が持ち上がり、首周りのフィンからゲッターサイクロンが放たれる。が

「オープン・ゲエエエツト!!」

オープンゲツトでかわした!?

「こいつ…できる!!」

「チエエエエンジゲツタアアアワンツ!!トマホオオオオオオクブウウウウメランツ!!」

トマホークブーメランを逆に手に取り、ゲッターポセイドンがゲツタートマホークを持つ変な絵になった。

「何っ!?!」

「おかえしだあああああ!!」

俺は片腕のポセイドンで切りつける!!すぐさま両手にトマホークを構え、防ぐ新ゲッター1。だけど

「勝負は預けたぜ!!あばよっ!!」

俺はオープンゲツトして、ポセイドン号だけになって逃げる。そして手ごろなビルに飛び下りた!!

「ぐうっ…ゲツタアアアア!!」

「お…おいてかないでくれえええ!!」

残った奴は、新ゲッター1のゲッタートマホークで両断され、俺の乗っていたポセイドン号も、どっかから撃たれたゲッタービーム

に貫かれ、爆発した。新ゲッター1はしばらくあたりを見渡すと、その場から飛び去っていった。

「ふう…なんとか…!？」

物音がして、俺はすぐに振り返った。するとそこには…はやてがいた。

「リョウ兄…」

「はやて…はやてなのかつ…!」

俺は駆け寄り、奴を抱き締める。

「すまねえ…すまねえ…けど…!」

「わかつとる。あの子が教えてくれた。」

はやては俺に笑顔で言った。

「ありがとう…リョウ兄。」

はやては微笑むと、光に包まれて消えていく。

「待てっ…!はやてっ…!」

はやてが消えていく…その空間に、俺は飛び込んだ……

竜馬 Side out

はやてSide

「…分かりました。あなたがそれを望むのであれば…私は全力を持ってそれに従いましょう。」

「へ？」

え、えらくあっさり私の意見に賛成してくれたなあ。おかしい…
もつといういろややこしくなりそうな気がしたんやけど…

「私は…騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士たちと同じように、私も貴方を愛おしく思います。だからこそ、あなたを殺してしまう自分自身が許せなかった。自分ではどうにもならぬい力の暴走。インベーターにとって苗床にされ、DG細胞の兵器として改造されてしまった私を。あなたを侵食する事も、暴走してあなたを喰らい尽くしてしまうことも…止められない。そう言っ自分分はあがきもせず誤魔化し、逃げてきました。」

「だが、気が変わった…とでも言いたいのか？」

足音。振り向くと…

「リヨウ兄!!」

「おい、夜天たん。それで…今の答えは？」

リヨウ兄は聞いた…って、凄いなーミングやなあ。

「な…なんだそれは!!」

「闇の書って呼ばれるの、嫌なんだろう？ だったら夜天たん。」

「よかったなあ、夜天たん。」

「よくない!!」

夜天たん（仮）は顔を真っ赤にして怒ると、咳をしました。怒った時の反応がシグナムにとるなあ…

「…で、ですが、忘れていました。」

「ほう…?」

「…私は忘れていました。主の心からの望みをかなえると願っている事を…ですので、あなたが望む事を叶えたいと願っています。」

「せやったら!!」

「はい。あなたが本当にそれを望むのであれば…私は運命にすら抗います。たとえどんなに絶望的でも…最後の最後まで、必ず。」

「うん!せやったら!!」

「望んでください、あなたの願いを。今の主はあなたです。」

そう彼女が言うと、私の足元に白い魔法陣が出た。それにしても…いつまでも闇の書とか、夜天たん…もええけど、もちつとマシな名前がええなあ…けど、とりあえず今はこの子の中で暴れまわって自動防御プログラムを…メタルビーストたちを…止める!!せや

から…

「止まって!!」

私は小さく、だけど強く言った。

なのはSide

数えきれないほどのガンダム。倒しても倒しても、すぐに復活してくる…それに

『武蔵さんっ!!』

『闇の欠片は俺が止める!!安心しろ。ここへは一步も通さねえ!!』

武蔵さんは独り、海の上で戦っています。エイミーさんから聞くと、デビルガンダムが守護騎士のシグナムさん達のデータを使って、何人ものヴォルケンリッターを生み出したのです。それに、たった一人で戦う武蔵さん!!だけど、私も人の心配をしていられる場合じゃ…え?

「おかしい…ガンダム達の動きが急に鈍く…」

そう、突然ガンダム達の動きが止まったのです!!まるで電池の切れかけたおもちゃのように動きが悪くなって…これって一体…

『外の方！えっと、魔導師の方！！こちら、えっと…そこにいる子の保護者、八神はやてです！！！！』

「は、はやてちゃん！？」

『なのはちゃん！？』

『おい、高町かつ！！俺だ、流だ。今、はやてと一緒にいる。』

竜馬さん…無事だったんだ！！

「竜馬さん！！よかった…」

『ええ！！！？小さき魔導師ってなのはちゃんの事やったの！！』

『話は後だ。はやて、説明を。』

『あ、せやね、リヨウ兄…ごめんな、なのはちゃん。何とかその子止めたげてくれる？魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が発動していると管理者権限が使えるのや。』

『そこにいるのはインベーターがDG細胞を取りこんで作った、自動行動の防御プログラムだけだ。遠慮はいらん！！ぶち殺せ！！』

ぶ、ぶち殺せって言われても…けど結局…ど、どうすればいいの！？

『なのは…分かりやすく説明するよ。どんな方法でもいいから、目の前の者に魔力ダメージは…』

『チャージ完了しました、マスター。行けます。』

『魔力の回復は終わったか…とにかく、ゲッター兵器ではなく、魔力ダメージをぶつける。なのは風に言うなら、全力全開で手加減無しの一撃を。そうすればフェイトも竜馬さんも八神さんも、外に出ることが可能になる…いけ、なのはっ!!』

「さっすが、ユーノ君!! わっかかりやすい!!」

『It's so.』

『僕とアルフはサポートに専念するから、なのはは周りを気にせず集中して!!』

「うん!!」

よし…いくよ、レイジングハート!!

「いくよ、レイジングハート!! エクセリオンバスター中距離モド!! バレル…てんか…い!!!!!!」

『All right. Barr…r…r…』

え…!!? レイジングハートの様子が!?

「レイジング…ハート…!!? ねえ、しっかりして!!」

『r…r…r…』

壊れたテープのように繰り返すレイジングハート…その時でした。

『Change!! Shin Raising Heart!!』

その瞬間、私の体は光に包まれました…

チェンジ19 接近（後書き）

衝撃のアルベルトが、正式に参戦しました。そして、レイジング
ハートは……！そして、翼の折れた天使は、再び夜^{その}天へ………

チェンジEX「物語には、いくつもの可能性がある。その一つ一つに、本編では

なんか自分の創作物が全部殺伐としてしまっているので、こんなご時世ですし、もっと明るいのを書きたいなって思いました。腹筋がオーブンゲットして、フェイトに割って入られないようご注意ください。あと、作者は自重という言葉を知りませんので、ご了承ください。あ、あと本編には全く関係ありません。

い！！！！ちよつと濡れてるトコあるけど…でもそんなの関係ねえ！
でもそんなの関係ねえ！！待てよ、俺はどう考えたってロリコンキ
ャラじゃないだろ！！シグナムとフラグ立ってたし！！あれ？そう
言えば、あれはどうなったんだ？なんか中途半端で終わったな。

ドワオオオ！！

あ、ノックが鳴った。女の声が聞こえるな…誰だ？誰え…だ 誰
え…だ っつて、知らねえよな。怪奇大作戦とか。知ってる人いる？
モブでウルトラセブンが一回出てきたんだぜ？

「竜馬、アリシア、アルフ。朝ですよ。」

まさか…っつて、

「待てい！！！」

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

あ、妹キャラなのか…偶然ではなく……………

チェンジEX「物語には、いくつもの可能性がある。その一つ一つ
に、本編では語られぬドラマが繰り広げられるのだ…人、それを…
番外編という！！！」

「みんな、ちゃんと起きてますか？」

呆然としていると一人のいい女が部屋に入ってきた。リニスだ。長いリリカルなのは作品の中で、彼女ほど不憫な存在はいねえな…だって一瞬だけ！？よかったなあ！劇場版では出番増えてよお！俺は旧作になったらゲオで借りるぜえ！！獣耳やしっぱが見たいです。触りたいっ！いじり倒したいっ！モフモフモフモフ：ハツ！！おかしい…なんか、俺のキャラが完全に崩壊してるじゃねえか！…そういえば、恥ずかしく思ってるんだっけ？耳出すの。

「はい」

「眠い」

「どーせ、三人とも夜更かししてたんでしょ？」

フェイトの場合と違って、どうやら俺も入ってるようだ。フェイトが真面目なだけだ。俺は普通なのだ。

「ちよつとだけよ」

「ねえ」

アルフとアリシアが仲良く誤魔化している。それにカトちゃんを何故知ってる…！

「でも…」

アリシアが、頬を赤く染めながら

「お兄ちゃんの…よかったよ…?」

お、俺のパジャマの裾を掴みながらささやいた。

「……………死のう。」

「全く…遅寝遅起きの竜馬を見習っては駄目ですよ? 竜馬は駄目なお兄さんですから。」

…リニスさん、オデノゴゴロヴァボドボダ!!

「あー…リニス…さん?」

「なんですか? 貴方が私をさん付けで呼ぶときは、絶対何か隠してます。…また、何か隠してるのですか?」

お、おい! 俺、そんなの知らねえって!!

「ふっふー…また隠れてえっちいゲーム買ったんでしょ?」

「お、おい! 待て、アリシア!!?」

「そ、そ、そそそそそうなのですか、竜馬く!!!」

ちょ、何で怒るんだよ!!!? 顔真っ赤で!!! しかもケモノミミが立ってるし!!!

「ほら、お兄ちゃんのPCのマイドキュメントを開けば…」

そう言ってアリシアは、不自然にあったパソコン（電源何故かついたまま）のマイドキュメントを開くと、123456789と記されたファイルを開いた…って

「何：！？あつただとおおおおおおおお！！？」

待て！待て待て待て！！しかもその多くは、ちょっとレアすぎる性癖のものばかりじゃねえか！！しかも、明らかに1000枚越えてるぞ！？

「あ、あ、あああああなたという人は~~~~~！！！」

リニスさんが顔を真っ赤にして、チェーンソーを俺に振りかざしてきた！！

「落ちつけ！落ちつけ、リニス！！いいか。世の中にはな、目に見える健全さと不健全さが必要なんだ。もっと少女にとつて不健全で不健康な街を取り戻さねば！！リニス！日本はダメになるぞっ！！！」

説得を試みた俺だったが

「反省しなさあああいい！！！」

そう言って再び斬りかかるリニス。俺はとっさにアリシアを捕まえると

「アリシアガアアアアアアアアアアアッドッ！！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

血だまりに沈むアリシア嬢。リニスは血に染まった自分の手を見て

「あ…ああ…アリシアの血…」

ぺろぺろ舐めてた。俺は何か、絶対に見てはいけないものを見てしまった気がする。

「まったく…とにかく皆、着替えてくださいね？朝ごはんです。プレシアは食堂ですよ。」

「了解しました、大佐!!!」

アリシアとアルフ（中身は…松岡修造？）は、元気良く敬礼した。それにしてもあの厚化粧インベーターババア…キリシアから紫ババアを継いだ女、プレシアか…一体どんな事を俺に言っやら。

「あら、おはよう竜馬。そろそろあたしと…結婚する?」

「ウゾダドンドコドーン!!!」

What!?!とてもあの紫ババアと同一体とは思えねえや、リン
デイ級の若作りってわけじゃないけど…適度に年上感が出ていい

味だよ！！熟女には興味ねえけど…逆に色気が出てるな。俺別に結婚してもいいや！！

「あゝ！ずるゝいゝ！あたしもゝゝ！！！」

「あらあら、それじゃあアリシア二人で竜馬と結婚しましょうか？」

「ウエディングドレスって、綺麗なんだろうなあ…」

「全く…二人揃って朝から冗談ばかり言わないでください。ホント朝もはよから…」

「そうね、冗談よ。だってリニスも入れて三人だもん。ね、そう思うよね？アリシア君。」

「う、うん。そうだね、プレシア君。」

「こいつらの声真似…うまいっ！！」

「な、な、なななんですかゝ！！！」

「あらあら、リニス顔真っ赤よ？」

「プ、プレシア…！！貴方という人はゝゝゝゝ！！！」

「もー、素直じゃないな…！デレ期は近いぞ？ん？ん？」

そう言って、肘でリニスを小突くアリシア。何かコメントができん。

「夢は起きて見るもんなんだよ!」

「訳分かんねえよ!」

!?!?松岡修造!?!その声が聞こえて急いで振り向くと…

「どした、竜馬?」

子犬アルフがすでにドッグフード…じゃねえ!?!餌箱にはしじみが山盛りになっていた。

「バリッポリッ!」

立ちながらキャットフードを食べてるリニスさん…哀しいなあ、おい。

「おい、お前。本当はどっち」ほらほら、皆そろそろいただきますましよう?」「…あゝまた聞けなかった…」

んで、朝飯食おうとしたんだが…

「食わしていただくぜえっ!」

うるせえな…アルフ(仮)ちらっとプレシア見たら…

ちゅっ?

ウインクして投げキッスしてきた。もはやあいつは別人でできている。これもきつと、ゲッター線のせいだ。もう俺大混乱だ。頭の

中が虚無戦記。

「ねーねー、これってギャップ萌えっていうんでしょ？知ってる？萌えって。」

「健全な人生を送る上で知りたくねーです。」

「え〜？さっき不健全さも必要だって言ったのに…」

「それはそれ！これはこれ！！」

その時だった。

「僕と契約して、魔法少女になってよ！！」

突然、俺の目の前に白い何か落ちてきた。当然。

「黙れえっ！！」

とりあえず目障りだったので、ゲッター線を混入させたバズーカで、吹っ飛ばした。

「ギ…ギギ…」

「こいつ…インベーター！？」

「ううん、インキュベーターよ。最近目障りだったの…ありがとう。」

よく分かんねえ生物の残骸は、松岡アルフが食ってしまいました。

きめえ…

「お米食べる!!!」

イヤイヤ、白いだけで米じゃねーし、ソレ。

「ところで…俺って何者!!!?」

「何を言ってるのですか？あなたは十年前くらい前に、小規模次元震の影響で記憶喪失で飛ばされ、全裸に新聞紙の兜をかぶって日本刀のレプリカを持っているところを発見され、ここで一緒に暮らしている【流竜馬】ではありませんか。本来なら管理局に頼む所でしたが、貴方の肉た…い、いえ、ともかくプレシアがあなたを引き取ったんじゃないですか。ちなみに養子にしない理由は…」

「どこかの八丁堀の旦那ようなくうたらな奴じゃなくて、素敵な旦那様に育てるためよ」

「と、プレシアは言ってますよ。」

まじですげえな夢世界。ゲッター線のなせる業か。

「でも、暗闇仕留人と必殺仕業人と新仕置人の最終回は、神がかってカツコ良かったじゃねえか。俺は鉄つつあんだけどな!!!」

「私は半兵衛さんよ。仕事屋稼業の。」

何で知ってたんだよ…つつか、俺たちの言ってる事分かる人間いねえだろ…あと、作者はからくり人が好きです。って、知ったこつちやねえな。

その後、庭園みたいな所を皆で散歩する事になった。そしたらアルフが

「想像してください…ここは、どこなのか!? 想像してください…一体、何があるのか!？」

「…何が言いたい？」

「ここは…人の家です…! 見ただ目で判断すんじゃないよ…!」
「……………」

コイツは、無視に限る。さて…

「ねえ、今日は皆で町に出ましようか。」

「うん!」

「いいですねえ」

おっと、先手を取られたか…ふとプレシアは俺を見て言う。

「そろそろ婚姻届出さないと」

「いつまで言ってるつもりですか? プレシア。」

ため息をつきながらリニスは言う。結構良い艶の髪だな…

「あら、あなたがいちいち反応するから、つい言ってしまうのよ？リニスウ？」

「うう……………」

リニスをからかうプレシア。ちよつとかあええ…現実でもこんなだったらよかったのに…って、俺が思うことじゃねえ！！

「お兄ちゃんには、処刑用のギロチンをそろそろ買ってあげなくちゃ！」

「…何に使うんだ、ソレ…」

なんか無性に泣きたくなった。

「ご心配なく、その内市販なんて目じゃないものを私が作りますよ」

そうエツヘンと胸をはるリニス。つかいらねーよ…って、売ってんのかよ…！？

「さすがリニスね、さりげなく胸を強調して…」

「なっ…！？？」

あ…でもやっぱりプレシアに弄られた。弄ってって顔してんもんな。

「何鼻の下伸ばしてんだ！？伸ばすのはアキレス腱だけにしとけ

っ！」

「伸ばすかよー!!っつか犬にアキレス腱あるのかよ!あったとしてもどうやって伸ばすんだよー!!」

もう、やだ。

その後、俺ははらっぱで大の字になって寝転がっていた。近くではアリシアが薄い本を読んでいる。

「お、おいひい!あはふふえ、おいひいよおおっ!! ほ、ほれにくひが、ひはは、ひはふえ、いじられるのお!ひもひいのお!...! んぐつううあああっ」

何の本を読んでいるう!...!?楽しそうに朗読するんじゃないやねえ!...!...

「おにーちゃんとしよ、ドキクラブ?イケナイ林間学「アホ!!説明せんでいい!!」もー...イケズ~~~~」

そう言ってアリシアが頬を膨らませると、鼻先にぽつんと雨粒が落ちた。

「あれ?」

急に暗くなつたと思つたら雨雲が出てきた。おいおい、さっきまで晴れてたのに…

「雨になりそうだね…でもお兄ちゃんは風邪引かないからこのままがんばってね?」

馬鹿はなんとか言って言いてえのか!?!いいかげんシバくぞてめえ!?!

「冗談だよ〜もう家に帰るまでに間に合いそうにないから、あの木で雨宿りしよ?」

そう言つて大きな木を指した。その木には、藁人形がいつぱい刺さつてた。そこには下手な字で「フェイト」って書かれてた…根に持つタイプなんだな。

「ギャルゲつて、絶対濡れたヒロインに主人公がドキツとしちゃうイベントあるよね?私が濡れちゃつたら…お兄ちゃんが温めて?」

「てめえなんざ、レンジでチンで十分だ…」

「レンジでチン……………えっち。」

「どこがだ!!何想像した!!」

次第に雨が降り始めた。俺達は大量に藁人形の刺さつた木に寄りかかつて、座り込んだ。

「おい、アリシア。ケツ濡れんだろ?」

そう言って、きれいなハンカチを敷いてやった。

「あ、ありがとう…お兄ちゃん…」

そう言って笑うアリシア。綺麗な髪についた雨粒が、キラキラ光っている。濡れた草の何とも言えぬ匂いが、俺の鼻をそっと撫でた。俺は…思った事を口にした。

「なあ、アリシア…これって夢だよな？」

俺は今まで感じていた疑問を言った。

「てめえがいてもいなくても、ぶつちやけ俺にはあんまり関係ねえ…っていうか、あらゆる意味で根本的におかしいだろ…何でおれがこんな夢見てんだ？」

「…間違っちゃった」

そう言ってアリシアはテヘッ とウィンクした。目から放たれたハートが、カンカンカンカンと俺の頭にあたった。

「はあ！？おい、ふざけんなよ！！つかフェイトはどうした！？話の流れから言っておかしいだろ！！」

「ぶっしぎ〜 これもゲッター線の仕業だよ。そう思ってあきらめて。」

「不思議過ぎだろ！！つかゲッター線で逃げんなよ！！大体プレシアって、あんな性格だったか？はっちやけ過ぎてるだろ、どう

考えたって！！これは一体何なんだ！！俺の…俺の分かるよう、説明しろ！！」

「ちよつとリンディさんとしじみとゲッター線を混ぜてみました」

「混ぜんな！危険だろ！！」

おかしいだろうが！世界最後の夜明けを垣間見たぜ、俺は！！

「ねえ…お兄ちゃん。夢でもいいじゃん。ここにずっと…私とい
よっつ。」

「唐突だなあ、おい！！」

「だってこの台詞言わないと話進まないじゃん。」

そ、そうだけだよ！！

「とにかく、ここでなら私は生きていられるし、お兄ちゃんの妹
でいられる。母さんと修造とリニスと…皆と一緒にいられる。ぶっ
ちやけ別にどーでもいいかもしれないけど、それなりに楽しい性活
…じゃなかった、生活を提供できるよ？」

あ…考えるだけ無駄だ。でも、正直言ってこのまま戻っても、
血で血を洗う闘いの日々…俺はいいけど、なんかこう…人生をエン
ジョイ出来ない気が……ちよつと待て。

「さっきなんて言った？」

「え？ぶつちやけ別に…」

「その前だ。」

「お兄ちゃんの妹で…」

「その後。」

「えつと〜…母さんと修造とリニスと？」

…おい、待て！！

「今、確かに修造って言ったよな！！絶対言ったよな！！？やっぱり、あいつ松岡修造だったのか〜！！！」

「え…ああ！！？やっべ、ばれちった！！！」

アリシアはしまったって顔をして、そしてすぐにキラキラした爽やかな笑顔で言った。

「母さんとアルフとリニスと…皆と一緒にいられる（以下略）」

誤魔化すんじゃないやねえ！！！略すな、バカタレ！！どこそこのキモヲタどもはだませても、俺はだまされねえぜ！！

「ならば！行くぞ！松岡！シュー！！ゾウ！！！」

そう言っつて、突然木から犬耳を付けた松岡修造が飛び下りてきた！！おい！人間形態つて修造本人かよ！！

にまゝとしながらアリシアは言う。

「そ・れ・に・い・く・リ・ニ・ス・っ・て、実はお兄ちゃんに惚れている設定だよ？」

「マジかよ!？」

「マジの大マジだっ・て、うん。もっ・と・言・つ・と・今・ま・で・結・構・お・母・さ・んが煽ってきたし、今日の夕飯に、女の人が飲むと、一時間かそこらでドキドキしてハアハアしちゃうお薬を仕込んで設定だから、今日の夜らへんに…ふっふっふっ」

そう言われた瞬間、俺の額がキュピピピン!となり、頭の中にビジョンが駆け抜けた…

その日の夜、疲れの溜まっていた俺は。俺はベッドに横になった。凄く眠い…あれ?手足が動かねえ…だと!?!するとノックがして…

「あ、あの…竜馬…」

顔を真っ赤にして、もじもじとしながら妙に色っぽいリニスが入ってきて…

「らめなのお…リニス、竜馬のこと考えるだけでぐちよぐちよになっちゃうのお?」

そう言っ・て・ベ・ッ・ド・に・も・ぐ・ず・り・こ・ん・で・く・る・リ・ニ・ス・!・!

「うわっ!？お、お前…」

「しびれ薬が効いてるみたい…後二時間は動けないわ。」

「な、何だと!？」

リニスは、俺の髪をそつと撫でて言った。

「ごめんなさい…こんな方法、間違ってると思うわ。でも…でも、リニス…もう、我慢できないッ!！」

そう言つてリニスは俺に唇を重ね

?!?!?!?!

「み…みえるっ!？俺にも敵の動きが見えるぞ!?!？」

「ふっふっふ…夢だからね…何でもありなのだよ、明智君…」

すげえな夢世界。これもゲッター線の仕業か。

「いい、もし戻つたらオッサン逆戻り且つ恋愛フラグはほぼ皆無だけど…ここなら若いままで、しかも!！」

アリシアは天を指しながら言った!！」

「人妻キャラはお母さんから、ツンデレキャラはリニス、そして幼女キャラは私と選り取りみどり!！これで夜もばっちり お前のアレで天を衝けええええええええええ!！」

いつの間にか雨は収まり、雲は散り、光と融けていく。小鳥はさえずり、生命はふたたび動き出す。柔らかな光がアリシアに差し込んでいた。それはとても神々しかった。俺は頭を振って、思考を元に戻す。そしてこれからの事を、真剣：そう、マジで真剣になつて考えた。

「俺は…でも、それではっ…！」

どうする？どうする！？どうする！！？どうしよう、俺！！！現在俺のライフカードは3つある。

「ごめん、アリシア。俺は…プルプル

欲望にまかせるぜ

やらないか？

その時だった。修造が俺に熱く語ってきた。

「過去のことを思っちゃダメだよ。何であんなことしたんだろ…って怒りに変わってくるから。未来のこととも思っちゃダメ。大丈夫かな、あはあ〜ん。不安になつてくるでしょ？ならば、一所懸命、一つの所に命を懸ける！そうだ！今ここを生きていけば、みんなイキイキするぞ…！」

そうだ…そうだよな、修造！！あんだ今までで一番いい事言ったぜ！！

「欲望に任せちゃえ」

悪魔だと分かっている。でも、俺にはアリシアの笑顔が天使に見えたんだ。悪魔の姿をした天使に……

「ごめん、アリシア。俺は……」

欲望にまかせせるぜ　ピッ！！

やらないか？

「……………これだあつ！！！！」

その一言を言った瞬間、俺にも光が差し込んできた。まるで世界が…宇宙が、俺たちを祝福してるかのように……………

「あ、風が出てきたね？」

「フ…そうだな、アリシア。」

そう言っただけ俺は、アリシアを肩車する。

「世間はさあ、冷てえよなあ。みんな、君の思いを感じてくれねえんだよ。どんなにがんばってもさ、何で分かってくれねえんだって思うときがあるのよね。俺だってそうよ。」

「修造……」

あいつは言った。

「熱く気持ちを伝えようと思ったってさ、お前熱すぎるって言わ

れんだ。でも大丈夫、分かってくれる人はいる！そう！俺について
来い！！！！」

「だって。いこつ！お兄ちゃん！！」

俺は大きく一步を踏み出す。一步。でも、それは俺にとって大い
なる飛躍の一步だった。

「きつと私たちを祝福してるんだよ。そう…祝福の風だよ！」

「ふふ…そっか……………よし、帰るぞ、アリシア！！」

「うん！！」

そう言っただ俺達は肩車しながら帰……………

「『馬鹿っ！！いくじなしっ！！！！』」

「グハアツ！！！！？」

ろうとしたら、三人の女に後頭部飛び蹴りを喰らった！！吹っ飛
んだ俺は、顔をズリズリさせると、ケツを突き出した状態で止まっ
た。さりげなく俺が蹴られた瞬間にジャンプして避けたアリシアの
運動神経に舌を巻く余裕も無く、俺はウソツプみたいな転び方をし
た。その俺にストンピングをかます三人組。

トラマン夕陽に死すで、倒されたウルトラマンが運ばれていくシーンをイメージしてます。分かりにくいネタでゴメンねby作者

「お…お兄ちゃん!？」

アリシア…やっぱり、世の中で一番怖い生き物って、女なんだなあ。身にしみて感じた。俺があきらめて目をつぶろうとした…その時…!!

「諦めんなよ…諦めんなよ、お前!!どうしてそこでやめるんだ!?!?そこで!!もう少し頑張ってみてみるよ!!」

「修造…」

「そっだよ、お兄ちゃん!!」

「アリシア…お前まで…」

修造は熱く語った。

「ダメダメダメ諦めたら。周りのことと思えよ!応援してる人たちのことと思ってみるって!! あともうちよっところなんだから。俺だつてこのマイナス10度のところ、しじみがトウルつて頑張つてんだよ!ずっとやってみる!必ず目標を達成できる!だからこそNever Give Up!!」

そう言つて、何故かそこだけ雪の降っている川で、しじみを探っている修造がガッツポーズした。その手には、一粒のヤマトシジミが輝いていた。ちなみにテストアロツサ家のしじみは、全部修造が採っているらしい。

「そつだよな…うっおおおおおおお！！！！」

俺は渾身の力を込める。

「もっと熱くなれよ… 熱い血燃やしてけよ… 人間熱くなった
ときがホントの自分に出会えるんだ！ だからこそ… もっと！ 熱く
なれよおおおおおおおお！！！！」

「頑張つて、お兄ちゃん！！」

その時だった。

「竜馬… そんなに、良かったのか…？」

「え…？ シグナム…？」

俺をズルズル引きずってるシグナムが、ぽつりとつぶやいた。髪
に隠れて顔が見えない… って、あいつ、ポニーテールを解いてる！
？ STSのフェイトのような髪型だ。

「こうした方が… もっとかわいいって言ったから… 今日のために
切ってきたのに…」

え… おいおい！ そんな事、言った覚えないぞ！！

「今日だつて！！ デートしてくれるって… 言ったのに… ひぐつ！
えぐつ！！… ふええええええええええええええええん！！！！」

そう言つて泣き始めちまつた！？ 待て待て！！ そんな約束、俺し

てねえぞ!!

「わあつた!分かったから、泣くなよ。な?」

「ふええええええええん!!竜馬のバカバカバカ~~~~!!」

「あーあ。泣かせた泣かせた~~~~」

そう言つて煽るリインフォース。

「女の子を泣かすのはあかなあ〜。ねー」

「ねー」

そう言つはやてとリイン。そしてびーびー泣いてるシグナム。これって修羅場ってやつか?NTニートの修羅場を見せてやる!!

「そら、さつさと!」

「行くで!!」

ずるずる〜

「ぬあああああああ~~~~.....」

「...悔しいだろ?分かるよ。思うように行かないこと、たくさんあるよな!海鳴にきて、目の前においしそうなケーキがあったとしても食べれない!ハーレムを目の前にして、あきらめなくちゃならない!...そう、我慢しなきゃいけないときだつてあるんだよ!人生、思うように行かないことばかりだ!でもそこで頑張れば絶

対必ずチャンスが来る！ 頑張れよ！！」

「頑張れ！お兄ちゃん！！」

嬉しいのか嬉しくないのかよく分かんない励ましを受けながら、びーびー泣くシグナムをなだめつつ、俺は三人に引きずられながら、夢世界とさよならした。男の夢が…千年王国が…

「チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

俺の叫びは、空しく響き渡っていた。

一方その頃

「ごめんなさ～～～～い！ゆるしてえええ～～～～！！！！」

フェイトが泣きながらゲッター軍団に追い回されてたとか

おしまい

チェンジEX「物語には、いくつもの可能性がある。その「つつ」に、本編では

…おもしろかった？

チェンジ20 熾烈

クロノSide

エイミーから届いた情報は、僕に衝撃を与えた。こうしている間にも増え続けているガンダムと呼ばれるロボットと、巴武蔵が現在交戦している守護騎士たち…どうやら、防御プログラムが総攻撃を開始したらしい。だが、なのはの話を聞くと、管制人格が全力でガンダム達の攻撃の対象からなのは達を外しているらしい。そうなる…と、僕は守護騎士たちの破壊に向かった方がいいな…

『クロノ、聞こえる?』

「艦長。何かありましたか!」

母さんは言った。

『今、エイミーが出したの。あの大量の守護騎士たちは、闇の書が残っていたデータを使って復元したものだわ。便宜上、彼らを【闇の欠片】と呼ぶ事にするわ。』

『それとね、クロノ。その無数の闇の欠片の中に、三体だけ異常な数値の魔力反応が確認された個体があったの。それを潰せば、何とかなるかもしれない!!』

「そうか…分かった。ありがとう。」

そう言って、僕は念話を切った…さて

「さて、それでは行くか…!!」

シンガンで射殺し、ザフィーラは距離をとって、ゲッタービームで粉碎する。けど、こいつらの機能を停止させると、体がまるでガラスのように砕け散っちゃう。その時だった。

『ムサシさん、聞こえますか！』

ん？誰だ？

『はじめまして、時空管理局のエイミー・リエツタです。今、あなたの交戦している守護騎士たちは、闇の書の闇…防衛プログラムが作り出したただの人形です！思いっきり叩き潰しちゃってくださいー！』

「ああ…って、もう叩き潰しちゃったんだけどな。だけど、あいつらじゃない感覚はあったぜ。よかった。」

『それと、その守護騎士たち…便宜上【闇の欠片】と呼びますが、その闇の欠片のなかに、三体だけ巨大な魔力反応を検知しました。恐らく、魔力だけならなのはちゃん以上…』

お…おいおい！本当か！？

「なっ…！？で、でも、その3つを潰しちゃえば…」

『はい。闇の欠片については、これ以上増殖しなくなると思いますが。確認された三つの魔力反応の内、最も大きいものが武蔵さんから34キロ離れた地点で確認できました。補給が終わったら…って、こんな状況じゃできませんよね。すみません。』

「いいんだ。んで、俺はそいつを叩く…と。でも、後の二つはど

「うつするんだ？」

『一つは闇の書の内部、もう一つはこちらのクロノ・ハラオウンが搜索・撃退に向かっています。調べたところ、闇の書の内部にいるものは、どうやらフェイト・テストロツサ囑託魔導師とコンタクトを取ってるらしく…』

そうか…けど、今は俺の戦いをするまでだ。後は彼らに任せよう。

「分かった。すまねえな、忙しいときに。健闘を祈る。」

『こちらこそ。絶対に…無茶をしないでくださいね…!!』

そう言つと、彼女からの念話が途切れた。

「…となると、こいつらをいくら潰してもダメなわけか…よし。」

俺は敵の猛攻を躲しながら、奴らの親玉のもとへ飛んだ。

武蔵 Side out

フェイト Side

………夢を見ていた。とても心地のいい夢。すべてが、私に【優しい】世界。アリシアがいて、リニスがいて、母さんがいた。母さんも優しくかった。私があの日から、ずっと望んでいた、ずっと願っていた世界。けれど…決して手に入れる事の出来ない世界。本当の…【夢】でしかない世界。

けれど…私は選んだ。この世界よりも…この夢よりも現実いまを。現実には…大切な場所が、大切な人たちがいっぱいいるから。そう…

そして、これから作っていくんだ……

「…そっか。」

私の想いを伝えると、アリシアは笑った。少し哀しげな笑顔に、私の胸は締め付けられる。

「…ごめんね、アリシア。」

「…フェイトが謝ることなんて、何も無いよ。私こそごめんね。フェイトを足踏みさせることしちゃって。」

でも…

「でも…でも、それではアリシアが!」

「…ねえ、フェイト。」

そう言った時、アリシアの体が光に包まれた。その光に、思わず目をつぶってしまう私。再び目を開けると、そこにいたのは、大人になったアリシアだった…

「お姉さんの話…ちょっと聞いてくれる?」

アリシアに抱き寄せられた私。そんな私に、アリシアは優しく語った。

「…ずっと昔。そう、ミッドチルダがある銀河系のできる、ずっとずっと昔。その時からね、フェイトのいるこの世界…地球のある世界の宇宙は存在していたの。」

「え…？それって…？」

そして、アリシアは信じられない事を言った。

「…この地球はね、ずっと、ずっと昔に、戦争があったの。無限のエネルギー・ゲッター線を使つての戦争。人々は【ゲッターロボ】を駆り、殺し合った。ゲッターロボは巨大化していった。太陽系より大きなものまで、長い長い…永遠の様な戦争を繰り返して造られたの。そして…宇宙は滅んだの。」

え…？話に…ついていけない…！！

「人間はね…神を殺したの。古の言葉で…ラーグース…それが神の名。宇宙という代償を払つて。確かに人類は勝利したわ。宇宙を全て侵食し、虚無に返そうとした神を殺せたの。でも…神は死んでも、宇宙も人間も、全て死んでしまったの。空間も、時間も。精神も、この世の全てのものが…無くなってしまったの。」

「じゃあ…この世界は…」

アリシアはうなづいて言った。

「人類最後の切り札…ゲッター極ドラゴン…アルティメット無数の皇帝・ゲッターエンペラーが合体して最終進化を遂げた形態だわ。それが崩壊した時…膨大なゲッター線が放出されたの。虚無の中には、ゲッター線だけが存在していたの。そして…想像もつかないほどの時間。そ

う、何千兆もの銀河が生まれて、死んでいくほどの時間。ゲッター線は、精神を作ったの。次に空間。その次に時間。フェイト。この世界はね、ゲッター線によって造られた世界なんだ。」

「じゃあ…私たちは…ゲッター線によって造られた存在…ということ…？」

そして、アリシアは言った。

「……………そうだよ。でもね、フェイト。この世界には、旧世界から来た人が四人いるの。その内の二人に、貴方はもう会っているわ。」

アリシアは、私に手を重ねていった。

「でもね、たとえゲッター線から生み出されたとしても…フェイトはフェイトだよ。そして、もう一つだけ言っておきたい事があるの…」

「え……………?!」

そして、アリシアは笑って言った。

『It is a fate according to the fate. However, acting against the fate is a fate.』(運命に従うのも、運命。でもね、運命に逆らうことも、また運命なんだよ。)

そう、聞き間違えるはずはない。その声は…

「バル…ディッシュ…?!」

『Yes, sir!!』

そう言うと、アリシアの体は光に包まれ……私の手には、待機状態のバルディッシュが握られていた。

『Fate · We were one every two people · Because of From the beginning · Indefinitely』(フェイト。私たちは、二人で一つだったんだよ。最初から…いつまでも…)

そうだね…そうだったんだね、アリシア。

「夢は…覚めるもの。そして…新しい夢が始まる。でも、その夢を見るのは…ずっと先…」

私はバリアジャケットを展開させ、バルディッシュを構える。

「だから…いくよ、アリシア…」

『It is different · Calling You r mate · My name · The name of the cane of the thunder…!!』()
違うよ。呼んで。貴方の相棒の…私の名を。雷の杖の名を…!!()

そっか…そっだよね…!!

「…行こう！バルディッシュ…!!」

『Zamber form』

アリシア姉さん…いや、バルディッシュはザンバーフォームに移行する。

「疾風、迅雷…スプライ…」

私がバルディッシュを振るおうとした…その時だった。
フェイトSideout

混沌たる闇から、ソレは姿を現した。殲滅者は氷結の黒騎士の前に。襲撃者は運命の稲妻の前に。そして、闇の王は力の奪還者の前に。そう、それは…

「くっ！？閉鎖領域だと…エイミー!？」

クロノは念話を送ったが、それはノイズによってかき消されてしまった。

「捕えました…オリジナル…ではありませんでしたが、まあいいでしょう。貴方も私の糧となっております。」

その黒服の少女は、目をつぶったままそう言う。その姿にその声。それは…

「高町…なのは…じゃ、ないな。」

「はい。私と彼女は、似て非なるもの。星光の殲滅者…これが、私の名の様です。どうかお見知り置きを。」

そう言って、星光の殲滅者と名乗った少女は頭を下げた。

「僕の名は、クロノ・ハラウン。お前が、闇の欠片の中枢なのだ。できれば話し合いで解決したい。武装を解除してほしい。」

そう言うクロノ。だが

「それはできません。我らが望むは、永遠の闇。混沌たる世界。それを止めるのであれば……」

星光の殲滅者は、デバイスをクロノに突きつけていった。

「いかなる障害をも…滅します。」

一方フェイトも、精神世界で中枢の内の一人に捕まっていた。それは、自分とよく似た姿をした青髪の少女だった。

「お前がオリジナルか……」

「だ、誰!？」

フェイトに少女は名乗った。

「僕の名は雷刃の襲撃者。僕は君を倒す!!」

問答無用で攻撃してこようとする雷刃の襲撃者に、フェイトは説得を試みる。

「ま、待って！話を聞いて！！」

だが、彼女は聞く耳を持つとはしなかった。

「僕の存在理由は…フェイト・テスタロッサ。君を殺し、世界に永遠の闇をもたらすこと。大いなる闇の前に、君は死ぬ。僕は飛ぶっ！！」

雷刃の襲撃者は自らのデバイスを鎌状に変形させると、大きく振りかぶってきた。

無数の闇の欠片との戦いでボロボロになったゲッター1…巴武蔵の前に現れたのは、なんと八神はやてにそっくりな少女だった。

「なっ！？はやて…ちゃん…じゃない！おいおい、お前一体何者だ？」

そんな武蔵の態度に逆切れした少女は言った。

「黙れ！この塵芥！！あんな小鳥と一緒にするでない。我は闇統べる王…その闇の彼らの王よ。ククク…ハーツハツハツ！！」

そう言っただけで高笑いする闇統べる王。武蔵はちよつと困った様子で言った。

「あー…気分乗っているとこ悪い。んで、お前があいつらの大将と。」

「なんだと！芥が気易く話しかけるな！！」

妙に偉そうなこの少女について武蔵は考えた。あの態度は置いといて、彼女の魔力量は半端なものではない。自らを【王】と名乗っている以上、それなりに何か根拠があるはずだ。ひよっとしたら、彼女を倒す事が出来れば、闇の欠片全体を消滅とまではいかずとも、増殖する事だけは阻止できるかもしれない。武蔵は言った。

「いやいや、ゴミだが高んたか知らねえが、そのゴミとやらの底力…見せてやるぜ。」

「なっ！？ええい、忌々しい奴め。うぬが直々に地獄へ叩き落ちてやるわあっ！！」

先制攻撃を仕掛ける闇統べる王！！

「ひれ伏せ！エルシニアダガー！！」

光の短刀を放射状に撃つ闇統べる王。だが、ゲッター1はゲッタートマホークで切り払う。

「誘導型じゃねえ…へへへ、でかい口叩いた割には大したことねえな。ん？」

バカにされたのがとても気に障ったのか、闇統べる王は激昂した。

「黙れ塵芥！！こんなものはただの小手調べよ。うぬを痛めつけて殺すためのな。」

「おいおい、殺すんだつたら一発でスコンと逝かせてくれよ。あんまもたもたしてると…お前、首と胴体が永遠に繋がらない死にするぜ。」

声色の変わった武蔵。ゲッタートマホークがきらりと輝いた。

チエンジ20 熾烈（後書き）

マジで熾烈です。あ、あと例の三人娘ができました。設定がちよつと違いますが…

チェンジ21 聖夜の贈り物(前書き)

クロノが主人公よりも主人公らしくなっています。気に入ってはいませんが、いけません。

チエンジ21 聖夜の贈り物

クロノの予想していた事は、大方当たっていた。目の前の少女…星光の殲滅者は、高町なのはをモデルにインベーターとDG細胞…闇の書の闇の作り上げたプログラム体だということ。だが

「自動防御に、魔導の威力も装甲も桁違いとはな…悔しいが、僕の攻撃を直撃させても墜ちないとは。」

「お褒め頂き、感謝します。」

言葉遣いこそ丁寧だが、やっている事はなのは以上である。闇の書の機能もあるので、魔力切れなんて事は起こらず、その名の通り、全てを【殲滅】する。そのバリアジャケットもゲッターの装甲と同等かそれ以上の堅牢さを誇り、クロノのステインガーレイが当たっても、かすり傷一つ付かなかった。レイジングハートを模した魔導の杖・ルシフェリオンを駆り、黒き魔法使いが空を舞う。今ここに、二つの漆黒の風が激突した。

チエンジ21 聖夜の贈り物

「全く…おてんばなお嬢さんだ事だ。」

アクセルシユーターの強化版のパイロシユーターを躲すクロノ。残念ながら彼には、なのはの様な火力も、フェイトの様な速さも、ユーノの様な堅牢さも、アルフの様なパワーもない。彼は自分の事を中途半端という。彼の戦いは、相手を徐々に削っていくという、

ユノ曰く「いじらしい」戦い方だが、正直なところ、そのような戦い方しか「できない」というのも、また事実である。現に、タイマン勝負なら、恐らく管理局メンバーの中では最弱かもしれない。だが、戦術や指揮能力では、逆に頂点に立つ男。それがクロノ・ハラウンである。

「貴方の様な戦い方は、嫌いです。」

「それは褒め言葉として受け取っておく事にしよう。」

クロノは感じた。このプログラム…星光の殲滅者は、人格があり、感情がある、と。そしてその基本的な思考は…

（さしずめ…『好戦的ななのは』…って、言ったところだな。）

高町なのはは、基本的に争いを好まない性格だ。言ってることやってる事が違う気がするが、本人はそれを『友情』と完全に思いこんでいるから、しょうがない。けれど、自分からわざわざ喧嘩を売るような事をしなければ、竜馬や将造の様なイカれた思考を持っているわけでもない。基本的には素直な子供である。

だが、星光の殲滅者はその真逆の性格だとクロノは読んだ。彼女は、戦闘が「好き」なのだ。残念ながら、なのはの魔法は基本的にバインドに捕まらなければ楽に避けられる。クロノは攻撃を避けながら、戦略を立てていた。

（なのはの足りない事…それは、戦闘時に的確な判断ができないことだ。僕がなのはに唯一勝る部分だ。どうやら彼女もその類かもしれない…）

星光の殲滅者は、かなりイライラしていた。彼女は心の奥底で思

っていた。自分のオリジナル…高町なのはと全力で戦いたいと。だが、この目の前の魔導師はちょこまか逃げ回るばかりでまともな攻撃一つしてこない…失望はだんだん怒りに変わってきた。

（腹が立ちます…私を馬鹿にしてるのでしょうか。）

クロノは何をしているのかというと、逃げながらストラグルバインドをばらまいているだけ。魔力切れのない星光の殲滅者は、片っ端から撃ち落としていく。無駄と判断したのか、クロノはバインドを使うことすらやめてしまった。その態度は星光の殲滅者を本気で怒らせるのに十分すぎる要素であった。

「貴方…そんなに私に屠られたいのでしょうか？」

そう言う星光の殲滅者に、クロノはにいつと笑って言った。

「まあ、君みたいな美人に殺されるのもいいけど…生憎僕も十年しか生きていないものでね。死ぬのはもうちよつと先を希望かな？」

クロノのものの言いに、いい加減彼女はしびれを切らした。

「もういいです。消えなさい。」

星光の殲滅者は、ルシフェリオンをシューティングモードに変形させる。

（相手が焦り始めたか……来るっ！！）

「ブラストファイアアアアアアア！！」

デイベインバスターの二倍の威力のあるブラストファイアーを発射する。クロノは空中で回避すると

「当たれっ！ステインガー・レイ！！」

またもやステインガーレイを撃つクロノ。自動防御でシールドを張る星光の殲滅者だったが、なんとシールドの位置を予測して、シールドの下から隙間を狙って撃ち込む。だが、強固なバリアジャケットにはそれすらも通用しない。クロノにはスターライトブレイカーの様な『必殺技』が存在しないのだ。

「！？…無駄です。」

クロノの戦闘技術の高さに若干驚きを見せた星光の殲滅者だったが、威力は無いと見ると強気が出る。

「そんなの…やってみなければ、わからないだろっ！！」

クロノはS2Uを振りかざし、接近戦を仕掛ける。

「間合いを詰めれば…いけるか？」

S2Uとルシフェリオンが激突し、火花が散る。星光の殲滅者は、驚きを隠せなかった。なぜなら

（強い…ミッド系の魔導師が！？）

そう、ミッドチルダ系の魔術師は、遠距離戦と得意としている場合がほとんどだ。実際に高町なのはや星光の殲滅者の戦い方は、ま

さに典型的である。クロノは自分の魔法に大した威力がないことを知っていた。彼が鍛えた事…それは、格闘技だった。彼の体に染みついた型。自分でも、それが何なのか思い出す事が出来ない。ストライクアーツとも、この地球の格闘技とも違う型…そんじよそこらの選手とは、技の鋭さも威力も桁はずれだった。

「はあっ!!」

クロノの回し蹴りが星光の殲滅者の後頭部を襲う。右腕で防ぐが、次にはクロノの左の正拳が、鳩尾に入っていた。

「ぐうっ!?!」

バリアジャケットの内側から来る衝撃に、星光の殲滅者の肺にたまった空気が押し出される。体をくの字にまげて吹き飛ばされるが、クロノは追撃をする…が

「距離を取ろうとしているのか?」

クロノがそう言うのと、星光の殲滅者がブラストファイアーを力ウンターに放ったのは同時だった。急停止したクロノの目の前を、ブラストファイアーが通過していく。動きを読まれた彼女は舌打ちした。が、クロノはそれを潜って接近すると

「なっ!?!」

飛び蹴りをかますクロノ。シールドで防ぐが、逆にシールドを蹴って空中で反転すると、S2Uで足元を薙ぐ。空中に飛び上がることで星光の殲滅者は回避すると、ほぼ零距离でパイロシューターを放つ。だが

「くうっ！？パイロ…シューター…！！」

「ううおおおっ！！」

なんと怯むことなく、腕をクロスして頭を隠すと、そのまま突撃した！！魔力弾の当たった個所から血が吹き出る。

「ぬうん！！」

血のついたクロノの拳は、シールドを張る間もなく星光の殲滅者を捉える。

「く…？！」

手で受け止めた彼女の掌からは、鮮血が飛び散った。痛みに顔をしかめる星光の殲滅者。クロノはパンと両腕を跳ね飛ばすと、肘打ちを腹に入れ、蹴りを入れる。だが、決して顔を攻撃することはなかった。絶対に女の子の顔を攻撃しない事が、彼の信条だったからだ。

（いけない…一旦距離を取らないと！！）

そう思って下がろうとするも、クロノはそれをさせない。だが

「！？」

クロノの体がのけぞる。星光の殲滅者がクロノの攻撃を受けながら放った三発のパイロシューターが、彼の背中に命中したのだ。一瞬のすきを突いて、ルシフェリオンをクロノに接触させる！！

嫌みでもなく、率直な感想だった。星光の殲滅者：彼女は理解が
できなかった。なぜ、敵わぬと知って立ち向かうのか。なぜ、絶望
的な状況なのに笑っていられるのか。なぜ、この少年は：立ち上が
るのか。少年から得た答えは、意外なものだった。

「…勝つ？ふふふ…ははははは！！」

クロノは大声を出して笑った。

「確かにこの勝負…君と僕の戦いなのであれば…僕の負けだろう。
だが！この『勝負』は…僕の勝ちだっ！！！」

そう言つて、バリアジャケットの上着を脱ぎ捨てるクロノ。きれ
いな肌の割に筋肉質な上半身。だが…手首に刻まれたいくつもの傷
跡。首にも切り傷がある。自傷した跡だった。

「どういう…事…ですか…」

「そのままの意味さ。確かに僕では君に勝てなかった。だが、僕
が君と戦っている間…中枢となる独自の自我を持つ君達を足止めさ
せる事が出来れば、外にいる仲間が安心して戦える。」

その言葉を聞いた時、思わず星光の殲滅者は声をあげてしまった。

「まさか…貴方は、最初から時間稼ぎが目的で！！！」

「ああ…全力で戦いたいという君には申し訳ないが…ふふ。でも、
さっきのあれが、僕の全力だったよ。」

「そんな…じゃあ、私との勝負を貴方は…！」

彼女は怒りを隠せなかった。クロノにパイロシューターを放つ。立つだけで精一杯のクロノは、そのまま直撃を食らう。巻き起こる煙。だが、煙の晴れたその先には

「なぜ…なぜなのですか…!!」

ふらつきながらも、彼は立っていた。

「…何となくだけど…思い出せたのさ。彼女たちは、昔のじぶ…」

そう言い終わる前に、ブラストファイアーで吹き飛ばされた。うつぶせに倒れ、クロノはゆっくりと目を閉じた。

クロノSide

そこは真つ暗だった。僕は…死んだのか？いや、あの攻撃で死んだとは思えない。ならば、僕は気絶しながら夢を見ているのかもしれない。その時、まばゆい光が突然僕の体を照らした……

「誰…だ!？」

後ろで物音がする。振り返ると、そこに立っていたのは、いつか僕を倒した仮面の魔導師だった。紅い鉢巻きとマントをつけた、黒髪の男…彼は僕に言った。

「お前は…誰だ。」

「名前を聞きたいのは、僕の方だ！お前から名乗れ！！」

僕は反論するが

「思い出せ。あの日【以前】の記憶を。お前は俺を知らない…いや、『覚えていない』。だが、俺は知っている。そうだろう？クロノ・ハラオウン。」

「何で…何で僕の名前を知っているんだ！！」

そのあとに彼から出た言葉は、信じられないものだった。

「それは知っていると。そして君は覚えていないんじゃない。思い出そうとしないだけなんだ…あの日から、いままでずっと。自分自身の心が壊れないために。」

そう言っつて、男は仮面に手を掛ける。

「だが…君は知らなくてはならない。そして、君は死ねない。だからこそ…思い出せ、クロノ。大切なものを、救いたいのならば。」

そう言っつて、男は自ら仮面を投げ捨てた。

「!？」

な…まさか、そんなはずは！！そんな…そんな、事が…

クロノ Side out

「そうか…そう言うことだったのか……」

砂浜に横たわりながら、彼は言う。

「そっだ…だけど……」

彼の目から、涙が流れた。

「畜生…せめて…せめて一発！一発でいい。頼むよ…!!」

彼の体が起き上がる。だが、それは彼の力ではない。彼の体は、バインドで拘束されていた。空に立つは、黒衣の少女。

「貴方は…心に闇が。癒えぬ傷が。」

少女は、その杖を最終形態に変形させる。

「人の心を…読めるのか…?」

少年は言う。少女は、杖に光を灯して言った。

「はい…宿命という戦いの業火にさらされた身を。だから…温かき間に、貴方を。私が…貴方の全てを優しく包みます。だから…貴方も一つに……」

少女は、自らの杖を天に掲げる。

爆発。煙が晴れた先には、傷だらけの少年が、下半身を失った少女を抱き抱えていた。

「負け…ました……………」

少女はそう言うと、むせる。血が少女の魔導の衣装を、少年の体を汚した。

「ありがとう…そして、すまない……………!!」

少年の目には涙があった。少女は細い指を伸ばすと、すっと涙をぬぐう。その手をしっかりと握りしめる少年。

「何故…泣いているんですか？私は貴方を…殺そうとしたのですよ…」

そう言う少女に少年は

「確かにそうだ。だけど…君は僕に、父さんの記憶を見せてくれた。それに…」

少年は、涙を流しながら叫んだ。

「誰にも…誰にも祝福されないで生まれ、死んでいくなんて…そんなの、哀しすぎるだろ！！」

少年の言葉に目を丸くする少女。しばらくして…優しく微笑んだ。

「ふふ…何を言っているのですか？D G細胞の破滅を呼ぶ道具でしかなかった私に…貴方は涙を流してくれてる。私は…幸せ者です。」

「違うっ！僕は正義をかざして君を殺しただけだっ！！」

だが、少女は優しく笑っていた。それが、少年の心を絞めつけた。

「貴方と戦っていく中で…私は、人間らしい感情を得る事が出来ました。」

「あれは…あれは僕の作戦の内です！！」

その時、暖かい光が少女の体を包み込む。その体は光の粒子となり、ゆっくりと天へと還っていく。

「それでは…少しわがままを聞いてもらえますか？」

少女は…星光の殲滅者は、笑って言った。

「目を…つぶってもらえますか…？」

「…ああ。こう…で、いいか？」

言われるがままに目をつぶる少年…クロノ。そして

「ん……………」

「……………」

少女の唇が、少年の唇を奪った。一瞬とも、永遠ともとれる時間。ふっと唇が離れると、少年は目を開いた。

「…なら、僕からも君に送りたいものがある。」

少年は、少女の耳元で何かをそつとささやく。それを聞いた少女の目には…涙が流れた。

「あり…がとう。クロ……………」

そう言いかけて、少女は夜天^{そら}へと還っていった。クロノは仰向けに倒れる。同時に結界は解け、空には星が輝いていた。

「寂しいものだな……………」

クロノが最後に送ったもの。それは…名前だった。

チェンジ21 聖夜の贈り物（後書き）

今回はフェイト対アホの子…ではなく、雷刃の襲撃者です。

チェンジ22 突撃(前書き)

やっと投稿。遅れてゴメンネ

チェンジ22 突撃

クロノが星光の殲滅者と対峙していた同時刻。精神世界のフェイトもまた、自分と同じ姿の雷刃の襲撃者と対峙していた。

「く…！」

雷刃の襲撃者の先制攻撃に耐えるフェイト。そのままバルディッシュを回転させ、柄で殴りつける！雷刃の襲撃者は腕で防御するが、その隙にフェイトは上空へと退避した。

（私と同じ姿…でも、明らかにパワーと防御力が違う…！どう対処すれば…）

チェンジ22 突撃

「もらったっ…！電刃衝…！」

「プラズマランサー…！くっ…！」

フェイトは躲すが、その一発が避けきれず向かってくる。シールドで防いだが

「なっ…！？」

「ただのコピーと思うなっ…！ボクはお前のデータを基にして全能力を1.5倍…それに加え、防御力は高町なのはの二倍にまで強

化されたんだ。劣化版のお前に負けるわけがないっ!!」

「御託を並べたところでっ!!」

二人は同じポーズをとる。

「ハーケン…セイバアアアア!!」

「光翼斬!!」

同じ技が、空中で激突する。爆発。だが、威力を強化調整された光翼斬が、フェイトのハーケンセイバーを押し切る。

「どうだっ!!」

「なめるなあっ!!」

フェイトは力任せにバルディッシュで叩き落とす。

「いつまで続けるつもりだ？往生際が悪いぞ!!」

全ての性能が、劣っていた。それだけではない。

「それに、お前の行動パターンはボクにインプットされているんだ!どう動こうが…」

雷刃の襲撃者は、後ろから奇襲するフェイトを見破る!!

「そんなんっ!?!」

「全部見えてんだよ!!」

右のわき腹に強烈な一撃。フェイトの体は壁を突き破る。追撃をかわしてフェイトは急上昇する。

「はあっ!!」

フェイトの斬撃を片腕で防ぐも、突然フェイトはバルディッシュを上に投げ飛ばした!!

「なっ!?!」

「ううおおっ!!」

なんと拳を握りしめて顔面を殴ったのだ!!一発、二発…最後に回し蹴りを腹に入れて吹き飛ばすと、落ちてきたバルディッシュを手に取り

「いけるか!?!」

プラズマランサーを放つ!直撃!!雷刃の襲撃者はゴシック調の柱に叩きつけられると、がれきに埋まった。が!!

「電刃衝!」

フェイトが接近した事を悟った雷刃は、直進弾を連続で放ってフェイトを牽制する。突撃してくる雷刃。お互いのデバイスをサイスフォームに変形させ、激突する!!

「中々やるけど……やっぱりボクの方が強い!!」

バルディツシュとバルニフィカス。徐々にフェイトが力負けして、魔力刃にヒビが入ってくる。

「おらあつ!!」

雷刃はフェイトに蹴りを入れて距離をとると、バルニフィカスを空に掲げる!!

「天破・雷神槌!!」

サンダーレイジと全く同じ魔法が襲ってくる。だが

「当たるかつ!!」

フェイトは加速して躲すと

「プラズマランサー!!」

反撃するが、これも

「電刃衝!!」

空中で相殺される!!

「弱い弱い!!」

「ぐ…」

一瞬のうちに接近してきた雷刃が、バルニフィカスを斧の形態に

変形してして振りかざす！！フェイトも応戦するが、斬撃のスピードは向こうの方が上なので、フェイトはどうしても力負けしてしまう。雷刃の斬撃が何回かフェイトの体を切りつけ、血が飛び散る。

「どうだ！やっぱり僕のほうがすごいし強いしカッコイイ！」

雷刃がバルニフィカスを振り回しながら叫ぶ。だが、フェイトもバルディッシュを握りしめて言う。

「遊びで…遊びでやってるんじゃないだよ

！！」

そう言って、バルディッシュを振るうフェイト。

「君はボクには勝てない！！」

そう言って雷刃は、バルニフィカスを大剣に変えて、思いっきり振りかぶった。

「砕け散れ！」

巨大な魔力反応に、フェイトの動きが止まる！！

「大技…ッ！？来るっ！！」

「雷神滅殺！極光

斬！！」

「ハア…ハア…ゴブウツ!？」

床のクレーターの中央にいたフェイトは、口からおびたらしい量の血を吐きだした。

「避けきれ…なかった…ツ?!」

「どうだ！ボクの強さ…思い知ったか!！」

雷刃が叫ぶ。

「く…」

フェイトは血反吐を吐きながら、ゆっくりと起き上がる。

「まだやる気かい？君じゃボクには勝てないよ。」

「はは…それはどうかな？」

血まみれの顔でにいつと笑って見せるフェイト。フェイトはバルデイツシュを構えて雷刃に向かって駆け出し、雷刃と再び鏝迫りになるが

「ほらほらほらほらほら！遅い！遅い！遅い！遅い！」

バルニフィカスを振り回しながら、しきりに叫ぶ雷刃。先ほど大ダメージを負ったフェイトは、生きてるか怪しいほどにまでめっ

た切りにされる。そして十何秒かたったとき、ついにフェイトが前のめりに倒れた。

「ぐ……」

「だから言っただろ？君では僕には勝てない……」

そう言って、デバイスを鎌に変形させると

「僕はお前よりも……すごい！強い！カッコイイんだ……」

一閃！！だが、フェイトは地面を転がりながらそれを避ける！！

「プラズマ・スマツシャアアアアアア！！」

プラズマスマツシャアの逆噴射で、一旦距離を取るフェイト。

「離れたところでっ……！！」

そう言って雷刃は魔力を上げ、更に加速してフェイトに向かって襲いかかる。が……！！

「マツハスペシャル……！！」

雷刃は全く臆することなくバルニフィカスを構えて、フェイトの分身の中に飛び込み、高速でデバイスを振るって分身を次々を消していく。そしてあつという間に本体だけが残り、雷刃が狙いを定めて襲いかかる……！！

「終わりだあアアアアア……！！」

だがつー！

「なめるなああああ！ー！！」

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームに変形させると、横に薙ぎ払うー！！デバイスの機能を完全に知っていないフェイトに油断した雷刃は、一瞬だけ回避行動が遅れる。薄いバリアジャケットに横の筋が入り、見えた素肌に赤い筋がくつきりと付いていた。

「……嘘……だろ……？！」

雷刃が斬られた腹を見つめながら歯ぎしりし、バルニフィカスを血がにじむほどに握り締める。怒りに震えて彼女は叫んだ。

「ふざけるな！ボクが…ボクが、あんな人間に負けるはずがないんだ！ボクは、ボクは闇の防衛プログラム中枢の、力のマテリアルだー！！こんな力だけの人間に負けるはずがないんだー！！」

雷刃は続ける。

「じゃなかったら…じゃなかったら、ボクたちの生まれてきた意味は、一体何だったんだよー！！」

フェイトはバルディッシュを構えて、雷刃と再びぶつかり合う。雷刃もバルニフィカスをザンバーフォームに変形させると、二つの稲妻は激突するー！！

（あの子の攻撃…疾風のように速いー！！少しでも油断すれば、その隙を突かれて一気に畳み掛けられる。）

フェイトは雷刃の動きをある程度まで読んでいた。右から、左から、上から、下から、背後から来る攻撃を防御し、受け流す。

(クソッ！！後一撃、後一撃でも当てられたら、ボクの勝ちなのに…ッ！！)

雷刃の心には、焦りといら立ちが生まれていた。そして、ついにしびれを切らす。

「おおおおおお！！！」

雷刃が正面からデバイスを振りかぶる！！フェイトはその隙を突いて前進する！！振り下ろされるデバイス！！フェイトはデバイスのまわりを旋回しながら、雷刃と零距离まで肉薄する。そして！！

「零距离プラズマ・ランサアアアア！！！」

雷刃の腹部に衝撃が走る！！吹き飛ばされる雷刃。壁に激突しそうになるが、ギリギリのところまで止まる！！

「ぐ…」

「まだまだアッ！！！」

フェイトはハーケンセイバーで追撃する！！雷刃も光翼斬で応戦するが、振りがぶろうとしたその時！！

「なっ！！！」

「サンダーレイジッ!!」

一瞬のすきを突いたサンダーレイジが決まる!!そして浮かび上がったところをハーケンセイバーが切り裂き、雷刃は壁に激突、崩れ落ちた。

バルニフィカスを杖に立ち上がる雷刃。彼女は言った。

「ふざけるなよ……人間風情が!!僕は……僕はいずれ王の座を奪い取るんだ!!」

雷刃は、バルニフィカスを構えて足元に魔法陣を展開した。

「たった一人の王様なんて……何の意味があるんだよッ!!」

フェイトは、再び手にバルディッシュのザンバーフォームを握った。

「そんな剣など、僕には通じない!!」

雷刃の周りで稲妻が轟き、刀身に雷を纏っていく。

「そんなの……やってみなきゃ分からないだろ!!」

フェイトのまわりでも稲妻が轟き、刀身に雷を纏っていく。

「母さん……姉さん……リニス……力を貸して!!」

そして

「碎け散れ!雷神滅殺!極光……斬!!」

フェイトは全力で拳を振り上げると、雷刃に刺さったザンバーを殴りつける。雷刃の左胸を貫通すると、ザンバーは光となって消えた。それと同時に、爆発が起こった。

爆発が収まると、雷刃は左胸が吹っ飛ばされた状態で、床に倒れていた。フェイトもボロボロになったバルディッシュ・アサルトを杖に、なんとか立っている状態だ。

雷刃は痛みに顔を歪め、血を吐きながらもフェイトに向かって殺気の籠った視線を向けてきた。

「ぐ……くそ……お、お前の……ような……に、人間なんか……」

まだ負けを認めようとしていないのか、腕を大破したバルニフィカスに向けて、必死に伸ばして取ろうとする。ゆっくりと震える指が伸び、バルニフィカスを掴んだ瞬間、それは粉々に砕け散った。

「ああっ?!」

雷刃の指の間から、空しく砂となったバルニフィカスが落ちていく。何とかかき集めようとするが、力尽きて腕を降ろす。

「……これで勝った気になるなよ……。ボクが終わっても……後の二人が闇の書の防衛プログラムを……DG細胞を完全に起動させれば、ボクは何度でも蘇る事が出来る。その時は……ぐっつ!？」

肉体に限界が訪れたのか、足先から光となって消えていく。

「…なんだよ…なんだよオツ!!」

雷刃が泣きながら言う。

「何でだよ…何でボクだけ…」

雷刃は続ける。

「ボクだって…ボクだって、普通の人間に生まれたかったんだよ!!何でだよ!何で守護騎士の連中だけ…ボクたちは、生まれても生きていちゃいけないって!!」

「やだよお…死にたくないよお…!!」

嗚咽をあげる雷刃に、フェイトは這いずりながら近づき、抱きしめた。

「ごめんね…ごめんねツ!!」

涙を流しながら、雷刃を抱き締めるフェイト。雷刃は言葉を振り絞って言う。

「バツカ…ヤロオ…そんな風にされたら…責められないだろ…」

フェイトは雷刃の手を握りしめる。もう、雷刃の体は胸まで消えていた。

「ふ…ふふ…ボクはいつか必ず蘇る。次は!次はボクが必ず勝つ!!だから…負けんよ。」

そう言って満足そうに笑うと、雷刃は光に消えていった。

フェイトの傷は塞がっていた。雷刃の襲撃者が消滅する瞬間、不得意な治癒魔法を最後の力を振り絞って使ったのだった。砕けたバルニフィカスの欠片を、フェイトは両手で握りしめて言う。

「バルディッシュ、ここから出るよ。ザンバーフォームいけるよね？」

『Yes, sir』

「…ありがとう。」

フェイトはバリアジャケットを展開させ、バルディッシュを構える。

『Zamber form』

バルディッシュはザンバーフォームに変形する。フェイトは言った。

「私は、無様に生き続けるよ…だから!!」

バルニフィカスの欠片が、バルディッシュに吸い込まれる。

チェンジ22 突撃（後書き）

今回は、武蔵と統べ子が戦います。

チェンジ23 回天

海上では、武蔵の駆るゲッター1と闇統べる王が激闘を繰り広げていた。

「消え失せろ！ドゥームブリンガー！！」

放射状に伸びる光の刃を

「遅いぜっ！オープンゲットッ！！」

分離して躲す武蔵。そして

「チェンジ！！ゲッターアアアア3イツ！！」

海に両腕を広げて立つゲッター3。激闘の幕は開かれた。

チェンジ23 回天

「へへへ…いくぜ、ゲッター3！！」

ゲッター3は発射態勢をとると

「ゲッターアアアアミサイイイイル！！」

ゲッターミサイルを発射する！！だが、それは空中で迎撃されてしまう。

「馬鹿が！アロндаイトオツ！！」

王の砲撃魔法がゲッター3に命中する！！が

「へっ、かすり傷だ！！」

流石は3形態中最大の防御力を誇るゲッター3。城塞のような堅
牢な守りは、生半可な攻撃は通さない。

「うっおおおおおお！！！！」

ジェット噴射をしながら、ゲッターアームが王を掴む。

「ゲッターアーム！！どおりやあああああああ！！！！」

力任せに海面に叩きつけるゲッター3。王は海面に激突してバウ
ンドする。そこにすかさず、ゲッターパンチをたたき込む！！

「ぐわっ！？」

「へへ、ざまあみやがれてんだ！！」

そう言って武蔵が笑ったその時だった。

「紫電…一閃！！」

ゲッター3のイーグル号の部分から火花が飛び散る！！凄まじい
衝撃が、突然背後から襲いかかった！！

「うわっ!?!」

武蔵は後ろを振り向くと、そこには見たこともない騎士甲冑を装着したシグナムが、レヴァンティンを振り下ろしていた。

「鉄の鞭!?!」

ゲッター3のまわりを銀色の刃が牙をむく!!

「やべえ! オープンゲットツ!?!」

なんとか躲して、空中でゲッター1にチェンジする武蔵だったが、突然視界が暗くなった。

「なっ…?!」

「ギガントシュラク・ハンマアアアアア!?!」

ヴィータのギガントシュラクハンマーが、真上からゲッター1に振り下ろされたのだ!! 躲しきれず、ゲッターは腕をクロスして防ぐ。だが、ハンマーはゲッターごと海面に叩きつけられ、左腕と右の角の折れたゲッター1が吹き飛ばされていた。

「やるな…ちくしょうめ!?!」

ボタボタとオイルが垂れる。それを見て、闇統べる王は嗤って言う。

「くはははは!?! どうだ? 巴武蔵。ヴォルケンリッターが消滅した今、こいつらが真正銘のヴォルケンリッターだ。仲間によられ

る気分はどうだ？」

「何をっ!! お前だって、俺と戦うのが怖いからこんな手を使ってるんじゃないか。」

「何だと!?! ええい、こいつを破壊しろ!!」

王の命令で、シグナムとヴィータとザフィーラが、同時に行動する。隠れているが、シャマルもいるだろう。武蔵は無手で立ち、じつと睨みを利かせる。武蔵のまわりをグルグルと高速で回る三人。

(竜馬の真似じゃないけど…俺だって!!)

ぎりつと歯を噛みしめる武蔵。三人は回りながら、だが確実にその距離を狭める。

(5メートル…4メートル…まだまだっ!!)

ゲッター1の顔面と左足に傷がつく。シグナムの斬撃だろう。

(まだだ、まだ遠い…)

じつと耐える武蔵。だが、こうしている間にも機体には傷がついていく。

「3メートル…2メートル…今だアッ!!」

武蔵はそう言うつと、海面に膝をつく。と同時に、シグナムが凄まじい速さで突撃してきた!!

「もらったっ!!」

レヴァンティンがゲッター1の首に迫った…その時だった!!

「トマホオオオオク・ブウウウウウメラン!!」

ゲッター1の首に亀裂が走る。自分に向かって投げたとばかりに思ったシグナムは、一瞬だけ動きが止まる。と、それは

「ぐああっ?!」

ヴィータの足もとに血が落ちる。アイゼンを振りかぶったまま硬直するヴィータ。その顔面には、ゲッタートマホークが突き刺さっていた。

「ヴィータ?!」

「すまねえな…ヴィータ!!」

ゆっくりと倒れるヴィータ。その体は光の粒子となって消える。シグナムの腹にパンチを入れるゲッター1!!シグナムが防いだすきを突いて、オープンゲットして後ろに下がる。

「チエンジ!!ゲッターアアア3イッ!!」

海面を水切りのようにバツクするゲッター3!!頭部のミサイルが正面を向く。

「食らいやがれ!ゲッターアアアアミサイイイイル!!」

シグナムにゲッターミサイルを放つ！！だが、それはザフィーラによって防がれる。

「チツ、つたく、たまんねえや！！！」

海面にホバーで静止すると、ジャガー号のエンジンに火を付け、突進する！！

「おらああああああ！！！」

「飛竜…一閃ッ！！！」

シグナムの斬撃が、ゲッター3をめつた切りにする！！傷だらけのゲッター…だが、武蔵は止まらない！！

「ううおおおおお！！！」

ザフィーラをシールドの上から殴り飛ばすゲッター3！！浮き上がった体に、ゲッターアームが蛇のように締めあげられる！！

「元祖！！大・雪・山・おろしいiiiiiiiiiiii！！！」

巨大な竜巻が、ザフィーラの体を切り刻む！！

「ぬ…ぐあっ?!!」

「やっぱりお前たちは偽物だ…奴らはこんなにザコじゃねえ！！！」

落ちてくるザフィーラに、ゲッターミサイルを放つ！！爆発して粉々になるザフィーラ。だが

「ぐう…や、やばいぜ……」

ゲッター3の目はチカチカと点滅し、体のあちこちから黒煙が立ち上る。

「もらうー!!」

シグナムの斬撃が、上から、下から、右から、左から襲いかかる。爆発していくゲッター。そしてついに、左腕が切断された?!

「ぐう…!!」

「どうだ!!片腕を破壊されてはあの技は使えまい!!」

大雪山おろしを封じられた武蔵は、絶望的な状況だった。たとえヴォルケンリッターを倒しても、闇統べる王と補給なしの状態で戦わなくてはならない。だが、武蔵の脳裏にみんなの笑顔が浮かぶ。

「そうだよなア…こんなところで終われないぜ!!」

そう言っつて武蔵は、ゲッターミサイルを発射しようとする。が

「何っ!?!ミサイルのパーツがやられたか!!?」

そう、たび重なる攻撃でゲッターミサイルの発射装置がいかれてしまったのだ。シグナムの連結刃が、ゲッター3の胴体を貫通する!!コクピットの中に炎が上がる。

「決まったか!?!」

「ぬぐつ?!」

衝撃。視線を降ろすと、ゲッター1の腹から女の腕が飛び出していた。

「チツ、避けきれなかったか!」

舌打ちする武蔵。と、その時悪感が武蔵を襲う。

(ま…までよ…ここで炉心が破壊されたら!)

シヤマルは相変わらずコントロールが悪いのか、一発目は外していた。と、その腕を武蔵は無理やり掴む!!

『え…!?!』

「へっへっへ…こいつはお前につながってんだろ?」

そう言って笑つと、武蔵はゲッターマシンガンを自分の腹に向けてる!!

「こいつでどうだああああああ!!」

何と、旅の鏡の中にゲッターマシンガンを撃ち込んだのだ!? 飛び散る真っ赤な血液。飛び出た腕は痙攣すると動かなくなり、旅の鏡の中に消えていった。

「はあ…は…へへへ、どうでえ。お前の持ち駒は無くなったぜ。」

そう言って笑う武蔵。

「塵芥のデバイス風情が、生意気をほざくなあ!!!」

王である彼女は苛立っていた。全てを破壊する【砕け得ぬ闇】、そして【闇統べる王】である自分に対し、単なるデバイス…それも本来の力の30%も出せていないものに反旗を翻されるのは腹が立った。

素直に武蔵が従えば、せめても慈悲を掛けて苦しまないよう一瞬で終わらせてやろうと思っていた。だが、武蔵は完全に彼女の逆鱗に触れていた。後悔させて後悔させて後悔させて、そして許しを請うてきた所を叩き潰し、永遠の絶望の淵で…跡形もなく消滅させてやる!!!そう考えていた。

「悪いなあ、俺もお前にぶつ殺されるわけにはいかねえんだよ。」

事実、それを実現できるだけの力は『王』である彼女にはあった。彼女の魔力資質は、データの基礎とした八神はやてと同様に広域型。圧倒的な火力と攻撃範囲で、空間ごと敵を殲滅するのが彼女の戦闘スタイルである。正確には八神はやてがまだ覚醒していないので、はやてのデータとはいささか怪しいが…

さらに、他の構築体マテリアルと比べ、『王』である彼女は発生した闇の欠片を引き寄せる力が特化している。現に、さつきもオリジナル以上の魔力を持つ、強力な個体を出現させてみせた。さらに、この空間では魔力が底を尽きる事はない。まさに、無尽蔵と称しても差し支えない量の魔力。そして、広域型であるために、一度に放出を可能とする魔力量も桁が違う。連射できる広域型ほど、恐ろしいものはない。避けきれないからだ。

細かい制御は苦手だが、そんなものは物量と火力でねじ伏せる。敵対者が攻撃魔法を使ってこようと、自分はそれを上回る火力で圧

倒して、正面から消し飛ばす。そう、まさに『王』だからこそ可能な戦闘スタイル。悔しくても、人間であるはやてには不可能だ。

実際、ゲッターのミサイル兵器や砲撃でさえ、圧倒出来る。なのはたちと正面からぶつかっても、たった一人で圧倒する事が出来る。竜馬がいても勝敗は分からないかもしれない。

力比べにおいて、武蔵が王に勝てる理由は無かった。勝っている部分と言えば、装甲の厚さによる防御の出力と近接攻撃ぐらいなものだが、そんなモノは『王』の火力の前には、敗北を僅かに遅らせる程度の鉄板一枚にしかならない。

故に、王はこの戦いをただの戯れであり、自身の勝利は揺ぎ無いと思っていた。いや、思い込んでいた。

「食らいやがれっ!!」

ゲッター1が、ゲッターマシンガンを連射してくる。

「フン、馬鹿め!!アロンドイトオオオ!!」

彼女の砲撃魔法がゲッターに突き刺さる。が

「甘えぜ!!」

間一髪のところを武蔵は躲し、ゲッター1はゲッターウイングをその体に纏う。

「ゲッタアアアアビイイイイム!!」

「くぬうつ!?!」

だが、実際に蓋を開けてみたらどうだ。武蔵の放ったスパイラルゲッタービームが、自身を掠めるように四方八方から虚空を撃ち抜く。全てかわすも、その余波でバリアジャケットの一部が黒く焦げた。王による一方的な戦いとなるはずだったこの場合は、お互いに一進一退の攻防を繰り返している。王の力を前にしても、彼は一步も引かず攻撃を放ってくる。いや、確実に前進している。それも、相手は消耗しきった状態：本来の力など、とうに出せなくなっていた。にもかかわらず、武蔵は攻撃の手を緩めない。

（おかしい…何故、何故奴は動けるのだ…！！）

実際には、王である彼女の方が圧倒的に有利な事に間違いは無かった。王のバリアジャケットが焼け焦げたが、その程度は無限の魔力によるリカバリーで、一瞬にして自己修復を完了させる。それに対して、武蔵のゲッターロボ（王はバリアジャケットだと思っている）は、致命傷を負っていた。首の装甲は大きく傷つき、左腕はもげている。痛々しいまでに傷つき、体の節々から黒煙と火花が飛び散っている。

攻撃の頻度にしても、常に弾幕を張って攻撃し続ける王に対し、武蔵の攻撃は微々たる程度。せいぜい自分に向かってきた攻撃をやっと撃ち落とせる程度である。

満身創痍の相手。無傷の自分。エネルギー切れ寸前の相手。無限のエネルギーをもつ自分。誰がどう見ても、戦況は圧倒的。何一つ負ける要素が無かった。だが

「うっおおおおおお！！トマホオオオオク・ブウウウウウウウ
メランー！！」

それが分かっているというのに、そんなものは関係ないと言わん

ばかりに反撃をしてくる彼を見てみると、勝っているという気が湧いてこない。どうして自分の弾幕を受けても平然としていられるのかが分からない。どうして退かないのか分からない。どうして攻め入る事が出来るのか：分からない。それが、苛立ちとなって王を動かす。

「くそ…こんなんで負けるかってんだ!!」

ポロボロになりながらも、立ち向かってくるゲッター。トマホークブーメランといった小技で制空権を奪おうにも、王はそれを上回る火力とスピードと攻撃範囲でねじ伏せてくる。砲撃をメインに攻めようとも、ゲッタービームは接近しなければ放てない。王は接近戦を苦手としているが、相手は片腕を失っている。普通の攻める手立ての、その全てが通用しない。

だが、それでも彼は前進していた。

武蔵は、まともに関戦したところで、王には勝てない事は分かっていた。だが、今まで武蔵の戦ってきた戦いの中で、まともな戦いがあつただろうか。

否、断じて否!!

狂気とも呼べる殺し合いに身を投じていた武蔵の体には、今まで殺してきた無数のハチュウ人類の亡霊がうめき声をあげている。当然のことながら、武蔵は尋常ではない戦い方をしていた。そう、以前に竜馬の友人の男がこう言った。

『明日の為のその1!ケンカは先手必勝じゃ、攻撃し続ければ、どんな奴でもいつかくだばる!!』

直撃。

四方八方からの拡散したゲッタービームが、王を襲う。衝撃が爆発となって視界を覆う。

一撃。

たったの一撃で、武蔵はこれまでのダメージ差を覆した。そして

「ゲッターアアアアトマホオオオオク!!!」

王の放つ弾幕も止まる。そう、すれ違いざまに放たれたゲッタートマホークが、彼女の右腹を切り裂いていた。血が吹き出る。傷を押さえて、はじめて王がうずくまった。

「……認めぬ」

怒りに激昂した王は吠える。

「認めぬ認めぬ認めぬ……うっあああああああ!!!」

一瞬で傷を塞ぎ、眼前にベルカ式特有の三角形を基本とした魔法陣を、白の魔力光で空中に描き出す王。確かなダメージを受けていたが、そのダメージを憤怒に変えて、王は立つ。

「貴様：そこまで王に逆らうというのなら、跡形もなく消し去ってやるっぞ!!」

「へっ、おもしれえ!!! やってみやがれってんだ!!!」

保有する中でも最大の砲撃魔法を繰り出すための魔法陣。本気だ。相手を取り込むには、倒してもその原型を残す必要がある故に設定しておいた非殺傷設定など切っている。

「この塵芥！！我は…うぬの存在など認めぬ！！」

防御など意味の無い超火力。逃げ場など最初から存在しない超広範囲。後悔の暇も与えない。塵一つ残さず…消滅させる。巴武蔵は、闇統べる王にとっては存在してはいけない存在だったのだ。

「絶望にあがけ塵芥…我が闇は永遠よ！！」

凄まじい魔力光が収束していく。

手にしたデバイスを振ると同時に死の宣告を告げ、魔法を完成させる。

「散れッ！エクス……カリバアアアアアッ！！！」

三角形を描く魔法陣、その三つの頂点から彼女の放った砲撃を超える威力の魔力が同時に放たれる。しかもそれだけでは終わらない。単発だけでも必殺のそれは、一つになって直進する。そして、極大の砲撃は阻む物全てを無へと還しながら、直進する。

その射線上に居る武蔵に回避する方法は無い。迎撃も意味は無い。それでも、ゲッターウィングを体に纏い、両腕をクロスするゲッター！。

だが、そんな抵抗を嘲笑うかのように、白い極光はゲッターを呑みこんだ。

「ふははははっ。馬鹿め!!」

それを見届け、王は哄笑を上げる。煙が晴れると、ゲッター1の頭部が完全に消し飛んでいた。

「命乞いしてれば助けてやったものを…フッフ…アーツハツハツハ!!」

最大の砲撃を全力で放ち、頭部の消し飛んだ敵を見ると、先程まで抱いていた怒りや不機嫌も晴れた。手こずらされたが、所詮は道具。王たるこの身が本気を出せば、あの程度の雑魚など屠るのは容易いと高らかに嗤う。

だからだ

「……メラが……」

故に、耳に届いた言葉は最初、単なる幻聴だと思った。

「な……っ!?!」

だが違った。

「メインカメラがやられたただけだぜ!!」

闇統べる王の最大の失策。それは、ゲッターロボの構造を知らなかった事だ。ありえないと王は思う。当然だ。頭を吹き飛ばされれば、どんな人間だって必ず死ぬ。機械だったとしても、無事で済むわけがない。非殺傷設定も切っていたのだから、それはなおの事。

目の前に起こった事態が信じられないまま、徐々に晴れていく爆煙を、呆然と見ていた。

「だ、だが、貴様のエネルギーはもう……!!」

動揺する王。だが、ゲッターはたび重なる戦闘でエネルギーが切れていた。ゲッタービームは撃てない。装甲は見るも無残なまでにボロボロで、辛うじて原形が分かる程度。体中の至る所に亀裂が走り、流す血液が全身を黒く染め上げる。

満身創痍。武蔵は、まさにその言葉を体現していた。だが、驚くべくはその姿ではない。彼はチャンスを掴んでいたのだ。そう、またとないチャンスを。

「いいかヒヨッコ!!奥の手つてのは、最後まで残しておくものなんだぜ!!」

彼は実行していたのだ。王の攻撃を耐え切り、一撃必殺の技を繰り出す事を。

普通なら首をふっ飛ばされれば死ぬし、既にエネルギーが切れているため、ろくな攻撃を使う事も不可能。逆転の手札は無い。そう、竜馬だったらないと判断しただろう。

だが、武蔵の最大にして最強の切り札は、ゲッターの性能に依存するものではなかった。

「オープンゲットツ!!」

3機のゲットマシンに分離するゲッター。その内の、イーグル号とジャガー号が突撃していく。

それを知る。王は悟り青ざめる。今、王の心を占める感情。それは、紛れも無く恐怖だった。

「我は…恐れているのか?!こやつに…!!」

このままでは殺されると逃れようともがく。だが、大雪山おろしの竜巻はそれを許さない。

「オーブンゲット……」

そんな王の抵抗を、彼女は無様と嘲笑ったりしない。ましてや、勝利に酔う事もない。自分の仲間を傷つける奴を、彼は許さなかった。守護騎士をモノとして扱う彼女を、許せなかった。

「アタアアアアアツク!!!」

轟音と共に、オーブンゲットするゲッター3!!緑に輝く二つの光が、大雪山おろしの後で落下する闇統べる王に襲いかかる!!

それは、冷たい夜を突き抜ける、世界を変える風。

「馬鹿なああああああ!!!」

ゲットマシンが王に直撃した瞬間、世界は光に包まれた。

「お、おの、れ……」

フルオーバーのゲッター炉心を積んだゲットマシンの直撃を受けて墜ちた王は、仰向けで海面に倒れ伏していた。

その姿は見るも無惨。目の焦点も合っておらず、物が見えているか怪しい。そして、胸から下は消し飛んでいた。普通だったら原子レベルで消滅するはずだが、王の再生機能はここまで回復させた。だが、それはもう働かない。王の作りだした結界が、すでに破壊されてしまったからだ。

辛うじて呻き声を上げるだけのその姿は、君臨する王の威厳は完全に打ち砕かれていた。そう、まさに哀れだった。

「無様なもんだな…王様よ。」

そんな王の隣に立つ武蔵の姿もまたひどい。というより、立っていない。

唯一残ったベアー号のゲットマシンは、破損により殆ど原型を留めておらず、エンジンは片方が完全に破壊されている。そんな状態で、彼も海面を漂っていたのだ。

「どうだ…これが、人間の力ってなもんだぜ。」

そこに浮かんでいるのは、単なる黄色いドラム缶を小さくしたようなもの。だが、そこからは想像を絶するほどの戦いを潜り抜けてきた覇気がにじみ出ていた。

「わ、我こそが、闇を……、全てを統べる、王、なのだ……っ！
！」

だが、目の見えていない王には、そんな彼の姿など分からない。アイデンティティーである王の尊厳にすがり付いて、結界を壊された事も知らずに、魔力を集めてダメージを修復しようとする。

「かわいそうな奴だぜ……」

「ぐふっ!?!」

血を拭き、もがき苦しむ王。そんな姿を見て、武蔵は言った。

「う……うぬは……ぐ、が、あ……っ!?!」

腹部から光の粒子となって消えていくたびに、王の口からは苦悶の聲が漏れる。

「お前らは……闇の中でしか生きられない……のか。」

「そ……そう……ぐっ!?!」

武蔵は言った。

「そいつは違っぜ。いいか、闇ってのは……影なんだ。つまり、光が無ければ、影もできねえ。逆に、光も影が無くては存在できねえ。」

「なにを……どういう意味……だ……!!」

消えてゆく王に、彼は優しく言った。

「なら言ってやる。お前さん……【光】になってるんだぜ?」

「え……」

その時だった。最後の最後に闇統べる王の視力がもとに戻る。彼女には見えていた。自分の頭をなでる、大柄な男の姿を。

「……言ってみな。お前は、何になりたかったんだ？」

呼びかけると、王は言った。

「そんな……そんな言葉を……かけるような奴がいたとはな……うぬよ、名を名乗れ。」

「巴。巴武蔵だ。」

「特別だ。お前はうぬの家来にしてやってもよいぞ？」

それと同時に、光が王を包む。

「我が名は、闇統べる王にあらじ。我が名は」

光がはじけた後には、何も残らなかった。と、その時だった。どこからか赤ん坊の声が聞こえてくる。一瞬だけ聞こえたその産声。武蔵は悟った。

「そっか……赤ちゃんに、なりたかったんだな。」

武蔵の眩きは、夜明け前の空に吸い込まれていった。

マテリアルが3機破壊された事により、完全に制御がもとに戻った闇の書内部。はやては管理人格のほおにそつと触れて言う。

「…夜天の主の名において、汝に新たな名を送る」

「名…ですか…？」

聞き返す管理人格。そして、力強くうなづく竜馬。

「せやよ。いつまでも今まで言われてきた名前やと悲しいやんか。私はそんなふうに貴方を呼ばせたくない…せやから貴方に送る新たな名は…強く支える者、幸運の追い風、祝福のメール…リインフォース。」

世界が光に満たされる。さあ、風は吹いた。最後の戦いの、ゴングは鳴る……………!!!

チェンジ23 回天(後書き)

チェンジ24 Snow White〜三つの心が一つになれば〜

「ありが…とうございます。では…新名称・リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります。」

「うん。」

光に包まれるはやて。闇の書…いや、夜天の書を抱きしめて彼女は言う。

「ですが、ここからが大変です。防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が、じき暴れだします…そしてその前に…」

「うん…わかつとる。リンカーコア送還。守護騎士システム、破損修復…帰っておいで…みんな。」

チェンジ24 Snow White〜三つの心が一つになれば〜

同時刻 とあるビルの屋上

ふいに、四つの魔法陣が展開し、光と共に四人の人影が現れる。

「竜馬…成功したのか!？」

それを見て、手当てを受けていたクロノが喜びの声を上げる。

「みんな…おいで…」

光の中で手を広げるはやて。だが、その肩を掴む者がいた。

「え…？リヨウ…兄？」

そう、それは竜馬だった。

「てめえ…最後まで黙ってるつもりか？いい度胸してんじゃねえか。」

その言葉は、はやてではなくリインフォースに向けられていた。

「な、何言つとるんや？リヨウ兄！？」

竜馬は言った。

「リインフォース…俺が分からねえとも思ったか？データから無理やり引きちぎったてめえの体…そう長くはもたないはずだぜ。」

「！？」

竜馬は続ける。

「いいか、はやて。良く聞け。こいつは…そう長くはねえ。デビルガンダムを仮に倒せたとしても、もって一週間の命だ。」

その言葉を聞いた時、はやては顔色を変える。

「そんな…な、リインフォース。リヨウ兄は悪い冗談を言っとるんだよなあ。」

「……………」

だが、リインフォースから言葉は返ってこなかった。

「ねえ、嘘って…嘘って言ってよ！！いやだ！リインが、リインフォースが…」

「主…ありがとうございます。私は、世界で最も幸福な魔導書です。ですから、たとえこの後に旅立つ事になっても…悔いはありません。」

「いやや！リインは今まで辛い思いして来て、それなのに…折角折角みんなと…」

両目から涙をこぼれさせるはやて。その時だった。

「…なあ、はやて、リインフォース。」

泣きやみ、振り返るはやて。そこには、竜馬が腕を組み、そつぽを向いて立っていた。

「いいか。一か八かも知れねえが…やってみる価値はある。」

そして、竜馬は正面を向いて言った。

「俺にその命…懸けてみねえか？」

「ゲギヤアアアアアア！！！」

その頃、なのはは禍々しい紫色の球体と対峙していた。あの後、全てのメタルビーストガンダムたちが、特殊な繭を作って融合を始めたのだ。そこにはインベーターの触手とガンダムローズのローゼルビットが飛びまわり、徹底的に外敵を排除していた。

「きゃあっ！？」

ついに避けきれなかったのか、ローゼスビットの直撃を喰らってなのはが落下する。それを追うように、インベーターの触手がなのはを突き刺そうとする！！

「いやああああああ！！？」

死を覚悟して、なのはが目をつぶった…その時。

「サンダアアアア…ブレエエエエエエエエエエク！！」

凄まじいまでの雷光が、触手とローゼスビット消し飛ばす！！その雷光をたどっていくと…

「フェイトちゃん！！」

「なのは！大丈夫！！」

なのはのもとに駆け寄るフェイト。

「よかった…」

「ありがとう、フェイトちゃん!!…あれ?」

胸をなでおろすなのはを、閃光が包み込む。だが、不思議と不安な気持ちはなかった。

「あたたかい…この光は…!?!?」

なのはとフェイトの目の前に、5つの光が舞い降りた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

凜々しい声が夜明け前の空に響き渡る。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

優しいそよ風のごとく、その場を吹き抜ける。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

それは大いなる海。全てを受け止め、全てを壊す。

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に!」

小さくとも、大気すらも震わす威光。ヴィータは閉じていた目を開き、言った。そして…

「リインフォース…私の杖と、甲冑を。」

『はい…我が主。』

はやては杖と甲冑を展開させその姿を現した。

「はやてちゃん!!みんな!!!!」

嬉しそうな声で、なのはは言う。微笑むフェイト。そして

「夜天の光よ我が手に集え。祝福の風、リインフォース!セエエ
エエエツト…アップ!!」

はやては、杖を天に掲げて夜天の書の力を解放する。闇の書の頃の名残であった黒い魔力光は、白へと塗り替わっていく。放たれた光は、はやてのその姿を…騎士甲冑を完全なものにしていく。だが、髪と瞳の色は元のままであった。

「ふふ…やったじゃないか。」

ユーノが笑って、クロノの背中を押す。

「…信じていたからな。何の根拠もないが…でも、僕は信じていた。」

クロノとユーノは彼女たちを見下ろしていた。

「はやて…」

「はやてちゃん!」

「あの…主はやて…」

ヴィータとシャマル、そしてシグナムが声をかける。ザフィーラは静かに目を閉じていた。

「ええよ、まだよく分からなかった所は、管制人格のリインフォースが教えてくれた。」

「はい…」

「あの…それから…」

二人はまだ何かを気にしているようではやてに聞く。

「あ、うん。あ…来たみたいやね。」

轟きを上げて、二つの何かはやてたちを横切る。それは

「まさか…」

「そう、彼らこそが…」

海上では、ボロボロのベアー号が浮かんでいた。

「畜生…!!」

そのベアー号に、メタルビースト・ゴッドガンダムが迫る。合体

せずついに残っていたようだ。

「どつやら、ここまでのようだな……!!」

武蔵にゴッドフィンガーが放たれようとした…その時

「ムサシイイイ!!俺と合体しろオオオ!!」

遙かかなたから飛んでくる、二機のゲットマシン!!バルカンがゴッドガンダムを妨害する!!

「飛べえ!!ムサシイイイ!!」

「お、おう!!」

武蔵はゲットマシンのジェットエンジンを最大にする!!

「ちつ、矢でも鉄砲でも持ってきやがれてんだ。いっけええええええええええ!!」

海を割り、全速で離脱するベアー号。

「竜馬っ!!竜馬なのかつ!!」

三機のゲットマシンが並ぶ。竜馬は言った。

「フツ、俺たちが死ぬわきゃねえだろ?」

「それもそうだな…って、お前!?!」

武蔵はそれを見て驚きの声を上げた。

「話は後だ。…今は奴を叩くぞ。」

「おう…任された!!」

ゴッドガンダムの石破天驚拳をかわしながら、ゲットマシンは雲の中に突入する。雲を突き抜けると、イーグル号、ジャガー号、ベアー号の順番に縦に並ぶと、武蔵はエンジンを唸らせた!!

「ゲッタアアアア!!」

武蔵のベアー号が変形したジャガー号に合体した時だった。

「チエエエエエエンジン!!」

綺麗なソプラノボイスと同時に、凄まじいまでのゲッターエネルギーが放出される!!

「大丈夫か!？」

「あ、ああ…私は平気だ。」

竜馬の応答に、ジャガー号が答える。その時、不思議な事が起こった。なんと大破していたベアー号が、ゲッターエネルギーを浴びたからか、新品同然に修復されていたのだ!!それだけでなく、ゲッターミサイルの残弾やエネルギーも最大にまで回復していたのだ。

「いくぞ!!」

と、その時、なのはとフェイトの後ろに少年が降り立つ。クロノだった。

「空気が読めん事は自覚しているのでな、手短に説明させてもらおう。」

「とか言っというて前置き長いじゃねえかよ……」

クロノは竜馬を無視して説明を開始する。

「今、あの黒い球体に全ての防衛プログラム……いわばインベードーとメタルビーストの集合体は、内部で分裂・融合をしていることがわかった。」

「馬鹿でけえ野郎か……目障りだぜ。ぶっ殺してやる。」

「だが、破壊する方法が無ければどうしようもなかつ。」

シグナムが言つと、クロノが答えた。

「これから先は総力戦になる。敵も、雑魚一体であれほどの強さを誇っていたんだ。あれが全部合体したら……」

「勝算が無くとも、戦わねばなるまい。ヤツを野放しにしては、いずれ地球全体が食われる。」

「ザフィーラさんの言つとおりだ。僕たちは何としてもアレを破壊しなければならぬ。そこでだ……停止のプランは現在二つある。」

「

そう言ってクロノは待機中のデュランダルを出した。

「一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ目は軌道上で待機している艦船アースラの魔導砲・アルカンシエルで消滅させる。これ以外に、他にいい手はないか？ 闇の…失礼、夜天の書の主と、その守護騎士の皆に聞きたい。」

それにシャマルがすまなそうに手をあげて答えた。

「えつと…多分、最初のは難しいと思います。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから…」

「ああ、凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらない。」

それにシャマルとシグナムが答える。

「なんだ、シャマルとシグナムにしてはマシな作戦が思いつくじやねーか。」

「「うるさい…！」」

すると、ヴィータも頭の上で×を作って言った。

「アルカンシエルも絶つつ対ダメー！こんな所でアルカンシエル撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

「え〜と…そ、そこまで凄いの？」

なのはが疑問の声を上げると、ユーノが答えた。

「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起させる魔導砲って言うのと大体分かる？」

それにザフィーラが付け加えた。

「あつはっは！見る！！人がゴミのようだ！！！！はっはっはっは！！！！に近いな。」

「さっすがザフィーラさん、わかりやすい！！」

「地味に声真似うまい！！」

「君はラピユタ王の前にいるのだよ？言葉を慎みたまえ。」

「…僕の立場は何？」

ユーノが少し凹んでいた。だが、そんな事など全く気付かないのがなのはクオリティである。

「えっと…あ、あの！私もそれ反対！！」

「同じく、絶対反対！本当に！！」

「僕も艦長も使いたくないよ。でも、あれの暴走が本格的に始まったら、被害はそれより遥かに大きくなる。」

「暴走が始まると、触れたものを侵食して無限に広がっていくから。」

さて、ここで言うのは簡単だが・・・ま、皆で考えてくれや。ギリギリまで言わんぞ？決して説教の仕返しではない！！

『はい、皆！暴走臨界点まで、あと15分切ったよ！！会議の結論はお早めに！』

『おいおい、地味に長いな・・・』

つまらなさそうに武蔵が言った。

「何か無いか？」

クロノが再びシグナム達に言う。

「すまない。あまり役にたてそうにない。」

「暴走に立ち会った経験は我らにも殆どないのだ。それに、数少ない経験と言ってもすでに何代も前の話であり、もはや磨耗してしまっている…零といっても良い。」

そしてインベーターを見たのも初めてだと付け加えた。

「でも、何とか止めないと…はやてちゃんのお家がなくなっちゃうの嫌ですし。私の松田優作の写真集が…」

シヤマルが真顔でそう言った。

「いや、そういうレベルの話じゃないんだがな。」

「違う！『野獣死すべし』や『蘇る金狼』の劇場用限定ポスター

やパンフレットやレコードやサインや…」

だが

「まずい… 『必殺必中仕事屋稼業』の本放送VHSが!？」

「ア…アタシの100体限定の『超合金魂カントムロボ』初期オ
ープニングVer」とノロイウサギが!！」

「…我の…い、いや、何でもない。」

ヴォルケン組がすんごく真剣そうな顔で考え込んでいた。

(私の等身大フェイトちゃん抱き枕もやばいの!?)

なのはも冷や汗をたらたらと垂らしていた。

「…馬鹿か、てめえら…」

竜馬の後に、ユーノが言った。

「戦闘地点をもっと沖合いにできれば…」

「海でも空間歪曲の被害は出るさ。魚がムルチになったりだ。」

竜馬は腕を組み、考えた末に言った。

「ツインテールって…エビの様な味がするんだってな。」

そう言って竜馬は、なのはとフェイトを見た。

「でも…ここじゃなければ…」

「「「あ！！！？」「」」

（フツ…気付いたか…）

竜馬は仮面の下で笑った。

「クロノ君！！アルカンシエルって撃つ場所の制限ってあるの！
！？」

まずなのはが声を上げた。

「制限…いや、特には無いが一体…？」

「例えば今アースラがいる…」

「軌道上の…宇宙空間とか！！」

続けてフェイトとはやてが意見を出す。

「結果はどうなんだ？エイミィ。」

彼女はドヤ顔で言った。

『ふっふっふ…管理局のテクノロジー舐めたらあかんですよ大将
！！撃てますよ…宇宙だろうがクロノ君の部屋のベットのくだらろ
うが…！！』

『…おい、坊主。』

竜馬はこっさりクロノに念話を送った。

『…今時そんなところに…ハハハ』

余裕綽々のクロノ。だが、次の言葉を聞いた瞬間に、彼の顔は青ざめた。

『ふうくん…じゃあ、今ここでクロノのPCの『おつづぎだえしよえ』のフォルダー…開いちゃおっかな〜〜』

ピク…

クロノの肩が震えた。その瞬間、竜馬は全てを悟った。

『…何も言わねえ。』

(ウソだ…あれは何重にもロックした上に隠しファイルにしておいたのに…!!?)

『あ、あとね、見つけたのリンディさんだから。』

それを聞いた時、クロノは真っ白な灰となった。

「あ、あのさ、エイミィ…」

クロノは虚ろな目で言った。

「……………見た？」

『……………バツチシ』

その瞬間、クロノはサラサラと崩れてどっか飛んでいってしまっ
た。

『うーん…まったく、相変わらずというか、今までに増してと言
うか…まさかこういう展開になっちゃうなんて。』

『計算上では、実現可能ってのがまた怖いですね。クロノ君、こ
っちのスタンバイはオツケー。暴走臨界点まで、あと10分!!あ
とクロノが意外とマニアックだったですね。』

リンディとエイミイが言う。

「実に個人の能力頼りでギャンブル性の高いプランだが、まあ…
やってみる価値はある。」

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずは
それを破る。」

「バリアを抜いたら本体に向けて、私たちの一斉砲撃でコアを露
出。」

「そしたらユーノ君たちの強制転移魔法で、アースラの前に…転
送…!」

『あとはアルカンシエルで蒸発…と?』

『うまくいけばこれがベストですね…みんな!気張っていこうね』

『!』

「「「「「はい！！！！！！！！！！」」」」」

それを聞いて、竜馬は血に飢えた獣の様な笑みを見せた。

「いくぜ…用意はいいか？リイン！武威！！」

『了解した！！』

『いつでもいいぜ、竜馬！！』

竜馬はすうつと息を吸い込んで…言った。

「ゲッターロボ…」

「「「発進！！！！」」」

チエンジ24 HEATS 冷たい夜を突き抜ける

ゲッターが飛び立とうとした時だった。

「クラールヴィント、本領発揮よ。」

『Ja』

そう言っつてクラールヴィントにそつと口付けをするシャマル。意外となのはとシャマルの共通点でもある。

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで!」

治癒魔法が発動し、緑色の魔力光がなのはとフェイト、そしてクロノを包み込み、戦いで受けた傷を癒していく。

「湖の騎士シャマルと、風のリング・クラールヴィント。癒しと補助が本領です。」

優しく微笑むシャマル。なのはとフェイトは称賛の言葉を贈った。

「凄いです!」

「ありがとうございます、シャマルさん!」

そしてクロノも…

「ありがとう…そして、済まなかった。」

そう言っ頭を下げるクロノを見て、シヤマルははっとする。クロノの父親は、自分たちが殺したのと同じだということに。あの時自分に向けた彼の憎悪は、相当なものだった。彼が自分の感情を押し殺しているのを見ると、シヤマルは心を締め付けられるような感覚にさらされた。何か言葉をかけたい。だけど、言葉が見つからない。そんなもどかしい感情は周囲にも伝播し、気まずい雰囲気になってしまった。

「ごめんなさい…とは言わないわ。だって、あなたの望んでいるものは、そんな言葉ではないものね。」

シヤマルはクロノに言った。

「…こんなことでああなたの心は晴れるかわからないけど、私たち全員、思いつきり殴って。でも、それはすべて終わった後でいいかしら。」

シヤマルは全員に向き合って言った。

「だから…勝ちましょう。みんな…！」

「はい…！シヤマルさん…！」

「…はいっ…！」

「せやな、シヤマル…！」

「お前が仕切るとはな…よかるっ…！」

「おう…！たりめえだ…！」

「承知した。」

「フツ…わかったぜ!!」

『フフフ…こうだったのも、悪くはないものだな。』

『いくぜ!!底力を見せてやろうじゃねえか!!』

皆がそれぞれ答える。と、エイミーから通信が入った。

『みんな!暴走臨界点まであと…30秒!!』

どす黒いドーム状の物体から、魔力が溢れる…その周囲にもガンダムヘッドが何本も生え始める。

「…来るぞ!!総員、対振動防御!!」

クロノが叫ぶ。

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の、闇…デビルガンダム!!」

チエンジ24 HEATS…冷たい夜を突き抜ける

はやてが口にしたと同時に、黒いドーム状の魔力がはじける。中から現れたのは、グランドマスターガンダムとあともう一機、ゴッドガンダムの上半身にドラゴンガンダムの背中、ガンダムマックス

て、ガンダムを拘束する。

「チエーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

それを繰り出したのはアルフとユーノだった。が、突然海面からガンダムヘッドが飛び出して襲いかかってくる！！

「ぬあっ！？ゲツタアアアアアアアア！！！」

間一髪で回避する竜馬。だが、ガンダムヘッドは不慣れなリインの駆るジャガー号に狙いを定めた。

「や、やべえ！？避ける、リイン！！！」

「クソッ、ううおおおおおおお！！！」

初めて乗ったとは思えないような機動でかわすリインフォース。だが、ついに一匹が回避を突き破って襲いかかってきた！！

「し、しまった！？」

が

「縛れ！鋼の軛！！でえりやあああああ！！！」

ザフィーラの鋼の軛が、ギリギリのタイミングでガンダムヘッドを薙ぎ払う！！

「盾の守護獣…貸し一つだな!!」

「フツ…それと俺の名はザフィーラだ。覚えておいてもらおう、祝福の風よ。」

そう言っつて、二人はにやっつと笑った。

「よし…いくぞ!!化け物に、目に物見せてやる!!」

ゲットマシンが海中に潜る。その直後、金色に光るゲッターアームが、グランドマスターガンダムをぐるぐるに縛り上げる!!

「キシヤアアアアアア!!」

「チエンジ!ゲッター3!!」

武蔵の声と同時に、グランドマスターガンダムの体がゆっくりと回転を始める。その周囲の海は渦となり、海面から竜巻が昇る!!

「元祖!!大・雪・山・おろしいiiiiiiiiiiii!!」

信じられない事に、竜巻の乗りながら巨大なグランドマスターガンダムの体が宙を舞ったのだ!!その勢いはすさまじく、あれほど巨大な体が空に消えるまで高々と放り投げられる!!

「今だあつ!!グイータツ!!」

「おうよ!任されたツ!!」

きりもみ状に上昇するメタルビースト・グランドマスターガンダ

ム。その上空に、その小さな体には見合わぬ巨大な鉄槌を握りしめる少女がそこにいた。

「我は鉄槌の騎士・ヴィータ！！そして相棒、鉄の伯爵・グラーフアイゼン！！！」

『G i g g a n t f o r m』

アイゼンはカートリッジをロードして変形する。そして鉄の槌を渾身の力を込めて振り上げる！！

「はああああ…轟・天・爆・砕！！！」

振り回すたびに、アイゼンは巨大化する！！その大きさは、100メートルを優に超えている！！

『奴め…物理法則もあつたもんじゃねえな。』

「ギガントシュラアアアアアアク・ハンマアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

凄まじい勢いでグランドマスターガンダムを叩き潰すヴィータ！
！マスターガンダムの部分がぐちゃぐちゃにつぶれ、装甲の裂け目からインベーターが這い出して蠢いている。空中で加速したグランドマスターガンダムは、海面に叩きつけられる！！

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン。行きます！！！」

『L o a d C a r t r i d g e』

レイジングハートに連続でカートリッジをロードさせ、なのはは構える。だが

「キシヤアアアアアア！！！！」

シャッフルゴッドガンダムがローゼスビットで妨害する！！無数のビットはなのはのみならず、全員に放たれる。

「きゃっ！？」

なんとかかわすなのは。だが、こうしている間にもダメージを受けているグランドマスターガンダムは再生を始めている！！そしてその一発が、戦闘に不慣れなはやての背中に襲いかかった！！

「え…?!」

「逃げて！はやてちゃん！！！」

なのはが声をかけるが、間に合うタイミングではない。向こうは銃弾と同じスピードで移動しているのだ。なのはは次に起こる惨劇を予想し、体の筋肉が硬直する。それは皆も同じだった。声すらも出す事が出来ない。悪魔の銃弾がはやての心臓をかつさらおうとした…その時！！

「ロオオオオゼス・ビットオツ！！！！！」

それは、無数の薔薇だった。外見は両方とも全く同じだが、新たに現れたローゼスビットは次々とメタルビーストのローゼスビットを撃墜している。その先には、敵であるはずのガンダムローズが静かに立っていた。

「え…?!」

『大丈夫かね？お嬢さんたち。』

ガンダムから響いてくる声。それを聞いた時、クロノは驚きを隠せなかった。

「グ…グレアム提督!？」

『ピンポーン』

そう言っつてサムズアップするガンダムローズ。それを見て竜馬は

『なんだと…あのロリコンだとおおおお!!?!?』

『ロリコンだとは人聞きの悪い。私はごく普通の時空管理局提督…強いて違つところを上げるとするならば、小さな女の子に興味があるつてことかな…』

『だからそれがロリコンだつ』

の!!?!?』

そう言っつて投げた竜馬のゲッタートマホークを、指一本でピンと弾くガンダムローズ。彼は言った。

『さて…遊びはここまでだ。援護射撃は任せたまえ。今がヤツを破壊する最大のチャンスだ。』

グレアムはなのはに指示を出す。

『さて…高町さん。敵の攻撃は気にするな。君はヤツに一撃を加えることだけを考えるんだ。いいね?』

「は…はいつ…!お願いします…!」

ガンダムローズが盾になり、なのははグランドマスターガンダムへと肉薄する。その道中で襲いかかるビームや触手を、ガンダムローズが切り払っていく。

『いまだアツ…!』

「エクセリオン・バスタアアア…!」

『Barrel shot』

ガンダムローズの盾の下から、なのははバレルショットを放つ。鋼の如き空気の弾が、グランドマスターガンダムを押しさえつける。

「ブレイク…シューート…!」

四つの砲撃が一つになり、巨大な魔力の塊がグランドマスターガンダムのだ真ん中の装甲を撃ち抜く。そしてなのはは、レイジングゲハートを切り替える…!

「レイジングゲハート、動力を魔導からゲッター炉心へと変更…!」

『All right』

切り替えを済ますと、なのはは撃ち抜いた装甲に向かって

「ゲッターアア

ビイイ

ム!!」

ゲッタービームを撃ち込んだ!!

「クキヤアアアアア!?!?!?!?」

「次!シグナムとテストロッサちゃん!」

シャマルが次の指示を出す。二人はシャッフルゴッドガンダムの前に立ち、カートリッジを装填する。

「剣の騎士・シグナムが魂、炎の魔剣・レヴァンティン!!」

シグナムはレヴァンティンを鞘から抜き、空に掲げる。その銀の刀身は月の光を纏い、淡く輝く。その光は炎と相反して、氷の如き冷たい輝きを放っていた。

「刃、連結刃に続く、もう一つの姿を…!!」

そう言って、鞘と刃を一つにつなぐ。そして広がるもう一つの姿…大弓と為す。その姿は大きく翼を広げる鷹の如く。

『B o g g e n f o r m』

弓を構え、カートリッジロード行つ。その矢は炎を纏い、そして

「駆けよ…隼ッ!!」

『S t u r m F a l k e』

炎を纏った矢は左右に炎を放ち、火の鳥となる。それがシャツフルゴッドガンダムの猛攻を潜り抜け、ゴッドガンダムの頭部を吹き飛ばす！！

「クキヤアアアアアア！！！」

頭部を失ったシャツフルゴッドガンダムは、かりそめの頭部を再生する。それはインベーターの頭部だった。右肩からビームハンマーを射出し、振り回す。そして加速させてフェイトに向かって投げ飛ばした！！

「フェイト・テストロツサ、バルディツシュ・ザンバー…出るツ！！！」

だがしかし、フェイトは臆することなくバルディツシュを構える。連続で3発ロードさせると、逆にビームハンマーに向かって飛び立った！！

「ジェットザンバーで…沈めツ！！！」

『Jet Zamber』

フェイトの斬撃は、シャツフルゴッドガンダムの右腕を斬り落とした。体液を撒き散らすシャツフルゴッドガンダム。フェイトは振り下ろしたザンバーの刀身を横に寝かして再度構える。

「まだまだアツ！！！」

今度は真横に敵を両断する。奴の装甲も、フェイトの斬撃の前には紙と同じ。横に切り裂くと、フェイトは上空に急上昇する！！

燻し銀のジャガー号の部分に金に輝くベアー号、そして漆黒のイグル号。ゲッタードリルには金色の刃が四列に並び、その目は右が潰れ、左は光を失っている。その中央で不気味に赤くぼんやりと光るモノアイ。それは…ブラックゲッターの第二の姿。

「ドリルアーム!!」

後方からジェット噴射をしながらドリルが高速回転をする。超高速で海の上を走るゲッター2。あまりの速さに、機体が沈む隙を与えない。

「ぶち抜けえええええ!!」

背中 of 装甲が持ち上がり、そこからジェットエンジンが露出する。ブースターで飛び立つと、グランドマスターガンダムの胸部を貫いて上空に舞い上がる!!

「止めは頼むぞ、武蔵!! オオオオオープンゲエエエエエエエエエエツ
!!」

リインフォースの叫びと共に、再びオープンゲットすると今度は海の中に突入する。グランドマスターガンダムの真下で合体すると

「海中戦はわしの十八番じゃあ!! チェイイイインジ!! ゲッター
アアアアア3イツ!!」

武蔵はゲッターアームを絡めると、必殺のあの構えをとる。

「ううおおおおおおおお!! 大・雪・山・おおおおおろし
いいいいいいいい!!」

海から竜巻が起こり、空の彼方へとグランドマスターガンダムが吹き飛ばされる。

「ゲッターアアアアミサイイイイイル!!」

とどめのゲッターミサイルを喰らい、グランドマスターガンダムは四散した!!

「やったあ!!」

喜びの声をあげるなのは。だが、クロノの顔は晴れない。

「いや…これからが本番だ。」

「え…!?!」

バラバラになったグランドマスターガンダムとシャッフルゴッドガンダム。その破片が蠢くと、黒い化け物の姿になる。

「うわぁ…キモッ!!」

思わずアルフは不快感を露わにする。DG細胞の部分を大方やられて、インベーターの姿に戻ったのだ。それが黒い魔力の塊の中へと吸収されていく。そして全てが吸収された時、閃光と轟音が走った。

「あ…あれは…?!」

閃光の先から現れたもの。それは…全長3000メートルもある、

チェンジ25 ETERNAL BLAZEあの日胸に灯った永遠の炎

ついに姿を現したデビルガンダム第二形態。それを見てリインフ
オースが言う。

『フツ…あんなもの、真正面から風穴を空けてやればよかるう。
竜馬ッ!!』

「チツ、急かすなよ…俺は暴れたりねえんだよ!!」

ゲッター1は真つ先にデビルガンダムに突撃すると、ゲッターウ
イングを体に纏った。

「おおおおおおお!!ゲッタアアアアビイイイイイイム
!!!!」

チェンジ25 ETERNAL BLAZEあの日胸に灯った永
遠の炎

スパイラルゲッタービームを放ちながら、ゲッタートマホークで
触手を切り払っていくゲッター。だがデビルガンダムは全身からミ
サイルを発射して迎撃する!!

「避けきれねえか…オオオオオープンゲットッ!!」

ぶつかるとギリギリのタイミングでオープンゲットをするゲッター。
対象を失ったミサイルは急ぎよ方向転換しようとするが、間に合わ

ず空中で激突し、爆発する。その炎の中からゲッター2が躍り出る！！

「ヤツを破壊する最大のチャンスだ！！ドリルアーム！！！」

ミサイルをゲッタービジョンを駆使してかわすと、ドリルアームをデビルガンダムの胸に突き刺す。本来生体コアがあるはずの部分には、どこかリインフォースに似ている紫の肌の人が生えていた。

「目障りな姿だ…永遠に眠っているッ！！」

ドリルアームが胸に突き刺さると、おびたらしい血液を噴き上げて生体コアは悲鳴を上げる。そこにすかさず左手のマニピュレーターで生体コアの頭部をつかむと、回転させながら首を無理やり引きちぎる。若干微笑んでいるが目が絶対笑ってないリインフォースを見て、竜馬と武蔵は悪寒が走った。

「リ、リインフォース…なぜか知らへんけど、キレてへん？」

「そ、そうだよね…」

いくら機械の部品とはいえ、人間そっくりのものの首がもがれる光景を見て、気持ちのいいはずはない。はやてに閉じては若干吐き気を覚えたが、なんとか我慢した。その時だった。

「なに…！？」

突如ゲッター2の動きが止まった。そう、コアに突き刺したドリルが急に抜けなくなったのだ。すると突然、ドリルがデビルガンダムの肉の色に徐々に侵食されはじめたのだ！？

『まずい、取り込まれるぞ！！リイン、ドリルミサイルで切り離せ！！そしてオープンゲッターで離脱しろ！！』

「わ、わかった！！」

竜馬の指示で、リインフォースはドリルミサイルを放ってドリルを切り離す。ドリルが完全に侵食されたのはその直後だった。竜馬の指示が少しでも遅れていたら、ゲッターごと取り込まれてははずだ。そう思うとリインフォースは寒気がした。すぐにオープンゲッターとして空中でゲッター1にチェンジすると、なのはたちの元まで帰還した。

「見たか？ヤツに接近戦は危険だ。武器やデバイスごと取り込まれかねない。」

『…それじゃあ、俺のゲッター3やベルカ組はきついな。敵に接触しなければ大技を使えねえ。』

武蔵の言うことは正しかった。少しでも手数を多くしたいが、一瞬のミスで命を失いかねない。はたしてその一撃が命を張るほどの価値があるのかといえば、そうではない。ベルカ組の遠距離攻撃の少なさは、ここにきて致命的になった。

「竜馬さん！！ゲッタービームの一斉射撃なら！！」

「フツ…わかったぜ！！」

だが、ここで退くわけにはいかない。なのはと竜馬は並んで立つと、同時にエネルギーをチャージする。

「いくぞおっ!!」

「はいつ!!」

「ダブルゲッターアアアアビイイイム!!」

レイジングハートとブラックゲッターから、同時にゲッタービームが放たれる!!だが、直撃したところでデビルガンダムはすぐに修復してしまう。

「チツ…次から次へと!」

そんな彼らを嘲笑うかのように咆哮するデビルガンダム。打つ手はなしと思われた…その時だった。

『竜馬あ!!そこをどけええ!!!!』

スピーカーからノイズの混じった音声が鳴り響く。と、その時だった。

「なっ…!」

竜馬たちの見たもの。それは、海から発射された無数のミサイルだった。

「わはははは!!最高の花火じゃのう!!」

「へい、旦那。きっと奴らも喜んでまっせ!!」

岩鬼将造は、嬉々としてその光景を眺めていた。そして凄まじい笑顔を浮かべながらガトリングを手に走り出す。

「わははははは！！竜馬ああああ！一人だけ何楽しい事してるんじゃない！わしも混ぜろおおおおお！！！！」

「くう……！！！」

「なっ……正気か、あいつは！！！」

将造の放ったミサイルは、逆になのは達に被弾してダメージを与えてしまった。だが、少しはデビルガンダムを足止めさせることはできたようだ。と、その時だった。

『見る、竜馬！！！！』

ラインフォースが竜馬に言う。

『さっきのミサイルで、奴の装甲にヒビが入っている……このまま一気に叩き掛けて、コアを露出させる！！！！』

「わ、わかったぜ！！チビ助ども、動けるか？」

竜馬は皆に声をかける。多少は喰らったものの、大丈夫と皆は声をそろえる。

「皆殺しにしてやるぜ！！ゲッタアアアアトマホオオオオオオオオク！！！」

触手を叩き切りながら、接近する竜馬。その横をシグナムが並走する。

「ゲッターチェンジアタックからの大雪山おろしで、奴を空に投げ飛ばす。その隙に叩け！！チャンスは俺たちゲッターチームが作る！！」

「了解！！うまくやれよ、竜馬！！リインフォース！武蔵！」

シグナムを抜き去り、ゲッターはオープンゲットして接近する。

「チェンジ！ゲッター3！！大雪山おろし！！！！」

ゲッター3にチェンジしたと同時に、大雪山おろしをしかけるゲッター3！！流石に完全に持ち上がりずとも、デビルガンダムは竜巻によってダメージを確実に受けている！！

「オープンゲット！！」

再び分離するゲットマシン。それは螺旋を描きながら上昇する。

「チエエエエンジン！！ゲッタアアアアア・ウワンツ！！ゲッタアアアアトマホオオオオオク！！！！」

上空でチェンジしたゲッター1は、ゲッタートマホークで斬る…というより叩き落とすと、瞬時にオープンゲットして倒れるデビルガンダムを追いかける！！

「とどめは私だ！チェンジゲッター2！！ドリルアアアアアム

「……！」

ゲッター2のドリルは、同化させる隙を与えず、デビルガンダムを貫く。塞ぎかかるデビルガンダムの装甲。だが

「後は任せる！！駆けよ……隼ッ！！」

『Sturmfalke……！！』

ピンポイントでシュツルムファルケンをシグナムが体内に撃ち込み、爆発させる。

「キシヤアアアアアアア！！？」

装甲の穴から炎を噴き出すデビルガンダム。のたうちながら、ガンダムヘッドで攻撃をしようとする。だが

「盾の守護獣・ザフィーラ！砲撃なんぞ撃たせん！！」

ザフィーラが鋼の軛を両腕に集中させ、巨大な刃とすると

「双・鋼・剣！！でりゃああああああ！！！！」

両腕の刃でガンダムヘッドを一掃する！！

「とどめだ！こいつも……くらえいッ！！」

最後に鋼の刃を投げつけて、離脱するザフィーラ。二枚の刃はデビルガンダムの目に突き刺さる。体液を噴きあげるデビルガンダム。

「!?!し、しまった?!」

後ろからクロノに噛みつきこうとするガンダムヘッド。だが、次の瞬間、その頭は空を舞っていた。

「なに…?」

「おおっと…執務官殿だけに良いカッコはさせませんよ。」

そこには、にいつと笑うユーノの姿があった。

「ふふ…そうか。なら、その良いカッコとやらをお見せしよう!」

その瞬間、クロノの腕から凄まじい冷気が広がり、それはデビルガンダムの表面を完全に覆った。それを見届けると、今度は膨大な熱を一瞬で発生させ、拳を握りしめる!!

「ヒヒヒヒヒイトオ……………エエエエエエエエエエエエ
ドオウツ!!!!」

表面の氷が吹っ飛び、爆発するデビルガンダム!!そこにヴィータが突っ込んでいく!!

「おらおらおらああああ!!ぶっ潰してやるぜ!!」

ヴィータはアイゼンを振り回し、ギガントシユラークの体勢をとる。だが、この後目を疑うような行動に彼女は出た。

「合体だあ!アイゼンツ!!」

なんとスティックが中に収納され、ギガントシユラークの先端がヴィータの腕と接続されたのだ！！そしてもう片方の先から飛び出たのは、巨大な鉄の拳だった。

「へっへっへっ…ちったあ驚いたか！！」

「なっ…！？」

敵よりもどつちかといえば味方の方が驚いている気がするが、気にはいけない。四つのブースターからジェットが噴き上がり、ぶれながらも巨大な拳の標準を合わせる！！放たれる一撃！！必殺の力！！その名を！その名を！！その名を！！

「ロケットパアアアアアンチ！！！」

ヴィータの腕から発射されたアイゼンは、ある程度まで離れるとヴィータの腕と接続していた部分から巨大なジェットエンジンを展開させ、一気に加速させる！！渾身の一撃は、デビルガンダムの胸に大きな風穴を空けた！！

「へっ、ざまあみやがれ！！はやて！！」

ヴィータがはやてに合図を送る。

「夜天の王・八神はやて！！」

はやてが杖を構えて詠唱を始める。

「彼方より来たれ、宿り木の枝！！」

「銀月の槍となりて、撃ち貫かん!!」

詠唱を終えると、はやての後ろに黒い空間が現れ、その中から7つの白い魔力の球が現れる。

「石化せよ!! 石化の槍、ミストルティン!!」

7つの槍はデビルガンダムに突き刺さると、即座に石化していく!! ！そして装甲が砕け散った!! だが、デビルガンダムは欠けた部分を強引に再生させる。その姿は、無数のインベーターがはい出した、グロテスクなものだった。

「フツ… 目障りな野郎だぜ。」

『主! 構わん、叩き殺せ!!』

リインが微妙に物騒な事を言っているが、装甲が大破した今がチャンスである。なのははフェイトとはやてに声をかける。

「…いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん!!」

「うん!!」

「よし… ほんならとことん、やったるうやないか!! なのはちゃん!!」

三人は一斉にエネルギーをチャージする。

『Starrylight Breaker』

「全力全開！！スターライトオ……」

なのはは魔力を集束させ、発射準備に入る。

「雷光一闪！プラズマ・ザンバアアア……」

フェイトも自らの刃に雷撃を纏わせ、大きく構える。そして、

「ごめんな……お休みな……」

はやてが小さく、だけど確かに呟いた。だが、そう呟いた後、しっかりと前を向いて詠唱をする。

「響け！終焉の笛、ラグナロク……！」

はやては三角の魔法陣を展開させ、頂点に魔力をチャージする。それを確認すると、一斉に砲撃を開始した……！！

「……ブレイカアアアアアアアア……！！……」

凄まじい三つの砲撃が、海を引き裂き、大気を震わせて、デビルガンダムを貫く……！！三つの閃光が一つの魔力の塊となり、行き場の無くなったエネルギーは、デビルガンダムを体内から爆発させ、上半身を粉々に粉碎した……！！そこからは、巨大なコアが露出している……！！

「本体コア、露出確認……！座標固定、確認……捕まえ……たッ……！！」

シャマルがコアの座標を固定すると、続けてユーノとアルフが強

制転移の準備に入る。

「長距離転送！！」

「目標、軌道上！！」

「……転・送っ！！！！」

三人の合図でコアは宇宙へと転送されていく。

「うまくやれよ……クソババア！！」

そう言っつて竜馬は空を見上げる。すると、クロノは空間に巨大モニターを展開した。そこには、アースラ内の映像が写っている。

『コアの転送、きます！転送されながら生態の部分を修復中、凄
い早さです！！』

『これなら……いける！！アルカンシエル、バレル展開！！』

エイミイの指示に従って、アルカンシエルのバレルが展開されて魔力が集束し始める。

『ファイアリングロックシステム、オープン！！』

リンディがそう言っつと、四角の透明なボックス型に収まっているトリガーが現れる。

『命中確認後、反応前に安全距離まで退避します！準備を！！』

エイミーが報告を終えた…その時だった!!

『!?!?こ、高エネルギー反応確認!!映像を回します!!』

全てが終わったと思っていたアースラの艦内に、緊張が走る。映し出された映像は、とても信じられないものだった。

『なっ…!!?!?』

そこには、地球より遙かに巨大なデビルガンダムと、その正面に立ってアルカンシエルを素手で受け止める二人の男の姿があった。

「ふはははは!!君たちは愚かだ…な?君もそう思うだろう?ステインガー君。」

「う、うん。そうだね、コーウェン君。人類は愚かだよね。」

それを見た時、竜馬の表情が豹変した。

「何…コーウェンと、ステインガーだとおおおおおおおお
おお!!!!」

コーウェンとステインガーはつづけた。

「宇宙がもたん時が来ているのだ。何も知らない、愚かな下等生物よ。滅びを受け入れるがいい。」

「そ、そうだよ、コーウェン君。デビルガンダムも、闇の書も、もともと人間の作りだしたもの…ならば!!」

「その報いは、自らの手で受けるがいい!!」

同時にそう言うと、ふたりはアルカンシエルを増幅させ、竜馬たちのいる日本の海鳴めがけて投げ飛ばした。

「消えてなくなれ、ウヒョヒョヒョヒョ!!」

雲の隙間から、閃光が漏れ始める。徐々に大きくなってくる光の弾。それを、ただ茫然と眺めることしかできない竜馬たち。己の無力さを噛みしめながら、死の時を待っていた。そして

午前五時四十八分 アルカンシエル・海鳴市に着弾

おまけ

竜馬「うるせえ!それはてめえのやるこつたあ!!」

はやて「何や何や、一体どうなつとるんや。」

緒方「どうも、作者です。さて、みなさん。今日…あ、日付が惜しくも変わってしまったので、正確には昨日ですが、実は本日をもって『真(チェンジ!)』リリカルなのは』の第一回投稿から…一年が経ちました!!」

シグナム「ほお…この小説は一年も続いたのか。短気で飽きっぽい事で有名な貴様が…不思議なものだな。」

シヤマル「シグナム、こんな言い方ないでしょ？でも、一年かあ…
あつという間だったわね。私たちは第二期からだけど、竜馬やなの
はちゃんにフェイトちゃん、はやてちゃんはとうだった？」

はやて「うん…何か実感わかへんなあ。なのはちゃんとフェイト
ちゃんはどつ？」

なのは「にやはは、そうだね…私もあつという間って感じ。」

フェイト「そうだね。何だかずっと長いように感じるけど、あつと
いう間というか…不思議な感じだよね。」

武蔵「しっかし、この小説も半分以上は終わってるんだよな。本当
に長い様で短いぜ。」

ザフィーラ「何を言う。ここから盛り上がってくるのではないか。」

アルフ「てゆうかさ…初期の方って、あんま文章になってない気が
…」

緒方「グサツ！…い、一番痛いところを…」

将造「そもそも、いくつ連載抱えるつもりじゃあ。これ一本に絞っ
とけば、今頃とうに完結できていんたんじゃないか？」

緒方「すまない…すまないと思っている…」

竜馬「すまない？それで済むと思ってんのか、緒方アー！」

リインフォース「なにはともあれ、ここが節目。」

クロノ「ま、祝いましょうや。」

ユーノ「で…緒方さん、そのわきに抱えてるのは？」

緒方「あ、そうだ、これこれ。実はものすつごく流行に乗り遅れる気がするのですが…最近「ブリ」。(ハマチ)なるものにハマってしまいました、作っちゃいました…竜馬で。」

グレアム「な、何イ!?おのれ、なぜ幼女にしなかつたあ!！」

緒方「ということ、完成したのがこちらです。えっと…これ書いたせいで死にかけてます。何で書いたんだろ…俺って馬鹿ですね。ということ、…」

> i 2 5 8 5 0 | 1 2 5 9 <

> i 2 5 8 5 1 | 1 2 5 9 <

> i 2 5 8 5 2 | 1 2 5 9 <

> i 2 5 8 5 3 | 1 2 5 9 <

> i 2 5 8 5 4 | 1 2 5 9 <

> i 2 5 8 5 5 | 1 2 5 9 <

アリサ「モドツタアアアアアアアア!!!」

「さすが「し、しっかりしてよ、アリサちゃん!」!

「はやて「このオチはあんまりやなあ。」

「緒方「だって、脱がせられなかったんだもん。」

「リインフォース「そして…地味に上手いな。」

「緒方「まあ、どっちかっていうと虫とかの方が得意なんだけどね。」

「やっぱパソコン書きにくいよ…でも、ちよつとでも楽しんでくれたらよかったなつて感じですよ。」

「はやて「さてさて、何やら地球が大変な事に!!ネタキャラだと思つとつたコーウェン君とステインガー君が妙にでしゃばつとんなあ。」

「フェイト「やだ、ああゆう顔、気持ち悪い…生理的に受け付けられないの、ああっ!やだやだやだ!」!

「なのは「さりげなく残酷な事言うね、フェイトちゃん…でも、なのはそんなフェイトちゃんの事、大好きだよ!」!

「フェイト「なのは…」

「なのは「フェイトちゃん…」

【モザイク映像のまま、しばらくお待ちください】

「竜馬「ゴ、ゴホン!…あー…つまりそう言う事だ。ま、もうしばらく俺たちに付き合ってくれよ。じゃあな!」!

は、ちて、「」れからも、チエンなのをよろしくな〜」

チェンジ25 ETERNAL BLAZE あの日胸に灯った永遠の炎（後

というところで、一周年です。みんな、ありがとね。そしてこれからもよろしくお願いします。

ファイナルチェンジ 竜馬がゆく

勇気ある戦士たちによって、ついに打倒されたデビルガンダム。衛星軌道上に転送したそのコアを、アルカンシエルの空間歪曲によって消滅。すべては順調にいったはずだった。

しかし、それは一気に崩れさる。死んだはずのコーウエンとステインガーが突如出現、デビルガンダムを地球よりも遙かに巨大な最終形態に進化させたうえ、受け止めたアルカンシエルを、何とそのままなのはたちのいる地球に投げ飛ばしたのだ！！海鳴に落下するアルカンシエル。はたして、人類の運命はいかに！！

ファイナルチェンジ 竜馬がゆく

「消えてなくなれ、ハハハハハ！！」

コーウエンとステインガーの跳ね返したアルカンシエルは、大気圏内に突入していった。焦燥に駆られるアースラであったが、放ってしまったアルカンシエルを止めることは不可能。なにもできず、ただ自分たちの手で日本が消滅するのを眺めているだけではしかなかった。

「リンディ提督！！何とかして止める方法はないんですか！！」

エイミイが必死にリンディに訴えるが、彼女は首を横に振った。

「だめ…アースラのスピードでは追いつけないわ。今の位置でもし撃墜したとしても、その衝撃で日本の地表はすべて吹き飛んでし

まうわ。」

「そんな…じゃあ、転送魔法で別の空間に転移させることなら…！」

「…アルカンシエルは、防御魔法といった一切の魔法をキャンセルさせてしまう…それが必殺といわれる所以よ。」

リンディは拳を握りしめた。あと3分で、すべてが終わってしまうのだ。

「フハハハハ！時空管理局よ、君たちがこの世界を滅ぼしたのだ。」

「日本が消し飛ばせば、周辺諸国が黙ってるわけがない！地球は核戦争に突入することだろう。そうでなくとも、この究極の進化が一瞬で消し飛ばしてしまうのだ…ね、コーウエン君。人類は滅ぶんだよね。」

コーウエンとステインガーは、リンディに向かって言い放った。

「ふはははは！今日こそが、夢にまで見た我が種族の復活の日。」

「我らは宇宙で最も尊く、進化を遂げた種族！！進化を忘れた種族など、存在している価値はない！！我らの究極の進化を見よ！！」

そう言い放つと、二人はデビルガンダムに取り込まれていった。そして生体コアの部分にはステインガーが、胴体の巨大なガンダムの顔はコーウエンの顔に変化していった。

「ふはははは！！これこそが究極の進化・真デビルガンダムよ！
！」

「消えて…消えてなくなっちゃうんだね！コーウエン君！！」

ふたりのインベーターは嗤う。その耳障りな嗤い声は、地上にいるのは達にも聞こえた。

「そんな…何も…できないの！？」

徐々にアルカンシエルの光で明るくなっていく空。そこから光り輝く球体が現れ、加速しながら大きくなっていく。

「フツ…ここまでだな……………」

竜馬が呟いた…その時だった。

「笑うな！！」

黒い何か、声と共に一瞬竜馬の横を通り過ぎる。目前に迫ったアルカンシエルは、何と片手で受け止められていたのだ。一人の男によって。その男を見て、始めて声を出したのはなのはだった。

「その声…まさか！？」

「そのまさかよ！！」

そう、アルカンシエルを受け止めている張本人…なのはは彼を知っていた。親友のアリサにいつも仕えている執事。彼女は何度も彼

と話をした事があるうえ、彼もなのは事を小さいころからとてもよく知っていた。

「アルベルト…さん!？」

アルカンシエルを受け止めるアルベルト。その周囲を覆う衝撃波に、シグナムですら跳ね飛ばされそうになった。

「なんて衝撃波だ…まさか、この男が?!」

アルベルトは左手でポケットから葉巻を出して口にくわえる。衝撃波のせい、葉巻の先に火がつく。

「よく聞け、バケモノ。わしが執事などという恥さらしな真似をしたのは、全てこの時のためよ。コーウェン! スティンガー! !あの時の借りは返させてもらうぞ。」

衛星軌道上の真デビルガンダム。地球よりもはるかに巨大なものもかわらず、彼らは怯えたような声を上げた。

「ば、馬鹿な! !?! しょ、衝撃のアルベルト! !何故貴様が! !」

「ね、ね、コーウェン君。衝撃のアルベルトはこの世界にはいないはずだよね。」

アルベルトはにやっと笑って言う。

「フン…元を言えば、わしをこの世界に送り込むきっかけを作ったのは、貴様らの方だぞ? 墓穴を掘ったのは貴様らの方だ、このくたばりぞこないが! !」

だが、コーウェンはそれを見て笑った。

「ウヒヨヒヨ、だが貴様でも無理だ、衝撃のアルベルト。所詮貴様は……」

「五月蠅い！！十傑集を……なめるなああああああ！！！」

アルベルトの叫びと共に、衝撃波の勢いは増す。彼は背を向けながら言った。

「いいか、小娘。わしは陰で貴様らの戦いを見させてもらった。だからわしは部外者、何も口出しする権利は無かるう。だがな、この事件：例えどんな裏があろうとも、これだけはわかつているぞ。そう世界の運命は、こんなバケモノなどに好きにさせるものではない！全ては貴様ら時空管理局と、闇の書の守護騎士・ヴォリケンリッターとで、決着をつけるものだ。違うか！違うか！！違うかああああああ！！！」

だが、衝撃波はアルカンシエルに耐えられず、かき消されていく。それを見たアルベルトは、疲れ切った笑みを浮かべて

「なあ……戴宋……」

宿敵の名を呟いた……その時だった。

「久しぶりだな、衝撃の。」

その声と共に、再び押し戻されるアルカンシエル。

「そ…その声は！！貴様か！東方不敗マスターアジア！！」

そう、アルベルトの横でアルカンシエルを受け止める男：東方不敗はアルベルトを見て笑う。

「貴様ほどの男が、こんな砂粒一つに敗れるとはな。片腹痛いわ。」

「し…師匠！！」

東方不敗の姿を見て、ヴィータは驚きの声を上げた。だが

「この馬鹿弟子がああああ！！こんな砂粒一つに情けない声をあげよって！！いいか、よく見ておれ。衝撃の！！」

それを聞いて、アルベルトはにやっと笑った。

「フン…貴様に指図される筋合いはないわ、東方不敗よ。」

笑う二人。すると東方不敗は急に真剣な顔になって言った。

「…一気に勝負を付けるぞ。」

「……………ああ！！」

東方不敗は息を吐きながら、ゆっくりと構える。

「流派・東方不敗が最終奥義……………」

東方不敗の手が金色に輝き、凄まじいエネルギーが収束される。

それと同時に、アルベルトの周囲の空間が、衝撃波でねじまがった。

「石破！！天・驚・拳えええええええええええん！！！」

「十傑集を…舐めるなあああああああああああ！！！」

石破天驚拳が衝撃波を纏い、同時に放たれたエネルギーの塊は正面からアルカンシエルと衝突する！！押し合い、せめぎ合う両者。すると、一方がずいっと後方に押された。アルカンシエルだった。

「でりやああああああああ！！！！！！」

これを好機と、二人は全力でアルカンシエルを押し返す！！地上目前に迫っていたアルカンシエルは、マツハのスピードで押し返された！！それは大気圏を抜け、成層圏を抜け、東方不敗の石破天驚拳とアルベルトの衝撃波とともに、真デビルガンダムに直撃した！！

「なに…?!ぬぐうつ?!?!?」

粉碎され、原子レベルに分解される真デビルガンダム。だが、惑星サイズの真デビルガンダムは、その再生スピードも凄まじい。アルカンシエルと石破天驚拳と衝撃波の三つをもろに食らっても、中破程度で済んでいた。それも再生を続けているため、こうしているうちにも装甲を修復してしまう。

「ぬはははは、無駄！無駄！！！」

「我らを倒すことなど不可能！！いい加減に身の程を知ればいい！！！」

そう言って嗤うコーウエンとステインガー。だが、今なら確実に真デビルガンダムはダメージを受けている。決断を下したのは、竜馬だった。

『Change!! Shin Raising Heart!!』

緑色に突然輝くレイジングハート。なのはは驚きの声を上げた。

「ま…また!？」

「どうしたの!?!なのはっ!!」

フェイトになのはは説明した。

「さつき、似たような事が一回あったの。レイジングハートが緑色に輝きだして、光ったと思ったたら魔力が満タンまで回復してて…って、な、なに!?!」

なんと光に包まれたレイジングハートは分解し、コアの部分がないのはの額に吸い込まれてしまったのだ!!それだけでなく、なのはのバリアジャケットが大きく変化していく。一度パージしたのち、今度は赤と白で構成された甲冑の様な鎧を身に纏っていく。両腕には、鋭い三対の刃に、背中には真つ黒な、悪魔の様な翼が展開された。中央に緑色の宝石の付いたヘッドギアに、なのはの耳のあたりからは一対の真紅の角が空にそびえていた。

「な…なに、コレ……!!?!」

突然の変化に、驚きを隠せないなのは。だが、驚きを隠せないのは竜馬の方だった。

(あれは…間違いねえ!!真…ゲッターだとおおおおつ!?)

なのはの外見は、竜馬の思う通り真ゲッター1に酷似していたのだ!!なぜなのは真ゲッターになったのかは不明だが、その時竜馬には、ある考えが浮かんだ。

(チビが真ゲッター…ならば、一か八かだ!!)

竜馬は困惑しているなのはに言った。

「…高町。ストナーサンシャインだ。ストナーサンシャインを使え!」

「竜馬…さん…?そ、それって何なんですか!?!?」

竜馬はなのはに言った。

「レイジングハートが持っている全ゲッター線を圧縮して、衛星軌道上の奴らにぶち込む。手負いの今がチャンスだ。敵を倒す事をイメージしろ。」

だが、竜馬にレイジングハートが反論した。

『The calculation of all energy was completed. Energy is 56 another % necessary to shoot sutora-sunshine』【全エネルギーの算出が完了しました。ストナーサンシャインを撃つには、エネルギーがあと56%必要です。】

レイジングハート…いや、真レイジングハートの全エネルギーをもってしても、ストナーサンシャインを撃つには半分以上のエネルギーが必要だというのだ。だが、それを聞いて竜馬は

「そうか…なら、十分だ。リイン、武蔵…わかっているな？」

竜馬はなのはたちに知れないよう、リインと武蔵に説明した。

『そうか…それで主たちが救われるのであれば…』

『断る理由なんかねえ…か。』

そう言って笑う二人。それを見て、竜馬も笑った。

「ああ…そうだ、まだ終わっちゃいねえ…！レイジングハート！
！炉心ならここにあるぜ？」

そう言つと、ゲッターは胸の装甲を引きはがして、ゲッター炉心を露出させる。

「り…竜馬…！」

「竜馬さん、何を…！」

皆が驚きの声を上げる中、レイジングハートは言った。

『When such a thing is done, you…！』【そんな事したら、貴方達は…！！】

「フツ…俺たちが死ぬわけないだろ？」

竜馬がレイジングハートにそう言ったと同時に、ブラックゲッターの体から、コードやバルブが伸び始めた。それらはなのはの体に接続され、二人は緑色の光…ゲッター線に包まれた。

「ぐ…!! 竜馬さん、一体何を!!」

なのはの問いに、竜馬はやつと答えた。

「…高圧縮したゲッター線の塊を、奴に叩きつける。まだ完全に修復できていない今がチャンスだ。スターライドブレイカーの時と同じだ。お前の心に浮かぶ技を…ストナーサンシャインを撃て!!」

放出されるゲッター線。ブラックゲッターの体は節々から煙が噴き上げ、目のパーツが吹き飛んだ。コクピットの中も爆発が起こるが、三人は必死に操縦桿を握った。

「…もう、十分だ。俺たちの役目は終わった。だから…ムサシ。」

武蔵は目を閉じて、静かに笑った。

「ああ。だからお前は残れ、リインフォース。」

「何……………!?!」

竜馬と武蔵の二人は、ブラックゲッターのレバーを同時に握った。

「…オーブンゲッター……………」

その時、ジャガー号から淡い光がはやてに向かつて走った。その光ははやての体に吸い込まれると、髪と瞳とバリアジャケットの色を変貌させる。

「え…？リインフォース…！！！」

竜馬と武蔵のしたことは、簡単な事だった。ジャガー号に残されていたリインフォースのデータを修復して、強制的にはやてとユニゾンさせることでゲッターから脱出させたのだ。だが

『あ…主！話は後です。竜馬と武蔵を止めてください！！あいつら、死ぬ気です…！！』

それを聞いた時、皆が驚愕した。はやてがゲッターを止めようと接近するも、高圧縮させたゲッター線は、それ自体が超強力なエネルギーフィールドとなっているため、押し返されてしまった。吹き飛ばされたはやてを、シグナムが抱いて受け止める。

「主っ！！！」

「だ、大丈夫や、シグナム。それより、リョウ兄と武蔵さんが！」

外のやりとりは、一切フィールドの中にあるなのはとゲッターには聞こえていなかった。だが、なのはも竜馬と武蔵が死の覚悟をしている事に気づいていた。

「竜馬さん…武蔵さん…！！！」

なのはは泣きながら、体に接続されたコードを抜こうとする。だ

が、ゲッターはその細い腕を優しく掴むと、首を横に振った。

「フツ…まだゲッターは戦えるぜ……………」

腕が、足が爆発して吹き飛んでいく。崩壊していくブラックゲッター。その時、突然アースラから通信が届いた。竜馬には聞こえないが、彼はそれが何だか理解していた。

「来たか…!!どうだ!ここまでやってやったんだ、後はてめえら次第だぜえ!!」

竜馬は叫んで、空を見上げた。

その頃、衛星軌道上ではアースラがアルカンシエルの再発射準備に取り掛かっていた。真デビルガンダムは高をくくって、アースラを放置していたのだ。何が何だか分からないが、とにかく地上が無事なことは分かった。今こそ、手負いの真デビルガンダムに一矢報いるまたとないチャンスかもしれない。だが、向こうも気づいて、アースラに攻撃を開始したのだ。

「ふん、何もしなければ大目に見てやったものを。」

「君たちはそんなに犬死したいのかね!ハハッ、ハハハハハ!!」

正直なところ、真デビルガンダムの防御力があれば、アルカンシエルの五、六発食らったところで屁でもない。だから、コーウェンとステインガーはそのまま放っておいたのだ。

「目障りな奴め、死ね!!」

コーウェンがそう言うと同時に、真デビルガンダムからインベーターの触手が発射された。触手は易々とバリアを貫くと、アースラを串刺しにした。

「うぐうっ!!アレックス!!被害状況を知らせなさい!!」

「は、はい!!右舷大破、左辺中破、コントロールシステムと動力炉が破壊されました。補助電源に切り替えています。後3分で全システムが停止します!!」

リンディは爆発する指令室に立って指示を出す。

「ええい、補助電源は30分はもつはずよ!!」

「そ、それがエネルギータンクそのものが破壊されてしまったため、照明用の緊急バッテリーしか使用できません!!」

それを聞くと、リンディは静かに椅子に座った。そして目を閉じ、皆に最後の指示を出した。

「…総員、脱出ポートで退避。奴は私がここで食い止めるわ。」

「そんな…それじゃあ、艦長は!!」

エイミィにリンディは言った。

「…エイミィ。女にはね、命を懸けなきゃならない時があるの。でも、貴方達にはまだ早いわ。だから…」

リンディの泣きそうな笑顔が、エイミイの見た最後の景色であった。ゆっくりと崩れ落ちるエイミイの体。その首の後ろには、リンディの手刀が振り下ろされていた。

「アレックス。エイミイを頼んだわ。」

抱きかかえたエイミイを、アレックスに渡すリンディ。アレックスは受け取ると、右手で敬礼をした。

「…ご武運を。」

「…ええ。」

リンディは、アレックスに向かって敬礼した。

「次元航行艦アースラ艦長、リンディ・ハラオウン提督。私の口から、最後の命令を告げるわ。」

そう言って、彼女は脱出用ポートを開いた。

「私の分まで、幸せになりなさい。」

光とともに、アレックスとエイミイが転送されていく。それを見届けると、必死に自分に通信を入れるクロノを見た。

「親らしいこと、何もしてあげなくてごめんね…クロノ。」

だが、リンディは涙を拭いて、凜とした表情で敬礼した。

「貴方達の航海に、幸あれ。」

その言葉とともに、触手の突き刺さったまま、アースラを全速前進させた。

「なに…？ステインガー君、撃ち落とせ！！」

ステインガーの目からビームが発射される。爆発する艦橋。大破したアースラが、爆発しながら真デビルガンダムに突っ込んでいく。

「母さん！戻れ！父さんだつて、そんなこと望んだのかよ！！何のために拾った命だつたんだ！！いいから戻」

必死に訴えてくるクロノの通信を切ると、燃える指令室で、抹茶に多すぎる角砂糖を入れた。それを一口飲んで、ふう…と一息つく。

「長生きした罰が当たったわね…クライド。」

アースラの両弦が爆発した。丸腰になったアースラ。だが、リンディは悲壮な笑みを浮かべていた。

「ふん、甘いわね！！アルカンシエル、零距离発射モード発動！！」

その時、アースラの艦首から巨大なブレードが展開された。

「ば、馬鹿な。なぜ撃ち落とせんのだ、ステインガー君！？」

「や、やってるんだよ、コーウェン君。でも、不思議なんだ！なぜ動力炉も稼働していない、高が次元航行船ごときが！！」

焦るコーウェンとスティンガー。だが

「遅かったわね!!」

時すでに遅く、艦首のブレードが真デビルガンダムに突き刺さった!!

「アルカンシエル、バレル展開!! 必殺必中! 零距离アルカンシエル砲!!」

リンディは、地面に落ちているアルカンシエルの発射装置に手をかけた。そして起動キーの鍵を…捻った。

「発射!!」

零距离から真デビルガンダムの体内に発射されたアルカンシエルは、DG細胞やインベーターを空間ごと消滅させていく。だが、それと引き換えにアースラが轟沈していく。

「ぎゃああああ!! ば、馬鹿な。だが、この程度では我々を倒すことはできない。な? そうだろう? スティンガー君。」

「う、うん。そうだね、コーウェン君。いい見せ物だったよね。」

だが、リンディの捨て身の攻撃も、彼らからすれば無駄な足掻きにしか過ぎなかった。再生機能によって、すぐに無傷になってしまっただけ。それと引き換え、アースラはアルカンシエルの反動で装甲が吹き飛んでいく。そして

「クライド…お願い、あの子たちを…」

爆発した。

「母さああああああああああん!!?」

爆発して跡形もなくなるアースラを見て、クロノは拳を打ち付ける。

「ふはははは！馬鹿め、貴様らは…」

コーウエンが唾ってそう言った…その時だった。

「いや…まだだアツ!!まだ終わらせんツ!!」

宇宙に響く勇ましい男の声。コーウエンとステインガーはその声を探す。

「コ、コーウエン君。あれは…ゴッドガンダムだよ!!」

ステインガーがコーウエンに声をかける。そこには、アースラの残骸の上に立つ、ゴッドガンダムの姿だった。そのコクピットの中では、赤い外套を纏った男が、気を失っているリンディを抱き抱えていた。男は、静かにリンディに声をかけた。

「…リンディ。聞こえるか、リンディ。返事はしなくてもいい。ただ、聞いてくれていればいい…この事件、グレアムさんと竜馬さん、あの二人がいなければ、俺はここまでたどり着けなかったんだ。全部、あの人たちのおかげだったんだ。だから…責めないでほしい。そして…すまなかった。俺は、お前とクロノを残して…なあ、もし、

もしお前が俺を許してくれるのなら…聞いてほしい。俺たちはこの十年間、一体何をしてきたんだ？俺たちのこの十年間は、一体なんだったんだ？まだ何も答えなんか出てないじゃないか！覚えてるか？あの時、俺が闇の書と刺し違えたあの日から！！だが…俺は！無我夢中で闘った！！異世界へ飛ばされた俺は、心から尊敬できる師匠に出会い、このゴッドガンダムを託された！！でも、でも俺は思った。強さを極めようが、どんなに偉大な名誉を得ようが、巨万の富を手に入れようが…俺の心の中は空っぽだったんだ。空っぽだったんだよ…リンディ。でも…でも、それで、俺たちの十年が終わってしまつていいわけないだろう！？確かに、俺はガンダムファイトに勝ち、この世界に帰ってきた！第十四代目のキング・オブ・ハートとして！！でもそれは全て、お前とクロノが心の中で一緒に居てくれたおかげなんだ！そうだよ…お前と俺と…クロノとで…家族で闘ってきた勝利なんだ。だから、これから一緒にでなくちゃ、意味が無くなるんだ！この世界が滅んでしまつたら…俺は一体何のために、何のために生きてきたのだ！何のために闘ってきたのだ！！なあリンディ。最後の出撃の朝、俺は言ったよな。全てが終わつたら、お前に聞いて欲しい事があるつて。俺は、闘う事しかできない不器用な男だ。だから、こんな風にしかいえない。俺は、お前が…お前が…お前が好きだアアツ！！お前が欲しいイイイツ！！リンディイイイイイイイツ！！」

その時、男の叫びに答えるようにリンディが目を開いた。

「クライドオオオオオオオオツ！！」

「リンディイイイツ！！」

「クライドオオオオオオオオオオツ！！」

ひしと抱きしめ会う二人。

「リンディッ！！」

「クライドッ！ごめんなさい、でも、私もう離れない！！ 放しはしないっ…ずつつと、ずつつと一緒よ！！」

リンディの言葉に、クライドは大きく頷いた。

「ずつつと、ずつつと一緒だ！！」

「ええっ！！」

その時、クライドに念話が届いた。

『クライドッ！！ははは、上手くやったようだな！！』

「その声…竜馬さんっ！！」

竜馬はクライドに告げた。

『どうやら…俺の役目はここで終わりらしい。アレはいつでも出せる。てめえらの一撃と、俺たちの一撃…ストナーサンシャインと石破天驚拳の同時発射を、リンディのぶち抜いたインベードー野郎の大穴にぶち込む！！』

それを聞いて、クライドは竜馬の名を呼んだ。

「竜馬さん…貴方、はじめからそのつもりで…！！」

『フフ…老兵は礎になるものだけ？クライド…さア…最後の仕上げだッ！！流派東方不敗とやらの力…俺に見せて見るッ！！』

「…はいつ…！」

竜馬の決意を受け取ったクライドは、リンディと共に構える。そして地上では、竜馬と武蔵がなのはにエネルギーを転送していた。

「うっおおおおおおおおおおお！！」

『ぬうん…！！ウウォオオオオオ！！』

なのはの両腕に、ゲッターエネルギーが収束していく。それらは巨大な球体となり、その光は夜明けの空を白昼の如く照らす。だが、竜馬と武蔵には分かっていた。

「ムサシ、最後の仕上げだ！！」

『おう！いくぜ！！』

その声とともに、竜馬はブラックゲッターからゲッター炉心を取り出す。オーバーヒートさせた炉心を、そのままなのはの支える球体に投げ込んだ！！

「え…！？り、竜馬さん！！」

「いいか、高町！今、そいつにゲッター炉心をぶち込んだ。コアのできたストナーサンシャインは、星一つ楽に消す飛ばせる威力だ…だが、そいつは分かっているだろうが一度きりしかない。今、衛星軌道上で、俺の仲間が大技を使おうとしている。そいつと同時に発

射しろ！！指示は俺が出す！！」

「は…はいつ…！！」

なのはは必死に構える。極度の緊張で、その小さな手は震えていた。

「…ゲッターを信じろ。」

「え…？」

竜馬は崩れゆくブラックゲッターの中で、言った。

「お前自身の力を信じろ、高町。これからは…てめえらの時代だ。」

そして、竜馬に念話がつながった。

『竜馬さん！こっちはいつでも行けます…！！』

「おおっ、そうかあ…！！いくぞ、高町！ムサシ…！！」

「はいつ…！！竜馬さん…！！」

『おう…いつでもいいぜ…！！』

衛星軌道上では、ゴッドガンダムの中でクライドとリンディが流派東方不敗の構えをとる。

「二人のこの手が真っ赤に燃えるうっ…！！」

雪の降る丘で、車椅子の少女は嗚咽していた。集まった皆が…一人だけ欠けてしまった男の事を悔やんでいた。肩を震わす烈火の騎士の肩を、深緑の作業服を着た大柄の男がそつと叩く。

「…何でだよ。俺が、俺が奴の代わりに死んでいれば!」

男は震えながら、ぼろぼろの真紅のマフラーを手渡す。

「そんな…そんなこと、言わないでくれ。あいつは…あいつは、そういう奴なんですよ。」

彼女は…シグナムは、マフラーを手に取ると、泣き崩れた。誰にも決して涙を見せなかったシグナムが、泣いた。シグナムだけじゃない。皆が泣いた。だが、彼らが本当の彼の狙いを、本当の彼の優しさを理解するのは少し先の事だ。

少女たちの背中を、大きな手が『どん』と押した。そう、たとえばならば、彼はスペースシャトルの燃料ロケットだったのだ。役目を終え、切り離され、燃え尽きる。だが、だからこそ彼は最後まで笑っていたのではないか。これが、自分の役目だと。彼は…本当は、はじめから気付いていたのかもしれない。

『後は頼んだぜ…ムサシ。』

2005年12月25日 流竜馬 逝く

天下御免の大馬鹿者の魂は、後にエースとよばれる少女たちの胸に受け継がれていく。そうだ。それでいい。行ってこい。大声で笑うあいつの、そんな声が聞こえた気がした。

エピソード（前書き）

第二期：完結です。

エピローグ

六年後…

春になり、辺りは桜が咲き始めた頃。一人の少女が、仏壇の前で手を合わせていた。

「行ってくるで…父さん、母さん。じいちゃん、ばあちゃん。そして…リヨウ兄。」

仏壇に飾られてる幼き日の少女の写真の隣に、ボロボロの真紅のマフラーが置かれている。それをそつとなでると、少女は首に巻いた。

少女は力強く立ち上がり、玄関へと駆けていく。

「あ、はやてちゃん！お弁当忘れてる！…！」

「あう〜シャマルう〜」

シャマルが出てくると、シグナムが、ヴィータが、ザフィーラが家の奥から出てきた。

「主…あ……」

はやてのマフラーを見て、思わず声を上げるシグナム。彼女もまた、端のよれたボロボロの白いコートを身に纏っていた。

「えへへ…あ、シグナム、その……」

「あはは、いいですよ、主。私はこのコートをもらいましたし、それに…あいつは、私たちの胸の中で生きています。」

そう言って、胸に手を当てるシグナム。と、二人の頭をヴィータがアイゼンピコピコハンマーモード（仮）で叩いた。

「ん!?!」

「ぬあつ!?!? ヴィ、ヴィータ!?!」

「まったく、しみつたれてんじゃねえ! ほらほら、とっとと行ってこいよ!?!」

そういうヴィータにはやては笑って言った。

「せやな…ほな、行ってきます!?!」

そう言って、はやては外へと駆けだしていった。

エピローグ Stand by ready

「あ、主。おはようございます。」

出てきたはやては、早速声を懸けられた。

「おはよう、リインフォース。元気そうやな。」

「はい。我が主。」

と、そこに一台の軽トラが走ってきた。

「お、いたいた。はやてちゃん、乗ってけよ。折角だから学校まで送っていくぜ。」

「武蔵さん！ほんならお言葉に甘えて〜じゃ、リインフォース。行ってくるで。」

はやては軽トラに乗り込むと、リインフォースに手を振った。

「行ってらっしゃいませ。」

リインフォースに見送られながら、桜吹雪の中を軽トラが走っていく。運転をしながら、武蔵ははやてに話しかけた。

「お…そいつは、あいつの…」

「うん…えへへ、ちょっと…な。」

「そっか。」

武蔵にはやては話しかけた。

「そういえば…武蔵さんやリインフォースがヴォルケンリッターになれたのって…」

「…ああ。死ぬ間際にな、竜馬の奴が残ったゲッター線を駆使して俺たちの魂の入れ物を作ってくれたんだ。畜生…そんなの俺じゃなくて、自分に使えばあいつは…」

運転席を叩く武蔵。

「武蔵さん……」

「だがよ……拾った……いや、あいつの託してくれた命だったんだ。それに俺は、やつ^の遺言を守らなきゃならねえ。【はやてたちを、よろしくな】ってな。」

竜馬の真の狙いが明らかになったのは、事後処理での裁判でのことだった。闇の書……いや、ここでは夜天の書に寄生していたDG細胞とインベーターであると言った方が良いが、この事件での責任がはやてたちに全くないわけではない。現に世界一つ危うく滅ぼすところだったのだから。事情が事情とはいえ、重罪なのに違いはない。だが、竜馬のなのは撃墜云々……あれは、管理局の記録映像に、自分が首謀者だということアピールするための演技だったのだ。記録映像からでしか状況を判断できないため、今回の闇の書事件の首謀者は流竜馬で、八神はやてもヴォルケンリッターも、彼に騙されて利用された……ということを決着がついたのだ。その趣旨の手紙が、後日竜馬の部屋から見つかった。きつと竜馬は、はじめから死ぬつもりだったのだと、この時はやては感じたのだった。

それはそうと、事件に乱入してきた仮面の男は、クライドだったことが判明した。最後だけはリーゼとアリアだったが、実は事件の裏で竜馬とグレアムとクライドが繋がっていたということが、二人の口から語られたのだ。竜馬はインベーター、クライドはDG細胞、グレアムは闇の書についての知識を持っていた。竜馬は本当に地球が救えなくなったら、その時ははやてを殺すようにと二人に頼んでいたという。これについては、グレアムとクライドの希望退職という形で決着がついた。そして後日、グレアムは事件の真相をはやてたち八神家に直接行って伝えたのだった。

そして…竜馬は四つのデバイスを残していった。驚いた事に、全部竜馬が作ったらしい。ミッドチルダとベルカを融合させた、新機軸のデバイス。名を…いや、ここで明かすのは無粋なものだ。

いつかてめえらんと共に、四人の馬鹿なクソガキどもが来るだろう。そいつらにくれてやれ。

そんな走り書きのメモが添えてあった。実際、それから10年後に本当に馬鹿なクソガキどもが来るのだが…それはまだ、もう少し先の話だ。

「お、いたいた。おーーーーーい!!」

軽トラから武蔵が声を懸ける。すると、栗毛色のポニーテールに髪を結んだ少女が振り返った。

「武蔵さん！それに、はやてちゃん!!」

「なのはちゃん、ええとこいたなあ。乗ってけへん？」

すると、後ろから駆け足が聞こえてきた。

「なのは、ゴメン、遅れた…って、はやて！それに武蔵さん!!」

「おう！フェイトちゃんじゃねえか。それにアリサちゃんにすずかちゃん！」

フェイトとアリサとすずかが、息を切らしてこっちに走ってきたのだ。

「ぜえ…ぜえ…たく、何で朝っぱらから走んなきゃならないの
…！」

「ア、アリサ。気持ちはわかるけど、今日は明らかにアリサが…」
「う、うっさいわね…！」

ぎゃあぎゃあわめく二人に苦笑するみんな。

「おいおい、乗るんだったら早くしてくれよな。」

「え…？乗るのって…まさか荷台？」

フェイトは武蔵に言った。

「ああ、そうだけど…ってか、どうやってこの人数乗るんだよ。」

「そ、そんなことしたら警察が！」

「警察う？はっはっはっ、パトカーの一台や二台、大雪山おろし
で吹っ飛ばしてやる…！」

そう言ってジェスチャーをして笑う武蔵。なんだか笑えないフェ
イトであった。

「よし、じゃあいいか？」

「はい！お願いします…！」

5人を乗せて、武蔵の軽トラは走っていく。

「ああ、今年もいい桜が咲いたぜ…なあ！竜馬！！」

【おうよ！ムサシ！！へっ、酒の一杯や二杯はねえのか？】

「そう思ったからよ…っどー！！」

そう言っつて武蔵は軽トラの天井を空けると、空に向かって思いっきり缶ビールを投げた。と、その時だった。武蔵のトラックからアラームが鳴る。

「ん？どうした、エイミィー！！」

『武蔵さん！なのはちゃんたちはそっちにいる？』

「お、おう。みんないるぜ、どうした？」

『第23管理世界に、ロストログシア出現！！なのはちゃんたちに出動要請が降りています！！』

それを聞いて、武蔵は振り向いた。

「よっしゃあ！なのは、フェイト、はやて。出動要請だ。今すぐ準備しろー！！」

「はいっ！！アリサちゃん、すずかちゃん。行ってくるね。」

「気をつけなさいよー！！」

「あ、あとノートは取っておくからね。」

トラックの上で三人は立つと、桜吹雪の中デバイスを取り出す。

「レイジングハート！」

「Yes, my master。」

「バルディッシュ！」

「Yes, sir。」

「リインフォース！」

「はい、マイスターはやて！」

「Stand by, ready！」

そして三人の声は、空へと響き渡った。

「セエエエエット・アップ！！！！」

チェンジー！！
真リリカルなのは 地球が静止する日

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0362o/>

真《チェンジ！！》リリカルなのは 地球が静止する日

2011年7月9日12時09分発行